



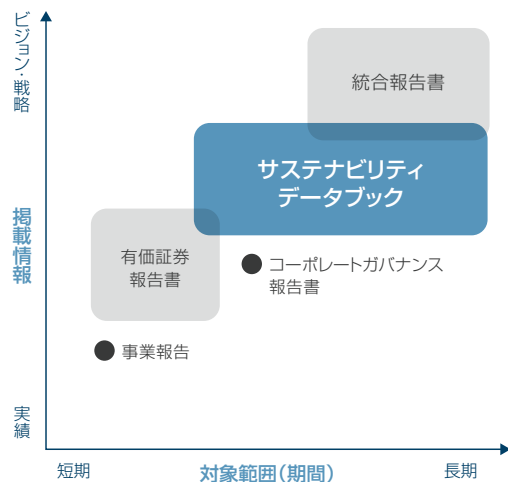
サステナビリティ データブック 2025

NISSAN
MOTOR CORPORATION

編集方針

日産は、私たちが果たすべき社会的責任と提供したい社会的価値をステークホルダーの皆さまにご理解いただくため、当データブックを発行し、日産のサステナビリティに関連する取り組みの実績・データ、また、その背景となる考え方をお伝えします。具体的には、日産のサステナビリティ戦略およびマネジメントについて報告するとともに、2030年に向けた第5次中期環境行動計画「ニッサン・グリーンプログラム2030」および社会性の取り組みを包括的に推進するために策定されたプログラム「ニッサン・ソーシャルプログラム2030」の概要や2024年度の活動結果などを報告しています。なお、より詳細なビジョンや戦略については統合報告書をご参照ください。

報告書の位置づけ



対象範囲

期間：会計年度である2024年度（2024年4月～2025年3月）を基本とし、該当外のものについては期間を文中に明記しています。

組織：日産自動車株式会社および海外拠点（欧州日産自動車会社、北米日産会社など）を含む日産グループ

参考ガイドライン

・GRI(Global Reporting Initiative)サステナビリティ・レポーティング・スタンダード

日産自動車は、2024年4月1日から2025年3月31日までの期間について、GRIスタンダードに準拠して報告しています。

[GRI内容索引](#)

・TCFD(気候関連財務情報開示タスクフォース)提言/TNFD(自然関連財務情報開示タスクフォース)提言

[TCFD/TNFD対照表](#)

・SASB(米国サステナビリティ会計基準審議会)スタンダード

[SASB対照表](#)

前回発行日

サステナビリティデータブック2024：2024年7月31日発行

報告サイクル

2004年より年1回発行

第三者保証について

第三者保証の報告書の詳細は[P061](#)をご覧ください。

見通しに関する注意事項

このデータブックの記載内容には、歴史的事実や、当社の将来にかかわる計画、目標およびそれに基づく事業計画や考え方が含まれています。実際の業績は、さまざまな要因により、これらの見通しとは大きく異なる結果となり得ることをご承知おきください。日産の事業活動やその展開だけでなく、世界経済の動向や自動車産業を取り巻く情勢の変化、地球環境の変化なども、実際の業績に大きな影響を与え得る要因となります。

ご質問窓口

〒220-8686 神奈川県横浜市西区高島一丁目1番1号
日産自動車株式会社 サステナビリティ推進部

メールアドレス：NISSAN_SR@mail.nissan.co.jp

サステナビリティデータブック2025

発行年月日：2025年7月31日

関連ウェブサイトのご紹介

- ・[日産自動車企業情報サイト](#)
- ・[サステナビリティ](#)
- ・[IR情報](#)

目次

Corporate direction

担当役員メッセージ003

日産のサステナビリティ.....004

環境

環境方針.....014

環境に対する認識.....015

グローバル環境マネジメントのガバナンス.....016

戦略的アプローチ.....019

ニッサン・グリーンプログラム.....024

バリューチェーンでの活動実績.....034

商品.....034

企業活動.....044

関連パートナーとの連携.....059

第三者保証.....061

社会性

社会性に関する方針・考え方.....064

人権.....066

ニッサン・ソーシャルプログラム2030の活動領域

安全.....072

品質.....075

知的財産.....081

責任ある調達.....084

地域社会.....089

Power of employees.....092

従業員の人権.....093

ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン.....097

従業員の能力開発.....109

労働安全衛生.....113

ガバナンス

ガバナンスに関する方針・考え方.....119

コーポレートガバナンス.....121

リスクマネジメント.....131

プライバシー&データ保護.....133

コンプライアンス.....134

データ集

会社基本情報.....141

ESGデータ集

環境データ.....142

社会性データ.....157

ガバナンスデータ.....161

使い方

各ページに、ナビゲーションボタンとカテゴリータブを設け、ページ間を容易に移動できるようにしました。

カテゴリータブ

目次 Corporate direction 環境 社会性 ガバナンス データ集

各カテゴリーのトップページへ移動します

ナビゲーションボタン

◀ 矢印をクリックすると
1ページ戻ります

▶ 矢印をクリックすると
1ページ進みます

↺ リターンをクリックすると
直前の表示に移動します

リンク

[P000](#) 全体PDFの中で該当するページに移動します

[URL](#) 該当するウェブサイトへ移動します

担当役員メッセージ

「人々の生活を豊かに。イノベーションをドライブし続ける」日産はこのパーパスのもと、お客さまニーズに応え、将来に向けたイノベーションを創出し、すべてのステークホルダーに社会的価値を提供していきたいと考えています。サステナビリティは日産の事業の中核をなすもので、企業としての持続的な成長と、次世代のために、より持続可能な未来を構築するため、事業のあらゆる側面に組み込まれており、新経営体制のもとで新たにスタートさせた経営再建計画「Re:Nissan」の活動においてもそれは変わりません。モビリティの未来を切り拓くことを目指す長期ビジョンのもと、日産は、よりクリーンで、安全で、インクルーシブな、誰もが共生できる世界を実現し、真にサステナブルな企業となることを目指し、一步一步、歩みを進めています。

日産はこの長期ビジョンの実現に向けて、ふたつの重要なプログラムを実施しています。

- **中期環境行動計画「ニッサン・グリーンプログラム2030(NGP2030)」**
環境負荷を低減し、社会と自然にポジティブな影響を与え、人々の生活が持続可能で自然と調和できる社会創りを目指す
- **「ニッサン・ソーシャルプログラム2030(NSP2030)」**
社会性の取り組みを包括的に推進し、ステークホルダーと共に成長しながら、「人」を中心とした企業になることを目指す

日産は、サステナビリティに対するコミットメントを具体的な目標に落とし込み、計画の進捗を示し、説明責任を果たします。これら一連の取り組みが、ポジティブなインパクトの創出につながっています。

サステナビリティは、ステークホルダーの皆さまからの信頼を築くために、欠かすことができません。昨年一年間で、私たちはNGP2030およびNSP2030の目標達成に向けて着実に進捗してきました。具体的には、カーボンフットプリントの削減、資源依存の低減、自然関連課題への取り組みの強化、従業員、サプライチェーン、ディーラーの人権イニシアティブの強化など、さまざまなステークホルダーとの連携が不可欠な重要課題に取り組んできました。これらの成果は本データブックに掲載されていますので、ぜひご一読ください。

私は、2025年4月にサステナビリティを含む経営戦略を担当するストラテジーアクセラレーションチーフに就任し、ビジネスのレジリエンスとロバスト性を確保するため、サステナビリティと経営戦略のさらなる統合を推進しています。そして、ますます厳しくなるESG規制や社会的な要請にも応えステークホルダーからの信頼を高めていきたいと考えています。

私は、日産が将来を見据え、企業価値を向上していくため、サステナビリティと経営戦略の一体化をさらに推進することに全力を尽くします。そして、新たな機会を探求しながら、同時に効果的なリスク管理を進めていきます。日産は引き続き、よりクリーンで、より安全で、よりインクルーシブな、誰もが共生できる世界の実現に向けて、ステークホルダーの皆さまとともに歩んでまいります。



日産自動車株式会社
ストラテジーアクセラレーション チーフ

坂根 学

日産のサステナビリティ

サステナビリティ戦略

日産の考えるサステナビリティ

日産は、コーポレートパーパス「人々の生活を豊かに。イノベーションをドライブし続ける」の実現に向け信頼される企業として、独自性に溢れ、革新的なクルマやサービスを創造し、優れた価値をすべてのステークホルダーに提供します。

グローバルなあらゆる事業活動を通じて企業として成長し、経済的に貢献すると同時に、社会が直面する諸課題の解決に貢献することは日産の使命です。その使命を果たすため、日産として取り組むべきマテリアリティ(重要課題)を特定し、それぞれの課題に環境と社会性の側面に対応する2030年までの行動計画を策定しました。「ニッサン・グリーンプログラム2030(NGP2030)」、「ニッサン・ソーシャルプログラム2030(NSP2030)」という2つの行動計画により、日産のサステナビリティの目標を明確に示し、グローバルで取り組みを強化していきます。この行動計画を通じて長期ビジョン「Nissan Ambition 2030」*1を具現化します。

日産は、お客さま、株主、従業員、地域社会などすべてのステークホルダーから必要とされる、真にサステナブルな企業となることを目指し、よりクリーンで、安全で、インクルーシブな、誰もが共生できる世界の実現を推進していきます。

社会の課題分析とマテリアリティの特定

日産は、ステークホルダーの皆さまの関心、ならびに技術革新などの最新動向を踏まえながら、サステナビリティ戦略を策定し、活動を推進しています。戦略策定にあたり、日産の優先課題を明確に示すため、リスクや機会分析を踏まえた会社全体として取り組むべきマテリアリティ(重要課題)を2022年に特定しました。

特定にあたりダブルマテリアリティの考え方を取り入れ、これまでも投資家からの関心が高かった「社会・環境が日産へ与えるインパクト(財務的影響)」の視点に「日産が社会・環境へ与える影響や価値」の新しい見方を加えた2側面により、企業活動とサステナビリティを相互に検討し、日産のつくり出す価値と取り組む優先順位を提示しています。

このように、日産としての方向性をより詳細にステークホルダーにお伝えすることで、自動車セクターのみならず、さまざまな協働機会の拡大や信頼関係の向上を図り、さらなる取り組み推進につなげたいと考えています。

なお、2024年度には、社内外の状況を踏まえてマテリアリティの名称、位置づけ、重要と考える理由について見直し、一部更新を行いました。

*1 長期ビジョン「Nissan Ambition 2030」の詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/PLAN/AMBITION2030/>

マテリアリティ特定のプロセス

STEP1.社会・環境課題の明確化

定期市場動向分析、ステークホルダー・投資家の皆さまとの対話より得られた社会からの期待値、グローバルスタンダード、国連気候変動枠組条約締約国会議（COP）、SDGs、世界経済フォーラム（WEF）発行のリスクレポートなどからグローバルなアジェンダを明確化。

STEP2.自動車セクターおよび日産の重要課題特定

コーポレート長期ビジョンにより実現する世界と、そこで果たすべき自動車セクターの役割という視点からリスクと機会を分析することで、日産にとっての課題を特定。

STEP3.マテリアリティの優先度整理

縦軸・横軸の2側面からリスクと機会で優先度の整理を実施し、日産のつくりだす価値と今後さらに強化して取り組むべき課題をマトリックス型により整理。有識者レビューを行い、フィードバックを反映。

STEP4.経営会議および取締役会にて合意

特定したマテリアリティは、各項目の設定理由や背景を含め経営会議および取締役会へ報告し、合意を得て決定。

日産のマテリアリティマトリックス

21項目のマテリアリティを特定し、その中でも日産が社会・環境へ与える価値・インパクトが最も大きい縦軸最上段の項目、および社会・環境から日産へ与えるインパクトが最も大きい横軸最右列の項目を最重要13項目としています。

特定された各項目は、事業活動へ織り込んでいくことで協働機会を拡大し、より一層充実した活動推進につなげ、コーポレートパーパスを具現化していきます。



担当役員メッセージ

日産のサステナビリティ

重要と考える理由

マテリアリティ	重要と考える理由	日産の取り組み	E	S	G
ガバナンス、法規制、コンプライアンス	コーポレートパーパスや行動規範に基づき、高い倫理観と透明性および強固な基盤を備えたガバナンスを通じて、最大限の誠実性を持って事業運営を行う。また法規制を遵守し人々と社会に対し敬意と誠実さを持ち行動する。	・コーポレートガバナンス(P121) ・コンプライアンス(P134)			✓
人々の自由な移動を実現	運転支援技術やコネクテッドカーシステムなどの新しいモビリティ技術やサービスをより多くの人に提供し、より安全で、よりパーソナライズされ、誰もが自由に移動できるインクルーシブな社会を実現する。	・安全(P072)		✓	
人権	すべての従業員が個人の尊厳と人権を最大限に尊重する組織を醸成する。また国連の「ビジネスと人権に関する指導原則」を参照した社内倫理基準に基づき行動する。特に、人権尊重の6つの重点分野*における行動を徹底する。 *6つの重点分野：1.従業員の労働環境、2.サプライヤーの労働環境、3.製品の安全性とAI、4.プライバシーと情報セキュリティ、5.ビジネスパートナーの労働環境、6.コミュニティと環境への影響（先住民への影響も含む）	・人権(P066) ・従業員の人権(P093)		✓	
電動車の拡充と多様なニーズへの対応	電動車ラインナップの拡充、バッテリーと車両の技術革新、クルマの多様な使い方を可能にするエコシステム構築により、カーボンニュートラル実現を目指す。	・バリューチェーンでの活動実績－商品(P034)	✓		
再生可能エネルギー	国や自治体との協働や、さまざまな業界団体との連携を通して、CO2削減に向けた再生可能エネルギーや代替燃料の使用を推進する。EVバッテリーの循環利用などの4R*の取り組みやV2Xの活用を通し、エネルギーマネジメントで社会課題の解決を継続する。 *4R：バッテリーの再利用、再製品化、再販売、リサイクル	・バリューチェーンでの活動実績－商品(P034)、企業活動(P044)、関連パートナーとの連携(P059)	✓		
クルマの安全性	先進の運転支援技術をより多くのお客さまに提供することで、日産車のかかわる交通事故の死者数を実質ゼロにする「ゼロ・フェイタリティ」実現を目指す。	・安全(P072)		✓	
クリーンなエミッション	「大気並みにクリーンな排出ガス」とその他のクルマから排出されるさまざまなエミッション（粉塵、マイクロプラスチックなど含む）のクリーン化を目指す。	・バリューチェーンでの活動実績－商品(P034)、企業活動(P044)	✓		
プライバシー&データ保護	データ保護およびプライバシー権の保護に取り組み、適切なセキュリティ対策を講じてステークホルダーの個人情報を守り、新しい技術とセキュリティリスクを考慮したデータの安全な取り扱いに責任を持つ。	・プライバシー&データ保護(P133)			✓
持続可能なコミュニティの共創	災害時の復旧支援や人道支援に加え、商品や技術、サービス、ノウハウを通じた社会変革への取り組みによりコミュニティの発展に貢献する。	・バリューチェーンでの活動実績－商品(P034) ・地域社会(P089)	✓	✓	
製品品質	デザイン、性能、化学物質管理および車室内空質向上などの製品品質向上により、より安心・快適で使いやすいモビリティを提供する。	・バリューチェーンでの活動実績－商品(P034) ・品質(P075)	✓	✓	
サステナブルなサプライチェーンの構築	取引先との協働により、「日産取引先サステナビリティガイドライン」に基づき、サプライチェーンにおける環境や人権問題への適切な対応と責任ある調達を実践する。これによりお客さまに安定的にクルマを提供するとともに、社会や法規が求める説明責任を果たす。	・バリューチェーンでの活動実績－関連パートナーとの連携(P060) ・責任ある調達(P084)	✓	✓	
サステナブルマテリアルの拡大	サーキュラーエコノミーを目指し、持続可能な資源利用のため、リペア/リユース/リビルト/リサイクルの推進、循環性や倫理性に配慮したマテリアルの使用など、サステナブルなクルマ作りを追求する。	・バリューチェーンでの活動実績－企業活動(P044)	✓		
人財育成	人財育成プログラムを提供し、働きやすい職場環境を整備することで従業員が能力を最大限に発揮できることを目指す。	・従業員の能力開発(P109)		✓	

E：環境、S：社会性、G：ガバナンス

2030年に向けたサステナビリティの取り組み

特定したマテリアリティに基づき、中期環境行動計画「ニッサン・グリーンプログラム2030 (NGP2030)」と社会性に関する行動計画「ニッサン・ソーシャルプログラム2030 (NSP2030)」を2023年度より実行しています。「NGP2030」および「NSP2030」では、活動領域ごとに2030年の目標、指標などを設定し、グローバルで取り組みを推進します。これらの取り組みを通じて、持続可能なビジネスの実現を目指し、安全安心なまちづくりや社会の発展、豊かな自然と生態系の回復に貢献していきます。

・「NGP2030」

私たちは環境理念「人とクルマと自然の共生」の実現のため、2002年より中期環境行動計画NGPを策定してきました。第5世代となる「NGP2030」では、人々の生活が、持続可能で自然と調和できる社会創りを目指しています。具体的には1.5℃シナリオの加速やサーキュラーエコノミーへの移行など、環境負荷を低減し、機会を最大化する環境の取り組み導入に注力します。「気候変動」「資源依存」「大気品質と水」を重要課題として設定し、さらに活動の基盤となるトレーサビリティの強化に取り組みます。

気候変動においては、日産は2050年までにクルマのライフサイクル全体におけるカーボンニュートラルを実現する目標を設定しています。2030年代早期より、主要市場で投入する新型車をすべて電動化車両とすることを目指しており、「NGP2030」の促進が、カーボンニュートラルの達成につながると考えています。また「Just transition (公正な移行)」の考えを実践し、カーボンニュートラルの実現を目指しています。

「NGP2030」一覧表

重要課題	領域		2030年目標	関連するマテリアリティ	主に貢献するSDGs
気候変動	CO ₂ 排出の削減 (基準2018年)	ライフサイクル(t-CO ₂ /台数)	グローバル -30%	・電動車の拡充と多様なニーズへの対応 ・再生可能エネルギー ・サステナブルなサプライチェーンの構築 ・持続可能なコミュニティの共創 ・サステナブルマテリアルの拡大 ・エネルギー効率の追求 ・ライフサイクルマネジメント ・物理的ハザードへの対応 ・生態系サービスと生物多様性	
		クルマの利用(g-CO ₂ /km)	グローバル -32.5% 4地域*1 -50%		
		生産(t-CO ₂ /台数)	グローバル -52%		
		サプライヤー	ライフサイクル目標の達成を目指す		
		物流			
		R&D拠点			
		オフィス			
販売店					
資源依存	材料資源	サステナブルマテリアルの拡大 (重量ベース)	40%(日本、米国、欧州、中国)	・電動車の拡充と多様なニーズへの対応 ・再生可能エネルギー ・サステナブルマテリアルの拡大 ・サステナブルなサプライチェーンの構築 ・持続可能なコミュニティの共創 ・生態系サービスと生物多様性	
		廃棄物/埋め立ての管理	低水準の維持		
	クルマの活用	エネルギーマネジメント機能の拡大	EVへの搭載率100%(日本、米国、欧州)		
	大気品質と水	水	生産拠点での 水リスク管理の強化		
生産拠点での使用量の削減					
生産拠点での排水の水質管理					
大気品質		クルマからのエミッション削減 (テールパイプ以外も含む)	技術の開発と適用		
		生産拠点でのVOC管理	活動の継続(塗装)		
		車室内空質の管理	車室内VOCの日産基準の遵守		
基盤	責任ある調達の実施		サプライチェーンのリスクマネジメントの実施	・ガバナンス、法規制、コンプライアンス ・サステナブルなサプライチェーンの構築 ・ステークホルダーとの エンゲージメント	
	バリューチェーン情報の統合管理および 説明責任の確保(トレーサビリティ)		・企業活動/部品製造からのカーボンフット プリント等の情報管理システムの構築/ 運用 ・サプライチェーン情報の信頼性向上		
	環境ガバナンスの強化				

*1 4地域：日本、米国、欧州、中国

・「NSP2030」

日産は社会性の取り組みを推進することにより、「人」を中心とした企業になることを目指し、従業員をはじめ社会におけるさまざまな「人」へ価値を提供していきます。企業としての責任を果たすとともに、日産らしさを追求し社会とともに成長していくことで、企業価値の向上と社会価値の創造を目指します。人財はビジネスとそのプロセス全体を通じて最も重要な要素だと考えています。「NSP2030」では、人事4領域を含めた9領域を重点領域と設定し、2030年の目標を定義しました。

また、従業員、パートナー、サプライヤー、お客さま、地域社会などさまざまなステークホルダーを含めた人権の取り組みを引き続き推進、強化していきます。

「NSP2030」一覧表

領域		2030年目標	関連するマテリアリティ	主に貢献するSDGs
人権	安全	運転支援技術やコネクテッドカーシステムなどの新たなテクノロジーに投資することによって、より安全で、効率的で、そしてより一層パーソナライズされたモビリティソリューションを創造する	・クルマの安全性 ・人々の自由な移動を実現	3 持続可能なエネルギー 11 持続可能な都市とコミュニティ
	品質	トップレベル品質*1、品質不具合ゼロ、コンプライアンス問題ゼロを達成する	・製品品質	7 持続可能なエネルギー 9 製造と産業革新 12 つくる責任 13 気候変動に具体的な対策を
	知的財産	他社とともに知的財産活動を推進し、イノベーションを促進することにより、社会課題の解決に貢献する (IPエコシステム)	・クルマの安全性 ・人々の自由な移動を実現 ・製品品質	3 持続可能なエネルギー 8 製造と産業革新 9 製造と産業革新 12 つくる責任 10 人や国の不平等をなくす 17 持続可能なパートナーシップ
	責任ある調達	「人権侵害ゼロ」を目指して、サプライチェーンにおける人権デューデリジェンスの仕組みを構築する	・サステナブルなサプライチェーンの構築	4 質の高い教育をみんなに 5 ジェンダー平等を推進しよう 8 製造と産業革新 10 人や国の不平等をなくす 12 つくる責任 13 気候変動に具体的な対策を 16 平和と公正な社会を築こう
	地域社会	日産らしさを活かして社会課題を解決するとともに、次世代の子どもたちの可能性を広げる	・持続可能なコミュニティの共創	4 質の高い教育をみんなに 5 ジェンダー平等を推進しよう 11 持続可能な都市とコミュニティ
	Power of employees	従業員一人ひとりが自信を持ち、支えられ、自分らしさを発揮できるような働き甲斐のある職場環境を築くことで、従業員の能力が最大限に発揮できることを目指す		
	従業員の人権	人権尊重を通じた「人を中心とする企業文化」の実現	・人権	5 ジェンダー平等を推進しよう 8 製造と産業革新 10 人や国の不平等をなくす 16 平和と公正な社会を築こう
	ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン	一人ひとりの個性を尊重し、インクルーシブでワクワクする日産の実現	・DEI (多様性、公平性、包括性)	5 ジェンダー平等を推進しよう 8 製造と産業革新 10 人や国の不平等をなくす
	従業員の能力開発	高いスキルとモチベーションを持った従業員の育成	・人財育成	5 ジェンダー平等を推進しよう 8 製造と産業革新 10 人や国の不平等をなくす 16 平和と公正な社会を築こう
	労働安全衛生	従業員が安全・安心・健康に働くことができ、活気ある職場の実現	・ウェルネス & 労働安全衛生	3 持続可能なエネルギー 8 製造と産業革新

*1 製品品質、セールス&サービス品質において各市場にてトップ3になる

サステナブル・ファイナンス・フレームワーク

日産はコーポレートパーパス「人々の生活を豊かに。イノベーションをドライブし続ける」の実現に向け、サステナビリティを事業の中核として位置づけ、グローバルな事業活動を通じて企業として成長し、社会が直面する諸課題の解決に貢献することを目指しています。

その取り組みの一環として、日産はサステナビリティの推進をより一層強化するために必要な資金を調達可能にするサステナブル・ファイナンス・フレームワーク*1を設定しました。本フレームワークは、グリーンボンド原則(GBP)2021、ソーシャルボンド原則(SBP)2023、およびサステナビリティボンド・ガイドライン(SBG)2021、ならびにグリーンローン原則2021、およびソーシャルローン原則2023に適合しており、その適合性については、独立した外部機関であるMoody's Ratingsより、セカンドパーティ・オピニオン*2を取得しています。初めての資金調達となるシンジケーション方式でのグリーンローン契約は2022年11月に締結*3されました。また、2番目の資金調達となる2023年1月および2月に発行した、個人投資家向け社債(愛称: サクラ[SAKURA]債)と機関投資家向け社債は、日産のフレームワークに定義された適格なグリーンボ

ンドプロジェクトおよびサステナビリティプロジェクトに全額充当しました。*4 本フレームワークを通じて調達した資金は、バッテリーを含む電動車両の開発や生産、EVエコシステム・スマートシティの実現に向けた技術開発やインフラ整備、より安全で持続可能なモビリティの開発など、幅広い取り組みに充当されています。今後も日産は、サステナビリティの推進を通じて、ステークホルダーの皆さまに優れた価値を提供し、持続可能な社会の発展に貢献していきます。なお、資金調達実績の詳細はサステナビリティボンドレポートを参照ください。*5

日産フィナンシャルサービスによるグリーンボンド発行

日産フィナンシャルサービスは、2024年3月に国内機関投資家向けに100億円のグリーンボンドを発行し、資金調達を完了しました。このグリーンボンドは、サステナブル・ファイナンス・フレームワーク策定後、日産グループ販売金融関連会社として初めての社債発行による資金調達であり、ゼロ・エミッション車を対象とする販売金融債権に資金を活用することで、販売金融事業を通じた日産グループの電動車両普及を支援します。なお、日産フィナンシャルサービスによるグリーンボンドレポートを日産フィナンシャルサービスのウェブページ上で公開しています。詳細についてはウェブページをご参照ください。*6

サステナビリティ推進のガバナンス

「人々の生活を豊かに。イノベーションをドライブし続ける」というコーポレートパーパスのもと、日産はサステナビリティを中核に据えた事業活動を行っています。2021年度から経営層の長期インセンティブ報酬において、サステナビリティに関する評価指標を新たに追加しました。短期的な業績目標達成のみならず、当社の中長期的な企業価値および社会価値を向上させ、サステナブルな企業となるための取り組みの成果を報酬に反映させることで、経営層のサステナビリティへのコミットメントを明確にしています。

サステナビリティ戦略の目標設定や進捗確認など具体的な活動の社内横断的な管理については、グローバル・サステナビリティ・ステアリング・コミッティ(GSSC: Global Sustainability Steering Committee)*7にて議論しています。一方、環境課題についてはグローバル環境委員会(G-EMC: Global Environmental Management Committee)*8にて決議しています。環境、社会性ともに、重要な論議はエグゼクティブ・コミッティ(EC: Executive Committee)および取締役会へ提案・報告されます。

*1 日産自動車・販売金融関連会社 サステナブル・ファイナンス・フレームワーク原本(英語) https://www.nissan-global.com/JP/IR/STOCK/SUSTAINABLE_FINANCE/ASSETS/PDF/Nissan-and-Nissan-Sales-Finance-affiliates-Sustainable-Finance-Framework_en.pdf
参考和訳 https://www.nissan-global.com/JP/IR/STOCK/SUSTAINABLE_FINANCE/ASSETS/PDF/Nissan-and-Nissan-Sales-Finance-affiliates-Sustainable-Finance-Framework_jp.pdf

*2 セカンドパーティ・オピニオン原本(英語) https://www.nissan-global.com/JP/IR/STOCK/SUSTAINABLE_FINANCE/ASSETS/PDF/Second_Party_Opinion_en.pdf
参考和訳 https://www.nissan-global.com/JP/IR/STOCK/SUSTAINABLE_FINANCE/ASSETS/PDF/Second_Party_Opinion_jp.pdf

*3 詳細はこちらをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/release-48b4dcee3ca553fae7e18a40fe024c80-221130-01-j>

*4 詳細はこちらをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/release-852a2a2cb9af6879ff7b8333991e25d8-230120-02-j>

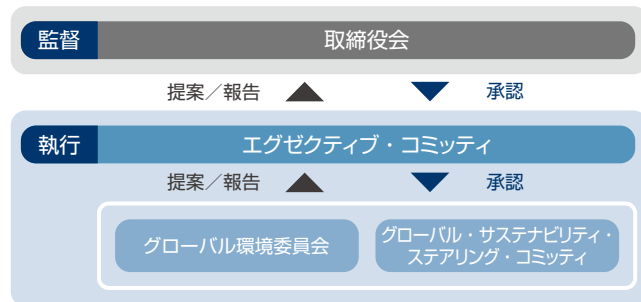
*5 日産自動車株式会社サステナビリティボンドレポート原本(英語) https://www.nissan-global.com/JP/IR/STOCK/SUSTAINABLE_FINANCE/ASSETS/PDF/Nissan-SBR-Mar2024_en.pdf
参考和訳 https://www.nissan-global.com/JP/IR/STOCK/SUSTAINABLE_FINANCE/ASSETS/PDF/Nissan-SBR-Mar2024_jp.pdf

*6 株式会社日産フィナンシャルサービス グリーンボンドレポート https://www.nissan-fs.co.jp/information/closing-of-accounts/pdf/nfs_greenbond_report.pdf

*7 グローバル・サステナビリティ・ステアリング・コミッティの詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P064](#)

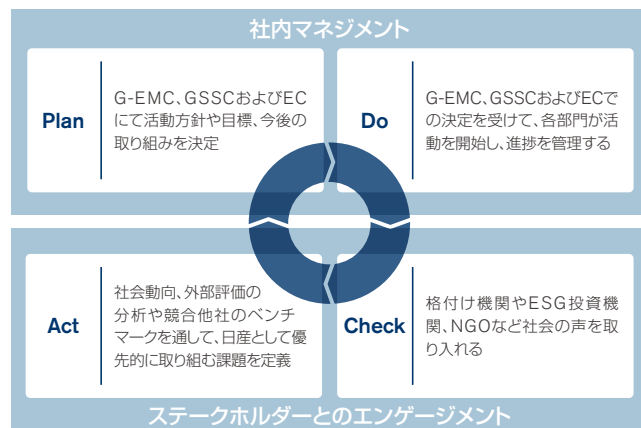
*8 グローバル環境委員会の詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P016](#)

サステナビリティ戦略に関する意思決定プロセス



各領域でPDCA (Plan-Do-Check-Act) サイクルを回すことで、サステナビリティパフォーマンスのさらなる向上を追求しています。

PDCAサイクル



経営層の役割と評価

当社は2021年度より、長期インセンティブ報酬のひとつである業績連動型インセンティブ(金銭報酬)にサステナビリティに関連する評価指標を組み込むことで、中長期的な企業価値および社会価値の向上を目指してきました。^{*1*2}

2024年度には指標および配分の見直しを行い、一層の取り組み強化を図りました。

■ 環境課題への対応：

旧)2021年度～2023年度

カーボンニュートラルに関わる取り組みを評価する外部指標(配分5%)

新)2024年度～

バリューチェーン全体をカバーする7領域におけるCO₂排出削減量に基づくパフォーマンススコア(配分10%)

■ 社会課題への対応：

旧)2021年度～2023年度

人権尊重に関わる取り組みを評価する外部指標(配分5%)

新)2024年度～

DEIに関するグローバル従業員サーベイのスコア(配分10%)

「国連グローバル・コンパクト」に署名

日産は国際的なガイドラインや協定に積極的に参画しており、国際的なポリシーや基準を尊重して事業活動を行っています。

日産は、国連が提唱する「人権・労働・環境・腐敗防止」についての普遍的原則である「国連グローバル・コンパクト」に、2004年から参加しています。日産では、国連グローバル・コンパクトの10原則に基づくさまざまな活動を一層強化するために、サステナビリティマネジメントを進めています。^{*3}

WE SUPPORT



^{*1} 報酬制度の評価指標に関する詳細は2024年度有価証券報告書(P79)をご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/IR/FINANCIAL_RESULTS/ASSETS/FR/2024/PDF/fr2024.pdf#page=82

^{*2} 報酬委員会に関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P126

^{*3} 国連グローバル・コンパクトに関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://unglobalcompact.org/>

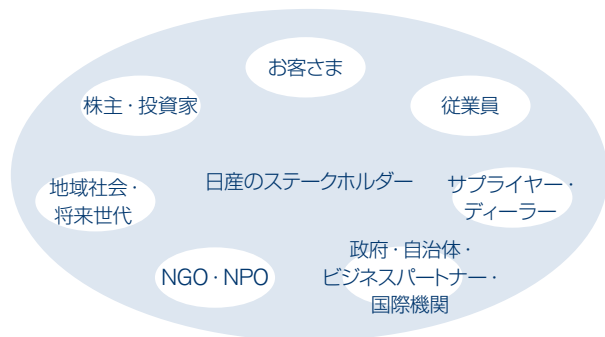
ステークホルダーエンゲージメント

ステークホルダーとの対話

日産では、日産の事業が存続するうえでかわりのある個人または団体をステークホルダーと位置づけています。

日産は、企業活動と社会的要請のベクトルを一致させた経営を目指しており、そのためにステークホルダーの声に耳を傾け、信頼関係を構築しながら、社会の声を企業活動に反映させることが重要だと考えています。ステークホルダーとの対話を図る多様な機会を設けることで、オポチュニティとリスクの芽を見いだすことが可能になります。こうした対話を本社はもちろん、事業所や海外拠点においても実施し、確実に社内フィードバックする体制を構築しています。

日産を取り巻くステークホルダーとの対話の機会



ステークホルダー	ステークホルダーとの対話の機会	ステークホルダーの関心事、主なテーマ	2024年度の主な取り組み
お客さま	問い合わせ窓口、ディーラー窓口、ウェブサイト、ショールーム、イベント、お客さまアンケート、TV・雑誌・SNSなどのメディア、オーナーズミーティング、アフターサービス、メール配信サービス	・製品やサービスの品質 ・お客さまへのサポート	・お客さま相談室対応(約20万件・日本) (P076) ・Quick VOC (P080)
従業員	問い合わせ窓口(社内通報制度)、イントラネット、社内イベント、面談、各種アンケート(調査)	・会社の業績や課題 ・社内ダイバーシティ ・職場環境 ・キャリア、教育	・社長講話 ・ECメンバーと部長層によるミーティング ・DEI Fireside Chat (P099) ・業績評価面談 ・グローバル従業員サーベイ (P092) ・労働組合と人権に関する対話の実施 (P071)
サプライヤー・ディーラー	定期的な会議、問い合わせ窓口、説明会、イベント、各種ガイドライン、ウェブサイト	・公正な取引 ・日産のサステナビリティ方針や中期経営計画、購買方針	・サプライヤー環境活動説明会 (P060) ・生産情報連絡会(月次) (P087) ・日産/パートナーズカンファレンス(購買方針説明会を含む) (P087) ・Nissan Global Innovation and Quality Award (P087) ・人権ホットラインの運用 (P085) ・日産グリーンショップ認定(日本) (P017) ・日産取引先サステナビリティガイドライン、ニッサン・グリーン調達ガイドライン改定と取り組みの要請 (P060) (P084)
株主・投資家	IR問い合わせ窓口、株主総会、決算説明会、IRイベント、取材対応、ウェブサイト、メール配信サービス	・日産の事業戦略、業績、サステナビリティの取り組みなどを含む企業価値向上	・株主、投資家とのエンゲージメント (P012) ・投資機関などとの個別エンゲージメント
政府・自治体・ビジネスパートナー・国際機関	問い合わせ窓口、共同研究、業界団体の取り組み、各種協議会、意見交換会、イベント	・法令遵守 ・実証実験など公共施策への協力 ・共同プログラムの推進	・日本電動化アクション「ブルー・スイッチ」活動 (P091) ・福島浜通りでのまちづくり貢献 (P091) ・横浜みなとみらい地区で自動運転車両での走行実証実験を実施 (P091)*1 ・ノッティンガム大学でV2G技術実証プロジェクトを実施 (P041) ・交通安全未来創造ラボ (P074) ・UNDP「ビジネスと人権」プロジェクトの参加 (P070) ・GXリーグなど環境に関する政府、自治体との連携 (P059)
NGO・NPO	問い合わせ窓口、意見交換会、プログラム運営、イベント	・社会課題の解決に向けた協働や支援	・アムネスティ・インターナショナル(本部および日本支部)と人権の取り組みに関する対話の実施 (P070) ・NPO・NGO6団体に会員として参加、意見交換実施 ・スマイルサポート基金(7団体支援)
地域社会・将来世代	各事業所問い合わせ窓口、地域でのイベント、工場見学、社会貢献活動、協議会、交通安全啓発活動、財団を通じた助成、ウェブサイト	・地域社会への貢献 ・企業理念 ・日産のサステナビリティの取り組み	・おもいやりライト運動(点灯呼びかけアクション) (P074) ・各国にて従業員による教育機会を提供 (P090) ・リカジョ(理科教育助成)育成賞の授与(日産財団)

*1 詳細はプレスリリースをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/250310-01-j>

・政治献金を行う場合は法令を遵守し、「グローバル行動規範」のガイドラインに基づいて、寄附を行っています。(2024年度寄附額：一般財団法人国民政治協会、3,700万円)「グローバル行動規範」の詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/NISSAN_GCC_J.pdf

株主・投資家の皆さまとの対話の方針

日産ではチーフ ファイナンシャル オフィサー(CFO: Chief Financial Officer)を中心に、長期的視野に立つ経営戦略や、競争力を強化するイノベーションの導入、最新の市場動向などの会社情報の適時・適切な開示と継続的なコミュニケーションを通じて、株主・投資家の皆さまと建設的な対話を行い、信頼関係の構築に努めています。

対話を通じて得られた株主・投資家の皆さまの質問や意見は、担当役員を介して取締役会および経営層にフィードバックされ、経営の参考にしています。また、決算発表準備期間中における情報漏えいやインサイダー取引を防止するため、四半期ごとの決算期末日翌日から決算発表日までの間は決算情報に関する対話を一切行いません。

株主・投資家の皆さまとのコミュニケーション

日産は投資家向けのウェブサイトを運営し、随時最新情報を開示するとともに、事業説明会では毎年、投資家・アナリストの関心が高いテーマを選び、各部門・地域のマネジメント層が積極的に情報を提供しています。

また株主総会をはじめとするさまざまな交流を通じて、株主の皆さまの意見に十分耳を傾けるとともに、疑問に対しても適切な説明をすることで、信頼に添えていきたいと考えています。^{*1} 第125回定時株主総会は、2024年6月25日に日産グローバル本社で開催し、インターネットによるライブ配信も実施しました。会場では625名の株主の皆さまがご出席、オ

ンラインでは1,221名の株主の皆さまがご参加されました。その他の2024年度の主なコミュニケーション実績は次の通りです。

2024年度の株主、投資家の皆さまとのコミュニケーション実績

2024年 4月 パワートレイン技術説明会
 2024年 5月 10月 日産デザインレビューイベント
 2024年 6月 社外取締役ラウンドテーブル
 2024年 9月 投資家向けサステナビリティセミナー
 2024年 11月 栃木工場見学会
 2025年 3月 投資家・アナリスト向け試乗会

日産への理解をさらに深めていただくため、今後もニーズに合わせた適切な情報開示を実施していきます。

社外からの評価

日産のサステナビリティに向けた取り組みは外部評価機関から高い評価を受けています。

・ CDP

環境分野の国際的な非営利団体であるCDPの「気候変動」と「水セキュリティ」の2部門で、最高評価である「Aリスト」企業に認定されました。「気候変動」部門では2013年度以降12年連続での「リーダーシップレベル」(「A」または

「A-」認定)、「水セキュリティ」部門では6年連続の「Aリスト」企業に認定となります。^{*2}



・ EcoVadis

サステナビリティに関する国際的な評価機関であるEcoVadis社による2024年の調査において、スコア66点(評価対象企業の上位18%程)を獲得しました。^{*3}

また世界的にその信頼性が認められた以下の代表的なインデックスに組み入れられています。

・ FTSE

FTSE4Good Index Seriesに引き続き選定、FTSE Blossom Japan Indexにおいても10年連続で構成銘柄に選定され、FTSE Blossom Japan Sector Relative Indexへは、同indexが新たに設定された2022年より組み入れ企業として選定されています。^{*4*5}



FTSE4Good

FTSE Blossom
Japan IndexFTSE Blossom
Japan Sector
Relative Index

^{*1} IR情報に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/IR/>

^{*2} CDP「気候変動」「水セキュリティ」の2部門で最高評価の「Aリスト」企業に認定 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/250228-01-j>

^{*3} EcoVadisに関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://ecovadis.com/ja/>

^{*4} FTSE4Good Index Series に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.ftserussell.com/ja/products/indices/ftse4good>

^{*5} FTSE Blossom Japan IndexおよびFTSE Blossom Japan Sector Relative Indexに関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.ftserussell.com/ja/products/indices/blossom-japan>

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集	◀ 013 ▶ ↺
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	ニッサン・グリーンプログラム	バリューチェーンでの活動実績	第三者保証

環境

環境方針	014
環境に対する認識	015
グローバル環境マネジメントのガバナンス	016
戦略的アプローチ	019
ニッサン・グリーンプログラム	024
バリューチェーンでの活動実績	034
商品	034
企業活動	044
関連パートナーとの連携	059
第三者保証	061

環境方針

環境方針

日産自動車は、エネルギーや資源の使用効率を高め、多様性や循環を促進しながら、お客さまに革新的な商品・サービスを提供し、日産の環境理念である「人とクルマと自然の共生」を目指していきます。

環境理念の実現に向けては、究極のゴール「事業活動やクルマのライフサイクル全体で生じる環境への依存と負荷を自然が吸収可能なレベルに抑えること」と、われわれのありたい姿

「シンシア・エコイノベーター(Sincere Eco-Innovator)」を明確に定め、地球の未来に残すエコロジカル・フットプリントをできるだけ小さくしなければなりません。

そして、われわれ一人ひとりが環境に対する正しい認識を深めるとともに、人や社会、自然や地球を思いやる「やさしさ」を企業活動全域に生かすことで、より豊かな社会の発展につながると考えています。

日産環境理念『人とクルマと自然の共生』

日産自動車は環境に対する正しい認識を深めるとともに、人や社会、自然や地球を常に配慮しながらクルマづくりや販売などすべての企業活動を行い、より豊かな社会の発展に貢献します。

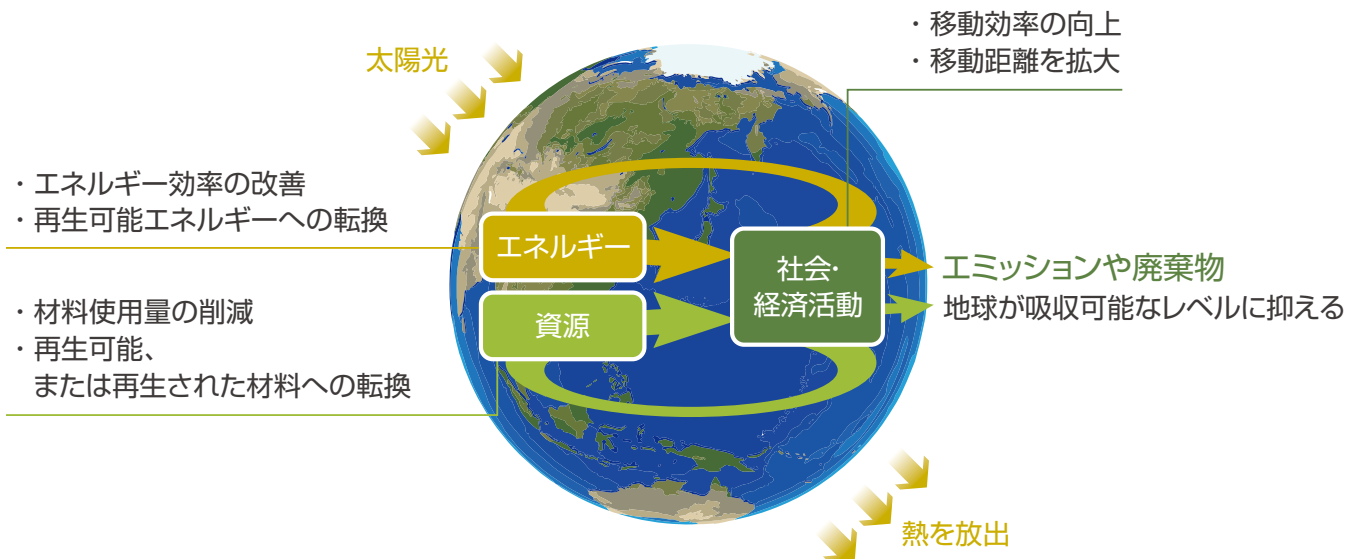
究極のゴール

事業活動やクルマのライフサイクル全体で生じる環境への依存と負荷を自然が吸収可能なレベルに抑え、豊かな自然資源を次世代に引き継ぎます。

われわれのありたい姿：「シンシア・エコイノベーター(Sincere Eco-Innovator)」

シンシア(誠実な)：環境問題に対し積極的に取り組み、環境負荷を低減する。

エコイノベーター：持続可能なモビリティ社会の発展のために、お客さまに革新的な商品・サービスを提供する。



環境に対する認識

昨今、環境や社会にかかわる課題は深刻さを増し、社会は貧困や飢餓、エネルギー問題、気候変動、天然資源の確保や、情報セキュリティ、平和を脅かす紛争問題などの課題に直面しており、これらの課題はWEF (World Economic Forum) でも取り上げられています。

こうした諸課題の解決を目指し、日産は、安全で安心かつ持続可能なモビリティをすべての人にもたらし、社会に価値を提供することがより一層重要になっていると認識しています。その中でも気候変動問題は、毎年世界中で頻発している大規模な自然災害の要因と捉えられており、これまで以上にその影響を抑える必要性が高まっています。2021年から2023年で発表されたIPCC (気候変動に関する政府間パネル) の第6次評価報告書では、人為的な温室効果ガスの排出が、地球温暖化を引き起こしたことに疑いの余地はないとし、世界全体の平均気温の上昇を1.5℃に抑えるためには、もはや一刻の猶予もなく対策の強化が必要であることが、改めて強調されました。

2023年12月に開催された国連気候変動枠組条約第28回締約国会議 (COP28) では、気候問題と生物多様性問題の解決を目指す世界目標達成のために、2030年までに自然の喪失を食い止め、状況を逆転させ、化石燃料の迅速な段階的廃止を進めるための、具体的な行動提案を含む野心的な目標を設定することが提示されました。また、COP29では国際的に協力して削減や吸収・除去対策を実施するパリ協定第6条の完全運用化が合意されました。

また2022年12月に開催された第15回生物多様性条約締

約国会議 (COP15) においては、生物多様性保全に向けた国際的な目標を定めた昆明・モントリオール生物多様性枠組が採択され、COP16ではその実施をモニタリングする枠組みが議論されました。

自動車産業は、クルマの製造にあたり、鉄やアルミニウムをはじめとする多くの資源を使用しています。また、近年の電動化により、リチウムやニッケルなどの偏在する貴重な資源の利用も拡大しつつあり、バリューチェーン全体において地球環境に依存するとともに、影響を与えています。日産は気候変動やエネルギー問題への対応、大気の質をはじめとする自然資本の保全、鉱物資源の効率的な活用、化学物質管理、資源枯渇への対応といった持続可能性に関する取り組みを行うとともに、化石燃料依存からの脱却に向けたビジネス構造の変革を推進することが重要と認識しています。

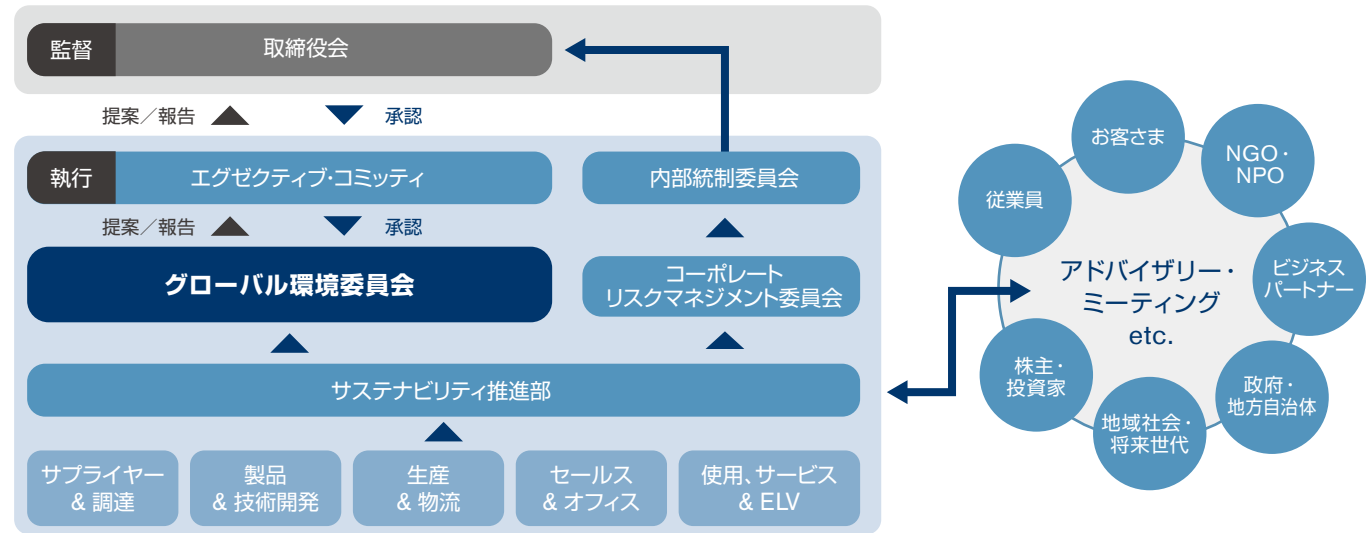
グローバル環境マネジメントのガバナンス

多様化する環境課題に対応しながら、グローバル企業として包括的な環境マネジメントを推進するため、日産は各地域、機能部署、さまざまなステークホルダーと対話・連携した組織体制を構築しています。

グローバル環境委員会(G-EMC: Global Environmental Management Committee)において、バリューチェーン全体をカバーする関係役員が出席し、全社的な方針や取締役会への報告内容の決議などを行います。また、経営層は企業としてのリスクと機会を明確にし、各部門での具体的な取り組みを決定するとともに、PDCAに基づく進捗状況の効率的な管理・運用を担っています。グローバル環境委員会での決議事項はエグゼクティブ・コミッティを経て取締役会に報告され、取締役会が監督する役割を担っています。

並行して気候変動に関してはコーポレートリスクマネジメント委員会にて論議され、内部統制委員会を通じても取締役会に定期的に報告が行われるほか、現場レベルのリスク管理としてはISO14001認証をグローバル主要拠点で取得しています。毎年発行するサステナビリティデータブックや環境格付け機関からの質問への回答などを通じて、幅広いステークホルダーにその状況を発信しています。

サステナビリティ戦略に関する意思決定プロセス



組織体	役割	主な決議事項	開催頻度
グローバル環境委員会 (G-EMC)	取締役会から権限委任 (DOA) され、全社的な環境方針などの決議を行う。	- 環境に関わるトピックのリスク/機会の明確化 - 目標の進捗管理 - 扱うトピック例: 気候変動、自然依存、大気品質と水、生物多様性を含む自然関連課題など	年2回

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	ニッサン・グリーンプログラム	バリューチェーンでの活動実績 第三者保証

気候変動と業績連動型インセンティブ

当社は2021年度より、経営層の長期インセンティブ報酬のひとつである業績連動型インセンティブ(金銭報酬)*1にサステナビリティに関連する評価指標を組み込むことで、中長期的な企業価値および社会価値の向上を目指してきました。2024年度には指標および配分の見直しを行い、気候変動に関する一層の取り組み強化を図りました。

旧)2021年度～2023年度

カーボンニュートラルに関わる取り組みを評価する外部指標(配分5%)

新)2024年度～

バリューチェーン全体をカバーするNGPの活動7領域におけるCO₂排出削減量*2に基づくパフォーマンススコア(配分10%)

ISO14001によるマネジメント強化

日産ではグローバルに主要生産工場とその他非生産拠点でISO14001の認証を取得しています。日本においては、グローバル本社をはじめ、研究開発、生産、物流などすべての主要拠点、および製品開発プロセスにおいて環境ISO14001の認証を取得しました。環境統括者が定めた全社での統一目標を、地区事務局を通して事業所ごとに従業員に共有しています。地区事務局では各事業所や部門での活動内容や従業員からの提案を束ねる役割を担います。また、全社を統括するISO事務局と月に1回以上協議を実施し、目標に対する進捗の確認、ベストプラクティスの水平展開、マネジメントシステムの改善、次年度計画の立案、事業所や部門からの要望の吸い上げなどを行います。協議された内容や提案などは年2回(うち1回はマネジメントレビューにて)、環境統括者に報告し改善につなげています。マネジメントが適切に機能していることを確認するために第三者機関による外部審査を定期的に実施しています。さらに、内部監査において第三者機関による確認項目だけではなく、行政への届出など、遵法性を重点的に確認しリスクを洗い出しています。

連結製造会社との協働

日本国内外の主要連結製造会社においては、ISO14001の認証を取得し運営することはもちろん、各社の環境方針に基づいた環境活動を推進しています。

販売会社との協働

また日産の環境活動に対して、お客さまから信頼と評価を頂くためには、販売店での環境配慮が不可欠だと考えています。日本の販売会社は、ISO14001認証をベースとした日産独自の環境マネジメントシステム「日産グリーンショップ」認定制度を導入し、半年に一度、販売会社自らが内部審査を行うとともに、日産自動車株式会社による1年ごとの「定期審査」、3年ごとの「更新審査」を通じて、継続的な環境マネジメントシステムの維持に努めています。2025年3月末時点で、部品販売会社を含む全販売会社147社の店舗約2,700店を「日産グリーンショップ」として認定しています。認定された販売会社では、お客さまに環境への取り組みの紹介などを行い、お客さまと積極的なコミュニケーションを行っています。

従業員の環境意識の向上に向けて

日産の環境活動を支えるのは、従業員一人ひとりの環境知識や意識、そして業務を遂行する技能(力量)です。日産はISO14001の活動の一環として、従業員および事業所や工場で働く協力会社の従業員を対象に、「ニッサン・グリーンプログラム2030(NGP2030)」に基づくカーボンニュートラルの実現を目指したCO₂排出量の削減、エネルギーや水使用量の削減、廃棄物の削減のほか、環境事故防止についての教育を毎年実施しています。また工場では、環境リスク低減を実現する力量の継続的な向上のために、教育や訓練に加え各従業員の定量評価を行い、人財を育成しています。訓練内容は、常に必要な力量が身に

*1 社会課題への対応に関わる評価指標はこちらをご参照ください。 >>>P010

*2 NGPの活動7領域におけるCO₂排出削減量についてはこちらをご参照ください。 >>>P007

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	ニッサン・グリーンプログラム	バリューチェーンでの活動実績 第三者保証

つくよう年1回の見直しを行っています。

日本では、「NGP2030」や自動車産業を取り巻く環境課題について理解を促進するため、入社時のオリエンテーションや新任監督者や役員向けのコンプライアンス教育を実施しています。また環境への取り組みの新情報などを社内ポータルサイトを通じて発信し、従業員への共有を図っています。海外でも、社内ポータルサイトでの情報共有はもちろん、ビデオやイベントなど地域に合ったツールや機会を活用しながら啓発活動や従業員への情報共有を図っています。

環境負荷物質を高い自主基準で低減

材料における環境負荷物質については、欧州ELV指令(使用済み自動車に関する指令)や、2007年6月から欧州で施行されている化学品に関するREACH規制*1、日本の「化学物質の審査および製造等の規制に関する法律」などにより、各国で使用制限の強化が求められています。日産では、厚生労働省が2002年1月に定めた指定物質で、自動車車両を構成する物質の指針値を満たすことを目指し、2007年4月以降、日本国内で生産・販売している新型乗用車に適用しています。2019年1月に同省指針値が改定され、2022年以降発売の新型車から新しい指針値を満たしています。

日産は、環境負荷物質の管理強化、計画的な削減、および代替を推進しています。科学的にハザード(危害要因)が認定された、またはそのリスクが高いと考えられる物質や、NGOがリスクを指摘している物質などを含めて検討し、各国の法規

よりさらに厳密な日産独自の物質使用方針を2005年に制定、2007年よりグローバルに展開しています。使用を禁止または管理する化学物質については、日産技術標準規格「特定物質の使用に関する制限」で規定し、開発初期段階から日産車に使用する原材料、部品、用品のすべてに適用しています。例えば、2007年7月以降にグローバル市場に投入した新型車*2から、重金属化合物4物質(水銀、鉛、カドミウム、六価クロム)および特定臭素系難燃剤PBDE*3類の使用を禁止もしくは制限しています。

日産技術標準規格「特定物質の使用に関する制限」は、グローバルの化学物質法規の動きと日産の自主基準物質の追加に基づいて、毎年改定しています。2017年度の改訂にあたっては、法規を先読みしてコンプライアンスレベルを高めるハザードとリスクに関して再評価した基準を設定しました。日産はサプライヤーとともに、サプライチェーン全体で情報伝達と管理の仕組みを構築して運営しています。例えば欧州で生産・輸入するクルマや部品については、REACH規制に適合するためユーザーなどへの情報提供や官庁への登録・届出を行い、CLP規制*4にも対応しています。

日産の拠点における行政処分および指導

2024年度の環境マネジメントシステムの活動について、重大な環境法令違反や行政処分を受けた事案はありませんでしたが、下水排水基準値または協定値の超過が発生しました。設備改善およびモニタリング体制の強化により再発防止を行っています。

*1 REACH規制：Registration, Evaluation, Authorisation and Restriction of Chemicals

*2 OEM車を除く。

*3 PBDE：ポリブロモジフェニルエーテル

*4 CLP規制：Classification, Labelling and Packaging of Substances and Mixtures Regulation

戦略的アプローチ

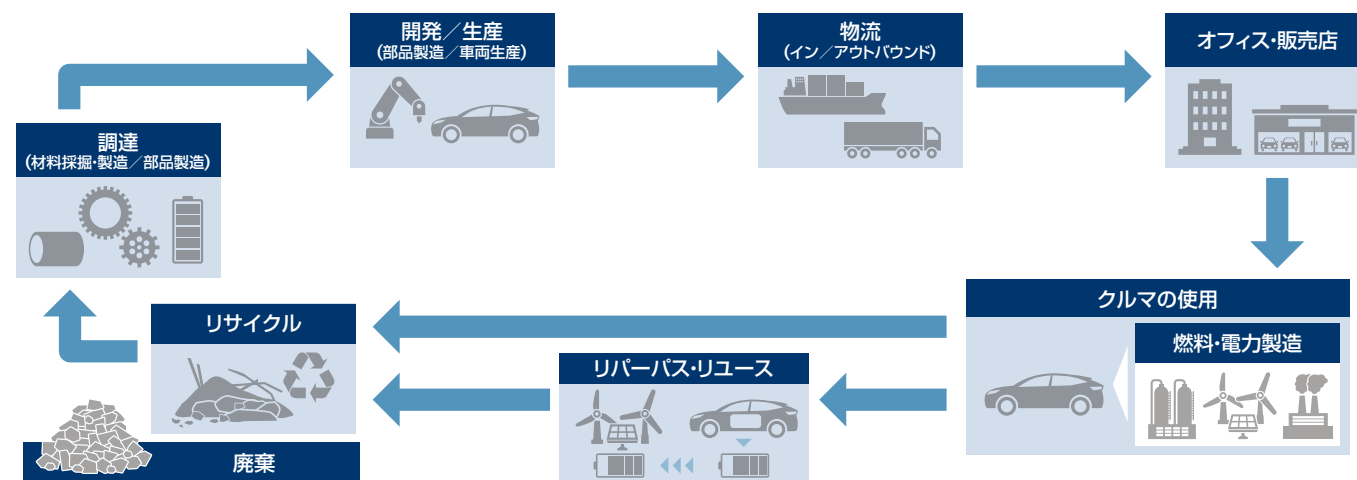
日産は、グローバルな環境課題の解決に対し確実に貢献するため、世界の環境有識者、投資家、NGO／NPOなどの団体と直接論議し、自社の潜在的な機会とリスクを分析しています。また分析範囲はグローバルな自動車メーカーとして、自社の活動だけでなく上流・下流での活動も責任範囲と捉え、クルマの原材料の調達から輸送、廃棄、リサイクル、走行時など、サプライヤーを含むバリューチェーン全体を対象としました。こうした対象範囲はENCORE*1の依存と影響の産業別ガイドと比較し、上流・下流での活動を影響範囲に含むこと

は妥当と判断しました。それをもとに取り組むべきマテリアリティ*2を特定し、日産の中長期的な環境戦略として取り組むべき重要領域として「気候変動」「資源依存」「大気品質と水」を設定し、2030年までの具体的な行動計画*3を策定しています。これらの領域は相互に関連しており、包括的に取り組むことで、生物多様性を含む自然資本の課題を解決できると考えています。また、脱炭素の移行にあたり発生する影響を把握し、負の影響を与えない公正な移行(just transition)を考慮した活動を進めていき、カーボンニュートラルを実現します。

自然関連課題への取り組み

2001～2005年に実施された「ミレニアム生態系評価」の報告書では過去50年間に、世界の生態系の劣化がかつてないほどの速度と規模で進行していると指摘されました。これを受け、日産は早くから材料資源の採掘、車両生産、車両走行に至るバリューチェーン全体での自然への依存と影響の評価を実施しています。国連大学とともに、「企業のための生態系サービス評価」*4の手法を用いて、自社の活動が生態系へもたらす依存と影響を把握する研究を行い、2010年にはその成果を報告書「Ecosystem Services and the Automotive Sector(ESAS)」*5として発表しました。これらはマテリアリティの判断にも反映され、「ニッサン・グリーンプログラム(NGP)」の方針や戦略として具体的なアクションに落とし込まれています。また日産は経団連生物多様性宣言イニシアチブにも参画をしています。

日産のバリューチェーン



*1 ENCOREについての詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.encorenature.org/en>

*2 環境を含むサステナビリティのマテリアリティは、こちらをご参照ください。 >>>P004

*3 中期環境行動計画「NGP2030」についてはこちらをご参照ください。 >>>P024

*4 国連のミレニアム生態系評価に基づき、世界資源研究所が世界経済人会議とメリアン・インスティテュートとの協力のもとに作成。

*5 「Ecosystem Services and the Automotive Sector」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/ENVIRONMENT/GREENPROGRAM/FOUNDATION/NGO/ASSETS/PDF/nissanEcosystem_web.pdf

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	ニッサン・グリーンプログラム	バリューチェーンでの活動実績
				第三者保証	

TNFD*1について



2021年、2022年に開催されたCOP15では、2030年までに生物多様性の損失を食い止め、反転させ、回復軌道に乗せるというネイチャーポジティブの方向性が明確に示されました。また、2023年には、自然資本等に関する企業のリスク管理と開示枠組みを構築する国際的な組織であるTNFD（自然関連財務情報開示タスクフォース）が、最終提言を公表しました。この提言には、企業活動と自然との関係性を評価し、適切な情報開示を行うためのフレームワークが示されています。日産はTNFDの提言に賛同し、その活動を支援するTNFDフォーラムに参画しました。そして2024年度から、TNFDの提言に基づいた開示の準備を進めています。TNFDに基づいた開示とその拡大計画についてグローバル環境委員会で役員の下承を得るとともに2025年1月にはTNFDアダプ

ターに登録をしました。開示提言に沿ってガバナンスなどの開示も強化しています。*2

LEAP*3分析について

TNFDが推奨するLEAP分析に基づき、当社の事業活動における自然への依存度や影響、関連する機会とリスクについて分析を行いました。

LEAP分析におけるEvaluate（診断する）のプロセスでは、ENCORE*4を使用しバリューチェーンにおける包括的な自然関連課題を認識、評価を行うための分析を実施しました。材料資源の採掘、車両生産、車両走行に至るバリューチェーン全体を網羅し、調達、物流、生産、販売、クルマの使用、廃棄の6つのフェーズにおける主要な材料、部品、工程を通じた自然への依存と影響の評価を行いました。

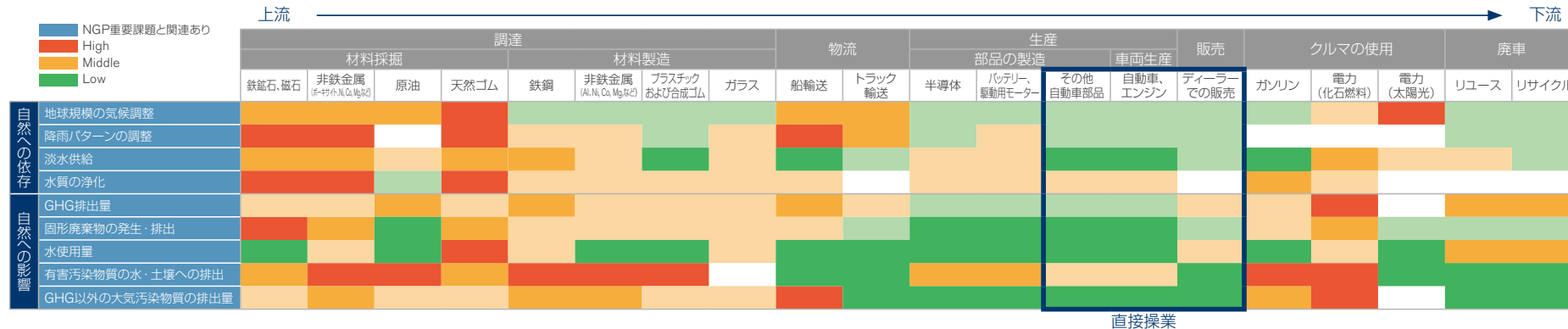
その後、日産がまず責任を果たすべき直接操業を中心に

WRI Aqueduct Water Risk Atlas*5、Integrated Biodiversity Assessment Tool (IBAT*6)やWWF Water Risk Filter*7を用いて詳細な分析を行いました。

その結果、自然への依存や影響の大きい領域はNGPで重要課題として取り組んでおり、NGPの資源や水に関する目標が自然関連の主要な対策を網羅していることが確認されました。（下図参照）日産ではTNFDに先がけて自然の依存と影響を評価し、取り組んでいますが、その内容はTNFDとも整合しており、NGPが自然課題への対応として有効に機能していることが確認できました。日産はこれまで通り、事業に関連の深い分野（気候変動、資源、大気品質と水）から自然課題に取り組み、NGPの目標の達成に向け活動を推進していきます。

また今後はLEAPの詳細分析をバリューチェーンに拡大し、特にリスクが高い上流での依存や影響、リスクや機会の特定をし、具体的な対策の検討をしていきます。

バリューチェーン分析の結果



*1 TNFD: Taskforce on Nature-related Financial Disclosures

*2 TCFD/TNFD対照表についての詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/SR/2025/TCFD/>

*3 TNFDが推奨する自然課題へのプロセス、自然との接点、自然との依存関係、インパクト、リスク、機会など、自然関連課題の評価のための統合的なアプローチ。スーピングを経て、Locate（発見する）、Evaluate（診断する）、Assess（評価する）、Prepare（準備する）のステップを踏む。

*4 自然関連リスクを調査し、依存度や影響を理解する際役立つオンラインツール <https://encorenature.org/en>

*5 WRI Aqueduct Water Risk Atlas についての詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.wri.org/aqueduct>

*6 IBATについての詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.ibat-alliance.org/>

*7 WWF Water Risk Filterについての詳細はこちらをご参照ください。 <https://riskfilter.org/water/home>

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	ニッサン・グリーンプログラム	バリューチェーンでの活動実績
				第三者保証	

気候変動シナリオ分析を用いた2050年社会への戦略強化

2015年、国連気候変動枠組条約第21回締約国会議(COP21)は、世界の気温上昇を2℃よりも「十分に低く」抑えることを掲げた枠組み(パリ協定)を採択、2021年のCOP26では、「気温上昇を1.5℃に制限するための努力を継続することを決意する」と「1.5℃に制限」をより強調するとともに「世界全体の二酸化炭素排出量を今世紀半ば頃には実質ゼロにすること」が追記されました。また、パリ協定と同じく2015年に国連が採択した「持続可能な開発目標(SDGs)」でも、気候変動への具体的な対策が求められています。日産の環境への取り組みは、長期ビジョンからバックキャストしたマイルストーンを確実に達成することで継続的な成果を収めてきました。しかし、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の報告書から2℃シナリオに基づいた長期ビジョンを策定した2006年と比較し、気候変動による異常気象の脅威は一段と高まっています。不確実性が拡大する中でさらにレジリエントな戦略の強化が必要と考えています。

強化に向けて実施したシナリオ分析は、2050年までのタイムホライズンにおける国際エネルギー機関(IEA^{*1})が提示した4℃と2℃シナリオ、およびIPCCの1.5℃特別報告書に基づいた社会を想定しました。さらにお客さまや市場の受容性変化、自動車にかかわる規制の強化、クリーンエネルギーへの移行を因子として考慮し、日産の事業活動や商品、サービスについて、気候変動がもたらす機会とリスクに対する戦略のレジリエンス性を以下の4つのステップで検討しました。

検討のステップ

1. 過去のマテリアリティの評価や、文献調査などで気候変動によって自動車セクターに決定的な影響を与え得るリスク要因を調査し、人口・経済・地政学、気候変動政策、技術などの区分でメインドライバーを定義
2. メインドライバーは物理的リスクと移行リスクに分類され、それぞれがトレードオフの関係にあることを考慮し、地球の平均気温の上昇を1.5℃、2℃、4℃と3種類のシナリオで検討し、2℃シナリオを基準とした場合のとして、1.5℃、4℃シナリオのリスク振れ幅を確認
3. 自動車セクターへの影響度合いとその時間軸をもとに、メインドライバーから影響力の高い項目をスクリーニング
4. シナリオごとの変化、状態、影響を整理し、戦略強化に必要な要素を定性評価に基づいて導出

次ページに示す通り、日産はグローバルな自動車企業として170以上の市場で生産にかかわる施設や、商品を展開しているため、各市場のインフラや規制、実際の使われ方が異なる状況を想定しました。この想定を検証結果として、日産の電動化技術を始めとする取り組みは想定されるすべてのシナリオ(1.5℃/2℃/4℃)のリスクに対応可能で、さらに機会を生み出す見込みがあり、企業としてのレジリエンス性があると認識しました。そのため、これらの技術の具現化に向けた取り組みをさらに加速させていきます。特にリスク対応にはサプライチェーンと一体となった活動が必要不可欠です。社会全体の気候変動対策が遅れた場合、考えられるリスクは、脱炭素社会へのさらなる政策や法規制、研究開発業務の増加、市場需要や企業評判の変化による移行リスク、

異常気象災害の増加や海面の上昇といった物理的リスクなどがあり、それぞれへの対応にかかるコスト増とクルマの販売成績の低下によって財務状況に大きな影響を及ぼす可能性があります。このようなリスクを少しでも回避し、将来の機会創出に向け、シナリオ分析から得られた知見を実際のアクションに落とし込み、レジリエンス性を拡大した戦略を加速させていきます。また、ゼロ・エミッション車の拡大は、自動車セクターとして脱炭素社会に移行する大きな方策としてだけでなく、電力マネジメントや減災・防災における社会のレジリエンス性にも寄与する機会であり、社会への価値創造とビジネスの両立を可能にします。こうした影響や検討した戦略を、投資家などのステークホルダーにより分かりやすく的確に伝えることが重要だと考え、日産はTCFD^{*2}提言を支持するとともに、その推奨される枠組みに沿った情報開示に努めていきます。

*1 IEA: International Energy Agency

*2 TCFD: The Task Force on Climate-related Financial Disclosures

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	ニッサン・グリーンプログラム	バリューチェーンでの活動実績
				第三者保証	

想定したシナリオと関連機会とリスク

想定シナリオ	影響領域	種別	気候変動が事業活動に与える機会とリスク	発生の時間軸*1	財務インパクト*2	影響を与えるバリューチェーン	NGP2030活動領域	取り組み内容
1.5℃	政策規制	移行リスク	さらなるクルマの燃費や排出ガス規制の強化へ対応し、電動パワートレイン技術の開発や生産コストへ影響を与える可能性	中期～長期	大	開発/生産 クルマの使用	気候変動 大気品質	・電動車による持続可能な社会の構築(P034～) ・排出ガス規制への対応状況(乗用車のみ)(P043～) ・大気品質に関する実績(P058～)
		移行リスク	炭素税の拡大によるエネルギーコストの負担増加と、対策としての省エネルギー設備への投資拡大	中期～長期	大	開発/生産 物流 オフィス販売店	気候変動	・生産工場でのカーボンニュートラルロードマップ、「ニッサン インテリジェント ファクトリー」(P045)
	技術	移行リスク	車載電池などのEV関連技術や、自動運転技術の拡大など次世代自動車技術の採用によるコスト影響	中期～長期	大	開発/生産	気候変動	・次世代バッテリー(P036) ・高度運転支援技術 ープロパイロットー(P073)
		移行リスク	車載電池材料である希少金属の需要拡大によるサプライチェーンへの影響やその安定化のためのコスト増加	中期～長期	中	調達	サステナブルマテリアルの拡大 責任ある調達の実施	・使用済み自動車(ELV)のリサイクル、希少資源の再利用(P055) ・責任ある調達の実施(P031～)
	市場	移行リスク	消費者の意識変化による、公共交通機関や自転車の選択や、モビリティサービスへの移行による新車販売台数減少の可能性	中期～長期	小	開発/生産 クルマの使用	気候変動 クルマの活用	・新しいモビリティを活用したまちづくりの実証実験(P091)
		機会	EVのエネルギー充放電力技術であるV2X(Vehicle to Everything)による電力マネジメント機会の提供拡大とEV価値の再認識(特にV2G(Vehicle to Grid)において)	中期～長期	小～中	開発/生産 クルマの使用	エネルギーマネジメント機能の拡大	・EVを活用したエネルギーエコシステム(P040) ・英国での「Vehicle to Grid(V2G)」技術導入(P041)
4℃	異常気象	物理的リスク	大雨、渇水など異常気象による、サプライチェーンや生産拠点の操業への影響と、損害保険料や空調エネルギーの費用の増加	短期～長期	大	調達 生産	気候変動 生産拠点での水リスク管理の強化	・リスクマネジメント体制(P131) ・水に関する実績(P057)
		機会	防災・減災対策として、EV/バッテリーを使用した緊急電源確保のニーズが増大	短期～長期	小～中	開発 クルマの使用	エネルギーマネジメント機能の拡大	・ブルー・スイッチの展開(P091)

想定した気候変動シナリオ

想定したシナリオはIEAのNZE*3シナリオ・報告書、IPCCの代表的濃度経路(RCP*4)や共通社会経済経路(SSP*5)などを用いました。

・ 1.5℃シナリオ：急激な緩和策が要求されるが、長期的には持続可能な社会に移行する。

参照：IEA NZEシナリオ、IPCC Special Report 1.5

・ 4℃シナリオ：気候変動被害が深刻かつ大規模化し、適応に迫られながら緩和策が強制される。

参照：IPCC RCP 8.5、IPCC SSP 3

*1 発生の時間軸：短期(～1年)、中期(～3年)、長期(3年以上)

*2 売上高に与える影響度

*3 NZE: Net Zero Emissions

*4 RCP: Representative Concentration Pathways

*5 SSP: Shared Socio-Economic Pathways

炭素税の影響による財務インパクト評価

既に開示しているシナリオ分析をもとに、財務インパクト評価を2021年度に実施しました。炭素税の影響についての評価結果は以下の通りです。

財務インパクト評価のシナリオ選定背景

二酸化炭素排出に対する価格付けが進み、炭素税を導入する国・地域が拡大しています。国・地域により、課税の水準や対象となる業種も異なりますが、企業に対する影響が大きいため、この分析では炭素税による財務インパクトを対象とします。

算定式と試算額の評価、前提条件

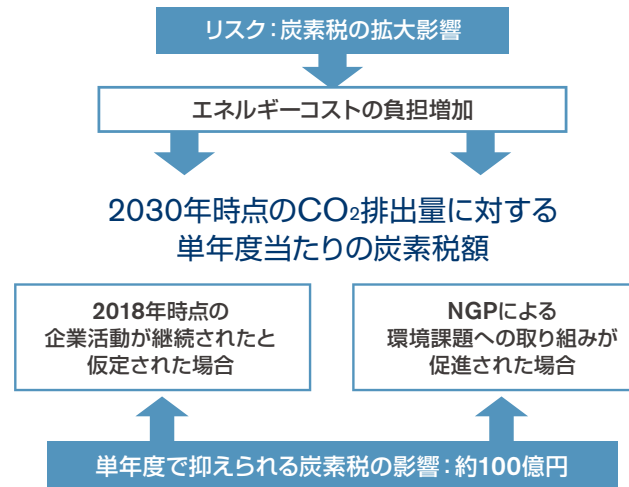
試算では、日産の炭素税予測の基礎としてIEAレポートなどを参照しています。

2030年時点のGHG排出量の炭素税を、次の条件で算出しています。

- ①2018年時点の企業活動が継続された場合
- ②NGPによる環境課題への取り組みが促進され、単年度での炭素税の影響を抑えた場合

事業展望の影響度

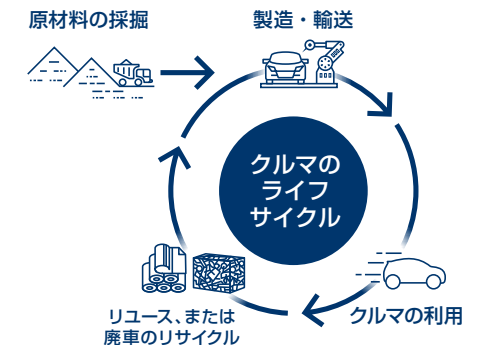
NGPによる環境課題の取り組みを実施した場合、GHG排出量を削減しなかった場合に比べ、スコープ1&2で炭素税の影響を約100億円抑えることができると試算されました。



ライフサイクルアセスメント(LCA)手法を活用した環境負荷の低減

日産はライフサイクルアセスメント(LCA: Life Cycle Assessment)によって潜在的なリスクを抽出しています。^{*1}クルマの使用時のみならず、製造に必要な原材料採掘の段階から、製造・輸送、リユースまたは廃車のリサイクルに至るすべての段階(ライフサイクル)において環境負荷を定量的に把握し、包括的な評価をしています。

また、日産は、2010年から社団法人産業環境管理協会による第三者認証を取得し、2013年からはLCAの算出手順についてドイツの第三者機関テュフラインランドによる認証に切り替え、現在も継続して取得しています(2023年12月更新)。この認証は、ISO14040/14044の規格に基づいており、製品ライフサイクルにおける日産の環境負荷の算出手順を保証するものです。この算出手順に基づいて、影響の大きいグローバルのトップ販売モデルを中心に継続してLCAを実施し、台数ベースでのカーボンフットプリントは、グローバルで約80%、欧州では約90%に達しています。LCAの継続的な実施を通じて、クルマのライフサイクルにおける環境負荷の可視化・低減を推進していきます。



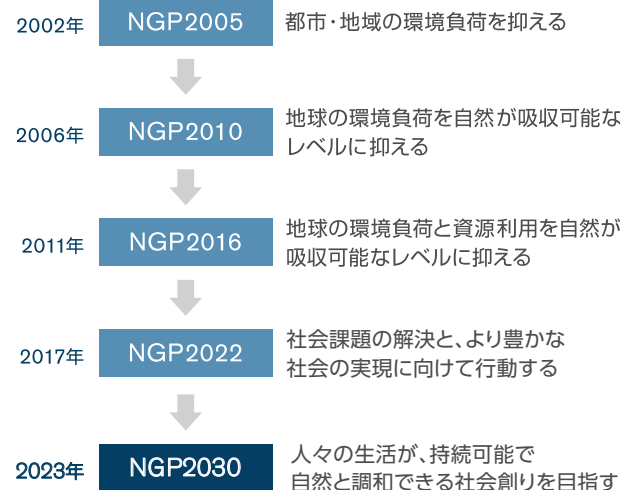
^{*1} ライフサイクルアセスメントの評価結果はこちらをご覧ください。 >>>P037

ニッサン・グリーンプログラム

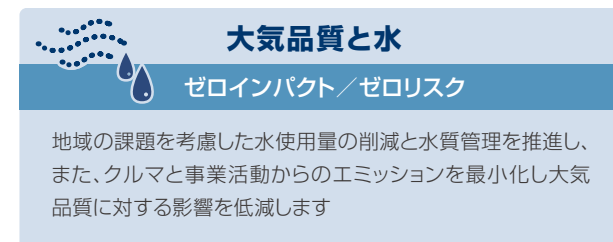
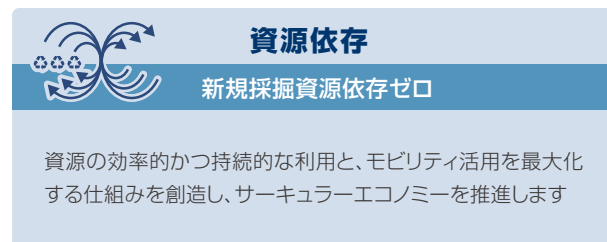
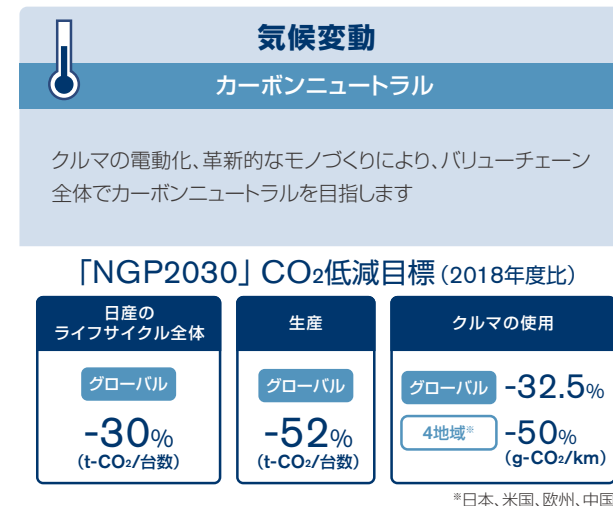
中期環境行動計画「NGP2030」の 取り組むべき重要課題とチャレンジ

日産は、環境理念である「人とクルマと自然の共生」を実現するため、中期環境行動計画「ニッサン・グリーンプログラム（NGP）」を2002年に制定しました。この計画は、環境への依存と影響を自然が吸収できる範囲に抑え、環境にポジティブなインパクトを与える価値創造を究極のゴールとしています。2023年度に策定した第五世代「NGP2030」は、持続可能で自然と調和した社会の実現に向けて、活動を強化・推進しています。マテリアリティ評価に基づき、「気候変動」「資源依存」「大気品質と水」を「NGP2030」における重要課題に設定し、コンプライアンスはもとより、社会的要求かつ長期的視点に基づき、上記3つの重要課題にチャレンジしています。さらにそれぞれの活動の説明責任を果たすため、トレーサビリティを通じた「基盤」の強化にも取り組んでいます。「気候変動」の目標策定にあたっては、最新のIPCC（気候変動に関する政府間パネル）に基づいて長期のCO₂削減量を試算し、先述の気候変動シナリオ分析を踏まえながらバックカスティングした目標を定めました。重要課題に関連する取り組みの指標や進捗は、毎年開示します。日産は、クルマづくりに携わる開発・生産部門のほか、セールス・サービス部門を含む企業全体で、環境課題に関する取り組みを加速させると同時に、基盤を強化し、社会価値の創出に取り組めます。

「NGP」の進化



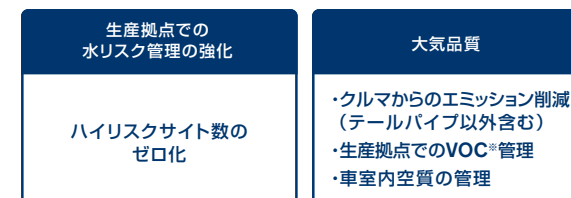
「NGP2030」の重要課題



「NGP2030」目標



「NGP2030」目標



*Volatile Organic Compounds: 揮発性有機化合物

気候変動

カーボンニュートラル社会の実現に向けた日産の取り組み

自動車産業は、化石燃料への依存からの脱却を進めCO₂排出量の削減に取り組むことが求められており、そのビジネス構造は大きく変化しつつあります。日産は2050年カーボンニュートラルを宣言し、クルマの電動化や企業活動のイノベーションに注力し、サプライヤーと協力して目標達成に向けた活動を推進しています。

再生可能エネルギーや充電インフラの拡大に合わせて、クルマの電動化を進め、事業活動の持続可能性を追求することで、カーボンニュートラルな未来を実現していきます。

「NGP2030」は1.5℃シナリオ実現に向けて気候変動の取り組みを加速し、CO₂排出量の削減や電動化技術の実用化など環境対応と社会的価値の創出に取り組んでいます。

ライフサイクルでのCO₂排出量削減の取り組み

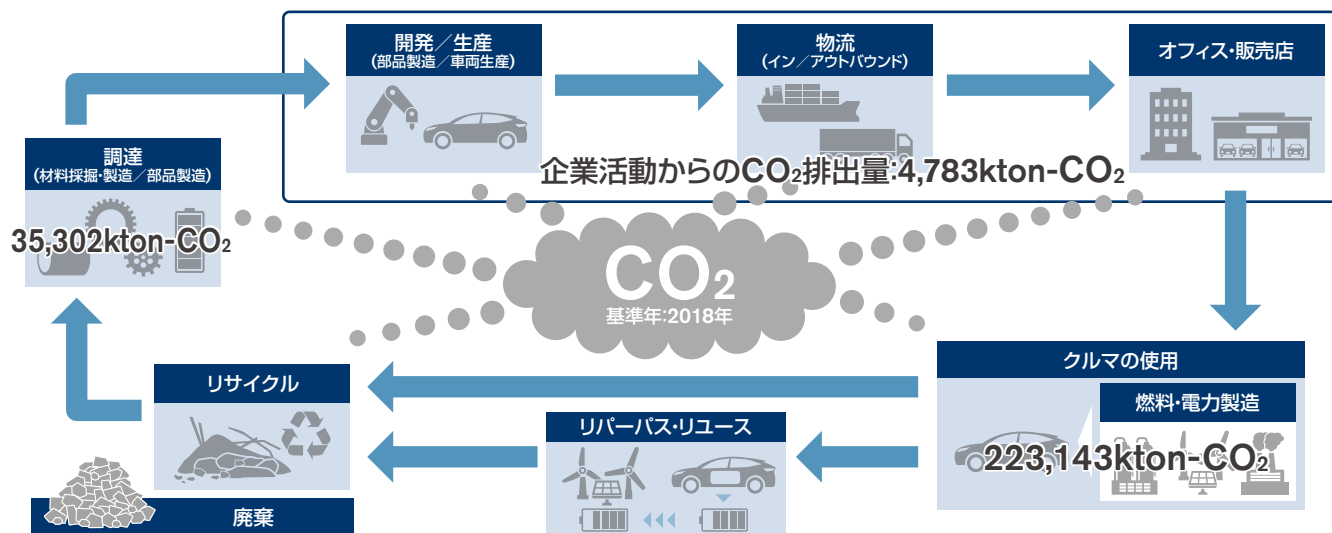
日産は、自動車のライフサイクル全体でCO₂排出量の削減に取り組んでいます。

原料採掘から製造、輸送、製品の使用、廃棄までのすべての段階でCO₂削減を実現するため、サプライヤーを含むバリューチェーン全体で新たな技術開発や再生可能エネルギーの導入を推進しています。

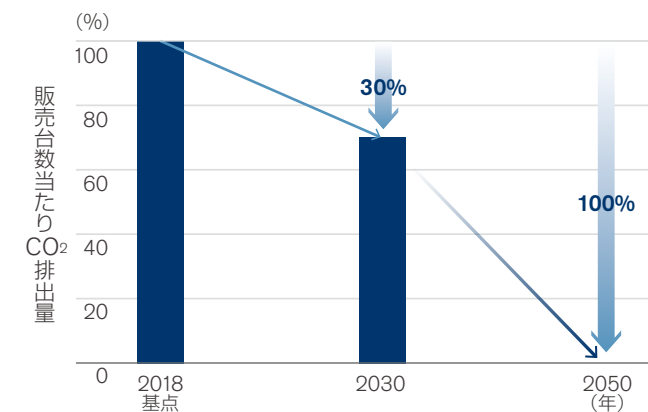
そのため、「NGP2030」では、調達、生産、物流、オフィス、販売会社、製品の各活動領域ごとにCO₂削減を進め、ライフサイクル全体のCO₂排出量を2018年基点で30%削減することを目指しています。

2024年のライフサイクルでのCO₂排出量は、2018年度と比べ12%の削減となりました。

ライフサイクルでのCO₂排出量



ライフサイクルにおける長期ビジョン



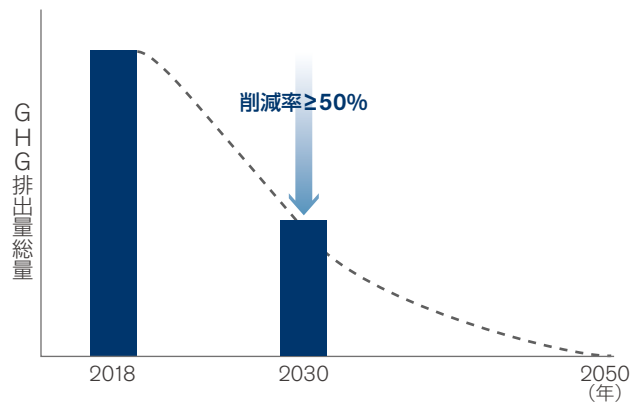
企業活動を通じた取り組み

企業活動を通じた取り組みに関する方針・考え方

2018年、IPCC 1.5℃特別報告書では、世界の平均気温上昇を産業革命以前から1.5℃以内に抑えることの必要性和、2050年にはネットゼロ実現の必要性が示されました。日産はIPCCの報告内容をもとに2030年までに必要なCO₂排出総量(スコープ1・2)の削減率を50%以上(2018年比)と試算しました。

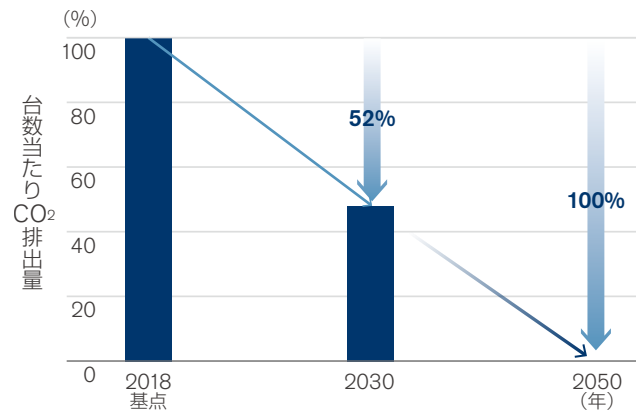
この1.5℃目標の達成を目指し、「NGP2030」における企業活動の取り組みでは、それぞれの領域でCO₂排出量削減を着実に実行するため、生産、オフィス、販売会社の活動領域別に原単位CO₂削減目標を設定しています。

スコープ1・2における長期ビジョン



特にスコープ1・2排出総量の約9割を占める生産領域では、2030年までに52%削減(生産台数あたり、2018年比)が必要と試算し、NGPの目標に落とし込んでいます。

生産活動における長期ビジョン



目標達成に向けたアプローチは、まず使用エネルギーの測定・管理と省エネ活動により消費エネルギーを最小限に抑えます。

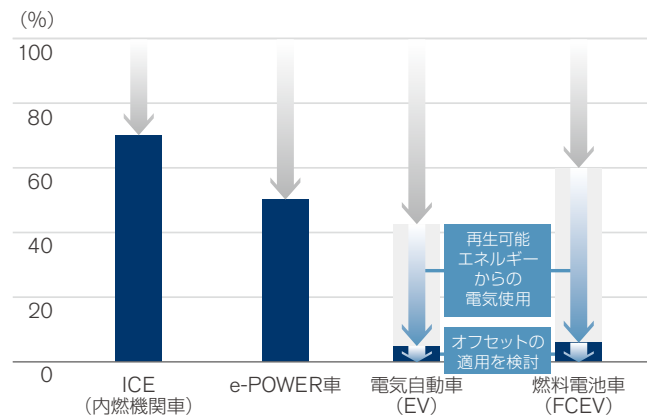
次に、化石燃料を使用中の生産設備に対し可能な限り電化やカーボンフリーエネルギーへの代替を進め、機会創出を目指して技術開発を推進し1.5℃目標の達成を目指します。

製品を通じた取り組み

気候変動に関するアプローチ

クルマの走行中に排出されるCO₂は、ライフサイクル全体の80%以上を占めています(2024年時点)。この影響を最小限に抑えるため、日産はCO₂排出量の少ないクルマを開発し、お客さまに継続的に提供することに取り組んでいます。

パワートレイン別CO₂排出量比較(WtW)*1



CO₂排出量削減に最大限取り組んだ後、回避できないCO₂排出についてはカーボンオフセットの適用を検討し、ライフサイクル全体での目標達成を目指します。

製品による環境負荷低減に関する取り組み

日産は、製品を通じて環境負荷を低減するために、さまざまな技術革新を通じて電動車のイノベーションを推進します。さらに、電動車ラインナップを強化し、多様な顧客ニーズと各市場の電動化のスピードに対応した、バランスの取れた製品ラインナップを構築します。また、車両電動化技術は、乗用車だけではなく、商用車にも適用されます。

日産は、革新的な製品の提供を通じて、事業基盤の一つとしてのサステナビリティのさらなる進化を追求します。



製品のCO₂排出削減シナリオ

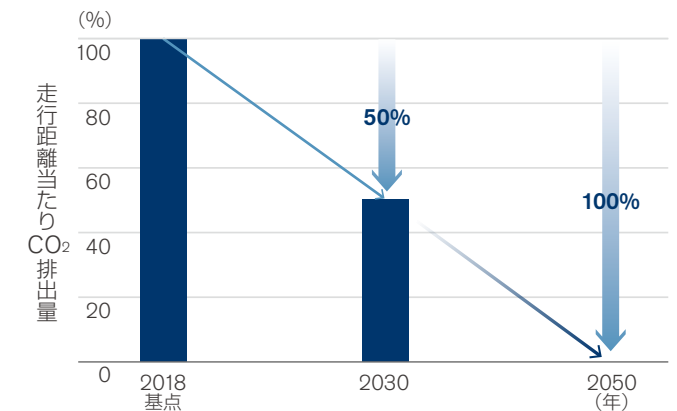
長期ビジョン

2050年までに事業活動を含むクルマのライフサイクル全体でのカーボンニュートラルを目指します。

「NGP2030」目標

2030年に2018年比で、グローバルでCO₂を32.5%、4地域(日本、米国、欧州、中国)で50%の削減を目指します。

新車からのCO₂排出量(4地域:日本、米国、欧州、中国)



*1 日産は、WtW(Well to Wheel: 燃料の採掘からタイヤを駆動するまでの過程)でCO₂排出量の低減に取り組んでいます。

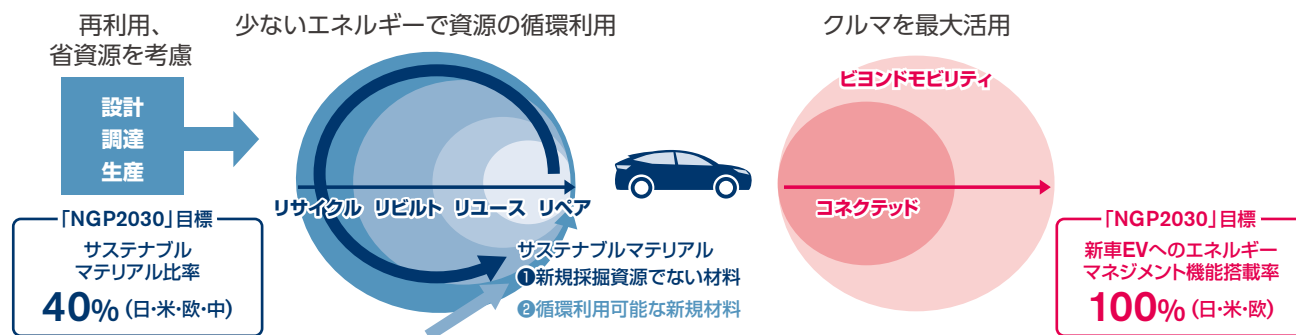
資源依存

資源依存に関する方針・考え方

日産は、サーキュラー・エコノミーの考え方を取り入れ、資源をクルマのライフサイクル全体にわたり効率的かつ持続

的に活用するとともに、お客さまや社会へ提供する価値を最大化することを目指します。

日産のサーキュラー・エコノミー



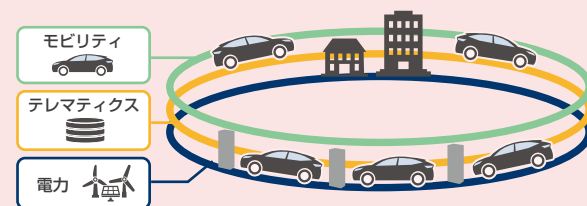
少ないエネルギーで資源を循環利用

設計・調達・生産段階から資源の再利用や省資源を考慮し、リサイクルされた材料の積極的な使用、化学物質の適正な管理、車体の軽量化に継続的に取り組みます。

また、より少ないエネルギーで資源の有効利用を推進するため、新車へのリサイクル材料の適用だけでなく、お客さまの修理・交換部品への循環部品の適用やEV用バッテリーの二次利用も引き続き拡大していきます。さらに、将来の持続可能な資源利用も考慮し、新規資源を使用する場合にも、資源の循環性を考慮した材料の採用を進めます。

クルマを資源として最大活用

クルマの走行に際してはライドシェアなどの新たなサービスを通じたモビリティとして、駐車時はバッテリーの電力を家や社会とシェアするエネルギー源として、クルマの最大限の活用を目指します。



サステナブルマテリアルの考え方

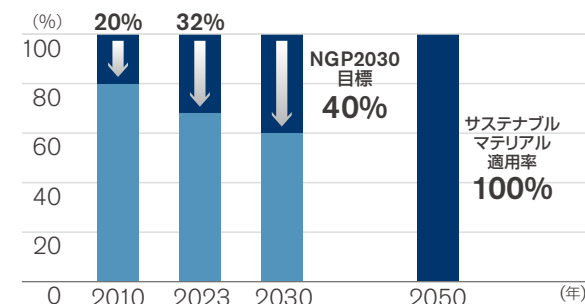
日産独自の下記要件を満たす、「新規採掘資源でない材料(①)*1」と「新規材料でも継続的に循環利用可能な材料(②)」をサステナブルマテリアルと定義し、利用拡大に取り組んでいます。新車や交換部品への適用を促進することで、将来にわたる循環資源の確保と拡大を目指します。

サステナビリティ要件*2

- ・低CO₂材料
- ・毒性のない材料
- ・倫理的に調達された材料

サステナブルマテリアルの長期ビジョン

サステナブルマテリアル適用比率



エネルギーマネジメントの考え方

EVIは、駐車時にバッテリーの電力を自宅や社会とシェアすることで、電気代の節約、再生可能エネルギーの地産地消、災害時のバックアップ電源など、資源としてクルマを有効活用するほか、地域社会のエネルギー供給へも貢献します。電力をシェアするためには、EVIに双方向充電への対応やテレマティクスとの連携などのエネルギーマネジメント機能が必要となり、2030年までに全新車EVIに本機能の搭載を目指します。

*1 リサイクル材、バイオ材など

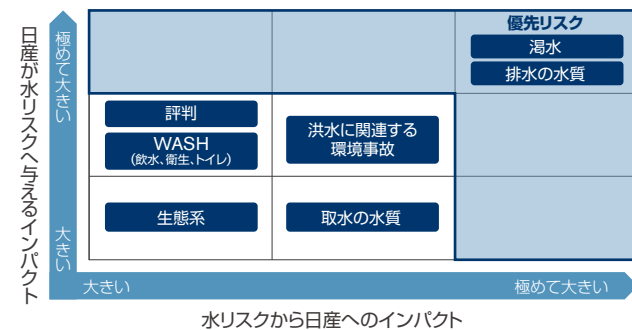
*2 サステナビリティ要件の詳細はニッサン・グリーン調達ガイドラインをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/GREEN_PURCHASING/

水

水の管理に関する方針・考え方

世界的な人口増加や経済発展などにより、水の需要が増えることが予測されています。また異常気象によって雨の降り方が変化しており、安定した水の供給に対する社会の関心は年々高まっています。

日産では、塗装や洗浄工程および冷却水として多くの水を使用します。日産は取り組むべき水リスクのマテリアリティ(重要課題)を「日産が水リスクへ与えるインパクト」と「水リスクから日産へのインパクト」の2側面から分析し、「渇水」と「排水の水質」を優先的に取り組むべき重要課題と特定しました。日産は、水リスクの評価を優先リスクについては毎年、その他のリスクに関しても定期的に見直しながら、事業を行っている地域での水環境への依存と影響を低減していきます。



また、水は偏在する資源であり、地域性が高い課題と考えています。日産では、渇水リスク(水ストレス)の高い地域では排水のリサイクル、雨水の有効活用など、優先的に水使用量を削減する活動を行うとともに、地域の水課題への貢献も行っています。

長期ビジョン

2050年に水リスクのある生産拠点の数をゼロにします。

「NGP2030」目標

- 水リスクの高い生産拠点(ハイリスク拠点)の数をゼロにする
- 生産拠点での水使用量の削減
- 生産拠点での排水の水質管理

水使用量の管理

渇水リスクの分析



水資源は、生産拠点が立地する流域ごとに使用可能な水量が大きく異なるため、グローバルの生産拠点の渇水リスクを評価しています。「NGP2030」では、渇水リスクが高く、事業への影響が大きい拠点をハイリスク拠点とし、水の使用量の削減に優先的に取り組みます。また、ハイリスク以外の全拠点においても、使用量の削減活動を継続的に進めます。

- 渇水リスクは、Aqueduct Water Risk Atlasの流域単位でのBaseline water stressの指標や社内の知見に基づき、グローバルの全生産拠点を評価
- 事業への影響は、生産台数を用いて評価

排水の水質管理

排水の水質は、使用可能な水量に影響を与える可能性があります。特に水資源が限られた地域では、その重大性がさらに高まります。

日産の主な生産拠点では、法令を遵守した排水の水質管理のため、現地規制よりも厳しい基準に沿った廃水の処理を行っています。

水質管理の取り組み事例

- 日本の生産拠点では、排水処理施設の排水口に水質センサーを取り付け、異常が検知された場合は自動的に敷地外への排水を停止させるシステムを導入し、水質汚濁防止を強化しています。
- 逆浸透膜で処理した排水を生産工程に再利用し、敷地外への排水ゼロを実現している生産拠点もあります。

大気品質

大気品質に関する方針・考え方

日産は大気品質において、クルマや生産活動からのエミッションをクリーンにする、お客さまに過ごしやすい空間としての車室を提供する、この2点を重視し取り組んでいます。これにより、生態系の配慮に努めるとともに、お客さまにとってより快適で安心なモビリティを追求してまいります。

米国の健康影響研究所が発行する「State of Global Air 2018」では、世界の人口の95%は世界保健機関が空気質ガイドラインで定めている微小粒子状物質(PM2.5)の基準値10 μ g/m³を超えている地域で生活していると報告されています。また、今後欧州で施行が計画されている排出規制案「Euro7」には、クルマのテールパイプからの排出ガスだけでなく、ブレーキやタイヤなどからの微粒子の発生低減も織り込まれる予定です。

日産は、グローバルな規制動向と整合するよう大気品質に対する責任範囲を拡大し、クルマと生産活動からのあらゆるエミッションを低減することで、地域の自然や人々の健康に与える影響の最小化を目指します。

日産の大気品質の取り組み



長期ビジョン

クルマや生産活動からの大気品質への影響を最小化します。

「NGP2030」目標

取り組み	目標
クルマからのエミッション削減 (テールパイプからの排出ガス以外も含む)	技術の開発と適用
車室内の空質の管理	車室内VOC*1における日産基準の遵守
生産工場でのVOC管理	活動の継続(塗装)

クルマからのエミッション削減活動

車室内と車室外へ排出されるエミッションを削減するために、日産は下記活動に取り組んでいます。

＜車室外で発生するエミッション削減＞

- ・ゼロ・エミッション車(EV)の普及推進*2
- ・内燃機関の改善*2
- ・テールパイプ以外からのエミッション、微粒子の削減
欧州の排出規制案「Euro7」に織り込まれるブレーキなどからの微粒子の発生低減に向け、日産は対応する技術の検討を開始しました。

＜車室内の空質の管理と向上＞

クルマからの排出ガスのクリーン化のみならず、より安心・安全・健康に過ごすことができるよう空質をはじめとした車室内環境の向上についても研究開発を進めています。「NGP2030」では車室内VOCに関する各国の法令や指針に準拠した日産の基準を設定しています。

生産活動での排出物質の削減活動

クルマの生産工場から排出される代表的な物質として、窒素酸化物(NOx)、硫黄酸化物(SOx)、VOCが挙げられ、日産はこれらの物質の排出に対し厳しい対策を継続してきました。NOxやSOxは、燃料燃焼の際に空気中に放出されるため、低NOxバーナーの採用や低SOx燃料への転換を進めてきました。また今後は、現在燃料をエネルギー源とする設備の電化を進め、生産工程からの排出ガスをさらに低減していきます。VOCは、洗浄用シンナーの回収・リサイクルや、塗装工程の水系塗装ライン化の推進により、排出の低減を進めています。日産は大気に放出される物質の管理基準と仕組みの遵守を徹底し、原因物質使用量と排出量の双方の低減活動に取り組めます。

*1 VOC: Volatile Organic Compoundsの略。揮発性を有し、大気中で気体状となる有機化合物の総称。

*2 詳細はこちらをご参照ください。 >>>P042

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集	◀ 031 ▶ ↻
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	<u>ニッサン・グリーンプログラム</u>	バリューチェーンでの活動実績	第三者保証

事業基盤

気候変動、資源依存、大気品質と水の「NGP2030」の重要な課題の解決と新たな価値の創出を目指し、ステークホルダーエンゲージメントを通じてニーズを把握し、環境課題に関連する事業基盤の強化に取り組んでいます。

日産はグローバル企業として、環境課題への取り組みと合わせて、バリューチェーン全体に対する説明責任を果たすことを重要視しています。ライフサイクルアセスメントを活用したクルマの環境リスクの特定、倫理などに配慮した原材料の調達、バリューチェーン全体の情報管理の実現、および環境ガバナンスの強化など、一連の活動を通じ、持続可能なモビリティ社会の実現と事業運営を両立させ、製品のライフサイクル全体での環境負荷の低減と、説明責任の履行を目指しています。



責任ある調達の実施

EUバッテリー規制やCSRD*1などで環境デューディリジェンスへの対応が求められ、バリューチェーン全体で環境リスクの低減に取り組むことの重要性が高まっています。また、CSR（企業の社会的責任）に関わる規制やTCFD*2・TNFD*3な

どの情報開示の枠組みによって、事業者は自社活動だけではなく、サプライチェーンにおける環境・社会的活動を推進し、内容を開示することが求められています。

日産はサプライヤーをサステナビリティ方針においても重要なパートナーとして明確に位置づけています。日産は「日産人権方針」「日産グローバル人権ガイドライン」「日産取引先サステナビリティガイドライン」や「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」*4の策定や、「環境活動説明会」の実施を通じたサプライヤーエンゲージメントにより、環境・社会課題に対する基本理念や調達方針をサプライヤーと共有し、環境活動に関する協業を推進してきました。「NGP2030」では情報開示の法制化などの外部動向に対応するために、責任ある調達の要件をガイドラインに組み込み、日産のサステナビリティ要求を満たした材料の使用拡大など、サプライチェーンのリスクマネジメントに取り組んでいます。

また、日産は倫理、社会、環境面に配慮した原材料を調達し、サプライヤーとの対話を通じて、持続可能な責任ある調達の実現を目指しています。2025年3月に「持続可能な天然ゴムのためのグローバル・プラットフォーム(GPSNR)」に加盟しました。詳細は「責任ある原材料調達」*5「関連パートナーとの連携」*6をご参照ください。

バリューチェーン情報の統合管理および説明責任の履行(トレーサビリティ)

クルマのバリューチェーン全体での情報開示の規制化や開

示範囲の拡大の動向に対応するために、業界全体でサプライチェーン情報を収集・管理する仕組みの構築が検討されています。これに加えて、企業活動に伴うCO₂排出量などの非財務情報開示の強化も求められています。

これらの外部動向に対応するために、バリューチェーン全体の環境負荷情報を統合管理し、トレーサビリティを確保して説明責任を果たすことを目指します。気候変動だけでなく、サプライチェーンの人権問題や、水や大気などの自然環境への影響や依存に関する情報を統合管理するために、デジタルプラットフォームの導入に着手しました。具体的には、内部モニタリングツールにより、自社のCO₂排出量や水、廃棄物の記録と管理を実現し、情報開示の透明性を確保することで、ステークホルダーに適時・適切に情報提供することを目指します。また、日産のサプライチェーン全体の情報管理・企業間でのデータ連携の実現により、サプライヤーとの環境リスク低減に関する協業のさらなる加速を目指します。

環境ガバナンスの強化

環境負荷を低減するために、全従業員が高い倫理基準に従って誠実に行動することが重要です。日産では事業を行うすべての地域において、環境に関する法律や規制の遵守、および社会要請に対応するための環境に関する社内基準を定めています。「NGP2030」では、環境における法令遵守を徹底し、グローバルで従業員への教育活動等を通じて環境法令の理解浸透を進めています。

*1 CSRD: Corporate Sustainability Reporting Directive

*2 TCFD: Task force on Climate-related Financial Disclosures

*3 TNFD: Task force on Nature-related Financial Disclosures

*4 詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/>

*5 詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P087](#)

*6 詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P059](#)

「NGP2030」取り組み一覧

取り組み			「NGP2030」目標	2024年度実績
気候変動 長期ビジョン： 2050年までに カーボンニュートラル を表現	CO ₂ 排出の削減 (基準2018年)	ライフサイクル(t-CO ₂ /台数)	-30%(グローバル)	-12% 各領域でのCO ₂ 削減活動の推進により、台当たりのCO ₂ 排出量を削減しました。
		クルマ(g-CO ₂ /km)	-32.5%(グローバル) -50%(4地域:日本、米国、欧州、中国)	Global : -13% 4地域(日本、米国、欧州、中国) : -17% 主に4地域におけるICE燃費改善や電動化の推進により、走行時CO ₂ 排出量を削減しました。
		生産(t-CO ₂ /台数)	-52%(グローバル)	-10% 省エネルギー活動の継続に加え、再生可能エネルギー導入を推進しました。
		サプライヤー	ライフサイクル目標の達成を目指す	グリーンアルミやグリーンスチールの適用を拡大し、製造時のCO ₂ 削減を推進しました。
		物流(t-CO ₂ /台数)		-8% トラックから鉄道・船舶へのモーダルシフトや、生産台数構成の変動により、CO ₂ 排出量を削減しました。
		R&D施設(t-CO ₂ /開発費)		-25% 再生可能エネルギーの利用拡大によりCO ₂ 排出量を削減しました。また、電力排出係数の良化も貢献しました。
		オフィス(t-CO ₂ /延床面積)		-42% 各拠点で省エネ活動を推進し、さらに再生可能エネルギーの利用も拡大しました。 2024年度はグローバル本社の電力と熱エネルギーは100%再生可能エネルギー由来となりました。
		販売店(t-CO ₂ /店舗床面積)		-17% 各販売会社の実績を可視化し、各社の省エネ活動のマインド醸成を行いました。 また、個別店舗でエネルギー診断を実施し、更なる省エネの可能性や課題の解決策を提案するとともに、これらの事例を全国の各販売会社へ共有しました。
資源依存 長期ビジョン： 新規採掘資源依存 ゼロ	材料資源	サステナブルマテリアルの拡大(重量ベース)	40%(日本、米国、欧州、中国)	32.5% リサイクル材やグリーン材の積極的な採用によりサステナブルマテリアルの利用を拡大しました。
		廃棄物/埋め立ての管理	低水準の維持	鋳物砂リサイクルなど廃棄物・埋め立て削減を推進しました。
	クルマの活用	エネルギーマネジメント機能の拡大	EVへの搭載率:100%(日本、米国、欧州)	英国での交流電源V2G技術のフィールド操作試験を2024年に完了させるなど、充電やコネクテッド技術の開発を推進しています。

取り組み			「NGP2030」目標	2024年度実績
大気品質と水 長期ビジョン： ゼロインパクト/ ゼロリスク	水	生産拠点での水リスク管理の強化	ハイリスクサイト数のゼロ化を目指す	ハイリスクサイト数のゼロ化に向け、活動を推進しました。
		生産拠点での使用量の削減		栃木工場での冷却水の削減など、水使用量の多い工場で積極的に削減活動を推進しています。
		生産拠点での排水の水質管理		排水の水質管理を継続しました。
	大気品質	クルマからのエミッション削減 (テールパイプ以外も含む)	技術の開発と適用	より厳しい規制に対応するべく、ブレーキ摩耗粉の低減技術を継続検討しています。
		生産拠点でのVOC管理	活動の継続(塗装)	廃シンナーの回収率改善などを推進しました。
		車室内空質の管理	車室内VOCの日産基準の遵守	2024年度対象となるすべての車種で車室内VOCの日産基準を遵守しています。
事業基盤	責任ある調達の実施		サプライチェーンのリスクマネジメントの実施	「日産取引先サステナビリティガイドライン」と「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」を更新し、遵守を徹底しました。
	バリューチェーン情報の統合管理および説明責任の履行 (トレーサビリティ)		・企業活動/部品製造からのカーボンフットプリント などの情報管理システムの構築/運用 ・サプライチェーン情報の信頼性向上	2025年度からの運用開始に向けて、企業活動による気候変動、資源依存、大気品質と水に関する情報管理システムを刷新しました。
	環境ガバナンスの強化			2023年度に更新したグローバル環境ポリシーを社内教育資料へ織り込みました。

バリューチェーンでの活動実績

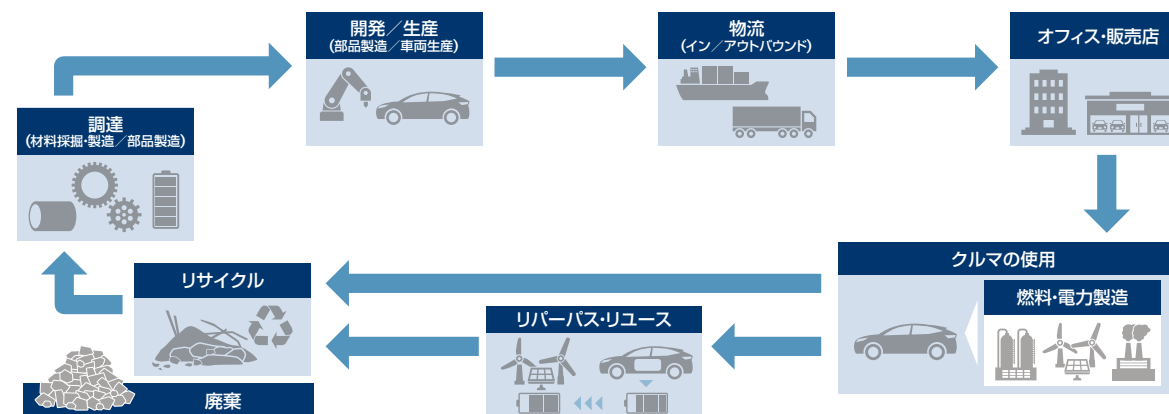
日産は、事業と関連の高い重要領域である気候変動、資源依存、大気品質と水に関連する課題から優先的に取り組み、生態系サービスへの依存と影響を最小化し、環境理念である、「人とクルマと自然の共生」の実現のためさまざまな価値を社会と環境に提供していきます。こちらの章では「商品」「企業活動」「関連パートナーとの連携」という3つの主なバリューチェーンの事業領域での環境に対する取り組みや創出する価値について紹介します。

商品

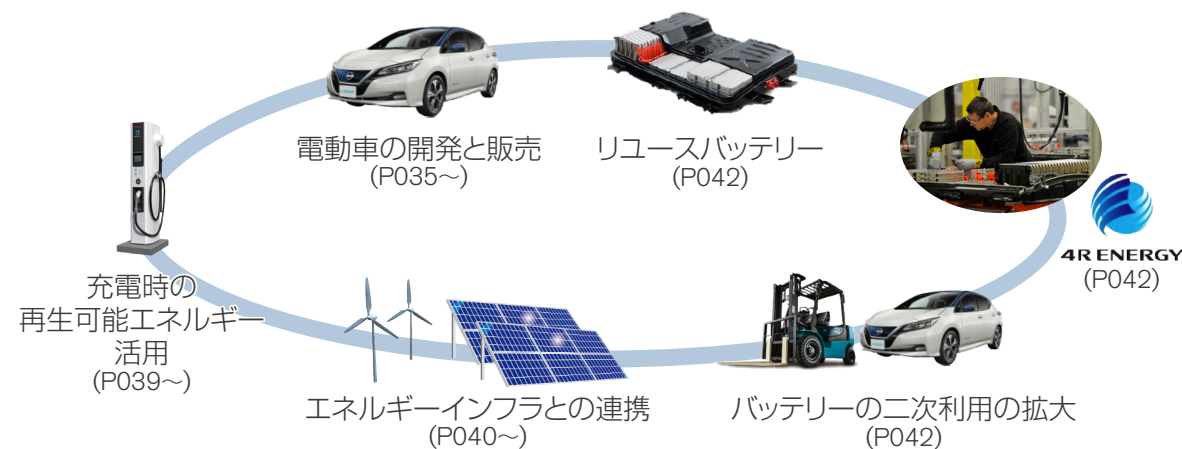
電動車による持続可能な社会の構築

日産は、量産型EVのパイオニアとして電動車の投入と普及を企業戦略の一つとして位置づけ、包括的なアプローチのもとでさまざまなパートナーと協力して活動を推進しています。この取り組みは、開発段階から販売だけでなく、お客さまの使用時も考慮し、電動車を充電する際の再生可能エネルギーの活用推進や自動車単体の枠組みを超えたインフラとの連携、廃車後のバッテリーの二次利用なども含まれています。これは走行時のCO₂排出量を削減するだけでなく、電動車だからこそ実現できるエネルギーマネジメントなどの新しい価値を創出し、クルマを資源として最大活用することを目指しています。これにより、日産はライフサイクルを通じた環境負荷の低減と、持続可能な社会の構築を実現していきます。

日産のバリューチェーン



電動車を活用した持続可能な社会構築への取り組み



目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	ニッサン・グリーンプログラム	バリューチェーンでの活動実績
					第三者保証

開発と販売での取り組み

2050年カーボンニュートラルを実現する 日産の電動化技術

日産はカーボンニュートラルを実現するために、電動化のイノベーションを推進しています。電動車は、ガソリン車に比べライフサイクルでのCO₂排出量の削減が可能であると日産では試算しています。また、再生可能エネルギーへの転換に貢献するEVは、クルマを取り巻く社会全体の低炭素化には不可欠です。日産は、100%モーター駆動という共通点を持つEVとe-POWERの2本柱で、電動化技術の進化と普及を推進していきます。

日産の電動車が提供したい価値

日産は、電動車の普及のために電動車ならではの運転体験や快適な車内空間の追求に取り組んでいます。100%モーター駆動の特性を活かした運転体験は、ドライバーにワクワク感と、ストレスのない走行を提供します。例えば、e-Pedal Stepは、アクセルを踏んだ時のレスポンスのよい加速と、アクセルを離れたときの滑らかな減速を提供します。e-4ORCEでは、前後に配置された2つの高出力モーターとブレーキの統合制御により、駆動力を自在にコントロールすることで、日常走行からワインディング、滑りやすい路面まで、あらゆるシーンでレベルアップした走行体験を提供します。また、EVではエンジンによる音や振動がないことを生かした車両全体での音振設計により、圧倒的な静粛性を実現しています。さらに、トランスミッションや排気管がないことによりフラットなフロアと広々とした快適な室内空間を実現していま

す。e-POWERでは、100%モーター駆動ならではの静粛性に加えて、荒れた路面の走行時などエンジン音が聞こえにくい環境の際に発電することでエンジン音を感じさせない静粛性を実現しています。

電動車普及を支える技術の革新

進化するEVプラットフォーム

日産はEV専用プラットフォームを進化させ続けています。2022年に発売した「日産アリア」ではモータールームをコンパクトにし、エアコンユニットをモータールームに移動させることで、室内空間を広げ前席の足元スペースを大幅に拡大しています。また、バッテリーパックとフロアを一体構造にすることでフラットなフロアと低重心かつ高いボディ剛性を実現し、ハンドリング性能の向上に貢献しています。2025年6月に発表した3代目「日産リーフ」ではこれらの技術をさらに洗練しつつ、バッテリーのより効率的な搭載と徹底した熱マネジメントシステムを採用することで、バッテリーの大容量化と高効率化を実現しています。

電動パワートレイン

日産が進める電動化の二本柱であるEVとe-POWERでは、モーターなどのコア部品において高い共用化を実現しています。ラインナップ全体で共用化を拡げることで、コスト低減に取り組んでいます。それぞれのコア部品は性能を向上しつつ小型化を実現しており、例えばe-POWERから第2世代のe-POWERへの進化においてはインバーターの出力密度は2倍に向上しました。日産の新しい電動パワートレイン「X-in-1」ではさらに進化したコア部品をEVとe-POWERで共有

しモジュール化することで、小型・軽量化と低コストを実現しつつ、走行性能や静粛性の向上を実現します。EV用にはモーター、インバーター、減速機の3つの部品をモジュール化した「3-in-1」を開発、2025年6月に発表した3代目「日産リーフ」から採用しています。e-POWER用にはモーター、インバーター、減速機に加えて、発電機と増速機の5つの部品をモジュール化した「5-in-1」を2025年度から採用する予定です。今後、この電動パワートレインの採用を拡大することで、EVとe-POWERの競争力をさらに高めていきます。

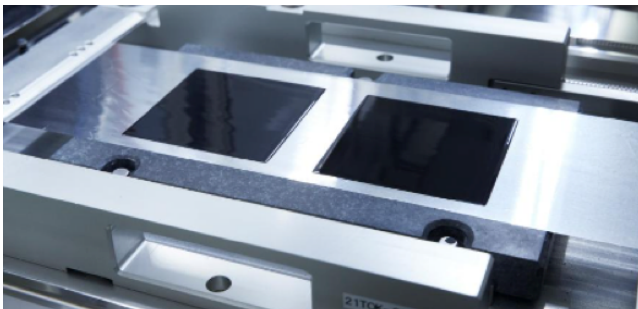
発電に特化した専用設計エンジン

日産は、STARC (Strong Tumble and Appropriately stretched Robust ignition Channel) コンセプトに基づいた発電に特化したエンジン開発にも取り組んでいます。従来の駆動力を伝える使い方では、さまざまな走行負荷をカバーする出力特性に対応するため熱効率はおおよそ40%が限界でした。一方、e-POWERのようにエンジンを発電専用として特化することでエンジンの使用領域を最も効率の良いポイントに限定できます。このように、エンジンを完全定点運転で使用するというブレークスルーによって、熱効率を飛躍的に向上させることができ、熱効率を50%まで実現できる技術を開発しました。

次世代バッテリー

日産は、従来と比べ性能を大幅に高めたリチウムイオンバッテリーや大幅なコスト削減ができるLFPバッテリー、およびゲームチェンジャーとして期待される全固体電池の開発を進めています。全固体電池は従来比で約2倍となる高いエネルギー密度や、優れた充放電性能による大幅な充電時間の短縮、レアメタルの使用量を減らすことによるコスト低減が期待できます。これにより、ピックアップトラックなども含めた幅広いセグメントへの搭載が可能になり、EVの競争力を高めます。この技術は生産試作の段階にあり、2024年にはパイロット生産ラインを公開しました。

2028年度までに市場投入することを目指し、開発を進めています。



軽量化技術

バッテリーやエンジン、電動パワートレインの効率向上と同様に、軽量化技術の開発もカーボンニュートラル実現に向けた重要な取り組みのひとつです。日産は、材料、構造合理化、工法、の3つの手法により軽量化を推進しています。

材料

日産は、軽量化を実現しながら高強度と高成形性を両立できる超ハイテン材の採用拡大をいち早く進めており、軽自動車からインフィニティに至るまで、幅広い車種の車体骨格部材に採用しています。衝突時のエネルギー吸収性を高めた980MPa級高成形性ハイテン材を2018年に「インフィニティ QX50」に採用し、2019年にSAE International「SAE/AISI Sydney H. Melbourne Award for Excellence in the Advancement of Automotive Steel Sheet」を受賞するなど高い評価を受けています。その後も採用車種の拡大を進め、2024年は「パトロール」「キックス」「ムラーノ」「インフィニティ QX80」へ採用を拡大しました。

構造合理化

モーターおよびインバーターを一体化したe-POWERシステムを2020年「ノート」に採用し、6%の出力向上を図りながらモーターでは15%、インバーターでは30%の軽量化を実現しました。2022年「日産サクラ」2023年「セレナ」でも同様の技術を採用しています。

工法

V-LPDC(吸引低圧鋳造法)*1という新たな鋳造工法の実用化により、薄肉軽量のシリンダーヘッドを実現しました。これを「ローグ」「キャシュカイ」などの1.5リットル3気筒ターボエンジンのシリンダーヘッドに採用し、4%の軽量化に貢献しています。

日産は今後も軽量化技術開発を積極的に進め、カーボンニュートラル達成に向けてCO₂の排出削減を推進します。

グローバルでの電動化推進

電動車の実績と評価

2010年の「日産リーフ」の販売開始以降、日産はEV、e-POWERのモデル拡大・普及を進めています。2022年に軽セグメント向けに販売を開始した「日産サクラ」は2024年度の国内販売における電気自動車販売台数No.1を獲得しました。また、J.D.パワー2024年日本自動車商品魅力度(APEAL)調査、軽ハイトワゴンのセグメントにおいて最も魅力的なモデルであるとして、第1位を受賞しました。

e-POWERは、既存のインフラを活用しながら低炭素化を実現でき、EVと変わらない運転体験を得られる電動車として、グローバルでの電動化を推進しており、2024年にはグローバル累計生産台数が150万台に到達しました。海外の主要な市場ではこれまでに、中国、欧州、メキシコなどで「シルフィ」「エクストレイル」「キャシュカイ」「キックス」へe-POWERを搭載してきました。2026年度には北米市場へ「ローグ」の投入も予定しています。

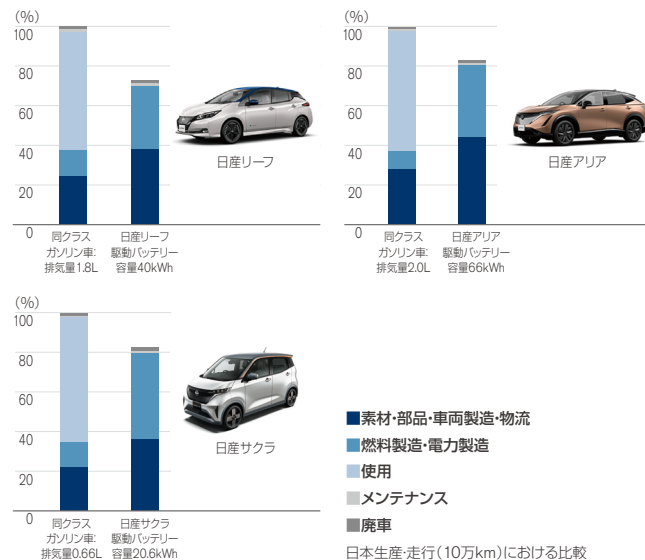
また、日本ではJ.D.パワー2024年日本自動車商品魅力度(APEAL)調査、コンパクト車とコンパクトSUVのセグメントにおいて「ノート」と「キックス」が最も魅力的なモデルであるとして、第1位を受賞しました。

*1 V-LPDC: Vacuum Low Pressure Die Cast process

EVのライフサイクルアセスメント(LCA)*1

日産ではLCA手法を用いて、クルマの使用時のみならず、原料採掘から廃棄に至るすべての段階(ライフサイクル)における環境負荷を定量的に把握し、包括的な評価をしています。「日産リーフ」は日本の同クラスのガソリン車と比べ、ライフサイクルにおけるCO₂等価排出量を約30%削減しています。2022年発売の「日産アリア」と「日産サクラ」は、EV商品力のさらなる向上と環境負荷低減を両立しています。航続距離を伸ばすと同時に、日本の同クラスガソリン車対比で、ライフサイクルCO₂等価排出量を約20%削減しました。日産は、EVのライフサイクルにおいて環境負荷低減の可能性を追求していきます。

ライフサイクルでのCO₂等価排出量

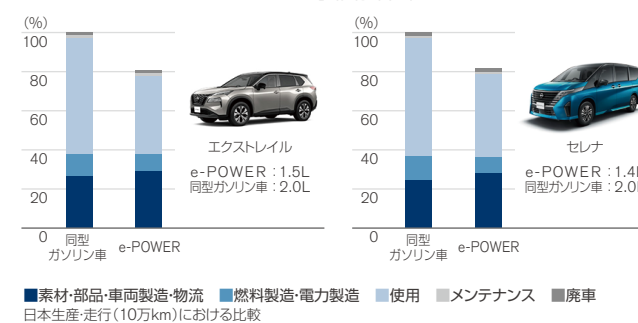


e-POWERのライフサイクルアセスメント(LCA)

2016年に新パワートレインのe-POWERを投入し、ライフサイクルにおける環境負荷を低減しながら車両の電動化をさらに推進しています。

例えば、「エクストレイル e-POWER」「セレナ e-POWER」では同型のガソリン車と比較して約20%のCO₂等価排出量の削減を達成しています。e-POWERを搭載している電動車では、発電のためだけにガソリンエンジンを利用するため、限定的な条件で運転することができます。これにより、通常のガソリンエンジンに比べてエンジンの小排気量化ができ、走行時の燃料消費量削減を実現しています。

ライフサイクルでのCO₂等価排出量



「日産アリア」のライフサイクルCO₂削減

栃木工場で生産する「日産アリア」では、ライフサイクルの各段階におけるCO₂削減の取り組みを強化しました。

製造段階では、材料の歩留まり向上、リサイクル由来の原材料活用などの継続的な活動により、CO₂等価排出量の抑制に貢献してきました。2021年に栃木工場に導入した「ニッサン インテリジェント ファクトリー」*2により、車両組み立て時の生産効率を向上させるイノベーションの推進、工場で使用するエネルギーと材料の効率の向上、工場設備の電動化、再生可能エネルギーへの代替を図り、生産工場におけるカーボンニュートラルに取り組んでいます。

使用段階では、電動パワートレインの効率改善、補機類の消費電力削減、バッテリー技術の向上などによる電力消費効率の向上を進めています。また、使用段階での再生可能エネルギーの利用は、環境負荷低減に貢献します。

廃車段階では、クルマ用として使用されたバッテリーをさまざまなエネルギーの貯蔵用途、分散型発電に活用し*3、社会全体での低炭素化に向けた取り組みを推進しています。

*1 LCAに関するデータ集はこちらをご参照ください。 >>>P155

*2 「ニッサン インテリジェント ファクトリー」に関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P045

*3 本件に関連する、リチウムイオンバッテリー二次利用事業「4R」の推進に関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P042

さまざまなニーズに応える技術開発

燃料電池車(FCEV)への取り組み

水素と酸素からつくる電気をエネルギー源とする燃料電池車(FCEV)は、CO₂や排出ガスを出さないゼロ・エミッション車です。持続可能なモビリティ社会の構築に取り組む中、エネルギーソースの多様性の観点からも、FCEVはEVとともに可能性のひとつであると日産は考えています。

また日本政府の方針と連動する形で、トヨタ自動車株式会社、本田技研工業株式会社とともに、FCEV向け水素ステーションの本格整備を目的とした「日本水素ステーションネットワーク合同会社」(JHyM)を設立しました。JHyMでは、FCEV普及初期における水素ステーション事業の諸課題を踏まえ、インフラ事業者、自動車メーカー、金融投資家などの協業により、戦略的な水素ステーションの整備、ならびに、水素ステーションの効率的な運営に取り組んでいます。

固体酸化物形燃料電池への取り組み

日産は2016年6月に、バイオエタノールを燃料とする燃料電池システム「e-Bio Fuel-Cell」の技術を搭載した燃料電池車を発表しました。「e-Bio Fuel-Cell」は、エタノールのほかにも天然ガスなどの多様な燃料と酸素との反応を利用して、高効率に発電する固体酸化物形燃料電池(SOFC)を発電装置としたシステムです。

固体酸化物形燃料電池(SOFC)は多様な燃料が利用可能なことから、既存の燃料インフラの活用が可能で、インフラ普及へのハードルが比較的低いというメリットがあります。また、発電効率の高いSOFCとエネルギー密度の高い液体燃料を用いるため、ガソリン車なみの航続距離の実現が可能となります。さら

に、短いエネルギー充填時間の利点を生かすことで、高い稼働率が要求される商用車への搭載の可能性も広がります。

商用車の電動化

日産自動車はカーボンニュートラルへ向けて商用車の電動化を進めています。

日産における商用EVの歴史

2014年に、EVの多目的商用バン「e-NV200」を欧州各国および日本で発売しました。「e-NV200」は走行用バッテリーから合計で最大1,500Wの電力を取り出すことができるパワープラグを2ヵ所に採用し、平時における外出先での電源確保、レジャー用途利用、災害時の電源など多様に活用できます。工事現場ではエンジン発電機を使用せずに現場周辺の騒音問題を緩和できます。欧州では冬のアウトドア活動を充実させる「e-NV200 Winter Camper concept」(ルーフに設置されたソーラーパネルから搭載された220ボルトのバッテリーへの充電可能、快適性と実用性を兼ね備えたコンセプト)を提案しました。

2020年には、「NV400」をベースとしたゼロ・エミッション(EV)救急車が東京消防庁に採用されました。救急車には静粛性が高く、振動の少ないEVはメリットがあります。当車両は33kWhと8kWhの2つのリチウムイオンバッテリーを搭載し、電装機器やエアコンをより長時間作動させることが可能で、停電時や災害時には移動電源としても活用することができます。

2022年、ルノー・日産自動車・三菱自動車によるアライアンスの「CMF-C」プラットフォームをベースに、品質と機能性を

追求した「タウンスターEV」を欧州で発売しました。都心での配達業務をフレキシブルに行うことができる商用バンです。さらに2024年には「クリッパーEV」を日本で発売しました。軽商用バンとして必要な荷室性能と積載量を確保しながらも、モーター駆動のEVならではの力強い走りで、重い荷物も軽快に運ぶことが可能です。



「e-NV200」は「走る蓄電池」として、さまざまなビジネスシーンに役立てることができます。(現在は生産終了しております)



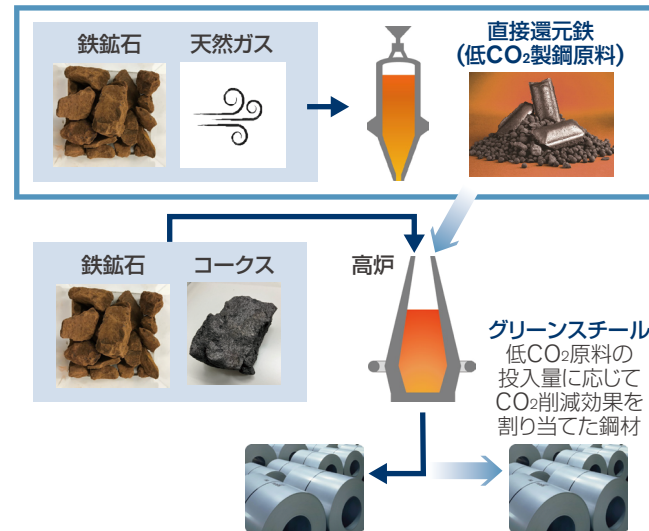
「NV400」をベースとしたゼロ・エミッション(EV)救急車

グリーンスチール・グリーンアルミニウムの採用による製造時のCO₂削減の取り組み

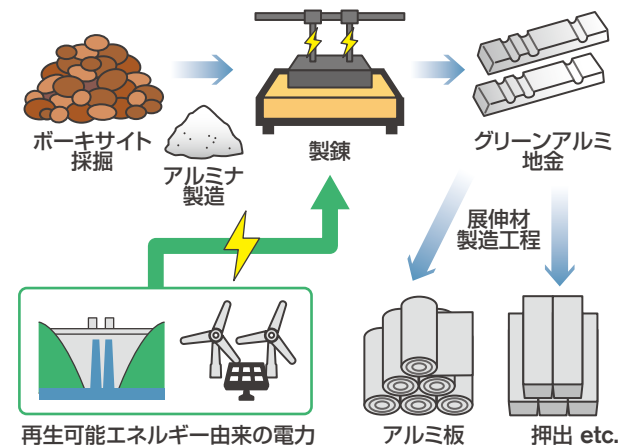
車両重量の約60%は鉄部品、約10%はアルミ部品によって構成されていることから、グリーンスチール*1やグリーンアルミニウム*2の採用は、ライフサイクルの一部である製造時のCO₂排出量を削減していくうえで、大変有効な取り組みとなります。従来製品と同等の品質を実現しながら、CO₂排出量を大幅に削減することを可能にしたグリーンスチールやグリーンアルミニウムを2023年1月の神戸製鋼所を皮切りに、グリーンアルミにおいてはUACJと、グリーンスチールにおいては日本製鉄株式会社、JFEスチール株式会社、POSCO CO.Ltdと連携し、車両へ順次適応拡大を進めています。

併せて日産の製造工程で発生したスクラップをリサイクル原料としても活用するクローズドループ・リサイクル*3などを推進することで、製造時のCO₂排出量をさらに削減していきます。

グリーンスチール：マスバランス方式(直接還元鉄の例)*4



グリーンアルミニウム



充電時の再生可能エネルギー活用

日産販売店舗等での再生可能エネルギー100%EV充電サービスを開始

EVを活用したゼロ・エミッション社会構築の取り組みの一環として、日産販売店舗および国内事業所では、急速充電に使用する電力を2023年9月から100%再生可能エネルギーに切り替えています。*5



実質再生可能エネルギー100%電力を提供

日産は、2019年よりEVユーザーの自宅充電を推奨するために、一部の日産販売会社において再生可能エネルギー100%電力の代理店販売を行っています。また、2022年度初頭より、関東圏に居住している日産自動車従業員に向けて、実質再生可能エネルギー100%電力の提供を開始しました。これらに加え、2024年12月から神奈川県で家庭向けの電力サービス「日産でんき」を開始しました。このサービスは実質

*1 グリーンスチール：高炉工程におけるCO₂排出量を大幅に削減した低CO₂高炉鋼材

*2 グリーンアルミニウム：太陽光などの再生可能エネルギー由来の電力のみを使用して電解精錬することにより、アルミニウム地金製造時のCO₂排出量を地金サプライヤー従来比約50%削減

*3 クローズドループ・リサイクル：製造時に発生したアルミニウムや鋼板の端材を同じ品質の材料として再生し、再び同種製品に採用する手法。アルミニウム材のリサイクル活動についてはこちらのページをご参照ください。 >>>P053

*4 マスバランス方式：製品の製造工程において、ある特性（例：低CO₂品）を持った原料とそうでない原料とが混在する場合に、その特性を持った原料の投入量に応じて、製品の一部に対してその特性を割り当てる手法。CO₂排出量低減効果を特定の鋼材に集約している。

*5 電気自動車（EV）オーナー向けの充電サポートプログラムである「日産ゼロ・エミッションサポートプログラム3(ZESP3)」を利用して急速充電をご利用いただく場合。詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan.co.jp/EV/CHARGE_SUPPORT/ZESP3/renewable_energy.html

再生可能エネルギー100%の電力を提供し、CO₂排出を実質ゼロに抑えることが可能です。今後、取り扱いエリアを拡大していく予定です。

日産は、将来のEVを軸としたエネルギーマネジメントの活用を鑑み、電力会社などと共に、各種のEV活用実証実験も実施しています。

今回の取り組みは、EV先駆者である日産自らが、EVの生産、販売だけに留まらず、ライフサイクルを通して脱炭素化に向けた一歩を踏み出すものです。日産はこのような活動を通じて、皆さまと共にカーボンニュートラルの実現に向けて取り組んでまいります。



エネルギーインフラとの連携

EVを活用したエネルギーエコシステム

EVのある暮らし・社会をより豊かなものにするソリューション「ニッサン エナジー」の刷新

日産は、「EVをつくって売る」ことに加え、お客さまにより豊かなEVライフを提供するためのソリューション「ニッサン エナジー」の開発を推進してきており、この2つを合わせた「日産EVエコシステム」を構築してきました。

その中で日産は、「ニッサン エナジー」を、次の3つの領域で提供しています。

- ・充電ソリューションの拡充
- ・電気自動車を活用したエネルギーマネジメント
- ・リチウムイオンバッテリー二次利用事業「4R」の推進

NISSAN ENERGY

充電ソリューションの拡充

日産はお客さまに安心・便利なEVライフを送ってもらうためのさまざまな充電ソリューションを提供しています。

自宅に駐車している間に充電が完了する自宅充電は最も便利な充電方法です。日産では日本などの一部地域において、自宅での安全な充電の実施に向けて、専用のEVコンセントを設置する業者や充電器などを選定・斡旋しています。

また、日常生活には十分な航続距離を有する「日産リーフ」だけでなく、長距離のお出かけができる「日産アリア」も、拡大を続ける公共充電設備ネットワークを使用することで、さらに安心して遠方へのお出かけを楽しめます。

日産のアプリにより、公共充電器の場所や使用状況の把握、充電場所を考慮した目的地までのルートプラン、料金の支払い等、さらに簡単に便利な充電体験を提供します。

また、公共充電の規格については、それぞれの地域やEVモデルの対象とするお客さまの充電行動を考え、より使い勝手のよい規格を採用しています。米国では、2025年から急速充電網として一番設置数の多い、Tesla社の充電規格であるNACSに「日産アリア」が対応することを決定しました。また欧州、日本もそれぞれの地域でのお客さまのニーズに沿った充電体験を提供しています。

日産の新しい「NISSAN ENERGY Charge Network」の導入により、日産EVの所有と充電がより簡単かつスムーズになります。このネットワークでは、日産アリアや今後の日産EVドライバーがMyNISSANアプリを使用して充電ステーションを見つけ、リアルタイムの充電器の空き状況を確認し、充電料金を支払うことができます。

このMyNISSANアプリの機能強化により、EVの管理と公共充電が一つのアプリに統合され、EV所有が簡素化されます。ユーザーはMyNISSANアプリにデフォルトの支払い方法を保存し、対応する充電ステーションに到着したら、画面のボタンをタップするだけで充電セッションを開始できます。この機能は2024年11月よりMyNissanアプリユーザーに提供を開始しました。

NISSAN ENERGY Charge Networkは、Tesla社やElectrify Americaなどの充電パートナーと提携しています。日産は、顧客体験を向上させ、EV所有をより便利にするためにこのネットワークを立ち上げました。

電気自動車を活用したエネルギーマネジメント

日産EVの蓄電池に貯めた電気は、クルマの動力源として使うだけでなく、双方向充電器と組み合わせることにより住宅やビル、地域社会と電気をシェアすることが可能になります。夜間など電気料金が安い時間帯の電力や、日中の太陽光発電装置からの余剰電力を貯めて使うことで、電気代の節約や電力の地産地消が可能になるほか、日本において停電時や災害時のバックアップ電源にもなります。

地域社会においても、複数のEVと電力システムをつなぎ、電力の需給状況に合わせて充電や放電を制御することで、社会の電力需給の安定や再生可能エネルギーの利用促進に貢献します。特に発電量のコントロールが難しい太陽光などの再生可能エネルギーを大容量蓄電池に貯めることが可能なEVは、社会のインフラとしての活躍が期待されています。

英国での「Vehicle to Grid (V2G)」技術導入

日産は、2026年に英国で一部のEVに「Vehicle to Grid (V2G)」技術を導入することを発表しました。この取り組みは、再生可能エネルギーの利用促進を目指しており、日産の長期ビジョン「Ambition 2030」に沿った持続可能な社会の実現に寄与します。

V2G技術は、EVのバッテリーに蓄えた電気を電力網や自宅に供給できるため、風力や太陽光などの再生可能エネルギーを効率的に利用することが可能です。これにより、化石燃料への依存を減少させ、温室効果ガスの排出削減に貢献します。

日産は、ノッティンガム大学での実証プロジェクトを通じて、

交流電源システムによるグリッド認証コード「G99」*1を取得し、EVからの電力供給を実現しました。この技術は、クリーンエネルギーの利用拡大を促進し、地域の電力インフラの効率化にも寄与します。

今後、日産は英国を皮切りにV2Gを欧州市場へ展開し、現地のインフラに応じた適切なシステムを導入します。また、低コストのAC双方向充電器を提供し、より多くの顧客が再生可能エネルギーを活用できるよう支援します。これにより、EVは単なる移動手段を超えて、持続可能なエネルギーエコシステムの一部として機能することを目指します。



V2X技術

日産のVehicle to X (V2X) は、EVのバッテリーに蓄えられた電気エネルギーを、双方向充電器によって外部に取り出し、家やビル、社会とシェアしながら、効果的に活用する技術です。

カーボンニュートラルに向け重要な役割を果たす、太陽光や風力などの再生可能エネルギーは、気象条件により発電量が変動し、電力需要に対し余剰や不足が生じる等、安定した需給バランスの維持が課題となります。

V2X技術を用いることで、EVのバッテリーの充電・放電により、再生可能エネルギーの発電量の変動を吸収することが可能になります。これにより、貴重な再生可能エネルギーを安定的に活用できるようになり、再生可能エネルギーの導入促進にも寄与します。また、災害時などにはバックアップ電源としても活用できるため、V2Xの価値と可能性は広がっています。

*1 英国の電力配電ネットワーク(系統)に発電設備を接続するための技術規格

リチウムイオンバッテリー二次利用事業「4R」の推進

日産のEVに搭載した蓄電池は、クルマでの使用後も高い性能を有しています。また今後EVが普及し買い替えが進むことで二次利用が可能な蓄電池は供給が大きく増加することが見込まれています。

EVのパイオニアである日産は、2010年にリチウムイオンバッテリーの二次利用の専門会社フォーアールエナジー株式会社を住友商事株式会社の合併で設立しました。リチウムイオンバッテリーの「再利用(Reuse)、再販売(Resell)、再製品化(Refabricate)、リサイクル(Recycle)」という「4R」を推進し、資源の有効活用を可能とするバッテリーの循環サイクルの構築に努めます。

EVバッテリーで実現する循環型システム

今後、EVの普及に伴い、中古バッテリー市場が拡大し、その活用が課題となります。フォーアールエナジーは、この課題の解決のため、福島県浪江町の事業所で、使用済みバッテリーを再利用するための技術開発を進めてきました。市場から回収した使用済みバッテリーは、その状態や性能によって分類してさまざまな二次利用先に供給しています。この取り組みにより、循環バッテリーの価値に応じて、もとのEVの残価を上げる等、お客さまに価値を還元するビジネスモデルを構築しつつあります。このモデルを事業として拡大し、お客さまがEVを保有する負担をより軽減することで、電動車のさらなる普及につなげていきます。

EVバッテリー二次利用の活用事例

フォーアールエナジー株式会社が提供するEVバッテリーを活用し、住友商事株式会社が北海道千歳市に「EVバッテリー・ステーション千歳」を完成させました。この設備は、約2,500世帯が一日に使用する電力に相当する出力6MW、容量23MWhの系統用蓄電システムです。住友商事は、EVバッテリーを定置用(電力事業用)として利用することで、EVリユースバッテリーの用途拡大や需要増による再生コストの低減に寄与し、蓄電池に含まれる希少金属などの資源を最大限に活用し、蓄電池製造時に排出されるCO₂の削減にも貢献しています。

リユースバッテリーの商品化

日産は使用済みバッテリーの商品化を進めています。



あらゆるエミッションへの対応

排出ガスへの対応

ゼロ・エミッション車の普及推進

グローバルで累計販売70万台(2025年3月末時点)を達成した「日産リーフ」をはじめ、走行時に排出ガスをまったく排出しないEVの普及は、都市部における大気汚染の改善に有効な手段となります。日産はそのリーダーとして各国政府、地方自治体、電力会社やその他業界とパートナーシップを締結しながら、ゼロ・エミッションモビリティの推進およびインフラ構築のための検討を進めています。

内燃機関の改善

内燃機関についても、日産は早くから厳しい自主規制や排出ガスの低減目標を定め、「大気なみにクリーンな排出ガス」を究極の目標に、よりクリーンな燃焼を行うための技術改善、排出ガスを浄化する触媒などの開発、燃料タンクから蒸発するガソリン蒸発ガスへの対応など、幅広い技術開発に取り組み、下記の成果をあげてきました。

- ・「セントラCA」(2000年1月発売／米国)：カリフォルニア州大気資源局が制定する排出ガス基準値をすべて満たし、ガソリン車として世界初のPZEV*1認定取得
- ・「ブルーバードシルフィ」(2000年8月発売／日本)：日本国内初のU-LEV*2認定取得

*1 PZEV：Partial Zero Emission Vehicleの略。米国カリフォルニア州大気資源局が制定。

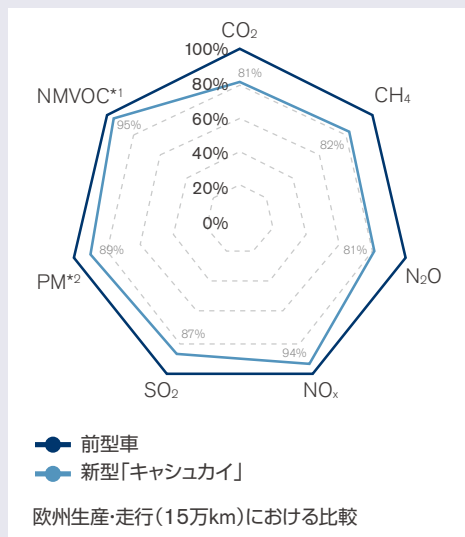
*2 U-LEV：Ultra-Low Emission Vehicleの略。日本の2000年排出ガス規制「新長期規制」の適合車より、窒素酸化物(NO_x)と非メタン炭化水素(NMHC)の排出量を75%低減したクルマ。

今後も内燃機関からの排出ガスについてもクリーン化への取り組みを継続して推進していきます。

ライフサイクル評価における地球温暖化以外の貢献

日産はLCA評価のスコアを温室効果ガス以外の化学物質へと拡大しています。新型「キャシュカイ」は前型車と比較し、削減対象とする全化学物質においておよそ5～20%の排出量削減をライフサイクルで達成しており、地球温暖化以外を含む総合的な環境負荷低減に貢献しています。

新型「キャシュカイ」のライフサイクル評価



排出ガス規制への対応状況(乗用車のみ対象)

日産は、走行中の排出ガスがゼロであるEVの開発・普及を進めるだけでなく、すべてのエンジン搭載車の排出ガスのクリーン化を継続して推進しています。例えば2018年10月に欧州で発売した「キャシュカイ」は、省燃費の1.3リッターガソリンターボエンジンにパーティキュレートフィルタを搭載し、EURO 6d規制に対応しています。また日本でも、電動化技術「e-POWER」が平成30年排出ガス規制75%低減レベルを達成し、同時に省燃費性能も向上させています。

現在の法規制への適合だけでなく、先進的な規制への対応も進めています。地域別の排気規制への対応状況は以下の通りです。

地域別排出ガス規制への対応状況^{*3}

国	規制	2024 (年度)
日本	平成30年排出ガス規制 50%以上低減レベル	87%
欧州	Euro6d / Euro6e	100%
米国	LEV III ULEV / SULEV / ZEV	100%
中国	国6	100%

排出ガス以外のエミッションへの対応開始

日産は、人や自然への影響を考慮し、排出ガスだけではなく、ブレーキやタイヤの摩耗による粉塵等、車から排出されるあらゆるエミッションを低減する取り組みを拡大しています。電動車両は減速するときに、回生ブレーキを使用し、発電し

た電力でバッテリーを充電することで、エネルギーを無駄にせず燃費を良くすることができます。また、ブレーキの摩耗も減るため、気候変動だけでなく、大気品質の改善にも寄与します。

欧州の次期排気ガス規制案「Euro7」には排出ガスだけでなく、ブレーキ等からの微粒子の発生低減が盛り込まれるため、日産は対応する技術の検討を開始しました。

車室内の空気環境の向上

先進運転支援技術の実用化と、完全自動運転の開発が進む現在、車室内で過ごす時間はより長時間化すると予想され、快適で安心な空間を提供することはますます重要になっています。

日産では、クルマからの排出ガスのクリーン化のみならず、より快適に過ごすことができるよう空質をはじめとした車室内環境の向上についても研究開発を進めています。ホルムアルデヒドやトルエンなど常温で揮発しやすい揮発性有機化合物(VOC)についても、車室内のシートやドアトリム、フロアカーペットなどの部材や接着剤の見直しを行い、継続的に削減を図っています。

日産では、車室内VOCに関する各国法令や指針に準拠した日産基準を遵守しています。

^{*1} NMVOC:Non-Methane Volatile Organic Compounds

^{*2} PM:Particulate Matter

^{*3} 乗用車のみ

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	ニッサン・グリーンプログラム	バリューチェーンでの活動実績
					第三者保証

企業活動

企業活動では、生産、物流、オフィス、販売会社を活動領域としてさまざまな活動を推進しています。

生産においては次世代のクルマづくりコンセプト「ニッサンインテリジェント ファクトリー」を発表し、カーボンニュートラルに向けた取り組みを進めています。

また、物流の効率化や、オフィス・販売店での再生可能エネルギーの導入など、企業活動全体での脱炭素化を進めています。さらに、資源やエネルギーをライフサイクル全体にわたり効率的かつ持続的に活用するシステムを発展させ、サーキュラーエコノミーの視点をいち早く取り入れることで、お客さまや社会への提供価値の最大化に努めています。

これらの活動により、資源やエネルギーを効率的かつ持続的に活用するとともに、使用量とエミッションの最小化に努めています。

カーボンニュートラルに向けた取り組み

エネルギーの有効活用による、CO₂排出量削減の取り組み

日産は企業活動においても2050年カーボンニュートラルを目標とした活動を推進しています。カーボンニュートラルに向けた日産での活動は、まず使用エネルギー測定・管理と省エネルギー活動により消費エネルギーの最小化を進め、電化への最大限の切り替え、カーボンフリーエネルギーへ代替していきます。

また、さらなる機会創出に向けた技術開発を推進していきます。

スコープ1と2のCO₂排出量*1

2024年度の日産グローバル企業活動によるCO₂排出量*2は、1,519千トン★(スコープ1排出量442千トン★、スコープ2排出量1,077千トン★)となり、2023年度の1,731千トンより12%減少しました。

(年度)			
	単位	2023	2024
スコープ1	kt-CO ₂	477	442★
スコープ2	kt-CO ₂	1,254	1,077★
スコープ1と2	kt-CO ₂	1,731	1,519★
日本	kt-CO ₂	984	908
北米	kt-CO ₂	501	401
欧州	kt-CO ₂	86	73
その他	kt-CO ₂	161	137

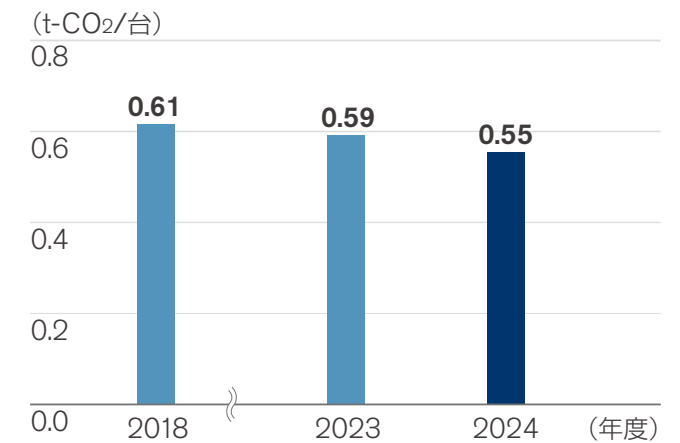
エネルギー起源CO₂以外の温室効果ガス(GHG)排出量*3

(年度)			
種類別	単位	2023	2024
CH ₄ (メタン)	t-CO ₂ e	5,705	4,810
N ₂ O(一酸化二窒素)	t-CO ₂ e	1,801	2,094
HFCs(ハイドロフルオロカーボン)	t-CO ₂ e	148	121
PFCs(パーフルオロカーボン)	t-CO ₂ e	0	0
SF ₆ (六ふっ化硫黄)	t-CO ₂ e	128	117
NF ₃ (三ふっ化窒素)	t-CO ₂ e	0	0

生産活動での取り組み

生産活動からのCO₂排出量(生産台数当たり)*4*5

2024年度の日産グローバル生産台数当たりのCO₂排出量は0.55トンとなり、2018年度比で10%削減しました。



*1 2023年度の実績値を見直した結果、変更が生じています。

*2 過去5年の推移はデータ集をご参照ください。 >>>P146
CO₂の算定方法についてはこちらをご参照ください。 >>>P062

*3 地球温暖化対策の推進に関する法律をもとに算出した、日産自動車株式会社の国内拠点からのGHG排出量

*4 データの集計対象を変更し、財務連結グループと一致させています。

*5 NGP管理範囲での生産台数当たりのCO₂排出量

★を付している開示情報について、KPMGあすさ sustainability ビリティ株式会社により保証を受けています。
詳細はこちらをご参照ください。 >>>P061

生産工場でのカーボンニュートラルロードマップ

日産は、2050年ライフサイクルでのカーボンニュートラル実現を目指し、生産工場においてもカーボンニュートラルを目標とした活動を推進しています。

達成に向けた取り組みを着実に推進するため、2021年10月、生産工場において2050年カーボンニュートラルを実現するロードマップを発表しました。^{*1}

～2030年：工場のエネルギーを削減しながら革新的な生産技術導入や電化を推進し、さらに再生可能エネルギーの導入や代替エネルギーの適用拡大を進めていきます。

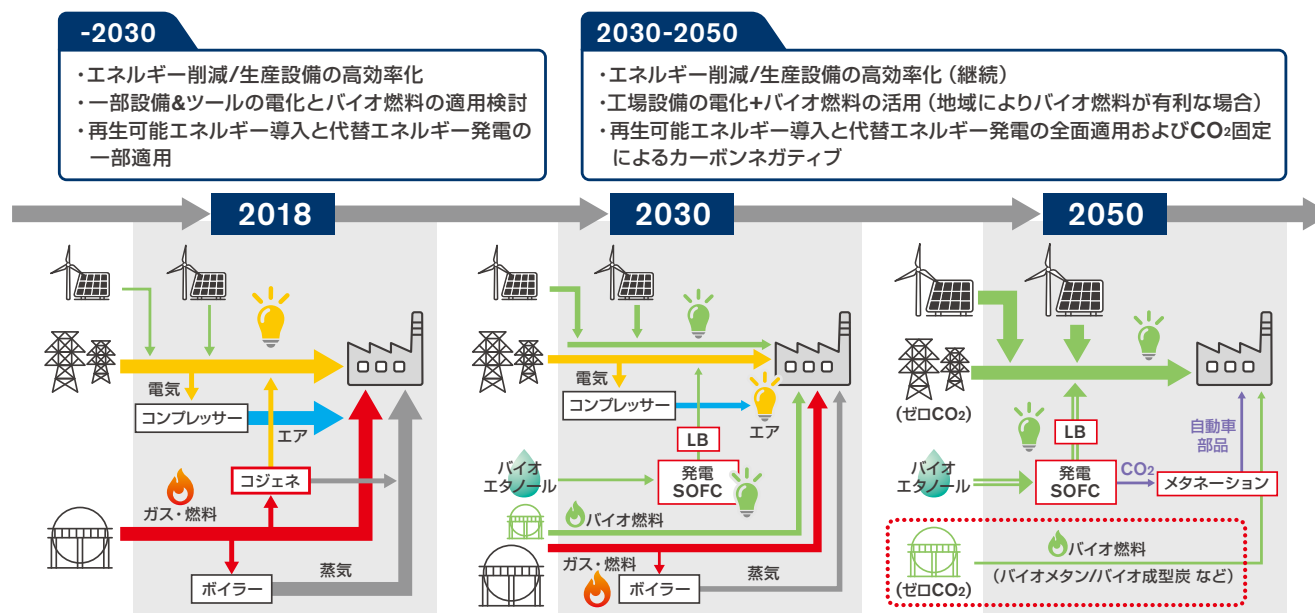
2030～2050年：ガスや蒸気などさまざまな動力形態で運営されている工場設備の電化と併せてバイオ燃料を活用することにより、化石燃料の使用ゼロを実施します。同時に、使用電力については、再生可能エネルギーと代替燃料を用いた燃料電池で自家発電した電力を全面適用することで、生産工場におけるカーボンニュートラルを実現していきます。

生産技術の革新で2050年 カーボンニュートラルの実現を目指す

次世代のクルマづくりコンセプト

「ニッサン インテリジェント ファクトリー」^{*2}

「電動化」「知能化」など、日産が進めている「ニッサン インテリジェントモビリティ」が加速することに伴い、クルマの機能や構造がより複雑化していき、生産工程もさらなる技術革新が不可欠となっていくため、次世代のクルマづくりコンセプト「ニッサン インテリジェント ファクトリー」を発表しました。ニッサン インテリジェント ファクトリーの柱である「ゼロ・エミッション化生産システム」では、生産工場でのカーボンニュートラルロードマップに基づく活動を推進します。



^{*1} カーボンニュートラルロードマップはこちらをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/210127-01-j>

^{*2} ニッサン インテリジェント ファクトリーはこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/INNOVATION/TECHNOLOGY/ARCHIVE/NIF/>
次世代のクルマづくりコンセプトの関連情報ははこちらをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/191128-02-j>

2050年カーボンニュートラルに向けた 生産工場の主な取り組み

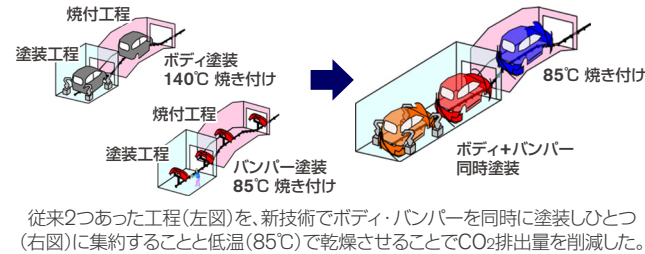
グローバルにおける省エネルギー活動 (新技術導入、運用改善)

生産過程におけるCO₂排出の主要因は、化石燃料を使用したエネルギー消費です。日産は、生産過程におけるエネルギー消費とCO₂排出量が最も少ない自動車メーカーとなるよう、さまざまな省エネルギー活動に取り組んでいます。

車両生産技術分野での取り組み

車両生産技術の分野では、塗装工程への3ウェット塗装技術と低温焼き付け技術を推進し、ボディとバンパーの同時塗装を実現しています。生産工場から排出されるCO₂の約30%は塗装工程に起因しており、同工程における工程短縮・撤廃、低温化がCO₂排出量削減につながります。日産が導入した低温3ウェット塗装技術は、これまでボディ塗装とバンパー塗装で別々に設けていた塗装工程を、ボディとバンパーを同時に塗装することでひとつに集約しており、塗装工程からのCO₂排出量を従来比25%以上削減^{*1}することを可能にします。日産はこの技術を日産ニッサン インテリジェント ファクトリー(2021年稼働)から採用しており、今後の塗装工場新鋭化に伴い順次拡大採用していきます。また従来、ブースから排気する空気を再利用する際に、必要な湿度へ調整する除湿処理が必要でしたが、乾式とすることで除湿する必要がなくなり、エネルギー消費量を従来の半分に削減できます。英国サンダーランド工場の塗装工程(2018年9月稼働開始)で採用しています。

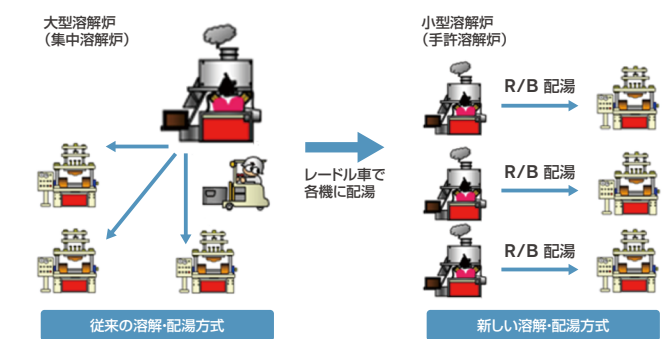
ボディ・バンパー同時塗装



パワートレイン生産技術分野での取り組み

パワートレイン生産技術の分野では、主にアルミ鑄造の溶解工程や熱処理工程のCO₂削減に取り組んでいます。従来の溶解工程は、3-4t/Hrの溶解能力の大型炉を工場毎に配置し、アルミ溶湯を取鍋付きフォークリフトで各鑄造機保持炉へ運搬、配湯する方式でした。これを、鑄造機1台に必要な最低限の能力を有した小型溶解炉を各鑄造機横に配置し、ロボットで溶湯を鑄造機保持炉に配湯する方式を採用しました。この方式により、溶湯運搬による温度低下ロスが無くなり、溶解温度を約100℃下げることを可能になりました。また各鑄造機の操業度に応じて溶解炉を停止することが可能になり、全体では約20%のCO₂削減を実現しました。これらの活動により一般社団法人日本能率協会主催の2024 GOOD FACTORY賞を受賞しました。

溶解・配湯方式の変更



NESCOによる省エネルギー活動

日産はグローバルの各拠点から必要な設備提案を募り、投資額当たりのCO₂排出量削減が大きい案件に対して優先的に資金を配分しています。日本拠点では投資することで老朽化した設備を最新の高效率設備に更新し、エネルギー消費効率を大幅に向上させています。

設備の運用面では、照明や空調設備を細かく管理し、エネルギー消費量やロスの少ない操業を徹底しています。日本で先行した省エネルギー技術を世界の各工場に普及させるとともに、各国の工場が相互に学び合い、ベストプラクティスを共有しています。また、日本のほか、欧州、メキシコ、中国、インドに設置した「エネルギー診断チーム(NESCO : Nissan Energy Saving Collaboration)」^{*2}が、各管轄地域の工場において省エネルギー診断を実施し、2024年度は約4万1,172トンのCO₂排出量削減^{*3}につながる対策を提案しました。

電力の調達については、日産全体のCO₂排出量、再生可能エネルギー使用率、コストのバランスを考慮しながら、それぞれ

^{*1} 日産調べ

^{*2} 2003年に日本、2013年に欧州、メキシコ、中国に設置

^{*3} 日産調べ

の目標を達成する最適なサプライヤーを選定しています。
こうした活動を推進した結果、2024年度の生産工場におけるCO₂排出量は生産台数当たり0.55トンとなり、2018年度比で10%削減することができました。

生産設備電化の適用拡大

カーボンニュートラル達成には、化石燃料設備の電化が不可欠です。そのため、鋳造のアルミ溶解炉やガス加熱装置の電化を進め、さらに各種熱処理炉やコークスを燃料とするキュボラの電化も計画しています。

またエネルギー効率の低い圧縮エアの電化もCO₂排出削減に効果があるため、組立工程のエアツールの電動ツール化や、加工工程のエアブローによる水切りを真空乾燥に切り替えるなど、圧縮エアの使用量削減に取り組んでいます。
このような生産設備電化の適用拡大を今後も推進していきます。



再生可能エネルギーの推進

日産は、各拠点の地域特性に合わせ、自社の設備による発電、クリーンエネルギーの調達、そしてPPA*1事業者との契約による再生可能エネルギーの導入促進という3つのアプローチのもと、再生可能エネルギーの利用と社会普及の推進をしています。

自社の設備による発電については、英国のサンダーランド工場で風力発電機を10基導入、出力は6.6MWに達しています。
2023年度には風力発電のタービンをアップデートするなど、効率的な発電を検討し続けています。いわき工場では、太陽光発電を工場見学者ゲストホールの電力に活用しており、余剰電力は「日産リーフ」の中古バッテリーに蓄電することで、エネルギーの安定供給と資源の有効活用を両立しています。
クリーンエネルギーの調達としては、インドのRenault Nissan Automotive India Private Limitedで風力発電、太陽光発電、バイオマス発電を積極的に採用しています。
2024年度では使用電力に占める再生可能エネルギーは年間平均で約82%、月平均は最大で98%となりました。
PPA事業者との契約により、2023年度には東風日産乘用车公司(DFL)の花都工場で約20MW、常州工場で3MW、鄭州工場で5MWの太陽光発電の稼働を開始しました。また英国のサンダーランド工場、マレーシアのタンジョンモーターでそれぞれ20MWなど、グローバル各拠点で太陽光発電等を導入し、着実に再生可能エネルギーの利用を推進しています。



サンダーランド工場での太陽光発電

代替エネルギーを用いた自家発電

日産は、2016年に固体酸化物形燃料電池(SOFC*2)を発電装置とした燃料電池システム「e-Bio Fuel-Cell」の技術を、自動車の動力源として世界で初めて車両に搭載しました。その車載用SOFC開発の経験を生かし、本技術を定置型発電システム*3へ応用していきます。2024年3月6日、バイオエタノールを使用して高効率に発電する定置型発電システムを開発し、同社栃木工場にてトライアル運用開始を発表しました。今後トライアル運用を通して、発電量を向上させながら、2030年からの本格運用を目指します。



SOFC等の自社での発電

*1 PPA(Power Purchase Agreement : 電力販売契約)

*2 SOFC(Solid Oxide Fuel Cell) : 固体酸化物型燃料電池

*3 定置型発電システムに関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/240306-02-1>

SOFCシステムと共に重要なのは発電用バイオエタノールの調達です。植物由来のバイオエタノールはSOFC発電時にCO₂を放出しますが、そのCO₂は植物が成長する過程で大気中のCO₂を吸収したもので、CO₂の増加をゼロに近づけることができる「カーボンニュートラルサイクル」の実現に貢献しています。日産はバイオエタノールの原料作物としてイネ科のソルガムに着目し、調達に向け研究開発に取り組んでいます。ソルガムの特徴は、生育が早く年に複数回の収穫が可能で、高い環境適応能力があることです。これらの特徴から、幅広い地域や気候条件で栽培が可能で、安定調達に適していると考えています。また、子実は食料として利用され、絞りカス（バガス）はバイオマス発電燃料や家畜飼料などへの利用が期待されています。2024年から小規模なソルガムバイオエタノールの製造実証実験を開始しました。ソルガム栽培からバイオエタノール製造に至る全工程を実証し、本格運用に向けて課題解決と準備を進めています。



カーボンニュートラルを実現するEV生産ハブ「EV36Zero」

日産は、ライフサイクル全体でのカーボンニュートラル実現を目指し、EVの開発・生産だけではなく、車載バッテリーの蓄電池としての活用や、二次利用など、包括的な取り組みを行ってきたパイオニアです。欧州におけるカーボンニュートラルの実現に向け、パートナーとともに、自動車産業の次のフェーズを切り拓くべく、世界初のEV生産のエコシステムを構築するハブとして「EV36Zero」を2021年7月に公開しました。

- 新世代のクロスオーバーEVを英工場（サンダーランド工場）で生産
- AESC社はサンダーランド工場の隣接地に新たな年間生産能力9GWhのギガファクトリーを建設
- 再生可能エネルギーを利用した「マイクログリッド」から100%クリーンな電力をサンダーランド工場に供給
- EV用バッテリーをエネルギーストレージとして二次利用することで、究極のサステナビリティを実現
- この包括的なプロジェクトにより、サプライヤーを含め、英国に6,200名の雇用を創出

EV36Zeroにより日産は、サンダーランド工場を中心にカーボンニュートラルへの取り組みを加速させ、ゼロ・エミッション実現に向けて、新たに360度のソリューション

を確立します。

この革新的プロジェクトには、日産とAESC、そしてサンダーランド市議会によって10億ポンドが投資され、EV、再生可能エネルギー、バッテリー生産という相互に関連した3つの取り組みによって、自動車業界の未来の青写真を示しています。

このプロジェクトで得られた経験・ノウハウを他の地域にも共有し、グローバルでの競争力を高めていきます。



物流分野での取り組み

日産はライフサイクル全体でのカーボンニュートラル達成に向け、物流分野でも2030年に向けた明確なロードマップを策定し積極的に活動を進めています。具体的な取り組みとして以下の活動を実施しています。

距離短縮：効率的な物流設計を通じて輸送距離を最小限に抑えています。

荷姿改善：荷姿仕様や部品形状を最適化して輸送量を削減しています。

積載向上：ルートや頻度を最適化して輸送積載効率を向上しています。

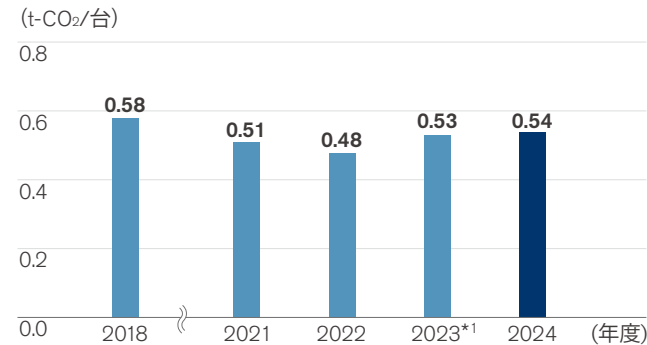
2024年には、ゼロ・エミッション生産システムを目指す栃木のニッサン インテリジェント ファクトリーで生産される日産アリアの輸入部品を本牧専用埠頭から輸送する際に、従来のトラック輸送から鉄道輸送に切り替え、環境負荷の低減を実現しています。さらに、環境対策に取り組む物流パートナーとの連携をグローバル各地で強化し、モーダルシフトや環境対応燃料船の活用、電動トラックの導入を進めています。特に、欧州向け完成車輸送は80%以上をLNG船で行っています。

2024年度の物流からのグローバル台当たりCO₂排出量は0.54トンとなり、削減率は2018年度比で、-7.9%となりました。



日産アリア輸入部品の鉄道輸送を開始

物流からのCO₂排出量(生産台数当たり)



物流からのCO₂排出量

2024年度の物流からのCO₂排出量は1,774千トンとなりました。

		(年度)	
	単位	2023*1	2024
合計*2	kt-CO ₂	1,981	1,774
インバウンド*3	kt-CO ₂	552	505
アウトバウンド*4	kt-CO ₂	1,429	1,269
海上	%	37.0	38.1
トラック	%	57.3	56.1
鉄道	%	3.1	3.4
航空	%	2.6	2.5

オフィスでの取り組み

日産は、日本、北米、欧州、中国のオフィスにおいてCO₂マネジメントを推進し、CO₂排出量を削減することを目指しています。日本では日産トレーディング株式会社が特定規模電気事業者(PPS: Power Producers & Suppliers)として、CO₂排出量とコストを考慮しながら環境負荷の少ない電力を調達しています。海外拠点では欧州拠点を中心にオフィスでの再生可能エネルギー導入を拡大しています。

さらに、エネルギー診断専門チームNESCO(Nissan Energy Saving Collaboration)を日産テクニカルセンター(NTC)に立ち上げ、オフィスにおいても省エネルギー診断を実施してCO₂排出量削減を推進しています。オンライン会議ツールを活用することで、グローバルに出張を減らすなど、CO₂マネジメントのほかにも環境に配慮した取り組みを推進しています。

*1 2023年度の実績値を見直した結果、変更が生じています。

*2 CO₂排出量には当社生産拠点への部品の輸送、ならびに当社生産拠点から販売店への輸送が含まれます。

*3 インバウンドには部品調達・KD(現地組み立て用)部品の輸送と返却容器の輸送が含まれます。

*4 アウトバウンドには完成車・サービス部品の輸送が含まれます。※ 過去5年の推移はデータ集をご参照ください。 >>>P148

グローバル本社での再生可能エネルギー導入の取り組み

神奈川県横浜市のグローバル本社では消灯などの日常改善やLED化の展開などによる省エネルギー活動を推進するとともに、再生可能エネルギーの導入によるCO₂排出量の削減に取り組んでいます。2011年に約40kW太陽光発電設備を導入しました。発電した電力は、本社ビル内の「日産リーフ」のリチウムバッテリーに蓄えられたのち、敷地内に設置されたEV向けの充電システムに使用されています。また発電した電力余剰分は、構内の電力として有効活用しています。2024年度は、グローバル本社で使用する電力と熱エネルギーは100%再生可能エネルギーに置き換えられています。



グリーンビルディングポリシー

日産はISO14001の環境影響評価のマネジメントプロセスに基づき、新築や改修工事の際に、環境配慮の面で最適化された建物仕様を重視しています。CO₂排出量が少なく環境負荷の低い建物や、廃棄物などの少ない工事方法の立案、さらに有害物質の使用削減などの品質管理を評価項目としてあげるとともに、日本においては建築物の環境性能を総合的に評価する国土交通省のCASBEE*1をひとつの指標としています。既存の建屋では、グローバル本社ビルがCASBEEの最高評価である「Sランク」を取得し、神奈川県厚木市の日産先進技術開発センター(NATC)に続く2件目の取得となりました。グローバル本社ビルは、自然エネルギーの有効活用とCO₂排出量の削減、水のリサイクル、廃棄物の大幅な削減が評価され、建築物の環境性能効率を示すBEE値が新築としては過去最高の5.6と、日本最高レベルの環境性能を持つオフィスビルとして認証されました。

販売会社での取り組み

日産は、日本の販売会社においても、CO₂マネジメントを推進しています。多くの店舗で高効率空調や断熱フィルム、天井ファン、LED照明などを採用しているほか、店舗によって建て替え時に日中の太陽光を取り込む照明システムや断熱材を取り入れた屋根を採用するなど、省エネルギー活動を継続的に進めています。

また、2000年4月、ISO14001認証に基づいた日産独自の環境マネジメントシステム「日産グリーンショップ」認定制度を導入し、環境への取り組みを推進する活動のひとつとして、省エネルギーなどCO₂削減活動を推進しています。

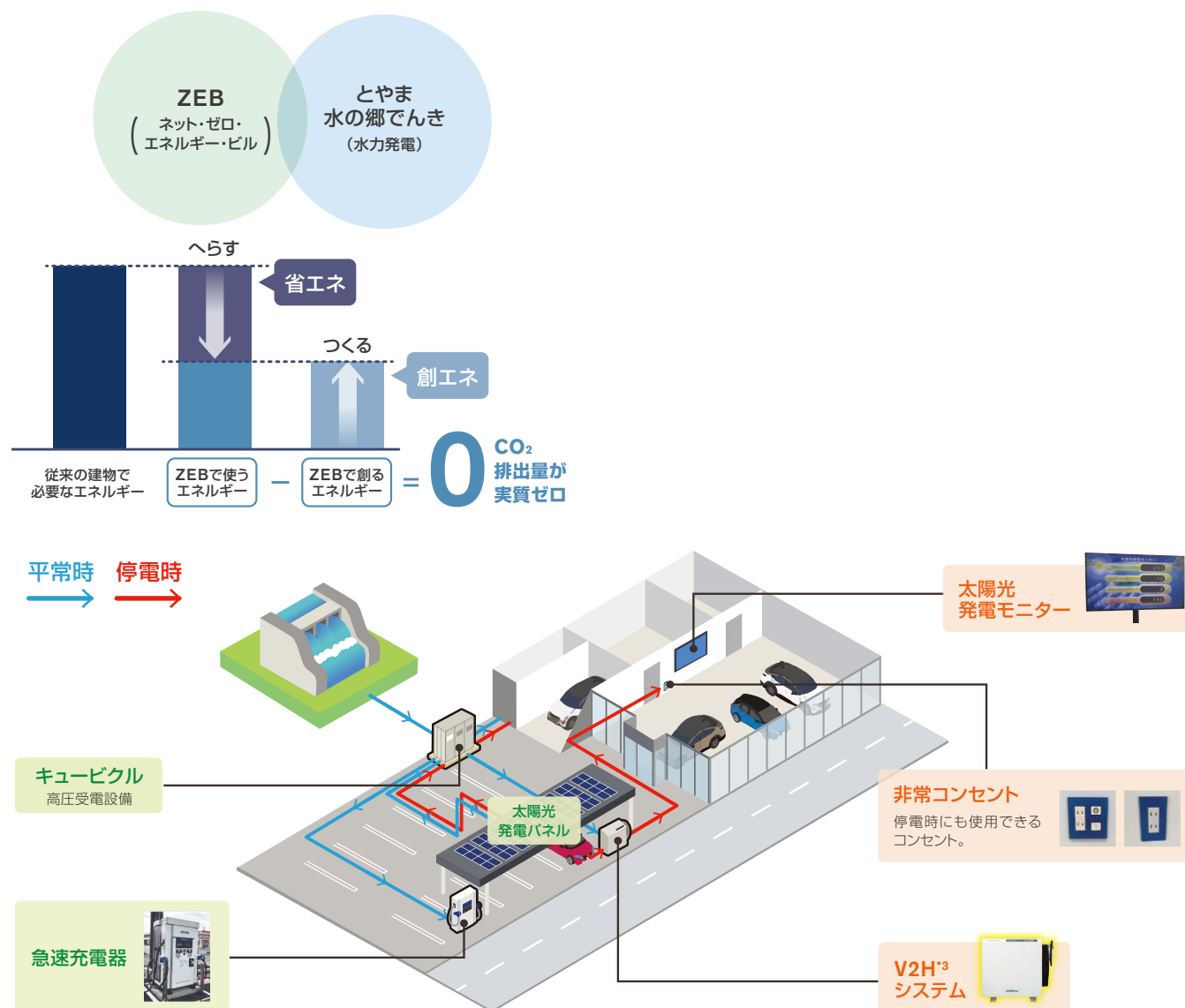
「NGP2030」に基づく統一した考えに沿ってCO₂削減活動が実施できるように基準書を設定し、電気使用量の削減や照明のLED化など具体的な方策が各社の活動計画に落とし込まれています。

*1 建築環境総合性能評価システム：Comprehensive Assessment System for Built Environment Efficiency

カーボンニュートラル店舗の取り組み

北陸の富山県にある日産サティオ富山「高岡インター店」は、2022年12月、カーディーラーとしては北陸初のカーボンニュートラル店舗となり、2023年7月には、県内2店舗目となるカーボンニュートラル店舗「富山東店」を設立しました。

高い断熱性能を有する建物に加えて、高効率空調、センサーを用いた照明制御の導入などにより、基準一次エネルギー消費を63%まで削減し、「ZEB*1Ready(ゼブレディ)」の認証を取得しています。また屋外展示場の屋根には、太陽光発電パネルを設置し自社での発電を行うとともに、自社の発電量では不足する電気については、富山県の水力発電所で発電された再エネ電気メニュー「とやま水の郷でんき*2」を活用することで、富山県産である「産地価値」を活かした再生可能エネルギーを使用しています。これらの活動を通して、省エネルギーと創エネルギーを実現するカーボンニュートラル店舗を実現しています。日産サティオ富山では、日本電動化アクション「ブルー・スイッチ」を推進し、電気自動車、V2H*3を活用した地域課題解決を図り、これら基幹店舗を中心に、富山県のカーボンニュートラル実現に貢献し、電気自動車および電動車のさらなる普及に努めていきます。



*1 ZEB(ネット・ゼロ・エネルギー・ビル) 快適な室内環境を実現しながら、建物で消費する年間の一次エネルギー消費量の収支をゼロにすることを旨とした建築物。

*2 富山県営水力発電所から生み出される電気とその環境価値を活用した再エネ電気メニュー。 電気の使用にともなう二酸化炭素の排出量がゼロとなる環境価値はもちろん、水力発電所由来の電気である「特定電源価値」、さらには富山県産である「産地価値」を付帯している付加価値の高い電気。

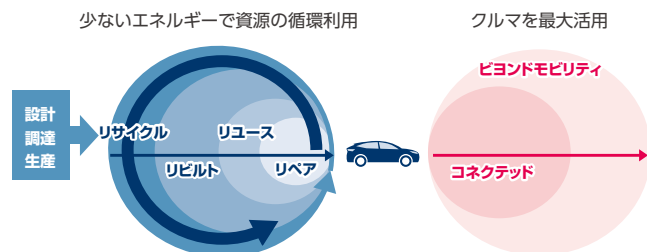
*3 V2H(ヴィークル・トゥ・ホーム) 電気自動車から電気を取り込み、建物へ給電するシステム。 災害等の停電時には、電気自動車から電力供給し、事務所、会議室などの照明、コンセントを使用することが可能となる。

サーキュラーエコノミーの取り組み (資源循環とモビリティの活用)

日産は、クルマに必要な資源の効率的かつ持続的な利用とクルマの最大限活用を推進しています。

より少ないエネルギーでの資源循環を目指し、クルマを修理しながら使うリペア、可能な限り部品やユニットとしての再利用を図るリユース・リビルド、そして素材としての循環を行うリサイクルを通じて、資源再利用を積極的に進めます。また、新規資源を使用する場合においても、資源の循環性を考慮した、環境影響の小さい資源利用を目指します。

日産のサーキュラーエコノミー



少ないエネルギー資源で資源の有効利用

「設計・調達・生産」における資源の有効利用

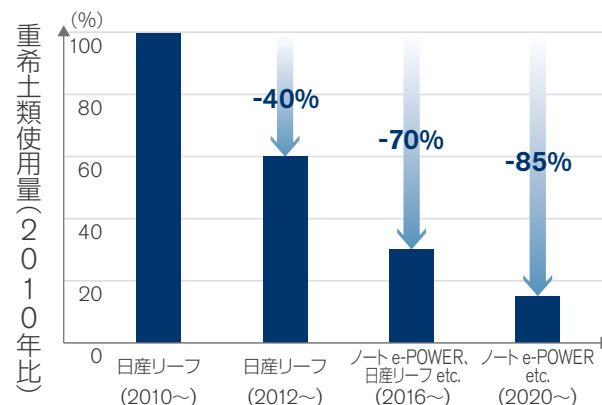
希少資源の削減

EV、HEVおよびe-POWER用の永久磁石式モーターにはレアアースと呼ばれる希少資源が使用されています。レアアースは資源の偏在や需給バランスによる価格変動が懸念され

ており、その使用量削減が課題となっています。

日産はレアアースの中でも希少性の高い重希土類を継続的に削減し、2020年「ノート e-POWER」では2010年比85%削減した磁石を採用しました。さらに2022年「日産アリア」では磁石を使用しない巻線界磁式EV用モーターも採用しています。磁石を使用するモーターに対しても、重希土類元素ゼロ化を目指した研究開発を進めていきます。

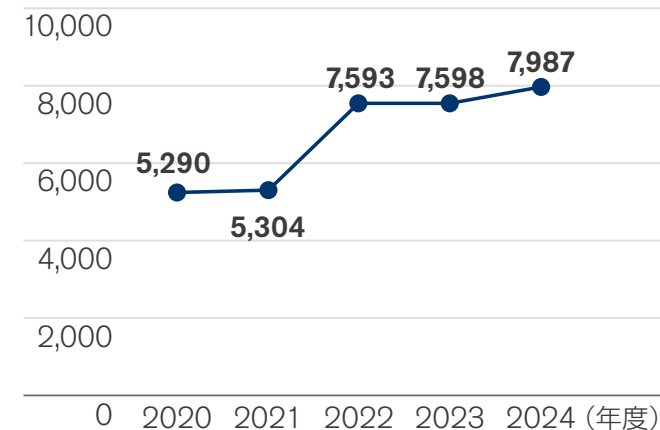
駆動モーター向け磁石における重希土類使用量



化学物質の適正な利用

日産では、化学物質のハザードやリスクの選定基準を、法令遵守以上のレベルで見直しを行っており、世界で検討が進んでいる物質も積極的に制限しています。その結果、2024年度の指定化学物質数は7,987へと増加しています。これは将来のリペア、リユース、リビルド、リサイクルといった資源の循環に必要な取り組みと考えています。^{*1}

指定化学物質数



「リペア・リユース・リビルド」における資源の有効利用

リペアの対応

金型を用いることなくボディパネルを成形する「対向式ダイレス成形」や、3Dプリンター^{*2}などの新技術により、多品種少量生産が求められるアフターサービス部品や旧型車の補修部品の延長生産が可能となります。これにより、クルマを修理しながら利用することができ、廃棄物の発生の抑制に貢献します。



^{*1} 化学物質のガバナンスに関する詳細はこちらのページをご参照ください。 >>>[P018](#)

^{*2} 3Dプリンターに関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/release-abe1d9572c0dbf098bf54c66e927c947-210315-01-j>

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	ニッサン・グリーンプログラム	バリューチェーンでの活動実績
					第三者保証

リチウムイオンバッテリー二次利用事業「4RE」の推進

日産のEVに搭載した蓄電池は、クルマでの使用後も高い性能を有しています。また今後EVが普及し買い替えが進むことで二次利用が可能な蓄電池は供給が大きく増加することが見込まれています。日産は電気自動車(EV)に搭載されるリチウムイオンバッテリーの再利用事業を推進しています。*1

リビルトパーツを拡大

使用済み自動車の部品や、修理の際に交換した部品の中には再生可能なものが含まれています。日本ではこれらを回収し、適切な品質確認を行ったうえで、修理用のリサイクル部品「ニッサングリーンパーツ」として市販しており、分解整備を施して消耗部品を交換した「リビルト(再生)部品」と、「リユース(中古)部品」*2の2種類があります。

日産は、これらニッサングリーンパーツの取り組みを日本、欧州、北米を中心にさらに加速することで、限りある資源を有効利用しつつお客さまへの安定した部品の供給を目指します。

日本におけるニッサングリーンパーツの対象部品の例



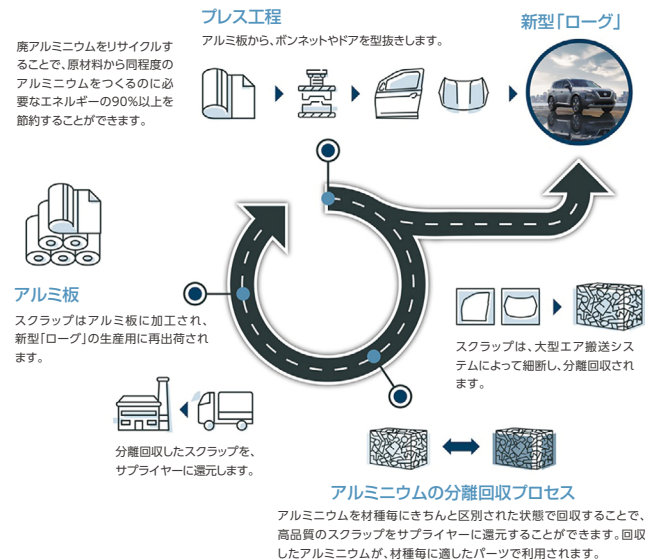
オルタネーター エアコンコンプレッサ スターターモーター

「リサイクル」における資源の有効利用 再生材使用拡大への取り組み(鉄・非鉄)

日産車に使用する材料は、重量比で鉄60%、非鉄11%、樹脂19%、その他11%(2024年実績)で構成されています。日産は、天然資源使用量をさらに低減するため、それぞれの材料で再生材の使用拡大に向けた取り組みを進めています。鉄とアルミニウムについては、生産時に発生する端材を減らす工夫に加え、発生した端材を自動車用の材料に再生するクローズドループ・リサイクルの取り組みをグローバルで推進しています。

現在、「エクストレイル」「ローグ」「キャシュカイ」を生産する

アルミのクローズドループリサイクル

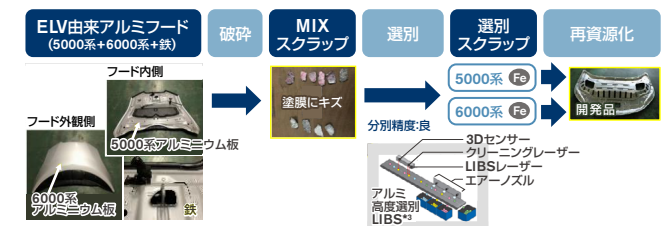


日産自動車九州や北米・欧州の生産拠点において、アルミメーカーと協働し、製造時に発生したアルミニウムの端材スクラップを自動車用アルミ板にリサイクルするクローズドループ・リサイクルを採用しました。このプロセスにおいては、端材スクラップの選別回収をすることで不純物混入を抑え、品質低下のない水平リサイクルを実現し、新規採掘資源(アルミニウム新塊)の使用量削減に貢献します。廃車や市場で発生するアルミのロードホイールスクラップについても、日産の品質に適した材種を選別・異物除去し、サスペンション部品に採用しています。軽量化のために推進しているアルミドアなどについても、選別精度の向上や、成分組成の制御による成形性の担保などにより、廃車からのクローズドループ・リサイクルを目指します。

アルミの水平リサイクル



アルミのアップグレードリサイクル



*1 リチウムイオンバッテリーの再利用事業に関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P042

*2 一部取り扱っていない販売会社があります。

*3 Laser-Induced Breakdown Spectroscopy

再生材使用拡大への取り組み(プラスチック)

鉄、非鉄の再生材使用拡大への取り組みに加え、プラスチックについても日産はリサイクル材の使用拡大に向けた取り組みを推進しています。車両に適用した原油由来のプラスチック材料は、廃車後にそのほとんどが自動車シュレッダーダスト(ASR)となり、サーマルリカバリーという形でエネルギーを回収しています。一方で、リサイクルプラスチックは従来の材料に比べ、材料製造時のCO₂の発生量を抑制する事ができ、資源の有効利用・廃棄物の削減に大きく貢献します。

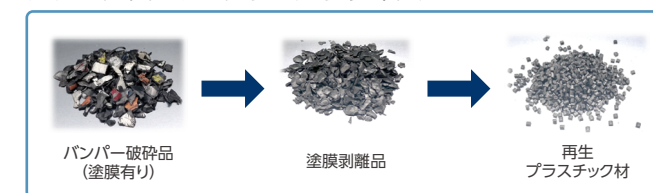
日産は、プラスチック材料のサーキュラーエコノミー構築のため、マテリアルリサイクルプラスチックやケミカルリサイクルプラスチックの研究開発を推進しています。マテリアルリサイクルの取り組みとして、追浜工場や中国合弁会社である東風汽車有限公司(DFL)における工場が発生する塗装済みバンパーのリサイクルが挙げられます。これらは新車用のバンパーやサービスバンパーの材料として活用しています。また、日本国内の販売会社で交換されたバンパーは再生資源として回収し、アンダーカバーなどの部品の材料として採用し、2024年度は日本国内のディーラーで取り外されたバンパーの50%に当たる、約7万8,000本を回収しリサイクルしました。

また、専用処理施設にて、廃車由来の自動車シュレッダーダスト(ASR)が処理されていますが、ASRの約30%はプラスチックとなっています。日産はこのプラスチックを自動車の材料として再生するために研究開発を進めています。

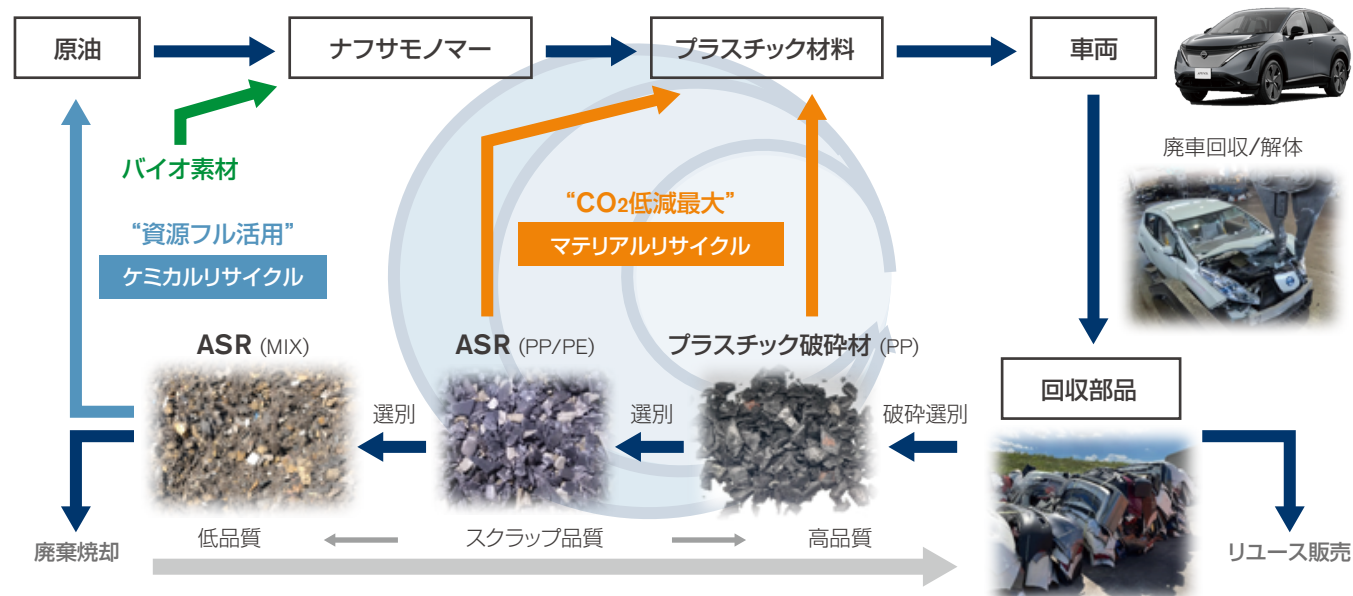
また、使用後の自動車部品のリサイクルだけでなく、他産業のプラスチック製品のリサイクルプラスチック適用開発も推進しています。事業所内で使用している飛沫防止用パーティションをリサイクルし、自動車部品として再生させる取り組みを進めており、アクリル(PMMA)製のものはヘッドランプの内部レンズに、ポリエチレンテレフタレート(PET)製のものは天井(ルーフトリム)への採用を進めています。

これら取り組みを推進することにより自動車や他産業由来のリサイクルプラスチックの適用を進め、2031年の日本国内生産・発売の新型乗用車において、リサイクルプラスチックの利用率10%を目指します。

プラスチックのマテリアルリサイクル



プラスチックのクローズドループリサイクル



使用済み自動車(ELV)のリサイクル

日産は、新車の設計段階から「3R」“廃棄物の発生抑制 (Reduce)、再使用 (Reuse)、再資源化 (Recycle)”の視点を取り入れ、2005年度以降、日本および欧州市場に投入したすべての新型車においてリサイクル可能率95%を達成*1しています。

また、解体事業者や破碎事業者、他の自動車メーカーと連携して、使用済み自動車(ELV*2)のリサイクルを進めています。日産は2005年度以降、日本の自動車リサイクル法に基づいたELVのリサイクル実効率95%以上を継続して達成しています。2024年度のリサイクル実効率は99.4%*3に相当し、政府の定めたリサイクル実効率95%を大幅に上回りました。

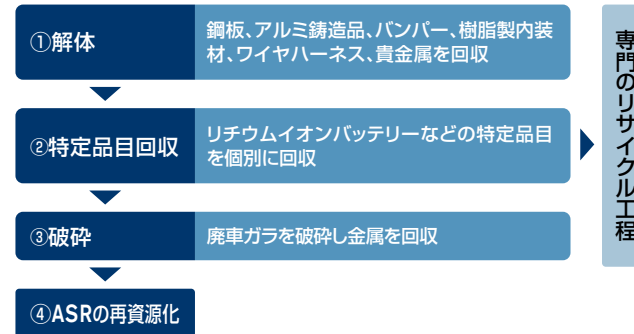
日産は、他の自動車メーカー12社と自動車破碎残さリサイクル促進チーム「ART (Automobile shredder residue Recycling promotion Team)」を2003年12月に結成し、協力して、ASR再資源化施設でのASRの処理を推進してきました。

これは日本の自動車リサイクル法に対応した取り組みで、日産はASRを有効・円滑かつ効率的に再資源化するための中心的な役割を果たしています。

ELVのリサイクルは欧州でも進められており、各国がELV指令に基づいて契約解体事業者、契約サービス事業者、自治体、政府と連携し、認定処理施設のネットワークを構築しています。

また、日本自動車工業会として、使用済みリチウムイオンバッテリーを共同で回収するスキームと適正に処理する体制を構築し、2018年度より運用を開始しました。

ELV処理のプロセス



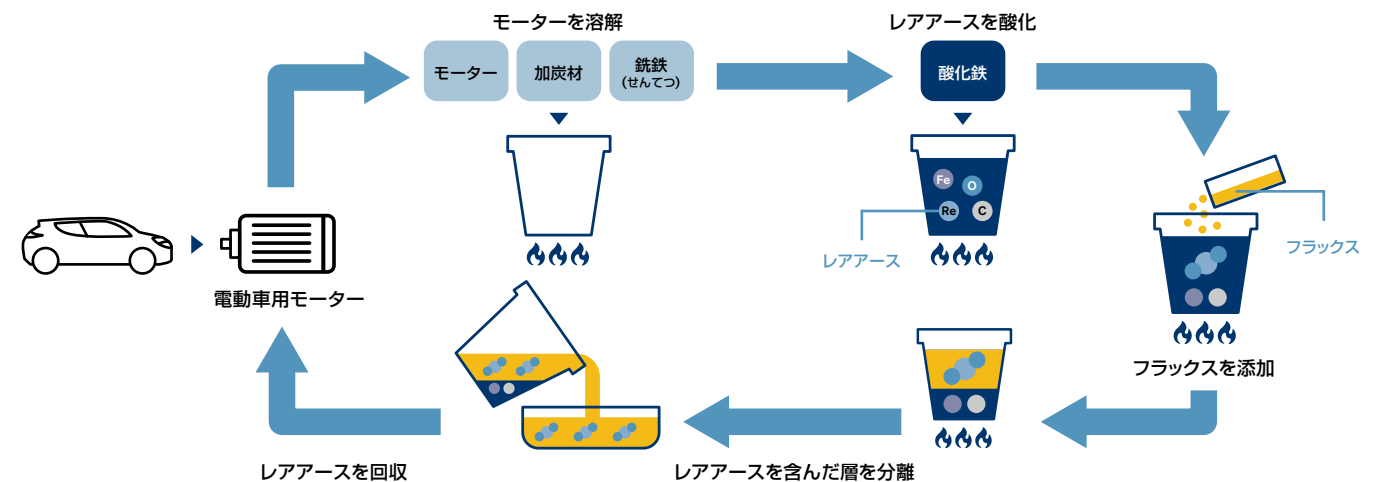
希少資源の再利用

日産は新たな取り組みとして駆動モーター磁石からのレアアース回収技術開発を進めています。これまでモーター内の

磁石をリサイクルするためには、手作業による磁石の分解取り出し作業を含む複数の工程が必要となり、経済性が課題となっていました。日産と早稲田大学は共同で、モーターのローターを解体することなく、ホウ酸塩を融剤(フラックス)とした直接溶解によりレアアースを高純度で回収する技術確立しました。現在、2030年前後の実用化に向け、出荷基準を満たさなかったモーターを活用して実証実験を進めています。

このように日産は、電動化のキーテクノロジーであるモーターに関し、レアアースの使用量の削減から使用後の再利用まで、資源を効率的かつ持続的に活用し、サーキュラー・エコノミーの考えに沿った開発に取り組んでいます。

電動車用モーター磁石からのレアアースリサイクルプロセス



*1 日本は1998年に日本自動車工業会が公表した定義とガイドラインに、欧州はISO22628に基づき算出。

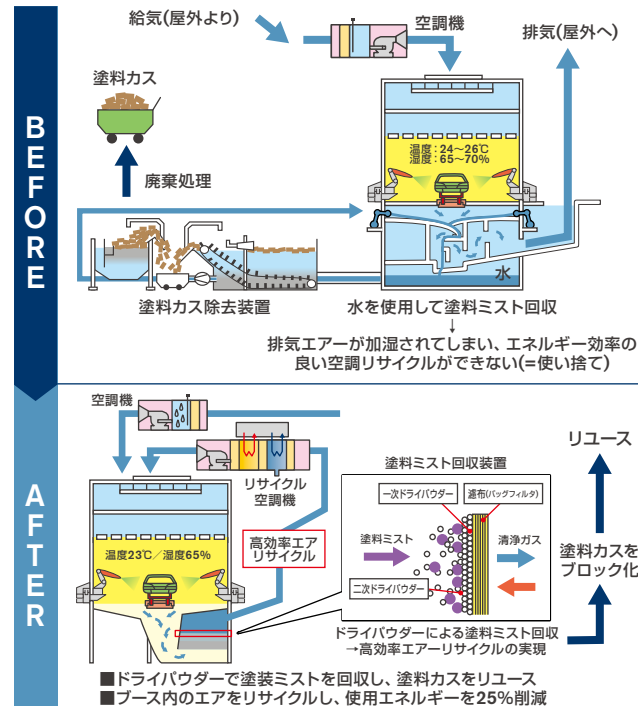
*2 ELV: End-of-Life Vehicleの略。使用済み自動車。

*3 日産調べ

塗装ドライブースでのリサイクル推進

2021年から稼働したニッサン インテリジェント ファクトリーにおいても、リサイクルを推進しています。

従来、塗装工程で空気中に残留した塗料は、水と混合され廃棄物となっていました。水を一切使わないドライブースを採用することで、浮遊する残留塗料を100%回収し、鑄造工程にて鉄を生成する際に、不純物除去のために使用される補助剤の代替として、工場内でリサイクルし活用しています。



廃棄物対策を徹底

日産は、生産過程における3R活動(Reduce, Reuse, Recycle)を積極的に推進し、廃棄物の発生源対策と徹底した分別による再資源化に努めています。日本では2010年度末よりすべての生産拠点(5工場、2事業所および連結7社)において、海外においてもブラジル、インドなどは、生産段階で再資源化率100%を達成しています。

また、日本を含めたグローバルの生産工場において、輸出入部品の梱包資材の削減、海外拠点間の部品の物流、プラスチック容器やリターナブル容器^{*1}を繰り返し使用するなど、廃棄物の削減に取り組んでいます。

さらに開発段階から部品形状を最適化する物流サイマル活動を行い、梱包資材の使用量削減を行っています。また梱包資材選択段階で、リサイクル素材を選定、炭素繊維強化プラスチック(CFRP)のリサイクル技術開発にも積極的に取り組んでいます。

廃棄物実績^{*2}

2024年度の定常廃棄物発生量^{*3*4}は、グローバルの企業活動全体で150,642トン、生産工場で145,678トンとなりました。(生産工場の非定常廃棄物^{*5}は10,226トン)

企業活動での定常廃棄物発生量^{*6}

	(年度)	
	2023	2024
合計	155,857	150,642

地域別内訳		
日本	57,646	54,910
北米	50,814	50,856
欧州	44,551	43,142
その他	2,846	1,734

処理方法別内訳		
リサイクル	146,332	142,013
焼却廃棄物	1,997	1,352
埋立廃棄物	7,528	7,277

(単位: ton)

クルマの最大活用： モビリティサービス・コネクテッド

クルマの電動化やコネクテッドカーの技術を通じ、ライドシェアなど新たなモビリティサービスの提供やエネルギー源としての活用を推進し、クルマから人、社会へとつながるサービスを拡大しています。モビリティサービス・コネクテッドでクルマの最大活用についても検討をしています。^{*7}

^{*1} リターナブル容器：部品梱包用の容器を部品納品後に発送元に返却し、繰り返し使用できるようにした容器。日産は返却時の輸送効率に配慮し、折り畳み構造を採用。

^{*2} 2023年度実績値より集計対象を財務連結グループと一致させています。

^{*3} 通常生産、メンテナンス、故障対応などの定常廃棄物

^{*4} 資源依存(廃棄物)に関するデータはこちらのページにも掲載しています。 >>>P151

^{*5} 新工設置、設備移設、設備撤去など、非定常に発生する廃棄物

^{*6} *5を除いた生産拠点とオフィス拠点から発生した、定常廃棄物総量。

^{*7} 詳細はこちらをご参照ください。 >>>PQ40

企業活動の自然への依存と影響(水・大気)

水に関する実績

企業活動における水使用量の削減

日産では水を地域性のある課題と捉え、渇水リスクの高い地域では排水のリサイクル、雨水の有効活用など、優先的に水使用量を削減する活動を行うとともに、地域の水課題への貢献も行っています。また、すべての生産工場で水使用量の管理・削減に取り組み、工場ごとに切磋琢磨しながら新たな水削減活動を行っています。

水使用量削減に向けて、インドのチェンナイ工場やメキシコのアグアスカリエンテス第2工場では雨水利用を目的にため池を整備し、インドのチェンナイ工場、中国の花都工場、日本の追浜工場などでは廃水のリサイクル設備を導入しています。中でも水資源が貴重な流域に位置しているチェンナイ工場は、水使用量の削減に加え、工場周辺の池や湖の再生にも取り組んでいます。こうした取り組みが評価され、2023年度には優れた水資源管理において、2024年度には排水管理と再生利用において、インド工業連盟(CII: Confederation of Indian Industry)から2年連続表彰されました。

また工場以外のオフィス拠点でも水資源の有効利用に向けて活動をしています。例えば日本のグローバル本社では、雨水・雑排水・厨房排水をリサイクル処理した後、飲用以外の用途に利用し、水使用量の削減に努めています。

これらの活動が評価され、CDPの水セキュリティ部門で6年連続の最高ランクであるAリスト企業に認定されました。



インド工業連盟から表彰されたチェンナイ工場

インドチェンナイ工場での Water Positiveに関する取り組み

水資源の取り扱いが生活に大きく影響するインドにおいて、工場では、水使用量削減のため逆浸透膜による水処理設備を導入し、生活廃水を処理後、製造工程やクーリングタワーの冷却水として再利用を行っています。これにより削減された水の量は年間約7万8,000キロリットルで、約32万世帯が1日で使う水の量と同等です。

また、地域における水利用を重要と考え、工場周辺の池や湖の再生にも取り組んでいます。2020年にはシザーリ湖の再生を完了し、2023年に6つの村の主要な水源と

なっているオラガダム湖を含めた11の湖沼の再生を新たに宣言しました。堆積した土を浚渫し、貯水容量を拡大することで、飲料水の確保や生物多様性の保全に貢献します。2024年2月には、工場での水使用量の削減や工場周辺の池や湖の再生など、水に関するポジティブな活動を包括的な水戦略に基づき実施していることが評価され、第三者による厳正な審査の上、「Water Positive」の認証(一番高いプラチナカテゴリー)を受けました。



Water Positiveの証書(プラチナカテゴリー)



再生したウットウクタイ池

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集	◀ 058 ▶ ➡
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	ニッサン・グリーンプログラム	バリューチェーンでの活動実績	第三者保証

企業活動での取水量*1

2024年度にグローバル企業活動における取水量は16,873千m³となり、2023年度の17,794千m³と同等となりました。

2024年度のグローバル生産工場の取水量は15,761千m³となり、2023年度の16,620千m³と同等となりました。

(年度)		
	2023	2024
合計	17,794	16,873
日本	10,724	10,086
北米	4,409	4,321
欧州	1,380	1,402
その他	1,281	1,064

(単位：千m³)

企業活動での排水量*1

2024年度のグローバル企業活動における排水量は12,831千m³となり、2023年度の13,405千m³と同等となりました。

(年度)		
	2023	2024
合計	13,405	12,831
日本	9,448	9,132
北米	2,837	2,669
欧州	724	706
その他	396	324

(単位：千m³)

水質		
化学的酸素要求量 (COD)*2	24,811	22,536

(単位：kg)

日産の各工場では、廃水処理の徹底を推進しています。メキシコやインドの工場では、廃水処理した水を敷地の緑地維持に活用し、敷地外への排水ゼロを実現しています。日本の工場では、油などが流出するという万が一の場合に備えて、廃水処理施設の排出口に水質センサーを取り付け、水質の異常が検知された場合は自動的に敷地への排水を停止させるシステムを導入しています。また、雨水放流口にも水質センサーを導入し、豪雨時でも水質異常の廃水を外部に流出させないように水門を自動的に閉止させることで、水質汚濁防止を強化していきます。これらシステムへの投資を確保し、現在の技術ではセンサーで検知しづらい物質については技術開発を進めています。

企業活動での消費量*1*3

2024年度のグローバル企業活動における水の総消費量は4,042千m³となり、2023年度の4,390千m³より減少しました。

(年度)		
	2023	2024
合計	4,390	4,042
日本	1,277	953
北米	1,572	1,653
欧州	656	696
その他	885	740

(単位：千m³)

大気品質に関する実績

生産工場からの排出ガス管理

日本では、大気汚染物質として窒素酸化物(NOx)、硫黄酸化物(SOx)の排出に関して厳しい対策を推進してきました。具体的には塗装工程の熱となるオープンやボイラー設備への低NOxバーナーの採用や、使用する燃料を重油や灯油などからSOx排出量の少ない燃料へ転換するなど、NOxやSOxの排出濃度を低減してきました。カーボンニュートラルの観点から、今後は燃料を使用する設備の電化が進みます。これに伴い生産工場から排出する排ガスの一層の削減が期待できます。引き続き、適正な管理を継続して実施していきます。

生産工程におけるVOCの削減

クルマの生産工程から排出される化学物質のうち、9割を占める揮発性有機化合物(VOC)の低減が課題となっています。日産は各国の法規制化に先駆けて、洗浄用シンナーなどの回収率を上げて工場外への排出量を減らすとともに、廃シンナーのリサイクル率向上を計画的に進めています。同時にVOC排出量を20g/m²以下に抑える水系塗装ラインへの切り替えを推進しています。九州工場、メキシコのアグアスカリエンテス工場、ブラジルのレゼンデ工場、米国スマーナ工場、中国花都工場、英国サンダーランド工場などでは水系塗装を採用しています。日産では、VOC排出量を削減する活動を今後も継続していきます。

*1 2023年度実績値より集計対象を財務連結グループと一致させています。2022年度以前の実績値は非連結会社も含みます。

*2 日産自動車および日産自動車九州の4拠点

*3 GRI303に基づいて算出。消費量は水の総取水量から総排水量を差し引いた量を示しています。

関連パートナーとの連携

気候変動や材料・エネルギー資源の枯渇、生物多様性の喪失など、日産は、事業を継続するうえで多面的なリスクに囲まれています。それらの環境リスクを正しく理解するため、お客さま、行政府、サプライヤー含む企業、投資家、NGO/NPOなど、直接的・間接的なパートナーとの信頼関係の構築と対話が重要となります。日産は、パートナーとの対話を通じ特定したリスクや発見した機会を自社の事業活動に反映させ、日産が環境に与える負の影響の最小化とポジティブな影響の最大化を目指し、持続可能な社会と事業の継続を実現していきます。

お客さまとの協業

日産ゼロエミッションファンド

日産ゼロエミッションファンド*1は賛同されたお客さまの電気自動車が行った際に排出されなかった分のCO₂を集約し、J-クレジット制度を活用し資金化します。そしてその資金を脱炭素に関連した活動を通して社会とオーナーの皆さまへ還元します。2024年度では過去にクレジット認証および売却した資金の一部を、北海道美瑛町の森林保全、植樹活動に活用しました。*2今後も、森林保全活動、環境教育、EV普及のための支援活動など、脱炭素化のための社会活動に本ファンドを活用していきます。



政府・自治体やパートナー企業とのさらなる連携

2006年から日産は中期環境計画を「ニッサン・グリーンプログラム」として設定し、その目標を確実に達成することで、環境理念である「人とクルマと自然の共生」を実現できる社会に近づけるよう努力してきました。COP21でパリ協定が採択された2015年、「気温上昇を産業革命以前に比べて2℃より十分低く保つと共に、1.5℃に抑える努力を追求する」という世界の共通目標の重要性を認識し、日産の長期ビジョンとの整合性を改めて確認しました。IPCCの特別レポートからさらなるビジョンの強化の必要性を認識し、2021年1月には、2050年までに事業活動を含むライフサイクルでのカーボン

ニュートラルを目指すことを宣言しました。そして、2021年11月野心的なアクションをまとめた電動化推進を含む「Nissan Ambition 2030」を発表しました。EVエコシステム構築には、政府、自治体との連携や他業種企業など幅広いパートナーとの協業が必要となります。政府との連携の一事例として、協業の機会を拡大するために2022年当初よりGXリーグ*3にも参画しており、気候変動の取り組みの実効力拡大に努めています。

また、以下の表の通り所属する業界団体の気候変動へのスタンスをレビューし、日産の目指すべき方向と一致していることを確認できました。所属する業界団体活動も通じ自動車業界内での連携を引き続き実施し、パートナーとともにカーボンニュートラルへ継続してチャレンジしていきます。

各加入団体のスタンスレビュー結果

団体	パリ協定に対するスタンス(出所)	パリ協定や当社スタンスとの整合レビュー結果
一般社団法人 日本自動車工業会 (自工会)	2050年カーボンニュートラル(CN)に全力でチャレンジする。 2050年CNは、画期的な技術ブレークスルーなしには達成が見通せない大変難しいチャレンジであり、安価で安定したCN電力の供給が大前提であるとともに、政策的・財政的措置等の強力な支援が必要。 (2021年4月8日：2050年カーボンニュートラル実現に向けた省エネルギーのさらなる深掘りと課題・要望)	- 自工会の目標である2050年カーボンニュートラルは、パリ協定で合意された目標および日産のVisionと一貫性を確認。 - CEOのイヴァン・エスピノーサは自工会副会長であり、各委員会分科会の議長に当社役員が参画。 - カーボンニュートラルに向けた自動車の公平・公正なLCA評価手法の開発に携わり、LCA分科会を通じてLCAの国際標準化に向けた取り組みを推進。 - 日産は自工会のスタンスと乖離はなく、2050年カーボンニュートラル実現に向け、引き続き自工会と連携していきます。
一般社団法人 日本経済団体連合会 (経団連)	- 環境は事業活動や国民生活の基盤であり、サステナブルな社会の実現は経済界の最大の関心事である。 「2050年カーボンニュートラル」に向け政府とともに不退転の決意で取り組む。 (2020年12月15日：2050年カーボンニュートラル(Society 5.0 with Carbon Neutral)実現に向けて一経済界の決意とアクション)	- 経団連の目標である2050年カーボンニュートラルは、パリ協定で合意された目標および日産のVisionと一貫性を確認。 - 日産は経団連のスタンスと乖離はなく、2050年カーボンニュートラル実現に向け、引き続き経団連と連携していきます。

*1 日産ゼロエミッションファンドに関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://n-link.nissan.co.jp/MANUAL/EV/ZEFUND/index.html>

*2 詳細はプレスリリースをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/240624-01-j>

*3 GXリーグの詳細はこちらをご参照ください。 <https://gx-league.go.jp/>

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
環境方針	環境に対する認識	グローバル環境マネジメントのガバナンス	戦略的アプローチ	ニッサン・グリーンプログラム	バリューチェーンでの活動実績
					第三者保証

サプライヤーとの連携

サプライーマネジメントの方針・考え方

環境目標達成には、サプライヤーとの協働は不可欠と考え、ガイドラインの策定や説明会の実施、活動実態の把握、共同での技術開発など、サプライヤーと連携し環境負荷低減活動を推進しています。

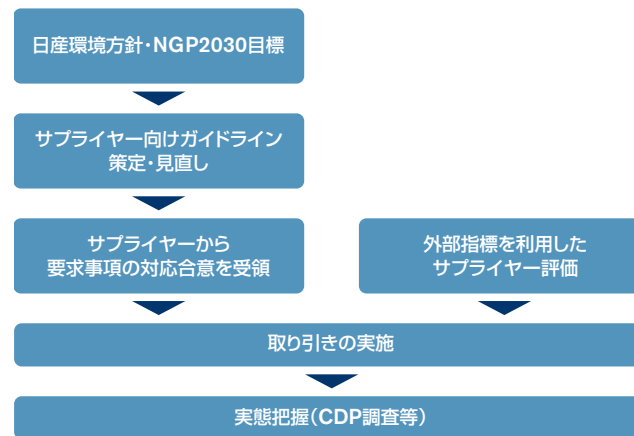
日産は、2008年に「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」を発行しました。社会要請や環境課題の変化を反映し、継続的にガイドラインの見直し、更新を実施しています。当社の環境理念や中期・長期の環境目標、サプライヤーへの要求事項を共通理解にすることで、サプライヤーによる環境負荷を軽減し、責任ある調達を進めています。



環境活動説明会の様子

発注先選定プロセスでの運用

サプライヤー選定時は、環境面も評価指標に組み込むほか、日産のガイドラインで定める要求事項への対応に合意したサプライヤーと取引を行っています。



サプライヤーとの改善活動の推進

サプライヤーにおける環境データ調査

日産は、2012年からサプライヤーにおける環境データ調査を開始し、2014年からは国際的な非営利団体CDPのサプライチェーンプログラムを採用しています。日産との取引額や企業規模などをもとに抽出したサプライヤーへ、気候変動および水に関するCDP調査を実施(2024年度回答率:78%)。調査結果に基づき、一部のサプライヤーに対して環境への取り組みの改善を働きかけています。

サプライヤーとのCO₂排出量削減活動

サプライチェーンでの環境負荷低減活動を推進するため、日産はサプライヤーからCO₂排出量情報を入手し、サプライヤー間の相対評価を実施しています。希望するサプライヤーに対して、サプライヤー間でのCO₂削減の進捗情報や日産の期待値、改善方策等を共有することにより、サプライヤーでのさらなるCO₂削減活動に繋げています。サプライヤーとの連携として、2027年度以降に生産を開始する全車で、アルミニウムを原材料とする部品に低CO₂アルミニウムの適用を進めていきます。

「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」におけるサプライヤーへの要求事項

気候変動	資源依存	大気品質・水	基盤強化
CO ₂ 排出量の削減活動(下記は活動の視点) ・推進体制の構築 ・サプライチェーン全体でのCO ₂ 排出量の把握 ・削減計画の立案/推進 ・科学的根拠に基づいたCO ₂ 低減目標の設定 ・フレームワークに基づく情報開示 CO ₂ 排出量の情報提供	・サステナブルマテリアルの使用推進 ・サステナブルマテリアルの使用状況報告	<大気品質> ・法規制・日産基準や方針の遵守や管理 ・情報提供 <水> ・水使用量の削減 ・排水の水質管理 ・水調査への回答	・環境マネジメントの構築 ・環境影響の管理者設定 ・サプライーマネジメント ・監査対応 ・ライフサイクルアセスメントの情報提供 ・環境調査への回答

第三者保証

独立業務実施者の限定的保証報告書

2025 年 7 月 10 日

日産自動車株式会社

代表執行役社長兼最高経営責任者 イヴァン エスピノーサ 殿

KPMGあずさサステナビリティ株式会社

東京事務所

業務責任者

佐藤 研一郎

結論

当社は、日産自動車株式会社（以下「会社」という。）のサステナビリティデータブック2025（以下「サステナビリティデータブック」という。）に含まれる2024年4月1日から2025年3月31日までの期間の★マークの付されている環境パフォーマンス指標（以下「主題情報」という。）が、サステナビリティデータブックに記載されている会社が定めた主題情報の作成規準（以下「会社の定める規準」という。）に準拠して作成されているかどうかについて限定的保証業務を実施した。

実施した手続及び入手した証拠に基づいて、主題情報が会社の定める規準に準拠して作成されていなかったと信じさせる事項が全ての重要な点において認められなかった。

結論の根拠

当社は、国際監査・保証基準審議会（IAASB）が公表した国際保証業務基準（ISAE）3000（改訂）「過去財務情報の監査又はレビュー以外の保証業務」及びISAE 3410「温室効果ガス報告に対する保証業務」に準拠して業務を実施した。同基準における当社の責任は、本報告書の「業務実施者の責任」に記載されている。

当社は、国際会計士倫理基準審議会（IESBA）が公表した「職業会計士のための国際倫理規程（国際独立性基準を含む。）」に定められる独立性及びその他職業倫理に関する規定に準拠している。

当社は、IAASBが公表した国際品質マネジメント基準（ISQM）第1号「財務諸表の監査若しくはレビュー又はその他の保証若しくは関連サービス業務を行う事務所の品質マネジメント」を適用している。同基準は、職業倫理に関する規定、職業的専門家としての基準及び適用される法令等の遵守に関する方針又は手続を含む品質管理システムを整備及び運用することを事務所に対して要求している。

当社は、結論の基礎となる十分かつ適切な証拠を入手したと判断している。

その他の記載内容

当社の主題情報に対する結論の対象には、主題情報及びその保証報告書以外の情報（以下「その他の記載内容」という。）は含まれない。当社はその他の記載内容を通読したが、追加的な手続は実施していない。また、当社はその他の記載内容に対して結論を表明するものではない。

主題情報に責任を負う者の責任

会社の経営者は、以下に対する責任を有する。

- ・不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない主題情報の作成に関連する内部統制を整備及び運用すること
- ・主題情報の作成に適合する規準を選択又は策定し、使用した規準を適切に参照又は説明すること

- ・会社の定める規準に準拠して主題情報を作成すること

主題情報の測定又は評価における固有の限界

サステナビリティデータブックに記載されているように、温室効果ガス排出量の量化は、活動量データの測定、及び排出係数の決定に関する不確実性並びに地球温暖化係数の決定に関する科学的な不確実性にさらされている。

したがって、経営者が、許容可能な範囲で異なる測定方法、活動量、排出係数、仮定を選択した場合、報告される値が重要な程度に異なる可能性がある。

業務実施者の責任

業務実施者は、以下に対する責任を有する。

- ・主題情報に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて限定的保証を得るために業務を計画し実施すること
- ・実施した手続及び入手した証拠に基づき、独立の立場から結論を形成すること
- ・経営者に対して結論を報告すること

当社は、業務の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行渡し、職業的専門家としての懐疑心を保持した。当社は、主題情報に関して結論の基礎となる十分かつ適切な証拠を入手するための手続を立案し、実施した。選択した手続は、主題情報及びその他業務環境に関する当社の理解と、重要な虚偽表示が生じやすい領域の検討に基づいている。業務を実施するに当たり、当社は主に以下の手続を行った。

- ・主題情報の作成に適用される規準の妥当性の評価
- ・会社の担当者に対する、主題情報の作成に関連する主要なプロセス、システム、及び内部統制についての質問
- ・分析的手続（傾向分析を含む）の実施
- ・重要な虚偽表示リスクの識別・評価
- ・リスク評価の結果に基づき選定した日産自動車株式会社 追浜工場における現地往査
- ・主題情報に含まれる数値情報についてサンプルベースによる再計算の実施
- ・抽出したサンプルに関する入手した証拠との突合
- ・主題情報が規準に従って表示されているかどうかの評価

限定的保証業務で実施される手続の種類と時期には幅があり、合理的保証業務に比べて手続の範囲が限定されている。したがって、限定的保証業務で得られる保証の水準は、合理的保証業務が実施されていれば得られたであろう保証水準よりも低い。

以上

上記は保証報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社及びKPMGあずさサステナビリティ株式会社がそれぞれ別途保管しています。

(注記)第三者保証にかかわるCO₂排出量の算定方法

■ 日産自動車および連結子会社からのCO₂排出量：GHGプロトコルを参照した社内基準に基づき、サプライヤーからの請求書をベースとするサイト内での各エネルギー投入量データに、日産自動車および各連結子会社にて一般に入手可能なCO₂排出係数をそれぞれ乗じて算定。

【電力】

- ・ 日本：環境省が公表する「電気事業者別排出係数一覧（令和6年提出用）」の調整後排出係数
- ・ 日本以外：各拠点契約の電気事業者別の排出係数を使用、電気事業者別の排出係数が入手できない場合はIEA emission factorsの国別排出係数を使用

【電力以外】

- ・ 日本：環境省『温室効果ガス排出量 算定・報告・公表制度における算定方法・排出係数一覧』の排出係数
- ・ 日本以外：各国公表の排出係数

■ 購入した製品・サービスにおけるCO₂排出量：2024年度実績から算定式を改定。サイズやパワートレインに基づき定義したセグメント別の主要製品毎に、クルマ1台あたりの原材料投入量に対してSphera Solutionsのデータベース(GaBi)を適用し1台あたりのCO₂排出量を算定し、各々に2024年度の年間グローバル販売台数（一部、生産台数含む）を乗じてCO₂排出総量を算出した。

■ 販売した製品の使用に伴うCO₂排出量：2024年度実績から算定式を改定。使用に伴うクルマ1台の走行距離当たりの平均CO₂排出量（地域別）に、廃棄されるまでの推

計平均走行距離（地域別）と2024年度の自動車販売台数を乗じて算出。使用に伴うクルマ1台の走行距離当たりの平均CO₂排出量は、GLECフレームワークのWell to Wheel係数を適用し、燃料採掘からタイヤ駆動までを算定対象範囲とした。日産自動車の主要市場（日本、米国、欧州、中国）については市場ごとの平均的な排出量、その他の国については主要市場の排出量を用いて推定した。廃棄されるまでの推計平均走行距離は、公表されている国別の市場走行距離データをもとに設定した。

■ CO₂排出量の定量化は、活動量データの測定、および排出係数の決定に関する不確実性並びに地球温暖化係数の決定に関する科学的な不確実性にさらされている。

目次	Corporate direction			環境		社会性		ガバナンス			データ集		◀ 063 ▶
社会性に関する方針・考え方		人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達	地域社会	Power of employees	従業員の人権	DEI	従業員の能力開発	労働安全衛生	

社会性

社会性に関する方針・考え方	064
人権	066
ニッサン・ソーシャルプログラム2030の活動領域	
安全	072
品質	075
知的財産	081
責任ある調達	084
地域社会	089
Power of employees	092
従業員の人権	093
ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン	097
従業員の能力開発	109
労働安全衛生	113

社会性に関する方針・考え方

当社はコーポレートパーパスの実現に向け、「Nissan Ambition 2030」の社会的側面の実行を担う「ニッサン・ソーシャルプログラム2030(NSP2030)」を策定しました。日産の企業価値と社会価値を創造しながら、従業員、サプライヤー、パートナー、社会と共に成長し、「人」を中心とした企業になることを目指しています。各領域では、プログラムを通じて社会に提供する価値および2030年に向けた目標、指標などを設定し、各領域の活動は担当部署が責任を持って推進しています。

グローバル・サステナビリティ・ステアリング・コミッティ(GSSC: Global Sustainability Steering Committee)において、社会性に関する全社的な方針や目標設定の論議および決定、各領域の活動進捗の報告を行っています。重要な論議はエグゼクティブ・コミッティへ提案・報告され、その内容は取締役会に報告されます。2024年度はGSSCを2回開催し、「NSP2030」の進捗報告や、人権に関する方針の改訂、サプライチェーンに関するサステナビリティ課題の論議などを行いました。

当データブックでは「NSP2030」各領域と、それらに共通する人権への取り組み実績について報告します。

社会性指標と業績連動型インセンティブ

当社は、サステナブルな企業となるための取り組みの成果を報酬に反映させることで、経営層のサステナビリティへのコミットメントを明確にしています。2021年度より、経営層の長期インセンティブ報酬のひとつである業績連動型インセンティブ(金銭報酬)*1にサステナビリティに関連する評価指標を組み込み、中長期的な企業価値および社会価値の向上を目指してきました。2024年度には指標および配分の見直しを行い、社会性に関する一層の取り組み強化を図っています。

旧)2021年度～2023年度

人権尊重に関わる取り組みを評価する外部指標
(配分5%)

新)2024年度～

DEIに関するグローバル従業員サーベイのスコア
(配分10%)

*1 環境も含めたサステナビリティに関わる業績連動型インセンティブはこちらをご参照ください。 >>>P010

社会性に関する方針・考え方

人権 安全 品質 知的財産 責任ある調達 地域社会 Power of employees 従業員の人権 DEI 従業員の能力開発 労働安全衛生

「NSP2030」一覧表

領域		社会的価値	2030年目標	取り組み
人権	安全	交通事故およびそれに伴う死傷者の削減、安心・安全な社会システム構築への貢献	運転支援技術やコネクテッドカーシステムなどの新たなテクノロジーに投資することによって、より安全で、効率的で、そしてより一層パーソナライズされたモビリティソリューションを創造する	・ Pro-PILOT拡大 ・ 次世代LIDARの導入 ・ 交通安全啓発ツールを作成し活動開始 ・ 地域毎に運転者/歩行者教育プログラムを推進
	品質	製品・サービス品質によるお客さまの満足	トップレベル品質*1、品質不具合ゼロ、コンプライアンス問題ゼロを達成する	・ お客さまフィードバックに基づく品質向上 ・ 監査機能の強化
	知的財産	人・社会・地球の共存共栄に貢献する、IPエコシステムを通じた効率的/効果的なイノベーションの促進	他社とともに知的財産活動を推進し、イノベーションを促進することにより、社会課題の解決に貢献する (IPエコシステム)	・ 知財創出の促進 ・ 確実な知財保護 ・ 知財ライセンスの促進 ・ 知財権行使の推進 (模造品対策)
	責任ある調達	サプライチェーンにおける人権尊重の推進および人権への負の影響の軽減と防止	「人権侵害ゼロ」を目指して、サプライチェーンにおける人権デューディリジェンスの仕組みを構築する	・ 人権デューディリジェンスの実行 ・ 苦情処理メカニズムの運用
	地域社会	教育機会の提供、被災地支援、地域が抱える社会課題への対応	日産らしさを活かして社会課題を解決するとともに、次世代の子どもたちの可能性を広げる	・ 地域貢献活動の企画および推進
	Power of employees	従業員一人ひとりが自信を持ち、支えられ、自分らしさを発揮できるような働き甲斐のある職場環境を築くことで、従業員の能力が最大限に発揮できることを目指す		
	従業員の人権	・ 人権を尊重する企業文化、具体的なルール の発展と浸透促進 ・ 個人の尊厳や地位の保護、活力の付与	人権尊重を通じた「人を中心とする企業文化」の実現	・ 従業員のデューディリジェンス実施拠点範囲の拡大 ・ デューディリジェンスの強化および人権に対する意識の向上
	ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン	・ 多様性豊かな従業員が尊重し合える環境を実現 ・ そこから生まれる独自性に溢れ革新的なクルマやサービスで、人々の生活を豊かに	一人ひとりの個性を尊重し、インクルーシブでワクワクする日産の実現	・ DEIマインドの醸成 ・ 従業員主体のDEI活動の確立 ・ インクルーシブな職場環境・制度の拡充拡大 ・ パートナースhip/コミュニティへの拡大
	従業員の能力開発	個人のエンプロイアビリティの向上、変革に対応できる人材の育成 (個々人の対応力の向上)	高いスキルとモチベーションを持った従業員の育成	・ グローバル共通のトレーニングプラットフォームの導入と推進 ・ 広く従業員に重要なスキル*2の習得の機会を提供する ・ テクノロジーを活用することにより学び体験を充実化する ・ 実効性のある学びを得られる機会を創出する ・ タレントアクセラレーションプログラムの見直しと再構築
	労働安全衛生	・ 社会全体の生産性向上 ・ 医療機関への負担軽減	従業員が安全・安心・健康に働くことができ、活気ある職場の実現	・ 従業員のメンタルおよびフィジカルヘルス、ウェルビーイングの改善 ・ 労働災害の根絶

*1 製品品質、セールス&サービス品質において各市場にてトップ3になる

*2 重要スキル：電動化、コネクテッド、自動運転、デジタル、先進技術、リーダーシップ

人権

人権に関する方針・考え方

日産は、従来より人を大切にし、人権を尊重することを経営の基本としており、その姿勢を2001年に制定した「グローバル行動規範」に明記しています。すべての国・地域で適用される法令や基準、企業の規則を遵守することが事業活動を行ううえでの基本であること、すべてのステークホルダーの人権が尊重されること、ならびに日産の従業員が最高の倫理基準に基づいて行動することが不可欠であるとの認識を全従業員で共有しています。

日産は、人種、民族性、国籍、文化、宗教、性別、性的指向、性表現、性自認、障がい、婚姻など、その他の理由に基づく差別やいかなる形態のハラスメントも許さないこと、さらにはサプライチェーンにおける強制労働や児童労働といった人権侵害も容認していません。

こうした人権尊重の想いは、コーポレートパーパス「人々の生活を豊かに。イノベーションをドライブし続ける」にも込められ、さらに全従業員共通の行動指針「日産ウェイ」（2019年度改訂）では、5つの価値観のひとつとして、“人に誠実に、社会に誠実に”を定義し、人権尊重を企業文化の基盤としても位置づけています。2021年11月に発表した長期ビジョン「Nissan Ambition 2030」の策定過程においては、人権に関するさまざまな課題や取り組みに関して、CEOをはじめとした多くの役員が活発な議論を交わし、人権尊重が会社の長期戦略実行において不可分で重要な土台であることを再認

識し、コーポレートパーパス実現に向けて、引き続き人権尊重の取り組みをさらに強化し、これを確実に実践していきます。2021年度には、CEOのもとに、人権に関する特別なプロジェクトチームを発足し、約8ヵ月間にわたり、社内各部門から選抜されたチームメンバーによって人権尊重に関する外部有識者との意見交換、社会動向・要請の確認、日産として取り組むべき方向性検討を行い、最高意思決定機関であるエグゼクティブ・コミッティ（EC：Executive Committee）に提案し、承認されました。この提案では、日産としての「人権尊重のありたい姿」を定義するとともに、人権マネジメント強化のための重要課題、方策、社内体制を明確化しました。これを受け、2022年度以降、定常の部門横断活動として継続的に取り組むとともに、従業員やサプライチェーンなどにおける人権の取り組みを今まで以上に浸透させるため、人事や購買など各主要部門が日常管理レベルへの落とし込みを推進しています。

引き続き「人権尊重のありたい姿」の社内浸透を図るとともに、より一層充実した人権尊重の取り組みをグローバルに推進していきます。

～日産の人権尊重のありたい姿～

- ・ステークホルダーと真摯に向き合い、それぞれの課題やリスクに寄り添いながら、人権を尊重することが自然と日々の業務で実践されている。
- ・日産のビジネスにかかわるすべての人が、多様性が尊重された職場環境で安心して個々の能力を最大限に発揮している。

「日産人権方針」の改訂

日産は、「国連グローバル・コンパクト」の参加企業として、世界人権宣言（UDHR）、市民のおよび政治的権利に関する国際規約（ICCPR）、経済的、社会的および文化的権利に関する国際規約（ICESCR）、国際労働機関（ILO）の労働における基本的原則および権利に関する宣言（ILO中核的労働基準）に記載された人権を尊重することをコミットします。

また、国連の「ビジネスと人権に関する指導原則（UNGP：UN Guiding Principles on Business and Human Rights）」に則り、日産の事業活動から生じ得る人権への悪影響を積極的に防止するために、2017年6月に「日産の人権尊重に関する基本方針」（初版）を策定・公表しました。2021年7月の同方針改訂を経て、2025年3月に2回目となる改訂を行い、「日産人権方針」*1へと刷新しました。主な改訂ポイントとして、自社だけではなく、バリューチェーン上のビジネスパートナーに対し、本方針に沿った行動を要請し、ステークホルダーとの対話をコミットメントすることで、取り組みを一層強化することを目的にしています。

*1 「日産人権方針」（改訂版）に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/HUMAN_RIGHTS/

目次	Corporate direction			環境		社会性		ガバナンス			データ集		◀ 067 ▶ ↺
社会性に関する方針・考え方	人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達	地域社会	Power of employees	従業員の人権	DEI	従業員の能力開発	労働安全衛生		

加えて、同じく2025年3月には、方針の遵守と実践をより確実なものとするため、従業員向けの人権尊重の具体的な取り組みをまとめた「日産グローバル人権ガイドライン」を改訂^{*1}しました。これを周知・徹底することでグローバルレベルで従業員に対する人権尊重の取り組みをより一層強化しています。同ガイドラインでは事業を展開している各国・地域の日産の従業員がより安心して働けるようにすること、また日産の活動と国際および地域社会が求める企業の人権課題への取り組み方を一貫させることを目的としています。

さらに、欧州法規などの要求事項への対応を見据え、2025年3月には「日産サステナビリティデューディリジェンス基準」^{*2}を新たに制定し、環境や人権などのサステナビリティ側面への影響に対する、日産のデューディリジェンスの基本理念と手順を定めています。

これらの改訂された方針やガイドライン、新たに策定された基準に基づき、日産はコーポレートパーパスの実現に向けて、企業としての責任を果たし、ミッションを実践して事業活動を行うとともに人権尊重への取り組みを進めていきます。

人権尊重に関する取り組み一覧表

年度	方針・考え方	取り組み
2001	・「グローバル行動規範」制定	
2004	・「国連グローバル・コンパクト」署名	・ダイバーシティディベロップメントオフィス設立
2010	・「ルノー・日産サプライヤーCSRガイドライン」発行	
2013	・「紛争鉱物方針」策定	・紛争鉱物調査開始・調査結果公開（以降毎年公開）
2015	・「ルノー・日産サプライヤーCSRガイドライン」改訂版発行	
2016		・第三者評価機関によるサプライヤー向けサステナビリティ評価開始
2017	・「日産の人権尊重に関する基本方針」策定・発行 ・「グローバル行動規範」更新	・内部通報システムSpeakUp導入
2018	・Nissan Sustainability 2022発表	・コーポレートレベルでの人権アセスメント実施
2019		・日産サウスアフリカ会社で人権アセスメント実施
2020	・「グローバル鉱物調達に関する方針」更新 ・「カスタマープライバシーに関する基本方針」発行	・タイ日産自動車およびグループ会社（ニッサンパワートレイン（タイランド）株式会社、エス・エヌ・エヌ・ツールズ&ダイズ会社）で人権アセスメント実施
2021	・「日産グローバル人権ガイドライン」発行 ・「日産の人権尊重に関する基本方針」改訂版発行	・北米日産会社で人権アセスメント実施 ・人権に関する特別なプロジェクトチームを発足し、人権マネジメント強化
2022	・日産サプライヤー向け「ルノー・日産サプライヤーCSRガイドライン」補足説明書発行 ・「グローバル行動規範」更新	・日産（中国）投資有限公司で人権アセスメント実施 ・部門横断活動として定着、人権尊重の取り組みを一層強化
2023	・ニッサン・ソーシャルプログラム2030 ^{*3} を発表 ・「カスタマープライバシーに関する基本方針」から「グローバルデータプライバシー ポリシー」 ^{*4} に改訂 ・「グローバル行動規範」 ^{*5} 更新 ・「日産サプライヤーCSRガイドライン」更新	・連結子会社での人権デューディリジェンス実施（スコープ拡大） ・サプライヤー向け人権ホットラインの設置 ・日常管理レベルで機能部署 ^{*6} による人権尊重の取り組みの浸透 ・コーポレートレベルでの人権アセスメント実施による重点分野の更新
2024	・「日産人権方針」改訂版発行 ・「日産グローバル人権ガイドライン」改訂版発行 ・「日産サステナビリティデューディリジェンス基準」発行 ・「グローバル鉱物調達に関する方針」から「責任ある原材料調達への対応方針」 ^{*7} に改訂 ・「日産サプライヤーCSRガイドライン」から「日産取引先サステナビリティガイドライン」 ^{*8} に改訂 ・「北米日産 SCM人権デューディリジェンスプログラム」を制定	・連結子会社での人権デューディリジェンスの継続実施 ・サプライヤー向け人権ホットラインの拡大 ・天然ゴム等責任ある原材料調達の強化 ・日常管理レベルで機能部署による人権尊重の取り組み強化 ^{*9} ・サプライチェーンマッピングと強制労働リスク評価の強化（北米日産会社）

^{*1} 「日産グローバル人権ガイドライン」（改訂版）に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/HUMAN_RIGHTS_GUIDELINE/

^{*2} 「日産サステナビリティデューディリジェンス基準」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/DUE_DILIGENCE/

^{*3} ニッサン・ソーシャルプログラム2030に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/Data_Privacy_jpdf

^{*4} 「グローバルデータプライバシー」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/Data_Privacy_jpdf

^{*5} 「グローバル行動規範」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/NISSAN_GCC_jpdf

^{*6} 人事、購買、広報などの部署に人権の取り組みを推進するマネージャーがいる。サプライチェーンへの浸透として、購買管理部がサプライヤーとともに、人権、環境、責任ある原材料調達などの取り組みを強化している。

^{*7} 「責任ある原材料調達への対応方針」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/MATERIALS_SOURCING/

^{*8} 「日産取引先サステナビリティガイドライン」に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/SUPPLIERS/>

^{*9} 人事での取り組みに関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/SUPPLIERS/>

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
社会性に関する方針・考え方	人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達
			地域社会	Power of employees	従業員の人権
				DEI	従業員の能力開発
					労働安全衛生

人権に関するマネジメント

日産は「日産人権方針」に基づき、グローバル・サステナビリティ・ステアリング・コミッティ(GSSC)において、人権に関するガバナンスを推進しており、2022年度にはガバナンス体制の見直し検討を行いました。具体的には、日常管理として各部門や海外統括会社が人権の取り組みを統括するサステナビリティ推進部に定期的に進捗報告し、サステナビリティ推進部からGSSCとECに報告・提案し、取締役会にも報告します。2021年度より、経営層の長期インセンティブ報酬のひとつである業績連動型インセンティブ(金銭報酬)において、サステナビリティに関する評価指標*1として人権尊重にかかわる項目を追加しました。日産の事業活動のあらゆるレベルで人権が尊重されるよう、浸透と定着を図り、日常マネジメントから取締役会まで人権ガバナンス体制を強化していきます。

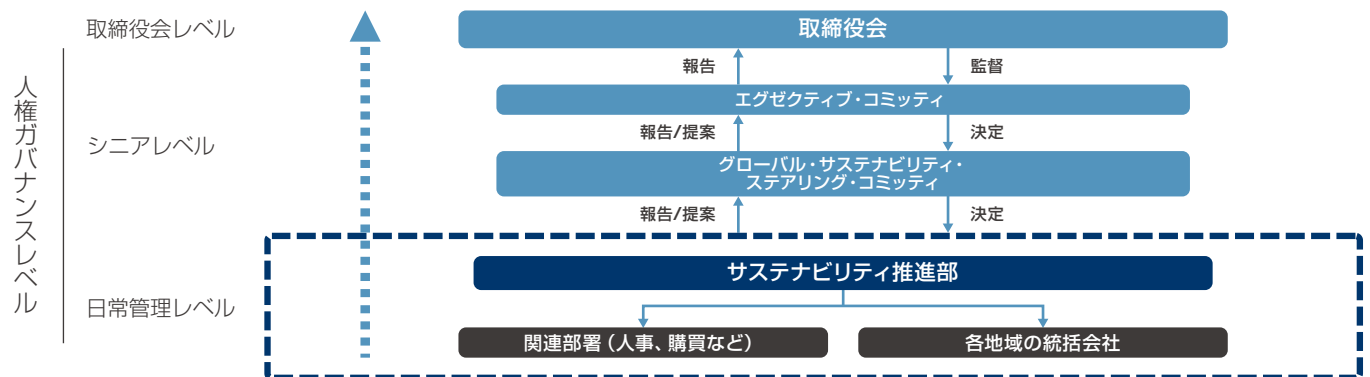
2021年度に人権特別プロジェクトチームで明確化された①従業員の人権デューディリジェンスのスコープ拡大、②人権トレーニング拡大・強化、③サプライヤー向け苦情処理メカニズムの構築、④ステークホルダーエンゲージメント(含む重大な申立てへの対応)の実施・強化の4分野の人権課題に加えて、2024年度に⑤ディーラーの人権デューディリジェンスを新たに追加しました。サステナビリティ推進部をはじめ、人事、購買、広報などの関連部署および各地域の統括会社を含めてグローバルかつ部門横断的に解決に取り組みました。それぞれの人権尊重活動の進捗状況・結果をGSSCに年2回報告し、最高意思決定機関であるECおよび取締役会にも報告しました。

日産では、社内の方針・ルールの変更、ならびに社外の関連法令・基準・ガイドラインおよび社会的要請に従い、「日産人権方針」と「日産グローバル人権ガイドライン」をそれぞれ定期的に見直し、これらをもとにした人権デューディリジェンスを継続的に行うことで、人権尊重の取り組みの強化を図り、人権課題のリスク低減を目指しています。

また、こうした人権への取り組み状況を適時・適切に社内外に開示・報告しています。加えて、「グローバルリスク管理規程」に基づく全社のコーポレートリスクマップに「人権」も織り込んで管理を行い、その状況を定期的にコーポレートリスクマネジメント委員会に報告しています。*2 2024年度の結果も取締役会へ報告しました。

項目名	2024年度目標	2024年度結果
①従業員の 人権デューディリジェンス	人権デューディリジェンスの実施	実施済み、改善計画をフォローアップ中
②人権トレーニング	人権e-ラーニング(更新版)などの実施	グローバルで実施済み
③サプライヤー向け 苦情処理メカニズム	通報内容、通報対象スコープの拡大	人権ホットラインの運用拡大・人権に加え、環境、地域社会の生活も追加 ・バッテリーサプライヤーにも開放
④ステークホルダー エンゲージメント (含む重大な申立てへの対応)	2024年度のコミュニケーションプランの実施(重大な申立てのプロセス確認を含む)	実施済み(NGP/NSP2030ローンチに関するメディア/アナリストとのラウンドテーブル実施、NGO/国際機関/組合とのエンゲージメント実施)
⑤ディーラーの 人権デューディリジェンス	日産人権方針を契約に織りこみ、デューディリジェンスプロセスの構築	日産人権方針をグローバルのディーラー契約へ織りこみ済、既存のTPC*3プロセスを活用し、ディーラーデューディリジェンスの枠組みを構築中

<人権ガバナンス体制図>



*1 2024年に業績連動型インセンティブのサステナビリティに関する評価指標が更新されました。詳細はこちらをご参照ください。 >>>P010

*2 リスクマネジメント強化の取り組みに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P132

*3 TPC: Third Party Complianceの略。

人権に関する実績

日産は人権について包括的に取り組む必要性を認識しています。顕在的・潜在的なリスクを把握したうえで、事実をモニター・評価し、対応策を講じることが重要と考え、活動を進めています。

人権デューディリジェンス

日産は国連の「ビジネスと人権に関する指導原則」(UNGP)ならびに「責任ある企業行動のためのOECD*1デュー・ディリジェンス・ガイダンス」に則り、人権デューディリジェンスのプロセスを策定・運用しています。定期的に人権アセスメントを行い、人権リスクの特定・予防・軽減に努め、是正措置を行い、実施状況および結果を追跡調査して、影響にどのように対処したのかを伝え、人権マネジメントのPDCAを回しています。

また、サプライチェーンにおいても、同様のプロセスを適用し、「日産取引先サステナビリティガイドライン」をもとに、定期的に第三者によるサステナビリティ評価を実施しています。その結果をモニタリングし、取引先と改善を図っています。*2
なお、従業員とサプライチェーンにおける人権への取り組みに関する詳細はそれぞれ従業員の人権章*3と責任ある調達章をご覧ください。

人権尊重重点分野の更新

2023年度に米国のサステナビリティ推進団体(NPO)であるBSR(Business for Social Responsibility)とともに、2018年以来2回目となるコーポレートレベルの人権アセスメントの一環として、人権尊重重点分野の特定・更新を行いました。



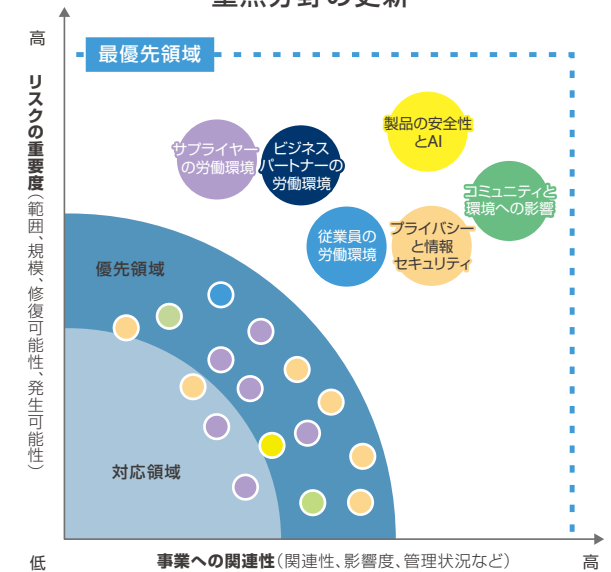
人権デューディリジェンスのプロセス



* 苦情処理メカニズムを含む

具体的には、自動車会社として人権に影響を及ぼす要素を特定するべく、人権リスクの重要度(範囲、規模、修復可能性、発生可能性)と事業への関連性(関連性、影響度、管理状況など)の2つを視点とした人権アセスメントを実施し、優先領域と対応領域に分類しました。優先領域と特定した要素の中から、事業戦略や事業活動を織り込んで、日産が取り組むべき最優先領域として6つの重点分野(1.従業員の労働環境、2.サプライヤーの労働環境、3.製品の安全性とAI、4.プライバシーと情報セキュリティ、5.ビジネスパートナーの労働環境、6.コミュニティと環境への影響)を特定しました。本アセスメントの結果を踏まえ、今後それぞれの領域における取り組みを強化していく予定です。

重点分野の更新



*1 OECD: 経済協力開発機構

*2 サプライチェーンにおける人権の取り組みに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P084

*3 従業員の人権の取り組みに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P093

関連する方針とガイドラインは下記をご参照ください。

・グローバル行動規範 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/NISSAN_GCC_J.pdf

・日産取引先サステナビリティガイドライン <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/SUPPLIERS/>

・責任ある原材料調達への対応方針 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/MATERIALS_SOURCING/

人権に関する ステークホルダーエンゲージメント

【社外との取り組み】

2024年度は、引き続き社外ステークホルダーの皆さまと複数回にわたってエンゲージメントを実施しました。

NPO・NGOとの取り組み

NPO法人 経済人コー円卓会議日本委員会が主催するステークホルダー・エンゲージメントプログラム(2024年度)*1に参加し、人権や環境を中心とした幅広い社会課題について、参加企業、NPO／NGO、学識経験者などとの対話を重ねました。この対話を通じて、人権問題が発生する背景や事業活動と人権との関わり、重要な人権課題、そして人権に配慮した事業活動の重要性について理解を深めました。また、脆弱な立場に置かれている可能性のある従業員(特に直接員)の意見を活動に反映するうえで、労働組合との連携が重要であることを認識しました。

また、2024年3月には国際人権NGO「アムネスティ・インターナショナル」の日本支部である「公益社団法人 アムネスティ・インターナショナル日本」との対話を実施しました。

この対話では、「日産人権方針」の策定・改訂プロセスへのステークホルダーの関与、対象スコープ、重点分野や運用に関して有益なご意見をいただきました。また、日産の人権への取り組みや、自動車業界全体への期待などについても、多面的で示唆に富むフィードバックをいただきました。

さらに、2024年11月には「アムネスティ・インターナショナル」の国際事務局および日本支部との対話も実施し、鉱物を含むサプライチェーンを中心とした日産の関連方針・ガイドライン、人権デューディリジェンスの取り組みについてご意見をいただきました。こうした意見交換を通じて、社会からの要請への理解をより一層深めることができました。今後の方針改訂や取り組み強化に生かしていきます。

国際機関との取り組み

前述のステークホルダーエンゲージメントプログラムでの対話に加えて、以下を実施しました。2024年10月の国際労働機関(ILO: International Labor Organization)との対話では、自動車業界への期待値として、社会対話(従業員や労使間の対話、進出先国の政府・労働組合との対話)の重要性が改めて求められていることを認識しました。これを踏まえ、人権に関する幅広いテーマについて、日産自動車労働組合とのエンゲージメントを行いました。*2

また、2024年度もUNDP「ビジネスと人権」プロジェクト(日本政府支援事業)に参加し、人権専門家による集合研修などを通じて、UNGPへの理解を深めるとともに、自社の各取り組みの見直しを進めました。さらに、参加企業との間で、人権方針や人権デューディリジェンス、苦情処理メカニズムなどの体制整備、コミュニケーション、投資機関からの期待といったテーマについて議論を行いました。このプロジェクトにおいて、日産が国際的に認められた人権を尊重する方針やマネジメント体制を持ち、部門横断的仕組みを構築し、人権課題へ取り組んでいることについて高く評価いただきました。

そのほか、潜在的な人権リスクへの言及、その影響度・優先

度に応じた活動の強化、人権活動の情報開示を充実させることについて、アドバイスを受けました。



*1 当プログラムに関する詳細はこちらをご参照ください。 https://crt-japan.jp/human-rights/she-program_archive/

*2 当エンゲージメントに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P071

【社内での取り組み】

2024年度は、人権活動において最も重要な社内ステークホルダーである従業員を代表する組織として、日産自動車労働組合とのエンゲージメントを実施しました。



日産自動車労働組合と実施したエンゲージメント(2024年10月)

具体的には、2024年10月に労働組合を訪問し、中央執行委員長および中央書記長と人権に関する幅広いテーマについて対話を行いました。日産からは人事、サステナビリティ推進部をはじめとする複数メンバーが参加し、苦情処理メカニズム、差別やハラスメント、ダイバーシティ、健康と安全などの人権関連課題について意見交換し、労働組合に届いた従業員からのリアルな声を聞く貴重な機会となりました。

対話の内容を踏まえて、ハラスメント研修の実施など社内の改善に繋げていきます。

また日産のみならず、自動車産業全体における人権意識の高まりを受け、労使関係をベースにした建設的な連携が重要であると、協力体制についても再確認しました。

エンゲージメントに基づく方針・活動等の強化

これら一連の人権に関する社内外ステークホルダーエンゲージメントで得たご指摘・フィードバックは、2025年3月に実施した以下の方針・ガイドライン・基準の改訂・新規策定、および関連活動に確実に反映し、日産の人権尊重の取り組みを一層強化しました。

- ・日産人権方針*1
- ・日産グローバル人権ガイドライン*2
- ・日産サステナビリティデューディリジェンス基準*3
- ・日産取引先サステナビリティガイドライン*4
- ・責任ある原材料調達への対応方針*5

今後も日産は、社内外ステークホルダーの方々から頂いた意見を、人権リスクの評価や報告、コミュニケーションを含めた人権領域の取り組みに反映させながら、取り組みのさらなる強化を実施します。そして自社のみならず、言及いただいたサプライチェーン上のライツホルダー*6を含む日産のあらゆるステークホルダーの方々との対話を継続的に実施することを通じて、取り組みの推進を行います。

*1 「日産人権方針」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/HUMAN_RIGHTS/

*2 「日産グローバル人権ガイドライン」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/HUMAN_RIGHTS_GUIDELINE/

*3 「日産サステナビリティデューディリジェンス基準」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/DUE_DILIGENCE/

*4 「日産取引先サステナビリティガイドライン」に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/SUPPLIERS/>

*5 「責任ある原材料調達への対応方針」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/MATERIALS_SOURCING/

*6 ライツホルダー：企業が尊重すべき人権の主体。

安全

安全に関する方針・考え方

クルマが広く普及したことで私たちの暮らしは大きく変わり、多くの人々がモビリティによる自由や利便性、そして運転する楽しさを享受してきました。一方で、世界保健機関（WHO：World Health Organization）が発行したGlobal status report on road safety 2023 によると、世界全体で交通事故によって年間約119万人の方が命を落としています。これは世界全体での死亡原因のうち、12番目に多い原因となっています。日産は“走る楽しさと豊かさ”を体現するクルマづくりに取り組むとともに、リアルワールド（現実の世の中）における高い安全性を提供します。

日産は日産車がかかわる交通事故の死者数を実質ゼロにする「ゼロ・フェイタリティ」の目標に向け、安全に関する取り組みを進めています。

安全に関するマネジメント

日産はリアルワールドで発生した事故の分析結果をもとに、衝突時の安全性能よりも事故そのものを減らすことが「ゼロ・フェイタリティ」の達成に向けて最も効果的であると考えており、“ぶつからないクルマ”の実現を目指しています。さらに、クルマの技術開発のみならず、アカデミアと立ち上げたバーチャル研究所「交通安全未来創造ラボ」などを通じて、交通安全啓発活動を実施しています。

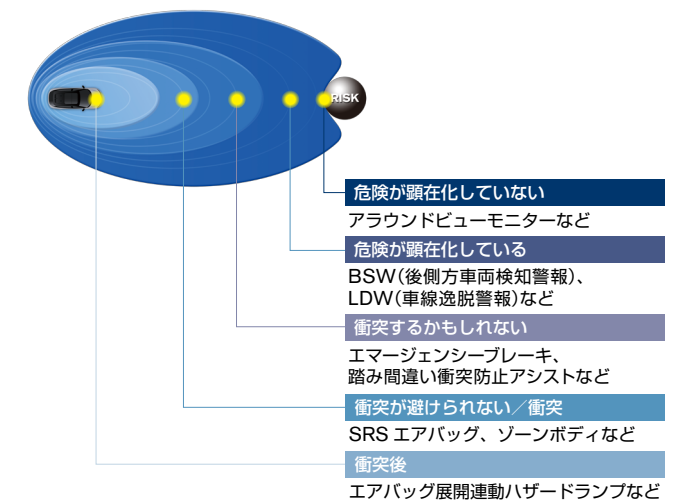
安全に関する取り組み

“ぶつからないクルマ”の実現に向けて

日産の安全技術開発は、危険が顕在化していない状態から衝突後に至るまでのそれぞれの状態で発生する危険要因に対し、最適な支援をクルマが行うことにより乗員の安全をサポートする「セーフティ・シールド」というコンセプトのもとに行っています。その中でも、衝突回避をサポートする運転支援技術は事故そのものを減らすために有効であり、新しい技術の開発と採用の促進に取り組んでいます。

日産は、安全技術を広く迅速に普及させていくことも自動車メーカーとしての使命だと考えています。

セーフティ・シールドコンセプト*1



*1 個々の技術についての詳細はこちらをご参照ください。日産の安全への取り組み https://www.nissan-global.com/JP/INNOVATION/TECHNOLOGY/ARCHIVE/SAFETY_TDC/

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集						
社会性に関する方針・考え方	人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達	地域社会	Power of employees	従業員の人権	DEI	従業員の能力開発	労働安全衛生

日産の安全技術の拡充と獲得した外部評価*1

全世界に広がりを見せる情報公開試験（NCAP：New Car Assessment Program）は、その評価項目を日頃の安全運転サポートから、危険回避支援、衝突安全、事故後に至るまでに広げ、車両トータルでの安全性能を評価する傾向にあります。日産は「セーフティ・シールド」コンセプトに基づき、衝突安全技術だけでなく、「インテリジェントエマージェンシーブレーキ」や「車線逸脱防止支援システム」、「踏み間違い衝突防止アシスト」など、全方位をカバーする「360°セーフティアシスト」による危険回避支援技術や、事故後に緊急車両の手配をサポートする「SOSコール」を積極的に採用、各地域で行われている情報公開試験において、高い安全性能評価を獲得しています。また、自動車工業会や自動車技術会などの業界活動にも積極参加し、車両安全対策活動や戦略的標準化活動を推進し、さまざまな安全技術の「性能評価試験法」の国際基準や国際標準（ISO）の作成にも貢献しています。近年、戦略的標準化活動は市場の創出や競争優位性の確保などの側面においても重要性が高まっており、これらの標準化活動を通じて国際標準に適合した技術を提供することにより、健全なグローバル市場の発展を支え、社会課題を解決するイノベーションを実現していきます。

高度運転支援技術「プロパイロット」

高度運転支援技術「プロパイロット」は高速道路などの一定の条件下で、加速、ブレーキ、ステアリング操作などを支援し、運転者の負担を軽減するシステムです。この技術は2016年より製品化し、現在は軽自動車からプレミアムSUVまで幅広い車種に搭載されています。2019年には高速道路で同一車線内ハンズオフが可能なナビ連動ルート走行ができる「プロパイロット 2.0」へと進化しました。ストレス・疲労を軽減し安心して使える技術として、世界中のお客さまから高い評価をいただいています。また、Euro NCAPの先進運転支援評価においても、高い評価を獲得しています。

次世代プロパイロット

日産は、安心して使える自動運転の実現を目指しています。次世代プロパイロットでは、エンボディドAIを搭載し一般道や敷地内の走行が可能なドア・ツー・ドアの運転支援を実現する開発を進めています。この技術をお客さまが安心して使えるようにするためには、複雑な状況下で起こる事故を回避するための運転支援技術が必要であると考えています。そのため、クルマの緊急回避性能の飛躍的な向上につながる空間認知車両制御技術、グラウンド・トゥルース・パーセプション（Ground truth perception）を開発しています。本技術は極めて判断が難しい複雑な状況において、周囲の情報を正

確に捉え、瞬時に判断し、危険を回避することを可能とします。本技術がドライバーを支援することにより、事故低減に大きく貢献すると考えています。日産は、この次世代プロパイロットを2027年度以降の新型車に採用する予定で、さらに安心かつ疲労の少ないドライビングを提供します。*2

交通安全啓発活動の推進

日産は交通安全活動「ハローセーフティキャンペーン」*3の一環として、交通事故発生件数が最も多くなる16～18時にヘッドライトの早期点灯をドライバーに促す「おもしろライト運動」*4を2010年からリード。市民活動を活用した双方向のコミュニケーションによる安全啓発活動を推進しています。また、新潟大学の研究室と連携して、2018年に交通安全プロジェクト*5を立ち上げ、2020年3月には高齢ドライバーの安全走行を促進・啓発する「ハンドルぐるぐる体操」*6を開発しました。そして、2021年3月にネットワーク上に創設した、産学連携バーチャル研究所「交通安全未来創造ラボ」*7では、生活や移動に不安や不自由を抱えている一人ひとりに寄り添い、交通死亡事故ゼロの交通社会を実現することを目的として交通安全に取り組んでいます。北里大学、相模女子大学、新潟大学、桐蔭横浜大学などと協力し、随時研究や活動の成果を公表しているほか、2024年3月には日産の歴代名車と交通安全の研究内容を体感できるVRワールド「NISSAN Heritage Cars & Safe Driving Studio」*8を公開しました。

*1 主な外部安全評価結果（2024年度評価分）に関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P160

*2 詳細はプレスリリースをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/250410-01-j>

*3 「ハローセーフティキャンペーン」に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/SOCIAL/SAFETY/HELLOSAFETY/>

*4 「おもしろライト運動」に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.omoiyari-light.com/>

*5 交通安全プロジェクト トリトン・セーフティ・イニシアティブ-まち・生活・交通の安全な未来へ-ToLiTon(Town, Life and Transportation) Safety Initiative従来の交通安全の枠にとどまらず、「まち・生活・交通」を結び提案を目指すことから命名したプロジェクトです。

*6 高齢者交通安全「ハンドルぐるぐる体操」に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/SOCIAL/SAFETY/HELLOSAFETY/TAISOU/>

*7 「交通安全未来創造ラボ」に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/SOCIAL/SAFETY/HELLOSAFETY/LAB/>

*8 「NISSAN Heritage Cars & Safe Driving Studio」に関する詳細はこちらの社会実装機能をご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/SOCIAL/SAFETY/HELLOSAFETY/LAB/ACTIVITY/>

社会性に関する方針・考え方

人権

安全

品質

知的財産

責任ある調達

地域社会

Power of employees

従業員の人権

DEI

従業員の能力開発

労働安全衛生

また、2024年11月には、日産を協力団体とする新潟大学のハンドルぐるぐる体操への取り組みが、「第13回健康寿命をのぼそう!アワード」スポーツ庁長官賞を受賞しました。

「おもいやりライト運動」

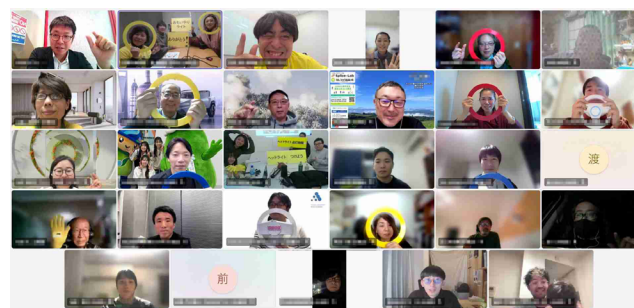


毎年11月10日「いい点灯の日」周辺で、全国点灯呼びかけアクションを実施。今年は「点灯ありがとう活動」と命名し、北海道から鹿児島まで19地域の賛同者が参加しました。また今年は、全国の賛同者との交流会をハンドルぐるぐる体操イベントとあわせて12月に開催しました。各地から、点灯呼びかけアクション方法の工夫などをシェアし励ましあうことで、新たな気づきが生まれる時間となりました。



主体的に点灯呼びかけアクションを全国で実施

日産グローバル本社ギャラリーでは、年間を通して、日産PRスペシャリストより「おもいやりライト運動」のプレゼンテーションを毎日夕暮れ時に実施しています。こうした活動を通じて、「おもいやりライト運動」は市民の間に着実に浸透しています。



おもいやりライト運動・ハンドルぐるぐる体操 全国の賛同者との交流会

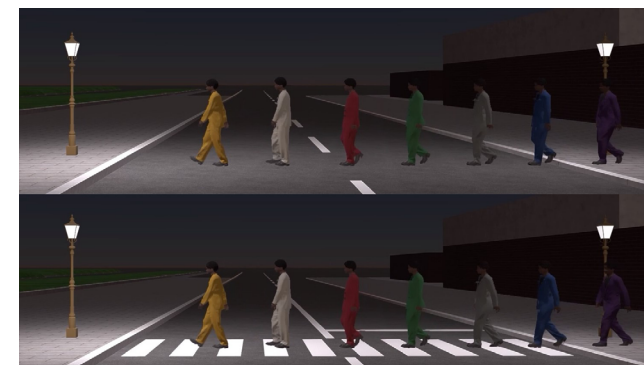
「交通安全未来創造ラボ」

本ラボでは、多様な取り組みを行っている中、社会問題となっている高齢ドライバーの交通事故削減を優先課題として取り組んでいます。今年は運転に必要な筋力・柔軟性・バランス力を向上させ、主として高齢ドライバーの安全走行を支援する「ハンドルぐるぐる体操」を広げる施策として、「ハンドルぐるぐる体操 友達の輪ひろげよう」と銘打ったハンドルの全国バトンリレーを開催しました。



各地の「ハンドルぐるぐる体操 友達の輪ひろげよう」

また、VRワールド「NISSAN Heritage Cars & Safe Driving Studio」に、横断歩道の大切さを学ぶ新コンテンツを加え公開しました。これからも交通事故削減に向けてさまざまな取り組みを行っていきます。



VR横断歩道ありとなしで渡った場合の気づきやすさ体験

品質

品質に関する方針・考え方

製品の評価や自動車メーカーのブランド価値は、お客さまからの品質評価で決まるといっても過言ではありません。技術革新がめざましい現在、お客さまが求める品質はますます高まっています。

世界経済の構図が大きく変化し、各地で都市化が進行する中、モビリティに対するニーズも増加しています。日産は、世界中の人々にモビリティがもたらす豊かさを提供することを使命としています。同時に、お客さまに満足してもらえる品質を常に提供することも自動車メーカーの重大な責務であると考えています。ニッサン・ソーシャルプログラム2030では、“トップレベル品質を目指し、品質不具合やコンプライアンス問題を起こさないこと”をゴールとして掲げ、取り組みを進めていきます。

日産は、品質を会社全体の課題と捉え、新車の企画から開発、生産、物流、販売、アフターセールスなどお客さまとかわるすべてのシーンで、高い品質を提供するために活動を続けており、お客さまに信頼される企業になることを目指しています。

一言で品質といっても、その内容は多岐にわたります。日産では、製品そのものの使用感から、お客さまがショールームで感じる販売員の対応、製品に不具合が発生した際の対応など、製品にかかわるすべてのシーンで高い品質を提供するために、部署や地域を超え、お客さまの声1件1件に真摯に向き合い、全社的に取り組んでいます。

日産はお客さま中心の考えのもと、「長きにわたり日産車をお選びいただくために、お客さまの声を第一に、深い満足を感じていただける製品やサービスの品質を向上すること」を目標に、「製品品質」と「セールス・サービス品質」の両面から取り組んでいます。

クルマそのものの「製品品質」は、お客さまに長く安心して快適に製品を使っていただくための基本となる品質です。お客さまがショールームで実際にクルマのドアを開け、シートに座り、試乗して感じる「感性品質」から、お客さまにお届けする新車の「初期品質」、長くお使いいただいている間に感じる「耐久品質」など、製品のライフサイクルすべてにおいてお客さまの期待に応えられるような品質の提供を目指しています。また、お客さまへの対応の質を追求する「セールス・サービス品質」では、店舗への訪問から、注文、納車、点検、車検、再購入に至るお客さまとのあらゆる接点で期待以上の対応を提供し、お客さまの満足を向上させる活動を行っています。

品質に関するマネジメント

日産は、お客さまの安全確保と常に満足していただける品質の提供が、重要な課題であると捉えています。信頼される企業として持続的な成長を実現するため、グローバルで品質向上の推進体制を構築し、全従業員が一丸となって活動に取り組んでいます。多岐にわたる品質向上活動の責任者やプロセスは、ISO9001に準拠した品質マネジメントシステムで明確に定められ、グローバルに適用されています。そして、それらすべての品質項目に対して、品質管理の徹底につながるよう、必要に応じて適宜マニュアルを改訂しています。また、品質マネジメントシステムを構築し実施していくための指針についての研修を毎年実施。この研修は全従業員必須のものとしています。なお、車両生産拠点において、連結・非連結を含めた23拠点*1すべてにおいてISO9001の認証を取得しています。

*1 非連結車両生産委託工場を除く。

品質に関するマネジメント体制

日産では、品質においてトップレベルになるという目標を達成するため、チーフ クオリティ オフィサー（CQO：Chief Quality Officer）を筆頭に品質専任の執行職を選任しています。CQOを議長とするCQO Meetingを毎月開催し、各部門の役員および各地域の責任役員が参加し、製品品質のみならず、お客さまがご購入前後に経験されるセールス・サービス品質の課題の迅速な解決と改善活動を推進しています。

また、コンプライアンスの徹底を実現するため、3層構造のモニタリング・監査体制を構築し、監査活動の強化に取り組んでいます。第1層は、各部門が法令や基準の遵守に責任を持ち、モニタリングを実施します。第2層は、品質監査室が法令や基準の遵守に関して監査を実施します。第3層は、内部監査室がリスクに応じた年度計画に基づき監査を行います。

品質への取り組み

お客さまの声を品質向上活動に反映

お客さまの期待する価値を提供するとともに、お客さまの感じる不満などに迅速に対応するため、お客さまからのすべての声に耳を傾け、企画・開発からサービスに至るあらゆる品質の改善活動に反映させています。

お客さまの声への迅速な対応とタイムリーな情報共有

日産では、世界各地のディーラー窓口やコンタクトセンター、調査など、あらゆる機会を通じてお客さまからの問い合わせや相談に応じています。例えば、日本の「お客さま相談室」には年間約20万件の問い合わせや相談が寄せられています。お客さまの声に迅速に対応するため、電子化した過去50年間のカタログや技術資料および「よくあるご質問（FAQ）」検索システムを活用しています。一部のFAQはお客さま向けにも公開しており、お客さまご自身で解決することでお問い合わせの手間を省く工夫も行っています。

寄せられたお客さまの声は、いつでも従業員が閲覧できるような社内のイントラネットに掲載し、同時に関係役員やマネジメントクラスにはメールでタイムリーに情報を発信しています。

お客さまの声を製品やサービスに反映

お客さまの声は、企画、デザイン、開発、生産、販売、サービスなど、あらゆる部門で確実に共有し、製品やサービスに反映する仕組みを整えています。故障ではないものの、お客さまが不満に感じている要素も製品の品質を左右します。日産では、お客さまの不満に応えることも品質向上活動の対象と捉え、改善に取り組んでいます。

お客さまが製品に求める期待値は、地域、年齢、嗜好などで異なり、製品の普及度や気候など市場特性の影響を受けることもあります。日産はグローバルデザインを基本仕様としながらも、地域のニーズに合わせた対応も行っています。この役割を担うのが、チーフ クオリティ エンジニア（CQE：Chief Quality Engineer）です。CQEは企画段階からクルマづくりに参画し、お客さまの不満や不具合の低減に取り組んでいます。お客さまの声は、クルマをご購入いただいたお客さまへのアンケートや市場情報、従業員モニターなどから抽出しています。そして、企画・開発工程から優先順位を決めて対応策を検討し、製品やサービスに反映するように努めています。

お客さま視点を醸成するための取り組み

従業員一人ひとりがお客さまの視点に立ち、お客さま中心“Customer Centric”を意識して業務に取り組むことが重要であると考え、日常的にお客さまの声に触れる機会を持つ取り組みなど、マインド醸成のためのさまざまな活動を推進しています。

その一例として、お客さまのお困りごとを理解し「お客さまのため何ができるのか」を考え、お客さまのおほめの言葉に触

れてお客さまの期待以上の製品やサービスを提供する大切さを体感する「カスタマーセントリックワークショップ」を全社で実施しています。

また、役員、従業員、サプライヤーを対象として、品質の現状や市場のお客さまの声、お客さまの声からの改善活動、目標達成に向けての活動をパネルや映像、実際の部品・車両の展示で紹介する「日産クオリティフォーラム」を実施しています。開発からサービスにかかわるすべての部門で共催し、体感型のイベントを取り入れ、全従業員のお客さま意識の醸成と品質の重要性を確認する取り組みを行っています。本フォーラムは日本をはじめ北米、欧州、中国、東南アジア諸国などでグローバルに開催しています。

製品品質の向上

「製品品質」とは、お客さまに長く安心して快適にご使用いただくための基本となる品質です。日本の“モノづくり”を担ってきた日産にとって、「製品品質」は企業の持続性を支える土台になるものです。常に品質をお客さま視点で考え、不具合が発生した場合は迅速に対応し、不具合の再発防止に努めています。また、お客さまの不満を確実に把握し、その解消に向けてあらゆるプロセスで対策活動を実施することで、一人でも多くのお客さまに満足いただけるよう「製品品質」を向上させています。

開発や生産工場での取り組み

感性品質を高め、価値あるデザインのクルマを開発

感性品質とは、実際に見て触って使って感じる質の良さのことです。人が感じる質感は非常に感覚的であるため、客観的な基準を定める際には入念な調査が必要です。日産では、実際に購入されたお客さまや購入を検討されている方への調査を行い、世界の各市場においてお客さまに対する理解を深めることで、感性に響くクルマづくりを目指しています。社内で育成した専門スタッフが世界中のお客さまの代弁者となり、お客さまにとって価値あるデザインのクルマを開発することに取り組んでいます。

グローバルで均一かつ高品質な製品を生産

日産では、お客さまに期待以上のより良い品質の製品を生産していきます。栃木工場では、ニッサン インテリジェント ファクトリーを立ち上げ、カーボンニュートラルや資源の有効活用など環境への配慮、電動化・知能化ニーズにお応えするとともに、従業員に負担の少ないモノづくりの具現化を行っています。インテリジェント ファクトリーは、今後グローバル工場に水平展開していきます。これらの活動を含め、日産では4つの領域に対し品質の取り組みを展開し、新型車の開発段階からお客さまに車両をお届けするパイプラインまで網羅的に取り組みを行い、高品質な製品を安定的に提供していきます。

日産の生産/SCM*1)における4つの領域

新型車品質の取り組み	新型車のデジタル段階においては、バーチャル工場を模擬し、シミュレーションやバーチャルリアリティを活用し、設計部門と連携して車両デザインデータのつくりこみを行います。またグローバル車両生産技術センターでは、試作車の構造工法の検証を通じて、グローバル全工場で、初期から高品質な車両生産を実現するための取り組みを行っています。
パワートレイン品質の取り組み	各工程での品質のつくりこみを完結するため、工程ごとにクオリティゲートを設定し、良品条件を設定し、良品を次工程にお届けする活動を実施しています。またお客さまからのご意見を製品設計や工程設計に反映し、新商品に対してもさらなる品質向上を図り、安定した品質の実現に寄与していきます。
生産車品質の取り組み	品質要件を確実に遵守できる信頼性の高い工法・ツールを整備し、工程ごとのつくりこみ品質の向上を行っています。またグローバルトレーニングセンターを活用し、人作業に起因する品質の安定化を図るために、マスタートレーナーの育成を通じてグローバルで高スキルの育成を進めており、全グローバル工場での安定した品質の実現を図っていきます。
物流品質の取り組み	完成車をお客さまにお届けする輸送過程では、グローバルで同じ評価指標を活用し、物流搬送作業の品質をスコアリングし、各拠点のベンチマークを通じて、さらなる改善を推進しており、工場の出荷品質を維持し、お客さまに高い品質の車両を提供することを推進しています。

*1 SCM：Supply Chain Managementの略。

あらゆる場面を想定した品質評価を実施

日産では、生産車および開発中の試作車に対し、VES*1という評価システムを用いて日々、品質評価を実施しています。お客さまの声や意見をもとに基準化された評価項目に従って評価ができる専門家を育成し、VES評価員と呼ばれる社内資格を取得した者だけが、厳しいチェックを行っています。実際の評価は、クルマの内外装の外観評価、走行評価で構成されており、お客さま目線で目標とした品質基準が達成されているかを確認します。実際に道路を走る走行評価では、異音、振動、操縦安定性、各先進機能の動作などをチェックしています。最終的には総合的な品質の責任を担うCQEが、お客さまが使用するあらゆる場面を想定して厳しく品質を確認しています。

市場品質改善活動

市場での迅速な品質改善への取り組み

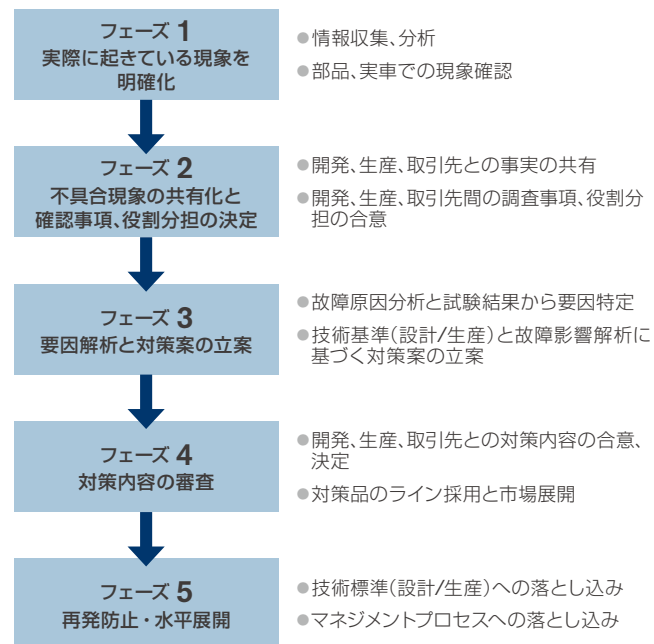
お客さまの不満や不具合現象をいち早く察知し迅速に対応するため、日産では販売会社やお客さまとのダイレクトコミュニケーションを強化しています。

TCSX(トータルカスタマーサティスファクション本部)が販売会社や「お客さま相談室」などから不満や不具合を把握しお客さまをサポートするとともに、開発や生産部門と情報を共有し、原因究明・対策検討などを実施します。生産車両に反映することで不具合の流出防止を促進するなど、恒久的な対策を行っています。

また、日産の企業活動がグローバルに拡大するのに伴い、不満や不具合も世界各地で発生する可能性があります。そうし

た不具合を現地で迅速に解析し要因を分析するため、日産では日本、米国、欧州、中国、メキシコ、ブラジル、南アフリカ、インド、オーストラリア、タイ、など計15カ所に「フィールド・クオリティ・センター」を設けています。同センターでは、5つのフェーズに分けて市場品質の調査・解析活動を実施しています。

5つのフェーズでの市場品質調査・解析活動の概念図



初期品質の向上

お客さまに高品質の新車をお届けするための取り組みを強化しています。お客さまの潜在的な要望や不満に早期に対応するため、開発責任者であるチーフ ビークル エンジニア (CVE : Chief Vehicle Engineer) や品質責任者であるチーフ クオリティ エンジニア (CQE : Chief Quality Engineer) が一堂に会して市場からの情報を共有します。品質が改善できていることを工程ごとに確認し、発生する可能性のあるリスクも企画段階から可視化してリスクを緩和する方策を検討しています。こうしたすべてのプロセスを透明性のある判断で実施することで、新車立ち上げ時から高品質を保証しています。

耐久品質の改善

お客さまに長く快適にクルマに乗り続けていただくために、樹脂の変色や変形、表皮の摩耗やメッキの剥がれ、疲労による異音など、長年の使用によって生じる経時劣化に対する取り組みを推進しています。日産では保証期間中はもちろん、保証期間後に発生する不具合も低減するため、実際にお客さまが使用された中古車・部品を回収して品質確認を実施し、不具合の早期検出に活用するなど、さまざまなデータを入手・分析し、劣化しにくい技術の開発を強化しています。

*1 VES : Vehicle Evaluation Standardの略。お客さまの目線で設定した300以上の評価項目を評価するため、認定された評価員によって実施する品質評価システム。

重大な不具合への公正・迅速な対応について

製品の不具合を発生させないよう最善を尽くすことが責務と捉えると同時に、複雑な工業製品であるクルマづくりにおいて、万が一のときに備えることも私たちの責務です。日産では透明で公正・迅速な対応をリコールの基本姿勢としており、法令遵守の視点と、発生した問題がお客様の安全にどのようにかわるのか、という視点でリコール実施を決定すべきという方針としています。具体的には、お客様の安全確保とお客さまへの迷惑を最小限に抑えること、法令遵守を最優先に、リコールの判断を行い、迅速なお客さまへの修理案内、在庫促進を実施しています。日産が生産・販売したクルマに問題が見つかった場合、社内規程に基づき、お客さまに一番近い地域の代表とともにリコールを決定します。リコールの決定後、お客様の安全・安心を最優先とした迅速な改修・修理ができるよう以下を実施します。

- 対象車両のお客さまへ、ダイレクトメールにより速やかに連絡します。必要に応じて販売店からも直接連絡します。
- お客さまの目に触れやすいよう、リコール届出内容はホームページやマスメディアに掲載します。
- 各国当局に対し、法規に準じて改修・修理実績などの必要な報告を行います。

2024年度 リコール実績*1

国・地域	件数(件)	台数(千台)
日本	13	386
北米	20	639
欧州	14	130
その他	13	100
グローバル	42*1	1,256

取引先との取り組み

部品の品質や供給に関するリスク対応を含め、日産は取引先と協働しながら、すべての生産拠点において、部品の設計段階から品質向上に取り組んでいます。

取引先と推進するリスク評価・低減のマネジメント

グローバル品質マネジメントの強化を進めるとともに、取引先各拠点における生産工程の品質管理状況を現場・現物で確認し、日産の要求レベルを満たすことができるように取引先の改善活動を支援しています。

また、日産へ部品納入している取引先のみならず、その構成部品を生産する二次取引先まで巻き込んだ共同改善活動を行うなど、さまざまな品質向上策に取り組んでいます。

製品安全・品質向上のための取引先の監査・トレーニング

日産は、製品安全を確保するため、製品のみならず納入部品についても、取引先と協働しながら監査を実施しています。

取引先からひとつの部品が日産に納品されるまでには、企画段階の確認から、設計の図面製作、試作品づくり、性能確認、量産体制の確保など、さまざまな工程が必要です。日産では、この一連の流れにおいて必要な品質保証活動をNPQP (Nissan Product Quality Procedure)*2として規定し、すべての部品、一つひとつにおいて実行することで正確な部品が納品される仕組みを整えています。日産ではASES (Automotive-parts Supplier Evaluation Standard)*2というシステムを構築しており、良品・不良品の明確な識別

方法の有無、トラブル防止の仕組みの確認など、240に及ぶ評価項目に基づいて、取引先の作業現場を確認します。

また、製造工程のみならず、部品材料についても取引先と連携した品質管理体制により、すべての部品について材料認証を取得していることを確認しています。

すべての取引先から毎年1,000名以上のご担当者の方々に参加いただきNPQPのトレーニングを実施しています。

これを通じて、取引先へのNPQP理解の促進、徹底を図ることで、正確な部品が納入される体制を構築しています。

また、「サプライヤースコアカード」による納品品質や市場品質などの診断と、マネジメント体制を確認する取引先工場監査SHC (Supplier Health Check)*2を実施しています。これにより、良質な部品の安定供給の仕組みや継続的な品質改善活動の実施状況を定期的に確認しています。

*1 リコール措置案件ごとに1件とカウントした件数のため、各国・各地域のリコール件数合計≠グローバル件数となります。各国当局からの安全関連の調査依頼に対しては100%対応しています。

*2 NPQP, ASES, SHCに関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/SOCIAL/QUALITY/PRODUCTS/ASSURANCE/>

「セールス・サービス品質」の向上

日産は、商品としてのクルマの品質だけでなく、あらゆる接点でお客様の期待を超えられるよう、店舗でのサービス品質向上にも力を入れています。そして、常に変化するニーズに対応できるよう、明確な計画を設定しています。その中で、お客様の満足度向上に向けた礎となる「オペレーショナル・エクセレンス」へ注力することに加えて、よりパーソナルでデジタルとのシームレスな体験を店舗でしていただくための新しい取り組みを各国の販売店へ展開しています。

グローバルディーラーガイドラインの見直し

日産はお客様の期待を超えるため、以下にあげるようなさまざまな取り組みを行っています。

「ニッサン・セールス・アンド・サービス・ウェイ(NSSW)」は、特に店舗での車両購入およびサービスの体験を継続的に改善することを目的としたグローバル・プロセス・ガイドラインです。最新のお客様の動向やニーズの変化を反映するためにガイドラインを定期的に改訂しており、お客様との接点がリアルな店舗かデジタル上であるか、またはその両方にかかわらず、あらゆる面でより良い体験の提供を目指しています。最新のNSSWにおいて、お客様のコネクテッドサービス体験をサポートできるよう、改訂を行っています。

販売店向けの研修開発チームである「日産アカデミー」は、お客様により良いサービスを提供するために、店舗スタッフから経営陣まで幅広い従業員を対象に、ブランド、商品、行動研修に渡る多彩な領域でのプログラムを組んでいます。

また、日産では、販売店での活動強化のため、フィールドチームへのトレーニングも続けています。フィールドチーム

は販売店のオペレーションを分析し、改善計画作成と実施を支援することで販売会社が持続的に成長できるようにしています。

「ニッサン・リテール・コンセプト(NRC : Nissan Retail Concept)」は、グローバルに展開されている新しい店舗のレイアウトとデザインであり、クルマの購入や修理に来店されるお客様を居心地の良い快適な環境でおもてなししています。電気自動車、日産のモータースポーツ部門であるNISMO、小型商用車、Nissan Certified Pre-owned(認定中古車)など、ブランドの重要な要素はすべてNRCで紹介しています。日産はNRCを各国で継続的に展開しています。

お客様の声を反映する「クイック・ボイス・オブ・カスタマー(QVOC)」

日産は、お客様一人ひとりの声と迅速な問題解決に向け、QVOCの導入を進めています。QVOCは第三者による画一的な調査ではなく、簡単な質問とフリーコメントでお客様からのフィードバックを集約する強力なツールです。お客様に対して「感動体験」を提供するために、QVOCを通じて、お客様の期待以上の体験を提供できたかどうかを把握しています。お客様が懸念を示された場合、QVOCは店舗および日産にアラートを出し、店舗がお客様の懸念に対して迅速な解決を実現することで、日産へのロイヤリティ向上につながっています。顧客満足度を継続的に向上させることは、日産が取り組んでいる重要課題のひとつです。

日産は常にお客様のことを考え、QVOCというツールを用いて、お客様へ卓越した体験を提供し続けていきます。



新ブランドロゴを掲示したディーラー店舗

知的財産

知的財産に関する方針・考え方

近年、自動車産業における知的財産（「知財」または「IP」）を取り巻く環境は大きく変化し、多様化しています。技術開発が「CASE」と呼ばれる分野にシフトしたことにより、イノベーションが創出される分野も変化しています。

これに伴い、従来の知的財産権の管理にとどまらず、ソフトウェアやデータの管理、ノウハウのブラックボックス化など、より広範な知的財産管理の重要性が増しています。また、従来の産業の境界線を越えた技術開発の活発化に伴い、多様化する産業間での知財活用（売買、ライセンス、権利行使等）の機会も増加しています。例えば、新たな分野で技術標準を採用する際に必要となる標準必須特許の取り扱いや、自動車メーカー以外の本来競合しない企業との間での新たな知的財産紛争などが増加しています。

さらに、知的財産を不正に使用している模倣品市場では、サプライチェーンの国際化がますます加速するとともに、模倣品の流通・販売チャネルも店舗からインターネット取引へと変化しています。

このように、多様なイノベーション環境、知的財産の活発な活用環境、変化する模倣品市場を踏まえ、日産は以下のような社会的機会と脅威を認識しています。

- ・世界中の知的財産が適切に尊重されつつ効率的に活用され、イノベーションの創出と活用が健全に活性化され

る環境の醸成によって、知的財産はさまざまな社会・環境問題の解決に大きく貢献することができる。

- ・一方、知的財産の不正使用の温床となっている模倣品市場の拡大を看過することは、上述のような、イノベーションの創出と活用が健全に活性化される環境の醸成を阻害する脅威になる。

日産は、このような環境の変化、社会的機会や脅威を踏まえ、知的財産の適切な活用を通じて、グローバルイノベーションの推進、個人・社会・地球の共生・共栄を目指しています。そのために、知的財産を取り巻くさまざまな環境の変化を認識しつつ、柔軟かつ効果的な知的財産の創造・保護・活用や、権利の適切な行使や模倣品対策などの法令に基づく施策を通じて、知的財産(IP)エコシステム*1の構築を推進しています。特に知的財産の管理、自社および他社の知的財産の相互活用に注力し、日産だけでなく市場全体でのイノベーションを推進しています。また、知的財産市場の活性化をリードすることで、健全な知的財産(IP)エコシステムの実現に貢献したいと考えています。さらに日産は、各国の行政機関と連携し、知的財産権の行使や不正競争防止法の適用等あらゆる方策により、潜在的に有害な模倣品の流通を防止することを目指しています。

知的財産に関するマネジメント

日産では、グローバル知的財産ポリシーのもと、全社的に知的財産の重要性、またその効果的な管理運用の必要性に対する意識を高め、知的財産ガバナンスの強化を図っています。また、さまざまな知的財産に関する課題に関し、多面的に評価し適切な対応方針を迅速に導き出すために、商品企画部門、研究開発部門、生産部門、ファイナンス部門、法務部門、知的財産部門等の多様な部門のメンバーからなる知的財産専門支援委員会を設置しています。

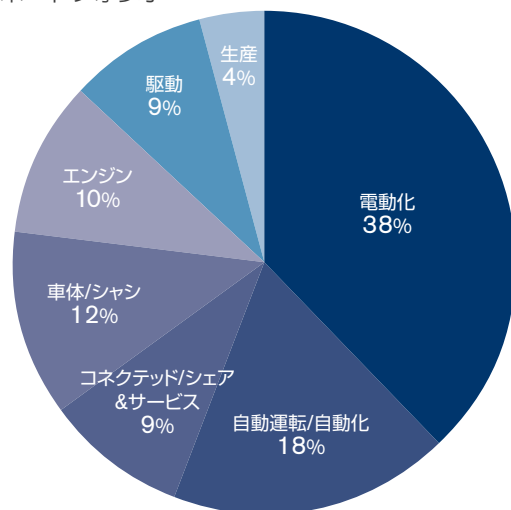
*1 知的財産(IP)エコシステムとは、知的財産を創造し、保護し、活用する循環を示す知的創造サイクルの概念に加え、そこから生まれる知的財産を基に、人々が互いに、また、社会に対して好影響を及ぼし、自律的に新たな関係が構築され、新たな「知」が育まれ、新たな価値が生み出される、いわば知的財産の生態系を指す。
(引用元：特許庁 ミッション・ビジョン・バリューズ https://www.jpo.go.jp/introduction/tokkyo_mv.html)

知的財産に関する取り組み

イノベーションの推進、 特許ポートフォリオマネジメント

日産は、市場環境に合わせた持続的なイノベーションを推進するとともに、自社製品の設計自由度を確保しつつ、対外的な活用に資する特許ポートフォリオの最適化を図っています。現在の特許ポートフォリオは、電動化領域(38%)、自動運転/自動化領域(18%)、コネクテッド/シェア&サービス領域(9%)と、CASE領域の特許が65%を占めています。引き続き時代を反映した特許ポートフォリオを強化していきます。

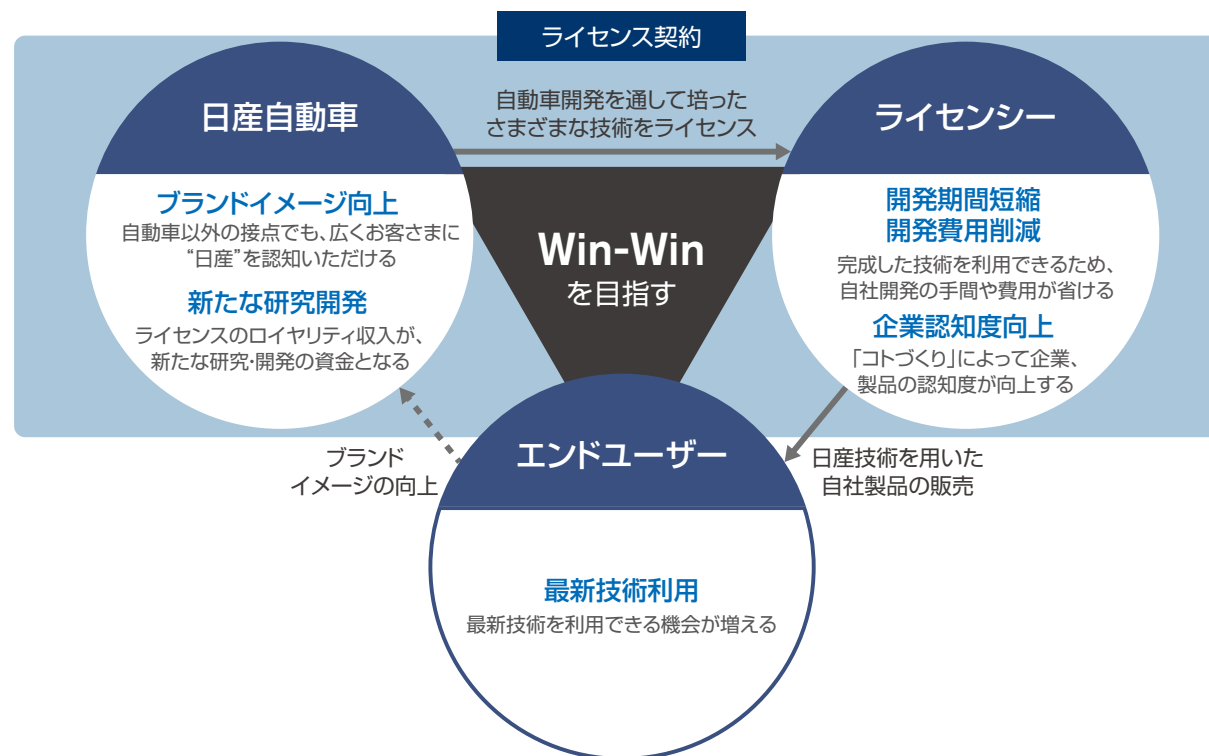
特許ポートフォリオ



IPライセンス

日産は、クルマづくりで培った先端技術やノウハウをさまざまな業種の企業にライセンス展開し、CO₂排出量の削減や労働環境改善に貢献する革新的な製品やサービスの開発をサポートしています。

ライセンサー企業、エンドユーザーとなるお客さまなど、すべてのステークホルダーとのWin-Winを実現し、豊かな社会を築くため、日産はIPライセンスに積極的に取り組んでいます。*1



*1 日産テクノロジーライセンスに関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/LICENSE/>

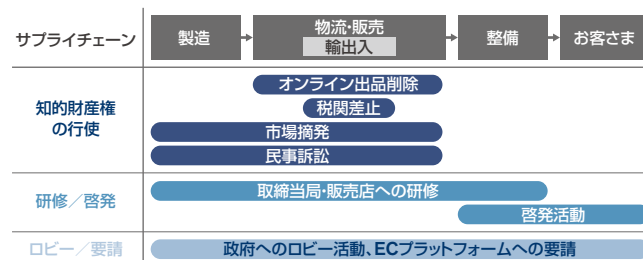
模倣品対策

模倣品対策の取り組み

日産は、グローバル本社と各リージョンが連携し、サプライチェーン全体に渡る模倣品対策を推進しています。

近年、インターネット取引（EC）プラットフォームを通じて、模倣品が世界中で容易に流通するようになってきました。このような状況に対し、日産は知的財産権を行使し、模倣品の排除に積極的に取り組んでいます。具体的には、ECプラットフォームを監視し、不正なオンライン出品の削除をECプラットフォーム事業者に要請しています。また、税関や市場における模倣品の取締りを関係当局に要請し、そのための研修も提供しています。さらに、悪質な販売者に対しては、民事訴訟を提起するなどの法的措置を講じています。

知的財産権の行使に加え、他の取り組みも行っています。模倣品が誤って購入され、車両に装着されることがないように、販売店への研修の提供や、整備業界やお客さまに向けた啓発活動を実施しています。さらに、効果的な対策を講じるため、政府へのロビー活動やECプラットフォーム事業者への要請を行っています。^{*1}



知的財産権の行使

日産は知的財産権を行使し、模倣品の排除に積極的に取り組んでいます。

2024年度には、34,676件の不正なオンライン出品が削除されました。市場では161件の強制捜査が実施され、314,532個の模倣品が押収されました。税関では74件、44,623個の模倣品の輸出入が差し止められました。さらに、悪質な販売者に対して、日産は12件の民事訴訟を提起しました。

権利行使の内容	件数	個数
オンライン出品削除	34,676	-
市場摘発	161	314,532
税関差止	74	44,623
民事訴訟	12	-

模倣品対策の社会的価値

日産は、模倣品のグローバル流通を阻止し、公正で健全な市場環境をステークホルダーに提供しています。

これにより、人々が模倣品を誤って購入することのない、安全で安心な社会の実現に貢献します。さらに、IPエコシステムを模倣品による侵害から守ることにより、イノベーションの促進にも貢献します。

模倣品対策の社会的価値	
安全で安心な社会の実現	IPエコシステムの保護／イノベーションの促進
模倣品が、適切な品質ではないために、人々の安全を脅かすことを防ぐ。 3 すべての人に健康と福祉を	模倣品が、パートナーとの公正なビジネス関係を傷つけることを防ぐ。 16 平和と公正をすべての人に 17 パートナーシップで目標を達成しよう
模倣品が、適切に製造されないために、環境に悪影響を及ぼすことを防ぐ。 12 つくる責任 つかう責任	模倣品が、イノベーションと創造性のインセンティブを損なうことを防ぐ。 8 働きがいも経済成長も 9 産業と技術革新の基盤をつくろう

^{*1} 日産の模倣品対策に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan.co.jp/SERVICE/SHAKEN/PURE/>

責任ある調達

サプライチェーン戦略

現代を生きる私たちは、気候変動やエネルギー問題など、逼迫する社会問題をグローバルに共有しています。日産がこれらの問題に対処していくためには、サプライチェーンのさまざまなステージで直面している課題を把握し、一つひとつ努力を重ねていくことが不可欠です。日産のビジネスおよびサプライチェーンは、全世界に広がっています。一貫性のある調達活動をグローバルに推進することを通じて、日産のビジョンや方針をビジネスパートナーと共有し、その達成のために戦略的に協働しています。

日産は、「人々の生活を豊かに。イノベーションをドライブし続ける」というコーポレートパーパスのもと、「お客様に魅力のある車を届け、喜んでもらうことを目的に、日産の事業に必要なあらゆる物品・サービスを調達する。また、そのために競争力のあるサプライヤーベースを整備し、日産・取引先双方の健全な事業運営に貢献する」ことを購買部門のミッションと決めました。そして、各国・各地域の法令を遵守するとともに、グローバルに統一された価値・基準をもった一貫性のある調達活動

取引先選定から量産までのプロセス



を展開し、以下の方針（日産購買基本方針）で取引を行います。

1. 公正・公平な取引：私たちは高い透明性をもって、公正・公平かつ誠実に取引を行います。また、企業の大小を問わず門戸を開き、明確な選定基準に基づき取引先を選定します。
2. 相互信頼・相互繁栄：私たちは取引先に敬意を払うことで相互信頼を築き、パートナーとしてともに競争力を強化し、相互の持続的な成長を目指します。そのためにイノベーションを重視し、よりよい明日に向かい、取引先とともに日々の改善を積みかさね進化し続けます。
3. 責任ある調達：私たちは、取引先とともに、サプライチェーンのあらゆる段階において倫理、社会、環境に配慮したビジネスの遂行を目指します。

日本では、「自動車産業適正取引ガイドライン」（経済産業省発行）にも則した取引の実践に努めています。また、2024年3月に受けた公正取引委員会からの下請代金支払遅延等防止法（以下、下請法）遵守に関する勧告を踏まえ、全社的な下請法教育強化の一環として、購買部門においては実務担当者向けの教育教材を見直し、より実践的な下請法教育を行うなど改善を実施し、公正な取引を推進しています。^{*1}

責任ある調達に関する方針・考え方

取引先との取り組み

日産はグローバルに広がるサプライチェーンのあらゆる段階において、倫理・社会・環境に配慮したビジネスの遂行を目指しています。日産は2024年3月に、これらの取り組みを具現化する中期的な活動計画として、ニッサン・ソーシャルプログラム2030とニッサン・グリーンプログラム2030を発表しました。

日産は、日産が大切にすべき価値に加え、持続可能なサプライチェーンの構築、すべての部品・原材料を含めた責任ある調達の実現を目指し、「日産取引先サステナビリティガイドライン」（2025年改訂）^{*2}、「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」（2024年改訂）^{*3}に取引先での実施が求められる取り組みを定め、取引先およびその取引先への周知と管理・実践を要請しています。

サステナビリティの取り組みを一層強化するため、「日産サプライヤーCSRガイドライン」（2023年版）から2025年に「日産取引先サステナビリティガイドライン」へ改訂し、デューデリジェンスの実施を含め、取り組みが求められる7分野・31項目を説明しています。（次頁表内を参照）

その一環として、取引先に第三者機関による評価を受けていただくことを要請し、また取引先から合意確認書を取得する

^{*1} 下請法に関するコンプライアンスの取り組みの詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P134](#)

^{*2} 「日産取引先サステナビリティガイドライン」（PDF）に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/SUPPLIERS/>

^{*3} 「バリューチェーンでの活動実績」における取引先との連携に関する詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P060](#)

目次	Corporate direction			環境		社会性		ガバナンス			データ集		◀ 085 ▶
社会性に関する方針・考え方	人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達	地域社会	Power of employees	従業員の人権	DEI	従業員の能力開発	労働安全衛生		

ことで、取引先およびその取引先にて同水準の管理をいただくことを確認しています。さらに、万が一、「日産取引先サステナビリティガイドライン」の違反が発生した際の対応（即時報告、調査結果、改善計画の報告）を明示し、実際に違反事案が起こった場合は、社内ルールに基づいた厳正な対応を実施し、再発防止の徹底に努めています。

また、日産は取引先へ「日産サステナビリティデューディリジェンス基準」に沿ったデューディリジェンスの実現（リスク評価および分析、リスクの予防および軽減、リスクの監視、苦情処理メカニズムの設置等）を要請しています。

各方針の発行時には、小冊子の配布や取引先ミーティングの場などで説明を行い、取引先へ周知を徹底しました。また英語版や日本語版に加え、中国語版も適宜発行しています。

ニッサン・ソーシャルプログラム2030では、「『人権侵害ゼロ』を目指して、サプライチェーンにおける人権デューディリジェンスの仕組みを構築する」をゴールとして掲げ取り組みを進めています。

サプライチェーンマネジメントの方針・考え方

日産のグローバル行動規範、環境方針、人権方針*1

サプライチェーンマネジメントの方針

「日産取引先サステナビリティガイドライン」■取引先に求める7分野・31項目

■コンプライアンス

法令の遵守、競争法の遵守、汚職防止、個人情報・機密情報の管理・保護、輸出入取引管理、知的財産の保護、反社会的勢力の排除

■人権・労働

人権尊重、差別の禁止、ハラスメントの禁止、児童就労の禁止、強制労働の禁止、賃金、労働時間、従業員との対話・協議、安全・健康な労働環境

■デューディリジェンス

■責任ある原材料調達

■安全・品質

お客さまのニーズに応える製品・サービスの提供、製品・サービスの安全確保、製品・サービスの品質確保

■環境

環境マネジメント、温室効果ガスの排出削減、大気・水・土壌への環境汚染防止、省資源・廃棄物削減、化学物質管理、生物多様性の保全、騒音と振動、工場の安全性

■コミュニティ・グローバル社会

地域社会の生活への貢献、ステークホルダーへの情報の開示

「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」

■環境法規制／日産環境基準の遵守

- マネジメント体制構築
- 化学物質の管理

■環境負荷低減活動

- CO₂／水など排出量データ調査

*1 日産の人権方針・取り組みに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P066

*2 プロジェクト詳細はこちらをご参照ください。（英語） <https://thailand.iom.int/blogs/pilot-project-automobile-sector-assessment-migrants-human-rights-nissans-supply-chain-thailand>

その他、2024年度取引先における差別などの人権を侵害した事例や強制労働・児童労働に関して著しいリスクのある取引先は日産が確認できる範囲においてはありませんでした。また、日産は、サプライチェーンにおいて強制労働が重要な人権課題のひとつであるとの考えのもと、特に負の影響を受けやすいとされている「移民」に焦点を当て、2023年度、国連関連機関である国際移住機関（IOM: International Organization for Migration）と協働し、サプライチェーンにおける移民労働者の人権デューディリジェンスのパイロットプロジェクト*2を実施しました。

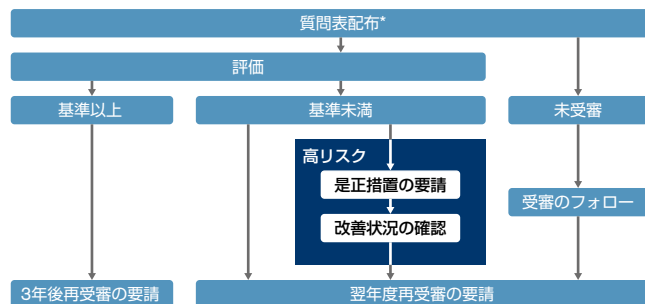
本プロジェクトにより移民労働者の人権侵害およびその発生可能性などの理解を得るとともに、これらがサプライチェーン上の重点化すべき人権課題・リスクになりうるものと認識し、この成果を今後の活動強化の検討にいかしていきます。

責任ある調達に関するマネジメント

取引先におけるサステナビリティ活動の評価およびモニタリング・監査

日産では従来、発注先選定時に「日産取引先サステナビリティガイドライン」ならびに、取引先の環境負荷マネジメント体制や日産との環境活動への合意についても確認してきました。2024年度に新たに選定した取引先の中で、社会性に関する基準に適合した新規取引先の割合は100%、環境基準に適合した新規取引先の割合も100%となっています。

日産は、2016年から第三者機関による取引先の環境や人権などを含むサステナビリティ活動の評価を開始し、取引先との相互確認によってサステナビリティ活動のレベルアップにつなげています。この評価の結果が日産の基準に満たない場合、改善計画の策定を取引先に依頼し、改善状況のフォローを実施しています。取引先向けセミナーを実施し、質問への回答方法や改善計画の策定について、評価機関からの直接レクチャーも行っています。現時点で購入額の90%以上の取引先が、第三者評価機関によるアセスメント済みです。



*第三者評価機関より配布

日産では、取引先と公正・公平な関係を維持するために、全従業員に対して、毎年下請法*1および独占禁止法*2に関する各e-ラーニングを必須研修として受講を義務づけています。さらに購買部門内では、購買担当者が日常業務の中で取引先のサステナビリティへの取り組み状況を確認するよう、サステナビリティ教育を実施しています。

万が一、取引先からの部品・材料の供給に支障があった場合、その影響は、日産車の生産だけにとどまらず、サプライチェーン全体を含め広範囲に及ぶ可能性があるため、①平時の取引先の供給リスク確認、②取引先のQCDDMSR実績確認(品質: Quality、コスト: Cost、納品: Delivery、開発: Development、経営: Management、サステナビリティ: Sustainability、リスク: Riskの実績を毎年フォロー)、③取引先との自然災害などのリスクを想定した生産継続・早期復旧計画策定の取り組み、といった項目もサステナビリティ活動の一環として位置づけ、実施しています。

なお、2024年度、「グローバルサードパーティ・コンプライアンスリスク管理ポリシー」に基づき、コンプライアンスリスクモニタリングを実施しましたが、コンプライアンスの視点で問題があると特定され、その理由で契約解消になった取引先はありません。*3,*4

取引先と共同で取り組む「モノづくり活動」の推進

日産は、より競争力のある製品を常に生み出すため、2008年から取引先との連携による「モノづくり活動」を進めてきました。この活動を発展させるため、2009年からは取引先との信頼と協力を重視した共同改善活動「THANKS活動」を推進しています。取引先とともに厳しい市場でコストリーダーとなることを目指し、部品当たりの生産量増加、現地化の徹底、物流の改善などを実施しながら、品質向上、コスト低減、製造の合理化などに取り組んでいます。

2013年度には、仕様、原材料、為替、物流などすべてのコスト変動を最適化する「TdC(Total delivered Cost)チャレンジ」を導入。引き続き、日産の各機能部署と取引先が一体となってコスト低減ばかりでなく品質・供給両面での改善活動を推進しています。

THANKS

～信頼と協調を重視した、取引先との共同改善活動～

Trusty and
Harmonious
Alliance
Network
Kaizen activity with
Suppliers

*1 下請法: 下請代金支払遅延等防止法

*2 独占禁止法: 私的独占の禁止および公正取引の確保に関する法律

*3 当社の人権ガバナンスに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P068

*4 サードパーティのコンプライアンスリスクにおける取り組みに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P134

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
社会性に関する方針・考え方	人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達
			地域社会	Power of employees	従業員の人権
				DEI	従業員の能力開発
					労働安全衛生

取引先とのコミュニケーション

日産は、取引先へのタイムリーで的確な情報提供が重要であると考え、日産パートナーズカンファレンスを日本および各海外拠点で開催し、中期計画や年度ごとの購買方針などについて周知を図っています。

日本の例では、月次で連絡会を開催し、生産計画やさまざまな業務、依頼事項について直接取引先に伝えとともに、取引先からの質問事項や要望に応える場としても活用しています。

事業発展に貢献した取引先をグローバルに表彰

日産は、毎年グローバルおよび各国拠点のレベルで事業の発展や業績向上に貢献した取引先を表彰しています。

この表彰制度は、品質^{*1}、コスト低減、技術開発といった経済活動に加え、社会性、環境配慮^{*2}の3つの側面でバランスのとれた経営を行うという日産の考え方が、グローバルレベルでサプライチェーン全体に浸透することを目的としています。グローバルでは「Nissan Global Innovation and Quality Award」として、年間を通して品質面で優れた取引先に「GLOBAL QUALITY AWARD」を、商品力向上やブランド向上につながる革新的な取り組みを実践した取引先に「GLOBAL INNOVATION AWARD」を贈呈しています。「GLOBAL QUALITY AWARD」は、購買や品質などの関連部門が、グローバルに統一された品質評価基準に基づいて選考します。「GLOBAL INNOVATION AWARD」は、商品技術とプロセスマネジメントの2分野において、開発、生産など関連部門の推薦を受けた取引先を選考します。

2024年度は、6社が「GLOBAL QUALITY AWARD」を、7案件・8社が「GLOBAL INNOVATION AWARD」を受賞しました。

責任ある原材料調達

原材料調達への対応方針

日産は2013年にいち早く紛争鉱物調達への取り組み方針を策定し、2020年7月には「グローバル鉱物調達に関する方針」を公開しました。2025年には紛争地域および高リスク地域からの3TG（錫、タングステン、タンタル、金）を含むすべての鉱物に加え、バッテリーの製造に必要な鉱物、天然ゴム等、社会や環境への影響が懸念される原材料へ対象範囲を拡大し、「責任ある原材料調達への対応方針」^{*3}を公開しました。日産はグローバル市場におけるサプライチェーンのあらゆる段階において、倫理、社会、環境に配慮したビジネスが行われることを目指しています。商品の製造に使用する材料や構成部品に含まれる天然資源において、環境や人権等のサステナビリティ側面への影響に対し、「日産サステナビリティデューディリジェンス基準」^{*4}に沿ってデューディリジェンスを実施し、自らのサプライチェーンを監視し、懸念がある場合には、「日産取引先サステナビリティガイドライン」に従って、リスクを防止・軽減し、改善に向けた対策を実施します。同様の管理を取引先にも徹底する要請をしています。

*1 「品質」における取引先との取り組みに関する詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P079](#)

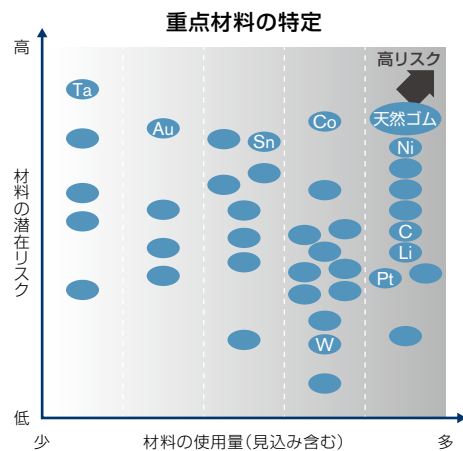
*2 「バリューチェーンでの活動実績」における取引先との連携に関する詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P060](#)

*3 「責任ある原材料調達への対応方針」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/MATERIALS_SOURCING/

*4 「日産サステナビリティデューディリジェンス基準」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/DUE_DILIGENCE/

責任ある原材料調達のマネジメント

日産は、倫理、社会、環境に配慮した材料を調達することで、材料の持続可能な調達の実現を目指す取り組みを行っています。日産は、材料の使用量（将来的な使用量の見込みを含む）や倫理、社会、環境等の側面での潜在リスクの観点から最優先で取り組むべき材料を特定しており、2024年度に天然ゴムを含む重点材料を特定しました。今後は、特定された各材料の潜在リスクを低減し持続可能な調達につなげるため対策を実施していくと共に、定期的にリスク評価を見直します。



材料の潜在リスク ●：リスク高 ○：リスクあり

材料の潜在リスク	天然ゴム	コバルト (Co)	ニッケル (Ni)	リチウム (Li)	天然黒鉛 (C)	錫 (Sn)	タングステン (W)	タンタル (Ta)	金 (Au)
倫理									
法支配が脆弱	●	●	○	-	○	●	●	●	●
賄賂	●	●	○	-	○	●	●	●	●
社会									
児童労働	●	●	-	-	-	●	-	●	●
強制労働	●	●	-	-	-	●	-	●	●
先住民／地域社会への影響	●	○	●	●	○	○	○	-	●
環境									
CO ₂ 排出	○	○	○	-	-	-	-	-	●
生物多様性への影響	●	●	●	-	-	●	-	●	●
精錬時環境汚染（酸の排出）	-	●	●	-	-	●	-	●	●
当該物質の毒性	○	○	●	-	○	-	-	-	●

Material Change(Drive Sustainability, Responsible Minerals Initiatives, Dragonfly Initiative) などの情報をもとに作成。情報が不足している箇所は・で表記。

*1 Global Platform for Sustainable Natural Rubber <https://sustainablenaturalrubber.org/>

*2 「鉱物調達への取り組み」(PDF)に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/Minerals_j.pdf

*3 RMI: Responsible Minerals Initiative の略。情報、コミュニケーションテクノロジー業界をはじめとする企業や団体からなり、社会・環境責任の促進に向けて世界的な取り組みを推進する組織。

天然ゴムにおける取り組み

2025年3月に「持続可能な天然ゴムのためのグローバル・プラットフォーム(GPSNR^{*1})」に加盟し、「責任ある原材料調達への対応方針」にて、持続可能な天然ゴム調達への対応を公開しました。本対応方針に従い、持続可能な天然ゴム調達のため、取引先と協力してデューディリジェンス等を実施していきます。

コバルトを含むバッテリーの製造に必要な鉱物における取り組み

コバルトについては、地政学リスクだけでなく、採掘時の環境負荷や人権問題が指摘されていることを認識しており、使用量の多いリチウムイオンバッテリーの取引先へヒアリングを実施し、2018年からサプライチェーンおよび製錬所、精製所の特定に向けた取り組みを行っています。結果は、「鉱物調達への取り組み」年次報告書^{*2}にて公開しています。2023年8月17日に発効したEUバッテリー規制では、コバルトに加え、天然黒鉛、リチウム、ニッケルおよびその化合物について社会・環境リスクにデューディリジェンスが求められており、第三者調査機関を活用した調査を進めています。

紛争地域および高リスク地域からの3TG(錫、タングステン、タンタル、金)を含む鉱物における取り組み

日産は、「OECD 紛争地域および高リスク地域からの鉱物の責任あるサプライチェーンのためのデュー・ディリジェンス・ガイダンス」を参照し、デューディリジェンスを実施しています。2021年からRMI^{*3}にも加盟し、RMIが提供する調査票(CMRT: Conflict Minerals Reporting Template)を使用し、サプライチェーンを遡る調査により製錬業者を特定し、当該製錬所が紛争地域の武装勢力の資金源となる鉱物を調達していないかどうかを確認しています。

2024年度は、日本、米国、メキシコ、欧州、中国、タイ、インド、南アフリカ、ブラジル、アルゼンチンの10市場で調査を実施した結果、武装勢力とかがわっているとみられる製錬業者から調達した鉱物を使用している取引先は確認されませんでした。

今回、回答が得られなかった取引先については、引き続き調査を継続していきます。

これらの取り組みは、「日産サステナビリティデューディリジェンス基準」に沿ってトップマネジメント層へ報告し、今後の取り組みの決定に反映します。

地域社会

地域社会に関する方針・考え方

日産は、グローバルに生産、販売など多くの活動拠点を持っており、事業を推進するうえで地域社会とのさまざまなかわりが生じています。自動車メーカーとして魅力ある製品やサービスを世界中の人々に提供することに加え、地域社会の一員として主体的に社会にかかわり貢献することも、企業の重要な使命だと考えます。

企業がさまざまな資源を地域社会に提供し、地域社会の活性化や課題の解決に積極的に参画することは、企業市民としての責務を果たすだけでなく、より良い事業環境や持続的に成長する市場を生み出し、企業と地域社会双方の発展につながります。

日産は、複雑化する社会課題に対応するため、非営利組織（NGO・NPO）や行政などさまざまなステークホルダーと連携し、相互の強みを生かしながら活動を展開しています。こうした社会貢献活動の方針をグローバルに共有するとともに、国や地域により異なるニーズに対応するため、各国の事業拠点や関連会社による独自の取り組みも行っています。金銭的な支援だけでなく、専門技術や知識、自社製品など、日産が事業を通じて培った資源を十分に生かした独自性の高い活動を推進し、従業員にボランティアとして積極的に参加することを促しています。

社会貢献プログラムの活性化に向けた2つの重点分野

日産らしさを生かして社会課題を解決するとともに、次世代の子どもたちの可能性を広げることを2030年に向けた目標とし、「教育機会の提供」「地域社会への生活向上支援」の領域において重点的に活動を推進していきます。

重点分野「教育機会の提供」

日産は、誰もが共生できる世界の実現に向けて、若者や子どもたちの可能性を広げていくことが重要と考え、より多くの教育機会を提供するべく取り組んでいきます。気候変動をはじめとした社会課題について理解を深める教育プログラムの提供だけでなく、創業以来培ってきた日産ならではの創造性や技術を生かして、さまざまな教育機会の提供を行います。

重点分野「地域社会への生活向上支援」

日産は、あらゆるステークホルダーの権利を尊重し、社会的な課題解決に貢献すべく、世界各地で多様な支援を行っています。社会的・経済的に恵まれない人々への金銭的支援や物的支援、心のケアなどソフト面での支援、自然災害や人道的危機などによる被災者への緊急支援など、地域社会のニーズに合わせて実施します。

また、地域のイベントに協力するほか、清掃など事業所周辺の環境を向上させる活動、自社施設の開放など、さまざまな地域貢献活動を行います。

地域社会への取り組みに関するマネジメント

活動推進にあたっては、グローバルで共通の社会貢献活動方針、2030年に向けた目標および活動の指標を定めています。これらは、グローバル・サステナビリティ・ステアリング・コミッティ（GSSC：Global Sustainability Steering Committee）*1にて議論、決定されたものです。各国・地域の社会貢献活動責任者は、この方針や目標に沿ってそれぞれの活動を企画し、進捗をGSSCで報告します。

地域社会への貢献の実績

2024年度の社会貢献活動の実績

グローバル社会貢献活動従業員参加人数：延べ約6万6千人
グローバル社会貢献活動受益者数：延べ100万人以上
グローバル社会貢献支出額*2：約23.4億円

<その他の緊急人道支援>

令和6年度台湾東部沖地震についての支援：
被災地域と被災者への緊急対応として、日産自動車、台湾現地子会社である裕隆日産汽車股份有限公司よりあわせて1,000万円を寄付しました。*3

*1 グローバル・サステナビリティ・ステアリング・コミッティ（GSSC）については以下のページにも記載しています。 >>>P009

*2 グローバル社会貢献支出額に関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P160

*3 令和6年台湾東部沖地震の支援に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/240416-00-j>

目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
社会性に関する方針・考え方	人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達
			地域社会	Power of employees	従業員の人権
				DEI	従業員の能力開発
					労働安全衛生

社会貢献活動事例*1

日産は、多様化する地域のニーズに応えるため、日本をはじめ各国で子どもたちを対象とした環境教育やSTEAM*2教育、NGOや地方自治体との連携による地域社会への貢献活動などを行いました。ここでは各地域における2024年度の代表的な活動をご紹介します。

タイ

森林火災対策支援

タイの大気汚染の原因となっている森林火災を防ぐために、タイ日産では2021年よりチェンマイ省と協力した支援活動を行っています。活動4年目となる2024年は、防火活動に使用する装備や食料品などの物資提供やピックアップトラック「日産ナバラ」の貸与とメンテナンスサポートを実施しました。

実績

支援実績：
車両貸与および物資提供
70,000パーツ相当



日本

日産の技術とノウハウがつまった3つの出張授業

NML*3では日産がこれまで培ってきた技術やノウハウを生かした環境、ものづくり、デザインの3つの出張授業*4を提供しています。また、事業所周辺校の生徒を招待し、小学校のニーズに合わせて工場やギャラリー等の事業所設備を活用した教育プログラムも提供しています。

実績

出張した学校数：
369校(2024年度)
従業員参加人数：
延べ1,650人(2024年度)
授業を受けた累計人数：
43万4,300人



中国

子どもたちや若者への教育支援「日産ドリーム・クラスルーム」

2013年から小学生を支援する教育プログラム「日産ドリーム・クラスルーム」を実施しています。現在、NCICとDFN*3にて環境、モノづくり、デザイン、塗装、インテリジェントドライビング、自動車文化や工学の基礎など、多彩な授業を提供しています。

実績

累計参加学生数：
230万人以上
従業員参加人数：
延べ290人(2024年度)



米国、カナダ

ハビタット・フォー・ヒューマニティとのパートナーシップ

2005年よりNGOハビタット・フォー・ヒューマニティ(ハビタット)との協働を継続しています。同団体は、「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」を理念に掲げ、世界約70カ国以上で住居建築や自立支援に取り組んでおり、NNAおよびNCI*3の従業員はボランティアとして参加しています。

実績(米国)

累計参加従業員時間：
11万時間以上
従業員参加人数：
延べ665人(2024年度)
2024年は12件の
住宅建築プロジェクトに参加
累計寄付額：
2,200万ドル以上



英国

教育機会を提供「日産スキルズ・ファンデーション」

NMUK*3では2014年に日産スキルズ・ファンデーションを設立し、日産独自の環境、モノづくりプログラムに加え、外部の3つの国際的な教育プログラム「VEX IQ Robotics」「FIRST LEGO League」「F1 in schools」にも機材や資金、知見などを提供して地元チームを支援しています。

実績

累計支援学生数：
10万人以上
従業員参加人数：
延べ791人(2024年度)



*1 各国の社会貢献活動の実績に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/SOCIAL/CITIZENSHIP/>

*2 STEAM: Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics

*3 NML: 日産自動車株式会社、NNA: 北米日産会社、NCI: カナダ日産自動車会社、NCIC: 日産(中国)投資有限公司、DFN: 東風汽車有限公司東風日産乗用車公司、NMUK: 英国日産自動車製造会社

*4 3つの出張授業の詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/SOCIAL/CITIZENSHIP/VISITINGSCHOOL/>

地域自治体、ステークホルダーとの連携

新しいモビリティを活用した まちづくりの実証実験

日産は、南相馬市、浪江町、双葉町の3つの自治体、7つの企業と「福島県浜通り地域における新しいモビリティを活用したまちづくり連携協定」を2021年に締結し、地域活動を支えるための交通基盤となる新たなモビリティサービスの構築に向けた実証実験に取り組んできました。浜通りを中心として交流人口を増やすことを目的に取り組んできた連携協定の活動から、2022年には誰もが地域の移動を自由にできるようにデザインされたオンデマンド配車サービス「日産スマートモビリティ」を開始しました。また、2023年には子ども向け送迎サービス「スマモビきっず」が生まれ、地域住民の新たな交通手段として根付こうとしています。^{*1} さらに、浪江町からスタートしたEVを活用したエネルギーマネジメントの実証実験は、「ニッサンエナジーシェア」として、2024年より本格的にサービスが始動しました。

横浜みなとみらい地区においても、2017年より自動運転モビリティサービスの実証実験を行っており、2024年度は「セレナ」をベースとしたドライバーレス自動運転車両での走行実証実験を実施しました。^{*2} さまざまな交通事情に合わせて走行する自動運転技術の確立と安全性の検証のために、日本国内だけでなく、日産先進技術開発センター・シリコンバレーで開発された技術や、英国での自動運転研究プロジェクト「evolvAD」などで得られた知見を最大限に活用しています。

また、日産と三菱商事株式会社は、次世代のモビリティサービスやEVを活用したエネルギー関連の共同事業を進めるべく、2025年3月に新会社「Moplus株式会社」を設立しました。横浜みなとみらい地区の自動運転実証を運営面で支援するほか、有人モビリティサービス・カーシェアリングサービス・エネルギーマネジメントサービスを展開します。自動運転技術の確立、事業モデル基盤構築、社会受容性の向上などに向け、Moplusと日産が連携して実証を行うことで、無人モビリティサービス事業の社会実装を加速していきます。^{*3}



ブルー・スイッチの展開

-EVを活用した持続可能でレジリエントな社会への取り組み

2018年に日本で発表された「ブルー・スイッチ」^{*4}は、ゼロ・エミッション社会実現を目的にEVを活用した電動化によるソリューションの提供を通じて、日本全国の自治体や企業など、多くのパートナーとともに、環境、災害対策、エネルギーマネジメント、観光などの幅広い分野において地域課題解決に向けて取り組む活動です。

これまでに自治体や企業・団体などのパートナーとともに取り組んだ件数は2025年3月末で276件となり、今後も多くの地域連携を予定しています。

2024年に発生した能登半島地震では、石川県庁と締結した協定に基づき石川県内販売会社とともに、合計8台の日産アリアとポータブルバッテリーを100台提供し、電力供給に尽力しました。また、EVがカーボンニュートラルやSDGsに貢献することが評価され、多くの大学から講座の依頼も受けています。2024年度は5つの大学でEVを取り巻く社会状況や、EVからの電力供給など活用事例についての講座を実施しました。

EVのパイオニアとして、EVの新たな活用方法を普及していくことで、よりクリーンな世界と持続可能な社会の実現に貢献していきます。



^{*1} 「日産スマートモビリティ」に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.smamobi.jp/>

^{*2} 詳細はプレスリリースをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/250310-01>

^{*3} Moplusに関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://moplus.co.jp/>

^{*4} 「ブルー・スイッチ」に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www3.nissan.co.jp/first-contact-technology/blue-switch.html>

Power of employees – 従業員一人ひとりが力を最大限に発揮するために –

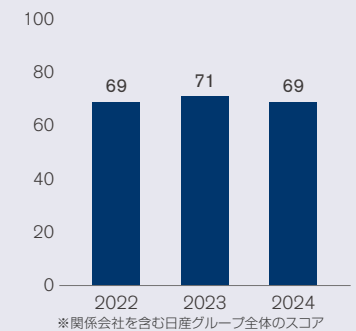
日産は、コーポレートパーパスや長期ビジョン「Nissan Ambition 2030」を実現すべく、コアビジネスを支えるエンジニアの採用強化を進めるとともに、「人材育成」、「人材の多様性の確保」、「社内環境整備」を包含した人財戦略として「HR Ambition 2030」*1を2022年に設定しました。2025年5月に発表した経営再建計画「Re:Nissan」のもと、従業員数の適正化を進めると同時に、「HR Ambition 2030」を通じて従業員が自発的に学び、それぞれの能力やポテンシャルを発揮、会社と従業員がともに成長し続ける企業文化の醸成と人材育成に取り組んでいます。

社会性の取り組みを推進するプログラム「NSP2030」では、「HR Ambition 2030」の中から、社会に関わる人事領域の取り組みをPower of employeesと定義しました。具体的には「従業員の権利」「ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン」「従業員の能力開発」「労働安全衛生」の4領域において、2030年に向けた目標をそれぞれ設定しています。従業員、地域社会、パートナーとともに成長する「People Centric」な企業になることを目指し、各領域の取り組みを推進しています。

グローバル従業員サーベイ

日産にとって従業員は最大の財産です。多様な人財一人ひとりが力を発揮するとともに、中長期的に成長できるインクルーシブな組織づくりを目指して、2005年からグローバル従業員サーベイを実施し、継続的な従業員エンゲージメントの向上に努めています。会社の重要指標として「エンゲージメント」*2を継続的にモニタリングしているほか、全社的に優先度の高い5つの重点領域*3を指標としています。サーベイの結果は社内で開示し、各部門や地域ごとに分析を行い、トップマネジメントの直接的なオーナーシップのもと改善活動に取り組んでおり、これらの重要指標は役員および管理職層の年次賞与の評価指標のひとつに設定しています。また、今年度はサーベイの最後にフリーコメント欄を設定し、会社を取り巻く状況について従業員からの率直な意見を広く集めました。2025年1月に実施したグローバル従業員サーベイ*4では、「エンゲージメント」のスコアにおいて前年比で2ポイント低下しました。5つの重点領域においては、企業倫理、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョンでスコアアップしましたが、その他の3領域はスコアダウンとなりました。従来からの改善活動に加え、従業員からのコメントを今後の会社の取り組みに反映し、より良い組織づくりにつなげていきます。

エンゲージメントスコア



*1 「HR Ambition 2030」に関する詳細は2024年度有価証券報告書(P26)をご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/IR/FINANCIAL_RESULTS/ASSETS/FR/2024/PDF/fr2024.pdf#page=29

*2 「エンゲージメント」は「日産で働くことへの満足度」と「日産を素晴らしい職場として推薦できる」の2つの要件で構成しています。

*3 5つの重点領域：エンペルメント（従業員の意欲をサポートする環境、能力を発揮するための働きやすさ）、企業倫理、リーダーシップ、企業文化、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン

*4 グローバルで約10.2万人が回答しました。（参加率89%）

従業員の人権

従業員の人権に関する方針・考え方

日産は、国連が提唱する「人権・労働・環境・腐敗防止」についての普遍的原則である「国連グローバル・コンパクト」に2004年から参加しており、その10原則に基づいてサステナビリティの取り組みを推進しています。

また、日産は国際労働機関（ILO）の労働における基本的原則および権利に関する宣言（ILO中核的労働基準）に記載された人権を尊重します。結社の自由・団体交渉権の承認、強制労働の禁止、児童労働の禁止、差別撤廃、安全で健康的な労働環境といったILO中核的労働基準を尊重します。なお、国内法と上記の国際的に認められた人権基準が異なる場合には、より高い基準に従い、相反する場合には、国際的に認められた人権を最大限尊重する方法を追求します。

2024年度に改訂した「日産人権方針」*1に基づき、同方針の遵守・徹底を目指し、従業員向けに人権尊重に関する具体的な取り組み内容を取りまとめた「日産グローバル人権ガイドライン」*2を2025年3月に改訂し、これを周知・徹底することでグローバルレベルにて従業員に対する人権尊重の取り組みをより一層強化しています。同ガイドラインでは事業を展開している各国・地域の日産の従業員がより安心して働けるようにすること、また日産の活動と国際および地域社会が求める企業の人権課題への取り組み方を一貫させることを

目的としています。従業員の基本的権利を尊重べくさまざまな活動を強化しています。

ニッサン・ソーシャルプログラム2030では、Power of employeesの重点分野のひとつに「従業員の人権」を含んでおり、人権尊重を通じた「人を中心とする企業文化」の実現を2030年目標（ゴール）として掲げています。

従業員領域は人事戦略によって推進されており、人権デューディリジェンスの範囲拡大やトレーニングの強化などの取り組みを進めています。さらに、従業員の人権の取り組みを推進するため、2023年度に従業員に向けての人権戦略を策定しました。人権戦略は、日産の人権尊重のありたい姿の実現に向けて、日産が目指すべき方向性の定義や、注力すべき人権課題を特定するものです。具体的には、人権尊重の企業文化の醸成、適用法令の遵守、国際人権基準への対応といった「守り」の整備・強化と、ステークホルダーとの価値共創、人権尊重企業としてのブランド確立、事業活動への組み込みといった「攻め」の構築・整備に分類し、ステークホルダーの人権への期待に応えていくことを目指すものとなっています。2024年度は、人権戦略を実行に移していくため、「攻め」と「守り」の各施策に優先順位を付け、実施のタイムラインを設定しました。その上で、各施策を具体的なアクションプランに落とし込み、アクションを推進する担当部署を割り当てました。一部の施策は既に取り組みを開始しており、人権デュー

ディリジェンスにおいては、リスクベースアプローチの考え方を導入し、より人権リスクの高い拠点を選定するようプロセスの見直しを行いました。この選定プロセスに基づき2025年度の人権デューディリジェンスを実施予定です。

*1 「日産人権方針」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/HUMAN_RIGHTS/

*2 「日産グローバル人権ガイドライン」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/HUMAN_RIGHTS_GUIDELINE/

目次	Corporate direction			環境		社会性		ガバナンス			データ集		◀ 094 ▶ 🔍
社会性に関する方針・考え方	人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達	地域社会	Power of employees	従業員の人権	DEI	従業員の能力開発	労働安全衛生		

従業員の人権に関するマネジメント

日産では、人を中心にした企業文化の実現を目指し、従業員が安心して働ける職場環境の構築に取り組んでいます。そのうえで従業員の人権を尊重することは組織として不可欠であり、日産では体系的に取り組むための仕組みづくりを行っています。

日産では、グローバル・サステナビリティ・ステアリング・コミティのもと人権尊重活動を推進し、その結果をもとにエグゼクティブ・コミティおよび取締役会へ報告・提案し、フィードバックを受ける人権ガバナンス体制を構築しています。

加えて、日常管理レベルでは、購買部門や人事部門などの各機能部門による人権尊重の取り組みを推進しており、人権の取り組みを統括するサステナビリティ推進部に定期的に進捗報告する体制を構築しています。特に、外部からの期待値が高い人権デューディリジェンス領域においては、人事部門内のグローバルチームとリージョンチームが一体となり、活動を推進しています。

そのほか、「グローバル行動規範」*1の「多様性の尊重と機会平等」において、従業員や取引先、お客さま、地域社会の多様性を評価・尊重し、差別やいやがらせは、どんな形・程度にせよ容認しないことを定めています。役員および従業員が相互の人権を尊重し、人種、民族性、国籍、文化、宗教、性別、性的指向、性表現、性自認、障がい、婚姻など、その他の理由による差別やいやがらせを行うことや、その状態を容認することを認めない旨を規定しています。また、職場におけるセクシュア

ル・ハラスメントやその他のハラスメント(いやがらせ)を許さないという立場で、性自認を問わず、すべての従業員が被害に遭わないよう、防止に努めており、その施策として人権およびコンプライアンスに関するe-ラーニングをグローバル全従業員対象の必須研修とし、従業員の意識向上、啓発に努めています。*2

また、グローバル行動規範を含むすべての内部規程に対する違反行為に関しては、内部通報システムSpeakUp*3の導入により、内部通報が可能となっています。

さらに、日産では従業員一人ひとりの安全と健康を守る観点から、長時間労働・過重労働の防止に取り組んでいます。

<具体的な取り組み事例>

- ・PCのON／OFFや生産現場に設置したカードリーダーを活用した管理システムの導入による、労働時間の適正化および各種休暇取得状況の見える化
- ・間接部門におけるノンコアフレックスタイム制の導入による自律的な働き方の推進

従業員の人権デューディリジェンス

実績

人権デューディリジェンスの一環として、外部団体の協力のもと、2019年度に日産サウスアフリカ会社で、2020年度にタイ日産自動車会社、ニッサンパワートレイン(タイランド)株式会社、エス・エヌ・エヌ・ツールズ&ダイズ会社、2021年度に北米日産会社、2022年度には日産(中国)投資有限公司、2023年度にはフィリピン日産社、メキシコ日産自動車会社、英国日産自動車製造会社で人権アセスメントを行いました。2023年度にメキシコ拠点で行った人権アセスメントでは、施設の衛生環境に改善の余地があったため、洗面所のリノベーションを行いました。また、英国拠点では、応急処置キットの不足が発見されたため、キットの補充と定期的な在庫確認を行うように改善しました。

2024年度は、北米日産会社、ジャトコ株式会社、ルノー日産オートモーティブインディア社、欧州日産自動車会社、タイ日産自動車会社の5拠点で人権アセスメントを実施しました。今回のアセスメントでは現地の法律を逸脱する事案は指摘されませんでしたが、「日産グローバル人権ガイドライン」で示されている7つのテーマ*4への対応を向上するために、対象拠点が見直しを検討すべき領域について確認しました。これらのうち、実際にリスクがあると認識されたものに関してはそれぞれ対策を検討し実行計画を策定しました。

具体例として、安全靴の交換ルールの周知不足や、安全トレーニングの更新頻度に関する運用上の課題が指摘され、社内ポ

*1 「グローバル行動規範」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/NISSAN_GCC_J.pdf

*2 ビジネス倫理の遵守のマネジメントはこちらをご参照ください。 >>>P137

*3 内部通報システムに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P137

*4 7つのテーマ(評価項目): 労務管理システム(労働慣行)および救済措置、強制労働、児童労働および若年労働者、労働条件、差別、結社の自由、健康と安全

リシーの再確認と改善が勧告されました。指摘事項はフォローアッププランに則って3年度以内に改善予定です。勧告には期限が設定されており、現地担当者への定期的な確認を通じ、実際にとられた対応策とその確認結果を通じて改善し、得られた教訓や今後のHRDDプロセスへの反映事項を検討します。

アセスメントプロセス

従業員向けの人権アセスメントは、ビジネスとサステナビリティの観点からリスクを考慮したうえ、毎年グローバル従業員の80%以上をカバーできるように対象拠点を選定し、社内で定めた人権アセスメントプロセス(下図：2023年度策定)に基づいて実施しています。

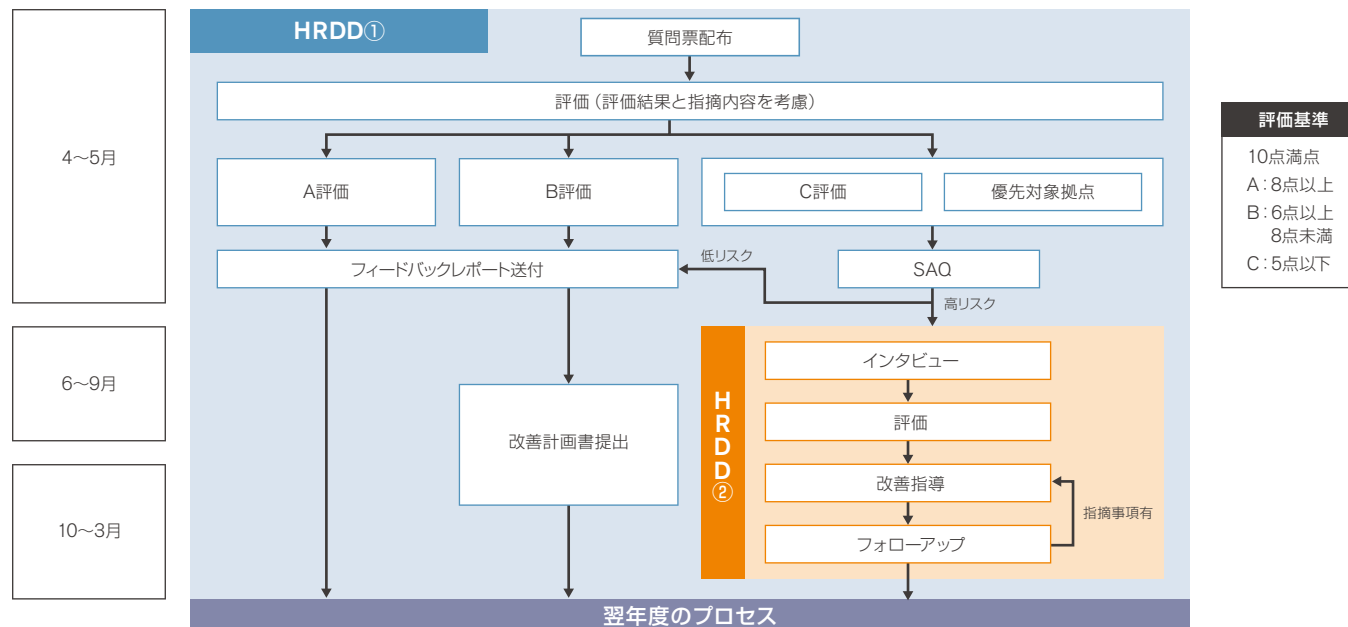
具体的には、外部団体の専門的な知見に基づいた協力のもと、人権に関する調査票を用いた自己評価を実施し、現地の従業員へのインタビューを通じて詳細な状況について把握します。インタビューの対象を選定する際は多様な立場からの意見を取り入れるために、雇用形態、職種、性別や人種といった属性を考慮しています。また、アセスメントの基準には、国際労働機関(ILO)や経済協力開発機構(OECD)による国際的な基準および「日産グローバル人権ガイドライン」を採用すると同時に、現地の法律や規制への準拠も織り込むだけでなく、現地専門家へヒアリングし地域における一般的な労働慣行や企業文化について事前に把握したうえで調査すべき領域を特定するなど、地理的・経済的・社会的要因を考慮のうえでリスク特定も行っています。

特定・評価された人権リスクは、改善活動の実施や、影響を受けるステークホルダーとの対話などを通じて、負の影響の予防・軽減・是正を図っています。このシステムはグローバルに適用され、引き続き各テーマにおける改善活動の進捗状況や有効性などについて、継続的に現地の従業員と確認しつつ、グローバル・サステナビリティ・ステアリング・コミッティで管理を行っていきます。

アセスメントで検出された人権リスクは、対象拠点へ勧告事項としてフィードバックされ、その対応状況やとられたアクションの効果は継続的に本社からフォローアップをします。勧告事項およびフォローアップ状況はグローバル・サステナビリティ・ステアリング・コミッティへも報告され、重要な問題を見逃していないか、またとられたアクションは適切であったかの評価がなされ、今後の活動につなげています。

人権アセスメントの実施率、指摘事項の改善率などの指標を立てて、2024年度も計画通り実施しました。

<従業員：人権アセスメントプロセス>



目次	Corporate direction			環境		社会性		ガバナンス		データ集		◀ 096 ▶ 🔍
社会性に関する方針・考え方	人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達	地域社会	Power of employees	従業員の人権	DEI	従業員の能力開発	労働安全衛生	

「日産グローバル人権ガイドライン」の改訂

日産は、2021年に策定・公表した「日産グローバル人権ガイドライン」*1を2025年3月に改訂しました。同ガイドラインは従業員の人権尊重に関する具体的な取り組み内容をまとめたもので、人権アセスメントの基準の一つになっています。最新の国際基準を踏まえ、従業員の人権尊重の取り組みをさらに強化できるように改訂を行いました。具体的には、求職者の採用にかかわる費用を負担させるような斡旋業者を使わないこと、報酬は不合理な控除なしに全額が遅滞なく支払われることを明記しました。また、児童労働を防ぐための年齢確認はこれまでも行っていましたが、採用時に行うことも明示しました。今回改訂したガイドラインを周知・徹底することによりグローバルレベルで従業員に対する人権尊重の取り組みを一層強化していきます。

「Happy8」による働き方の拡大

日産では働き方改革「Happy8」*2を通して、従業員一人ひとりの価値観やライフニーズに応じた幅広い働き方ができる職場づくりに取り組んでいます。

人権に関する従業員教育・研修、内部通報システム

2021年度から新設したグローバル全従業員対象の必須研修「日産人権e-ラーニング」は、2023年度に更新し、「日産人権方針（旧：日産の人権尊重に関する基本方針）」と「日産グ

ローバル人権ガイドライン」の内容紹介を中心に、CEOメッセージ、人権の定義、ビジネスと人権、日産の人権尊重、ケーススタディ、小テストで構成され、研修を通じて人権の基礎知識を体系的に学び、日々の業務の中で人権尊重が実践できるような内容としています。まず、日本の間接従業員から展開し、全役員・海外連結拠点の間接員向けに拡大展開を進めており、2024年の受講率は日本：87.3%、アセアン：81.9%、中国（NCIC）：99.7%、米州：98.5%、AMIEO：84%でした。本研修は、2025年3月に改訂した「日産人権方針」と「日産グローバル人権ガイドライン」の周知徹底および実践を図るべく、2025年度の更新、展開を目指しています。

また、工場などで働く直接員については、「グローバル行動規範」のビデオ研修の中で「日産人権方針（旧：日産の人権尊重に関する基本方針）」と「日産グローバル人権ガイドライン」を中心に人権尊重の考え方・取り組みについて学び、グローバルの全工場で定期的なシフト開始時のミーティングの場、または対面のクラスルーム形式で、トレーニングを実施しました。

さらに日産の従業員は、「グローバル行動規範」に記載している通り、内部通報システムSpeakUp*3を通じて人権問題に関する問い合わせを行うことができます。通報された懸念に対しては、調査・説明・対応を行うとともに、問い合わせた従業員が不当な扱いを受けることがないよう保護しています。日産の人権尊重の取り組みをサプライヤーとともに推進することを目的に、2023年度中に日産従業員による人権侵害などの通報をサプライヤーから受ける窓口（人権ホットライン）*4を設置しました。

その他、社外からの人権の重大な申立てに関する社内対応プロセスを構築し、関係部署や海外拠点と連携しながら、対応の強化を図っています。

ハラスメントに対する研修の取り組み

日産では、ハラスメントの未然防止に努め、従業員一人ひとりがいきいきと活躍できる職場環境づくりに取り組んでいます。これまでも、労働施策総合推進法（パワハラ防止法）を踏まえ網羅的にハラスメント防止に向けた施策を全社的に実施してきましたが、未然防止をより強化する目的から、ハラスメントに対する研修内容や仕組みをさらに強化しています。具体的には、新たに管理職や現場監督者になる者を対象に受講必須のハラスメント研修を実施しています。また、防止のための啓蒙活動として、ハラスメント相談窓口の設置や職場コミュニケーションの改善プログラムなど、トラブルに至る前に対応できる環境整備に繋がっています。

*1 「日産グローバル人権ガイドライン」に関する詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/HUMAN_RIGHTS_GUIDELINE

*2 働き方改革「Happy8」の詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P104](#)

*3 内部通報システムに関する詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P137](#)

*4 窓口（人権ホットライン）の詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P085](#)

ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン

ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン(DEI)の方針・考え方

日産は、従業員一人ひとりがチャレンジ精神を育み、変化を起こすイノベーションをドライブし続けるために、各リージョンの指針に基づき、真にダイバーシティ(多様性)、エクイティ(公平)&インクルージョン(受容)(DEI)を推進し続ける企業を目指しています。

人々のライフスタイルやモビリティに対する考え方が進化していく中、誰もが価値ある存在として認められ、尊重されるために、DEIの取り組みをさらに強化し、よりインクルーシブな世界の実現に向けて積極的に貢献していきます。

日産にとってのダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン

日産は、ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン(DEI)はグローバルの従業員自らが理解・実践することによって企業文化として根づいていくものと考えており、すべての従業員が自由に発言できる環境を整え、それぞれの能力を最大限発揮できる職場づくりを目指しています。「ニッサン・ソーシャルプログラム2030(NSP2030)」では、「一人ひとりの個性を尊重し、インクルーシブでワクワクする日産」をゴールとして掲げ取り組みを進めています。

世界がますます複雑化し、変化を続ける中、お客さまや社会の多様なニーズに応える商品を提供するためには、才能豊かな人財をひとつにまとめる必要があります。グローバルにDEIを推進することで、真にインクルーシブな組織となり、イノベーションを生み出します。そして、モビリティの未来を実現し、私たちが暮らす社会を豊かにしていきます。

ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン

日産は、ダイバーシティとは違いを受け入れることだと考えています。これは、人種、民族、国籍、文化、宗教、性別、性的指向、性表現、性自認、障がいの有無、配偶関係、年齢、職歴、学歴、ライフスタイルなどのさまざまな価値観やバックグラウンドを認め、尊重することを意味します。

エクイティとは、個々の事情を理解し、必要なリソースや機会を確保することで、一人ひとりの状況に応じた機会をすべての人に提供することだと考えています。

そして、私たちが考えるインクルージョンとは、一人ひとりが受け入れられ、持てる力を最大限に発揮できるようになるということです。日産は、社内のさまざまな業務を行う従業員が積極的にかわりあうことによって、インクルーシブな文化を育むよう努めています。さらに、誰もが意思決定プロセスにかかわり、社内での役割にかかわらず意見を述べるができる風土を醸成したいと考えています。

日産では、このようにダイバーシティ、エクイティ&インクルー

ジョンのサイクルを生み出すことで多様な人財を最大限にいかし、イノベーションをドライブし続けます。



「女性のエンパワメント原則」に署名

2023年8月、国連グローバル・コンパクト(UNGC)と国連女性機関(UN Women)によって設立された、7原則をもとにした「女性のエンパワメント原則(WEPs=Women's Empowerment Principles)」に署名*1しました。

In support of

**WOMEN'S
EMPOWERMENT
PRINCIPLES**

Established by UN Women and the
UN Global Compact Office

*1 CEOのコメントおよび詳細は、こちらをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/230907-02->

ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン(DEI)のマネジメント

ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン(DEI)の意思決定と実行推進体制

日産では、グローバルと各リージョンが連携し全世界でDEIを推進する体制を整えています。

グローバルDEIカウンスル

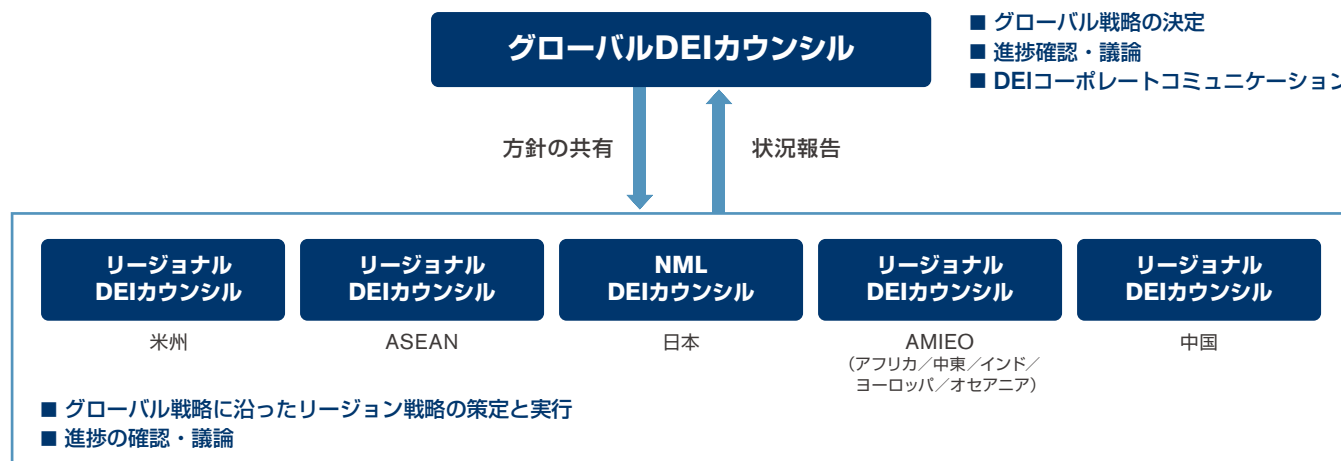
- ・最高経営責任者CEOが議長を務め、各部門・各地域を代表する役員がメンバー
- ・DEI戦略や方向性に関し、共有、議論、決定

リージョナルDEIカウンスル

- ・各リージョンのDEI推進組織
- ・各リージョンのトップマネジメントが議長を務め、各部門を代表する役員がメンバー
- ・コーポレート全体の方向性に沿って、各地域のDEI戦略と方向性を決定

DEI推進部署

- ・日本・各リージョンでDEIを推進する専門組織または専属の推進担当者を配置し、DEIカウンスルの運営や各部門と連携し、グローバル戦略に沿った各地域のDEI戦略の策定とその実行を主導



ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン(DEI)推進の取り組み(2024年度)

取り組みの方向性

日産では、一人ひとりの状況を考慮し、違いを認め合いながら、従業員一人ひとりが能力を最大限に発揮することを基本理念としています。まず、インクルージョンを実践する心構えを醸成し、ワークライフバランスを実現しながら公平な機会が提供できるよう、多様性ある企業文化を醸成します。そして、従業員には、異なる文化、人々、経験への理解を深め、積極的に協力・協業することが期待されています。これは、ビジネスパートナーやお客さま、日産が事業を行う地域社会においても同様です。日産が活動する国や地域においては、各自が果たすべき役割を定義したグローバル共通のポリシーを遵守しながら、それぞれの環境や実情に即した独自の取り組みを推進しています。

DEIを推進する企業文化の醸成

日産は、お互いの違いをより理解するために多くの機会を提供しています。日産の企業文化改革の取り組みであるOUR NISSANの基盤として、さまざまな対話の場を設け、従業員の声に耳を傾けて認識し、自由に気兼ねなくコミュニケーションが行える環境を作ることで、よりインクルーシブ(多様性を受容できる)な企業文化の醸成を目指しています。

目次	Corporate direction					環境	社会性	ガバナンス			データ集	099				
社会性に関する方針・考え方						人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達	地域社会	Power of employees	従業員の人権	DEI	従業員の能力開発	労働安全衛生

相互理解を深めるための取り組み

日産におけるコンセプトと、社員一人ひとりがインクルーシブ（多様性を受容できる）な企業文化にどのように貢献できるかについて理解を深めるために、複数の研修を導入しています。

内容	
グローバルDEI e-ラーニング	日産従業員のDEIに関する理解を深め、DEIが浸透する職場を実現することを目的とした研修です。
アンコンシャス・バイアス e-ラーニング	誰もが持つアンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）に気付き、それをコントロールするための方法を学ぶ研修を間接部門の役員・管理職を対象に実施しています。
LGBTQ+ e-ラーニング(日本)	誰もが自分らしく働くことを目指し、LGBTQ+に関する知識を学ぶ全従業員の必須研修として展開しています。
人権・DEI研修(日本)	人権とその一部であるDEIについて正しく理解し、どのように一人ひとりが行動すべきか、また貢献できるか、研修を実施しました。
グローバルDEI オンボーディング ジャーニー	中途入社者含む世界中の日産新入社員に入社時からDEIに関する情報を提供するため、入社後のオンボーディングプロセスにDEIのセクションを設け、日産のDEIへのコミットメントや、各地域でDEIの取り組みがどのように行われているかを学ぶ機会を設けています。

オープンなコミュニケーション

日産では、社内の役職や年次を超えて一体感を感じられる、オープンなコミュニケーションを大切にしています。誰もが自身のアイデアを共有でき、違いを尊重し、ユニークな視点を取り入れられるよう、さまざまな対話の場を提供しています。

主な取り組み	
リーダー層とのトークセッション	経営層の経験や考え、従業員への期待を Fireside Chatやラウンドテーブル等を通じた発信および意見交換から、DEIについての理解促進を図っています。 ^{*1}
グローバルダイバーシティ啓発月間	役員メッセージや従業員インタビューの掲載、パネルディスカッションの開催を通じて、一人ひとりがDEIの重要性について改めて考え、議論する機会を設定しています。
DEIフォーラムの開催	DEIに関するテーマを外部登壇者を招いて語り合い、従業員がそのテーマについて考える機会とすることを目的に開催しています。
DEIハンドブックの発行	DEIへの理解を深め、その価値を共有するためのマインドセットや行動指針を説明しています。各リージョンにて、さまざまな言語に翻訳し活用しています。
イントラネット、ニュースレター	各種セミナーの案内や報告、DEIに関するコンテンツを掲載しています。また、メールマガジンを定期的に発行し、DEIの社内浸透に取り組んでいます。
企業情報サイトのDEIページ ^{*2}	経営戦略の重要な柱のひとつとして、日産のビジョンや取り組み、日産トップマネジメントのメッセージを社外向けに公開しています。

インクルーシブなリーダーシップの実践

日産のリーダーには、チームメンバーや同僚一人ひとりのニーズを理解することが求められると同時に、インクルーシブ（多様性を受容できる）な職場環境を作ることが求められます。このような考え方が、個々の取るべきリーダーシップの価値観と行動を定義する日産リーダーシップウェイに含まれています。また、若手従業員がリーダー層のメンターとなり自らの視点や経験を基にアドバイスや意見を提供するリバースメンタリングを2024年度に導入しました。

主な取り組み	
役員ワークショップ	「多様化が進む組織のチーム戦略」や「コンシャス・インクルージョン」をテーマに開催しました。議論や意見交換を通じて、組織マネジメントにおけるDEIマインドの醸成につなげています。
ダイバーシティ マネジメントトレーニング	新任課長研修の一環として、DEIの課題と対応を考える体験型学習を通じて、多様な人財をマネジメントし、個々人とチーム双方の成果を最大化するマインドセットを身に付けます。
育児休職eラーニング(日本)	管理・監督者として、育児休職制度を理解し、育児と仕事の両立を支援し、男性の育児休暇取得を切り口に、日々のマネジメントにおけるチーム運営の工夫を学ぶことを目的に実施しています。
リバースメンタリング	日産リーダーシップウェイに沿った企業文化改革として、若手従業員がリーダー層のメンターとなり自らの視点や経験を基にアドバイスや意見を提供し、互いに新しい視点に触れることでイノベーションを加速させる効果があります。

^{*1} 「日産サステナビリティセミナー2023」におけるDEIセッションの詳細はこちらをご覧ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/230907-01-j>

^{*2} 企業情報サイトのDEIページはこちらをご覧ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/SOCIAL/DIVERSITY/>

一人ひとりの能力を最大限に引き出す取り組み

あらゆるバックグラウンドを持つ従業員が高いモチベーションと参画意欲を保てるよう、日産は学びや能力開発の機会を提供し、その最大限の能力を引き出す環境作りに努めています。

ジェンダーダイバーシティの取り組み

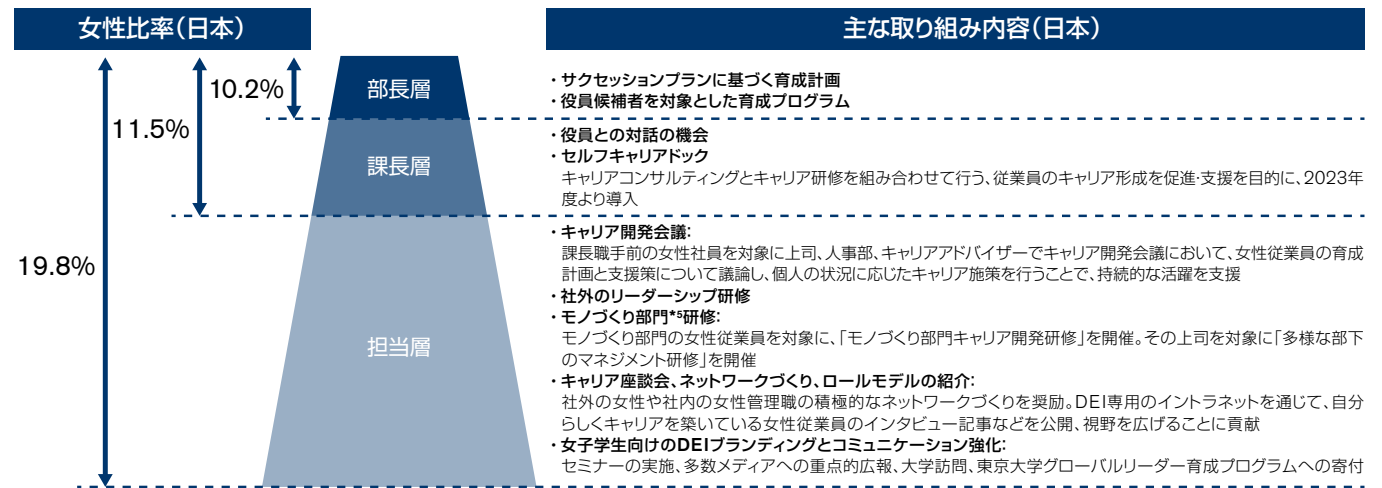
女性が影響力のある地位につくことは、新たな視点を提供するだけでなく、よりインクルーシブな社内のポリシーや制度の改善にもつながります。さらには職場の多様性といった企業文化の側面にも影響を与えると考え、日産では現状のジェンダーギャップを認識し、各リージョンの実態やニーズに基づいた取り組みを続けています。

2025年3月末現在、グローバルでの女性管理職比率は、16.2%となり、2008年の6.7%から大幅に伸び、グローバルに女性が活躍しています。^{*1*2*3}

これらの取り組みの結果、日本における全管理職の女性比率は2025年3月末時点で11.5%となり、従業員数1,000人以上の製造業の平均値4.7%と比べると、良好な水準です（「令和6年賃金構造基本統計調査」（厚生労働省）に基づき算出）。中でも、部長層の女性の比率は2008年の2%から2025年3月末時点で10.2%と5.1倍となり、日本の企業において上位に位置しています。

日産は、女性管理職比率と間接従業員に占める女性比率とを同等レベルにすることを目標とし、将来的には、さらなる女性

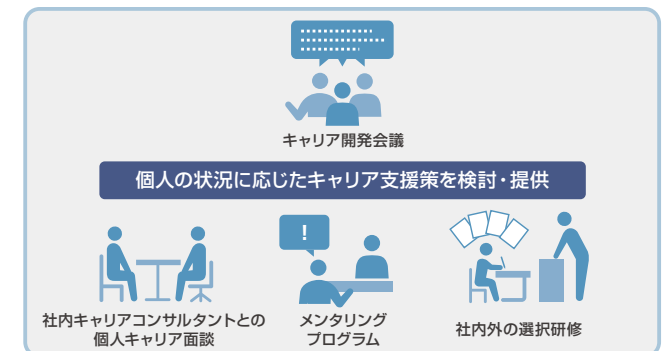
<層別の女性人財育成の取り組み> (日本)^{*4}



管理職比率の向上のために、母集団となる間接従業員に占める女性比率を30%レベルに高めるべく、女性従業員の積極的な採用と育成を促進します（2025年3月末の女性管理職比率11.5%、間接従業員に占める女性比率19.8%）。日本独自の課題について議論する「NML DEIカウンスル」では、「ジェンダーギャップ」を引き続き2024年度のテーマとし、アンコンシャス・バイアスに関するワークショップを実施しました。各部門を代表する役員が好事例の共有や、部門ごとに異なる課題と対応策について議論を行い、よりインクルーシブな職場環境の実現に向けて取り組みを加速していきます。男性の平均賃金を100としたときの女性の平均賃金の割合は83.8%です。（2025年3月末時点の全労働者における割合）管理職比率など男女間に構成の違いがあることで1名当

たり賃金に差が出ていますが、賃金制度・体系において性別による処遇差はありません。

前述の取り組みを継続することで、各階層ごとの男女比率の差が縮まり、男女の賃金差の縮小につながると考えています。



^{*1} 中核人材の多様性確保はコーポレートガバナンス報告書【補充原則2-4-1】をご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/GOVERNANCE/ASSETS/PDF/g_report.pdf

^{*2} 女性活躍推進法 行動計画 <https://positive-ryouritsu.mhlw.go.jp/positivedb/detail?id=727>

^{*3} 日産は日本経済団体連合会の取り組み「2030年30%へのチャレンジ」に賛同しています。詳細はこちらをご参照ください。 <https://challenge203030.com/>

^{*4} 制度や環境整備については、「インクルーシブな環境づくり」をご参照ください。 [>>>P103](#)

^{*5} モノづくり部門は、生産、R&D、購買、デザイン、品質保証の部門を示します。

目次	Corporate direction			環境		社会性			ガバナンス			データ集		◀ 101 ▶ ↺
社会性に関する方針・考え方		人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達	地域社会	Power of employees	従業員の人權	DEI	従業員の能力開発	労働安全衛生		

クルマの開発・生産現場、販売会社における取り組み(日本) 開発現場

女性のお客さまの声に耳を傾けながらデザインや開発を行った「エクストレイル」がウィメンズ・ワールド・カー・オブ・ザ・イヤー2023(Women's World Car of the Year。以下、WWCOTY)において、「ベスト・ラージSUV(Best Large SUV)」賞を受賞しました。WWCOTYは、審査員が女性の自動車ジャーナリストのみで構成される世界で唯一の自動車賞です。*1

生産現場

持続的に監督者の担い手を輩出するため、ライフステージにかかわらず、本人の希望に合わせたスキル向上の機会を提供しています。2024年度には初の女性係長が追浜工場(神奈川県横須賀市)で誕生し、指導職以上の女性従業員が40名以上となる等、キャリアアップを目指せる環境になっています。また、さまざまな年齢層や男女の区別なく、誰にでも作業できる製造ラインづくりに貢献し、女性に限らず身体的配慮の必要な方が活躍できる工程を整備しています。多様性受容を促進し誰もが働きやすい職場づくりを実現するため、技能員向けにDEI解説動画の配信、事業所診療所と連携した女性の健康に関するセミナーを定期的に開催しています。

販売会社

日産の販売会社では、女性の社長も就任しており、多くの女性カーライフアドバイザー(CA)が全国で活躍しています。2025年3月末時点で1,087名の女性CAが活躍しており、女性CA比率は11.4%です。女性従業員ネットワーキングの機会提供やキャリア研修の実施等、キャリア開発をサポートしています。また、アフターサービスにおいてお客さまと整備スタッフの橋渡しをするテクニカルアドバイザー(TA)にも女性を登用しています。

女性役員層の育成

グローバルで女性役員候補者を対象に専属キャリアコーチの配属、役員メンターの配置、さらには女性幹部候補向け外部研修への派遣等を行っています。また、役員サクセッションプラン作成の場で女性候補者の育成プランの議論の時間を確保し、継続的に女性役員候補者の育成に努めています。

健康推進支援サービス(日本)

日産は、フェムテック*2領域や睡眠改善など、不調を感じつつも対処が疎かになりがちな領域に着目し改善することで、仕事の生産性向上、さらにはワークライフバランスが取れる職場環境を推進しています。従業員とその家族・パートナーを対象に、女性特有の健康課題や、男女問わず起こりうる更年期や不妊治療など多様な健康課題について理解促進を深めるオンラインセミナーや、診療サポートを提供しています。2024年度は生産部門の従業員向けに外部講師を招き、DEIの重要性や令和と昭和の働き方に関する講演を開催しました。

従業員コミュニティ(ERG)*3

ERGは、共通の志(アインデンティティ／関心)を持った従業員が集まり形成するネットワークで、役員の支援を得たものです。日産には、LGBTQ+アライ、育児両立、マルチカルチャー、ジェンダー、障がい、キャリア&コミュニケーションなど、関心に応じたさまざまな団体が存在し、従業員自身がより安心していきいきと働ける職場をつくるため、イベントの開催や知識・経験の共有などを行っています。日本をはじめ、米州、AMIEO(アフリカ／中東／インド／ヨーロッパ／オセアニア)、中国など、海外の各拠点でそれぞれの特徴に合わせた活動を積極的に展開しています。

*1 詳細はこちらをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/230221-00-1>

*2 フェムテックとは、Female+Technologyを合わせた言葉。「更年期」「月経」「不妊治療」など女性の健康課題をテクノロジーの技術で解決するというコンセプトに基づいた考え方。日産では、男女共通の取り組みとして、フェムテックを含むセルフケア施策を導入。

*3 米州の日産グループでは、Business Synergy Teams (BSTs)と呼称しています。

LGBTQ+への取り組み

日産では、LGBTQ+の当事者にとって働きやすい職場を目指し、全従業員が性自認、性的指向の多様性について理解促進を進める風土醸成と、本人向けの制度・設備の充実、そして社会への発信の3つの柱で活動に取り組んでいます。

活動の柱	活動事例
理解促進のための風土醸成	 アライを表明するオリジナルアライステッカー  全従業員必須受講のLGBTQ+e-ラーニング  2014年から毎年開催LGBTQ+セミナー  メールマガジンやイントラでの情報発信PRIDE month特集号  従業員コミュニティ(ERG) 2016年立ち上げ 2023よりオフィシャルERGへ  LGBTQ+従業員のための人事部門サポートハンドブック
制度・設備	 【同性婚・事実婚にも適用】結婚祝い金の支給・忌引きファミリーサポート休暇等  健康診断日程の個別設定  多目的トイレの設置  外部相談窓口
社会への発信	 TRP(東京レインボープライド)に2017年から参加。2024年はブース出展とPRIDEパレード参加  婚姻の平等への賛同を表明  LGBTQ+支援企業 評価8年連続 最高ランク「PRIDE GOLD」

多様な人財の活躍推進

中途採用者、シニア人財への取り組み

日産では、多様なキャリアの人財を日常的に採用、育成、登用しています。他社でキャリアを積み入社してきた人財に必要な研修を提供し、早期に日産でパフォーマンスを発揮できる支援を行っています。

中途採用者の管理職比率は日本企業の中でも高い水準であり、さらに間接従業員に占める中途採用者比率を上回っており、中途採用人財が活躍しています。(2025年3月末時点：管理職に占める中途採用者比率は36.4%、間接従業員に占める中途採用者比率は34.6%(日本))シニア人財が活躍できる場も提供しています。*1

障がい者雇用への取り組み

日産は、障がいをお持ちの方が、能力を十分に発揮できるよう、職場環境や制度を整備し、活躍できるフィールドを提供していきます。障がいにかかわる従業員コミュニティ(ERG)が2022年度に米州、2024年度に日本、AMIEOで立ち上がり、障がいへの理解促進やすべての人にとって使いやすいクルマづくりなどに取り組んでいます。

多様な文化間での協働

日産では、グローバルに100カ国以上の国籍の人財が活躍しています。マネジメント層、チームリーダー層にも多様な国籍のメンバーが含まれています。国内における日産の管理職に占める外国人比率は日本企業の中でも高い水準にあります。(2025年3月末時点：6.3%(日本))役員層に

おいても、外国籍は50.0%(2025年7月1日時点)と高い比率になっています。

海外事業所との人財交流、プロジェクトを通じた協業など、多様な文化間で協働するスキルや経験を高める機会を提供しています。また、米州や日本では多文化に関する従業員コミュニティ(ERG)が活動しており、従業員が国籍や文化的背景・語学力に関係なく能力を発揮できるような環境づくりに取り組んでいます。

*1 シニア人財の活躍支援に関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P110

インクルーシブな環境づくり

日産は、従業員の誰もが能力を最大限に発揮できる職場環境を実現するためには、個人の状況を尊重したワークライフバランスを保つことに考えています。

両立支援(日本)

- ・育児・介護・治療／セルフケアなどと仕事の両立を行う従業員本人を支援する研修やセミナー
- ・両立従業員のキャリアを支援する上司向けの研修やセミナー
- ・制度や設備などのインフラ整備

これら3つの方向からアプローチすることで効果的な施策導入を行っています。2022年からは男性の育児休職取得希望者が育児休職を取得しやすい風土を醸成していくことを目指して、経営層や部課長層からの応援メッセージ発信、部課長層対象受講必須のe-ラーニングの展開、取得経験者のインタビューを通じた育児休職取得実例の展開などを実施しています。2024年度の実績は男性の育児休職取得率65.5%、取得日数平均92日となりました。2024年度からは従来のファミリーサポート休暇に加え、治療、療養、予防に使用できるライフサポート休暇も新設し、より幅広い従業員の個別ニーズに対応できる環境を整えています。

日産では開発拠点を中心に1990年からワーキングペアレンツ同士で情報交換を行う従業員主体のグループが活動していましたが、2023年からは役員スポンサーがつく従業員コミュニティ(ERG)として生まれ変わり、現在200名を超えるメンバーが参加しています。

仕事との両立を支援する環境づくり

活躍する人を包括的に支援 ― 本人から上司、意識からインフラまで



従業員本人の活躍を支援～キャリア形成×両立～

- ・産休、育休前の「プレパパママセミナー」、育児休職からの復職前の従業員向け「復職セミナー」産休、育休前と復職前に、復職後のキャリアや働き方の構築について考える機会を用意
- ・介護セミナー



上司の（両立）部下育成を支援

- ・育児休職前昇格試験ガイド
- ・管理職向け育児休職制度e-ラーニング
- ・管理職向けダイバーシティマネジメント研修
- ・男性の育児休職の取得支援



両立従業員にかかわる制度や設備などのインフラの整備、取得しやすい風土の醸成

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・リモートワーク制度（生産工程除く） ・スーパーフレックス勤務制度（一部事業所はコアタイム適用） ・時短勤務制度（育児／介護両立従業員対象） ・ファミリーサポート休暇（結婚、配偶者出産、育児、介護、不妊治療 ※時間単位で取得可能） ・ライフサポート休暇（治療、療養、予防 ※時間単位で取得可能） ・育児休職（分割取得可能）、介護休職、母性保護休職 ・出生支援休職（2025年4月～） ・治療のための短時間勤務制度（2025年4月～） | <ul style="list-style-type: none"> ・帯同休職制度（最長3年） ・再雇用制度 ・事業所内託児所（5ヵ所） <ol style="list-style-type: none"> 1) 仕事と育児の両立に意欲的な従業員がフルに力を発揮して活躍することをサポート 2) 待機児童問題に影響されことなく、望むタイミングで復職をサポート ・休職中のPC貸与（イントラネットとメールへのアクセスを可能に） ・MMケアルーム（搾乳室） ・介護に関する外部相談窓口 |
|---|--|

目次	Corporate direction			環境		社会性			ガバナンス		データ集		◀ 104 ▶ ↺
社会性に関する方針・考え方	人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達	地域社会	Power of employees	従業員の人権	DEI	従業員の能力開発	労働安全衛生		

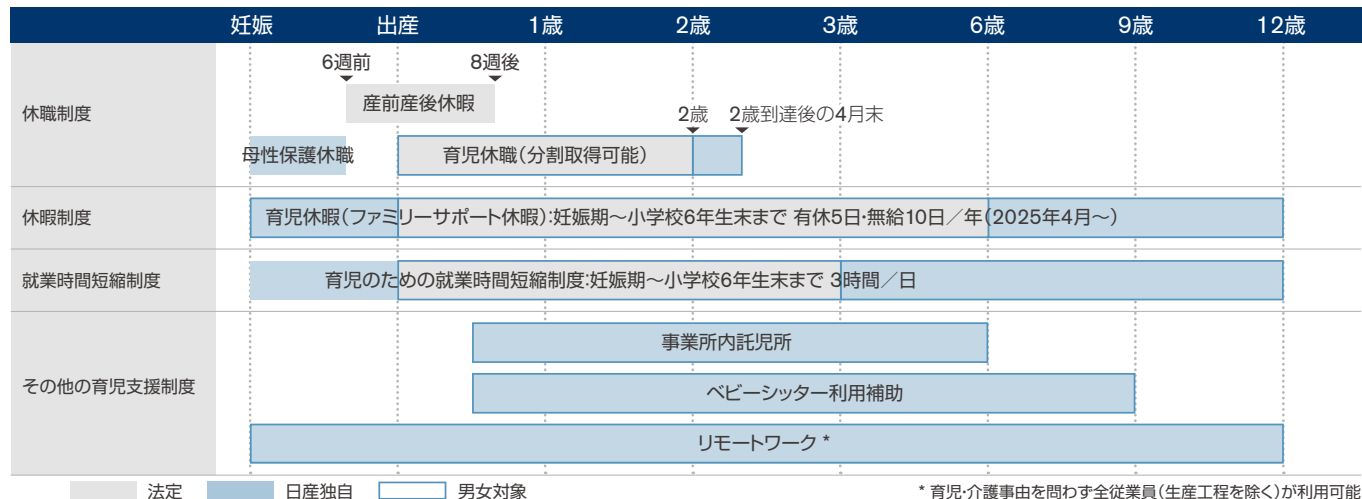
両立従業員にかかわる制度や設備などの インフラの整備について(日本): 社内託児所の設置

2005年に日産初の託児所をテクニカルセンターに開設以来、事業所を拡大中です。2017年には追浜工場に工場内初の託児所を開設しました。

2022年4月には事業所内5つ目となる託児所「まーちゃん

ど・よこはま」を横浜工場内に新たに開設しました。現在では、日産テクニカルセンター／日産グローバル情報システムセンター／グローバル本社／追浜工場／横浜工場に事業所内託児所を開園しています。開園時間は各事業所／工場のシフト勤務に対応しており、工場で働く従業員の就業継続を支援しています。

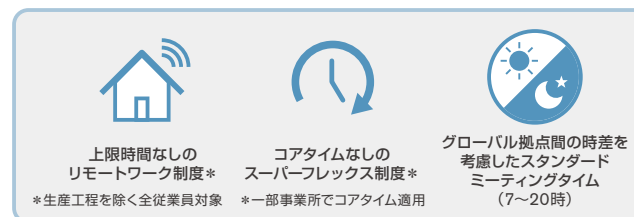
日本国内の出産から育児までの諸制度



多様な働き方の推進

多様な従業員が最大のパフォーマンスを発揮できるよう、働く環境の整備を行っています。

日産のリモートワーク制度は、2006年に育児・介護両立従業員を対象に在宅勤務制度を導入して以来、従業員やマネジメントの意見を反映し、場所の拡大や部分在宅の導入や対象者を拡大し、進化してきました。2021年には制度拡大のため利用上限時間を撤廃しました。



働き方改革「Happy8」

主な取り組み															
Happy8プログラム	2015年に、「誰もが1日8時間」という時間を意識した働き方改革「Happy8」を導入しました。全員が1日8時間の業務時間を意識することで、個人と組織の生産性を上げ、仕事、生活、健康も充実させる取り組みです。														
Happy Friday	毎月最終金曜日には15時退社を推奨する「Happy Friday」を2017年2月から導入し、ワークライフバランスの充実に推奨しています。														
Happy8サーベイ	毎年働き方に関する意識調査を行い、働き方や制度に対する従業員の声を定期的に拾い上げ、ニーズや実情に即した柔軟な制度更新につなげています。 過去のHappy8サーベイから制度化されたもの <table border="1"> <tr> <td>2019.5～</td><td>自宅に準じる場所(配偶者もしくは二親等以内の親族宅)への勤務拡大</td></tr> <tr> <td>2020.10～</td><td>公共の場所へ勤務拡大</td></tr> <tr> <td>2021.1～</td><td>ファミリーサポート休暇の1時間単位取得</td></tr> <tr> <td>2021.6～</td><td>リモートワーク時間の上限撤廃</td></tr> <tr> <td>2023.7～</td><td>健康推進支援サービス</td></tr> <tr> <td>2023.8～</td><td>セルフキャリアアドック</td></tr> <tr> <td>2024.4～</td><td>ライフサポート休暇</td></tr> </table>	2019.5～	自宅に準じる場所(配偶者もしくは二親等以内の親族宅)への勤務拡大	2020.10～	公共の場所へ勤務拡大	2021.1～	ファミリーサポート休暇の1時間単位取得	2021.6～	リモートワーク時間の上限撤廃	2023.7～	健康推進支援サービス	2023.8～	セルフキャリアアドック	2024.4～	ライフサポート休暇
2019.5～	自宅に準じる場所(配偶者もしくは二親等以内の親族宅)への勤務拡大														
2020.10～	公共の場所へ勤務拡大														
2021.1～	ファミリーサポート休暇の1時間単位取得														
2021.6～	リモートワーク時間の上限撤廃														
2023.7～	健康推進支援サービス														
2023.8～	セルフキャリアアドック														
2024.4～	ライフサポート休暇														

パートナーシップとコミュニティへの拡大

日産は、DEIの考えや活動の適用範囲を、社内にとどまらず、ビジネスパートナーや地域社会にも拡大していくことで、よりインクルーシブな世界の実現に向けて積極的に貢献していきます。

主な取り組み(日本)	
学校との連携	自動車業界および日産の仕事内容、従業員の経験談についての職業講話を行っています。
大学との連携	役員層による講演や、東京大学グローバルリーダー育成プログラムへの寄付を行っています。
TRP(東京レインボープライド)	LGBTQ+当事者ならびにその支援者(Ally)と共に、性的指向および性自認にかかわらず、すべての人が差別や偏見にさらされることなく、より自分らしく生きていくことができる社会の実現を目指し、イベントへの協賛および出演、パレードに参加しています。
D&Iかながわメンバーズに参画	すべての人が個性と力を発揮できるジェンダー平等社会の実現を目指す主旨に賛同し、取り組みに参画しています。
日産グループ各社との連携	各社DEI推進担当者間の活動共有とネットワーキングを目的に、定期的に全体会議や情報交換などを実施しています。
他社とのDEI意見交換会	日産自動車の過去20年に渡るDEIに関する取り組みの紹介や、参加企業同士の対話の場として実施しています。

海外拠点での実績

米州での取り組み

米州の日産グループは、従業員・お客さま・取引先を含むすべての個人が尊重され大切にされ意見が聞き届けられていると感じることのできるような文化の醸成に真剣に取り組んでいます。この使命は、世界中で当社の製品を製造、販売、使用する広範囲にわたる人々によって支えられています。私たちは、一人ひとりの従業員がその能力を最大限に発揮できる環境の整備に努めており、ともに成長するためにそれぞれの異なる個性を大切にしています。

2024年度には、リーダーシップ目標を推進するための43,820時間もの研修時間を含む効果的なアクションや取り組みを通じてDEIを拡大しました。インクルーシブな会話を促進し日産の文化改革の要となるOUR Nissanワークショップには、92%の従業員が任意で参加しました。これらのワークショップはリーダーとチームの間での安全な会話の場作りを強化します。「OUR Nissan」と「多様性のビジネスケース」という2つの戦略的トピックを通じ、私たちは信頼を深め、理解を促進し、アメリカ全域でビジネスの成功を推進するためにDEIが果たす重要な役割を明確にしました。

南米では、2024年にDEIディーラージャーニーが著しく前進しました。日産のお客さまの多様性とインクルーシブな環境づくりに関する長期的なコミットメントを強化するため、新たにマニフェストの冊子を発行して、すべてのディーラーで閲覧できるように配置し、QRコードからアクセス可能なバージョンも用意しました。この取り組みは、販売店において日産

ウェイを強化し、「すべての人のための日産」をお客さまと従業員一人ひとりが感じられることを確実にするものです。

周囲への感謝を示すことはモラル、人間関係、イノベーションを高めます。2024年度に「Kudos」というデジタル賞賛ツールを通じて従業員間で送られた賞賛は18,713件（前年度比59%増）となり、賞賛文化の醸成が進みました。また、年間を通じて、3,000人以上の参加者を集めて3回のリーダーシップサミットを開催し、リーダーが頭と心でリーダーシップを発揮し続けられるようネットワーキング、学習、インスピレーションのためのプラットフォームを提供しました。トップマネジメントと、安全なつながりと透明性のあるコミュニケーションの場を作り、600人以上の参加者が個人的、専門的、ビジネス的な話題を共有しました。

日産が素晴らしい居場所であり続けるために、私たちはさらに次のような取り組みを実施しています。

- 2018年から続くアンコンシャス・バイアス・トレーニング(任意)
 - 出産や多様なニーズに対応する柔軟な勤務制度
 - 2022年からの女性のエンパワーメント原則(国連)の採択
- 日産は、敬意に基づくリーダーシップ・アプローチによって、インクルージョン、フィードバック、成長の文化を形成し続けています。従業員の81%がチェックインに参加しました。これは、目標やキャリア開発について確認し、上司とのコミュニケーションを強化するための公式なセッションです。イノベーションと信頼を促進するため、43,000時間を超えるリーダーシップ研修や、サミット、称賛、コーヒーチャットを通じた強力なエンゲージメントにより、フィードバック主導の文化を構築し、インクルーシブなリーダーシップを醸成しています。

AMIEO(アフリカ／中東／インド／欧州／オセアニア)での取り組み

2021年4月設立のAMIEO(アフリカ／中東／インド／欧州／オセアニア)*1は、地理的に広く多様な地域です。その多様性を最大限いかし、当社は100ヵ国以上で事業を展開しています。AMIEOでは、従業員の12%を女性が占めており(直接部門と間接部門の従業員の両方において)、5名の女性が要となるリーダーポジションに就いています。

社内外において確固なDEI文化を構築する使命を果たすため、主体性の確立、インクルーシブな企業文化と職場づくり、コミュニケーションと称賛、ガバナンスという4つの重点領域を定めました。

すべての個人が安心して働くことができ、受け入れられ、自分らしくいられる環境を育むことで、従業員が帰属意識を持ち、毎日ベストを尽くすことができるよう取り組んでいます。*1

2024年度には、AMIEOのチームがERG(従業員コミュニティ)ツールキットを立ち上げ、地域内でのERGを拡大しました。このツールキットは、従業員に明確な指針、ベストプラクティスの事例およびインクルージョンと専門的な成長を促進するためのリソースを提供することで、従業員を支援することを目的としています。従業員一人ひとりがつながり、経験を共有し、互いを支援する機会を十分に確保することで、ERGグループとそのメンバーは増え続けています。



AMIEO発行のDEIレポート

*1 AMIEOでの活動については、AMIEO DEI アニュアルレポートFY2023をご参照ください。 <https://reports.nissanamieosustainability.com/dei-2023/article/1/>

中国での取り組み(日産(中国)投資有限公司(NCIC)とその他中国合弁会社)

中国では、一人ひとりが力を最大限に発揮できるよう、真に多様でインクルーシブ、かつ公平な職場環境を構築しています。

DEIの浸透

コミュニケーション: DEIの浸透のために、タウンホール、スキップレベルミーティング、DEIトピックに関する従業員ラウンドテーブルを含む全方位的なコミュニケーションチャネルを確立し、部署・役職を問わず対話が生まれています。加えて、カルチャーアンバサダーやDEIリソースサイトは従業員のエンゲージメントを高めています。

トレーニング: DEIへの理解をより深めるため、多くの研修を実施しました。

リーダーシップトレーニングや世代間リーダーシップワークショップを通じて、リーダーにDEIツールを提供しています。また、DEIに関するe-ラーニングおよびアンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)と心理的安全性に関するe-ラーニングを実施しました。

インクルーシブな職場づくり

柔軟な勤務体系: 従業員が個人のニーズに基づいてより柔軟に勤務できるようになっています。

社内ポリシーの見直し: 社内ポリシーと規則を、DEIの原則に沿って見直しました。採用プロセスにおいて、性別、年齢、または個人的な背景に基づきいかなる差別もありません。すべての採用募集で公平な機会を積極的に提供し、公正で偏りのない履歴書審査を実施しています。

ERG(従業員コミュニティ): 経営陣が支援するERGは、ネットワーキングと成長の機会を提供し、帰属意識を育みます。2024年には、ERGによって「効果的なコミュニケーション」と「異文化統合」という2つの重要なトピックに関するイベントが実施されました。

ジェンダーダイバーシティ: 2024年度には、以下のような多くのジェンダーダイバーシティ関連の取り組みを実施しました。

- ・包括的な産休、育休、介護休暇を着実に実施し、家族のケアをする従業員のニーズに応えています。
- ・定期的な個人育成計画(IDP)／キャリア開発計画(CDP))により、女性従業員のキャリア開発を促進しています。スキルギャップを解消してキャリア目標を設定し、成長の機会を得るために一人ひとりに合った明確なロードマップを提供しています。女性従業員のキャリア志向に沿ったリソースを提供することで、IDP／CDPは公平なキャリア構築と長期的な定着を促進しています。
- ・国際女性デーにメンタルヘルスに関するワークショップを開催しました。

若い世代の育成: 若い世代の育成を目的とし、次のプログラムを実施しました。

- ・カルチャーアンバサダープログラム、クロスファンクショナルチーム(CFT)プロジェクトへの参画、経営陣とのスキップレベルミーティングを通じて、若い世代の活躍の機会を広げています。
- ・若手従業員とのコミュニケーション強化を図るメンタリングプログラムへ経営陣が積極的に参加しています。

ASEANでの取り組み

ASEANでは、DEIを通じて人々の価値を創造し、尊重することに取り組んでいます。主な活動は次の通りです。

女性の活躍促進

男女平等を促進し、女性の多くの貢献をたたえるために、国際女性エンジニアリングデーおよび国際女性デーを祝いました。これらは、経営陣によるコミュニケーション、従業員の声、女性の育成活動を通じて実施されました。

機会均等への取り組み

一人ひとりのキャリアを実現するために、経歴にかかわらず日産は公平な機会を提供しています。そのため、当社では従業員が自身のキャリア開発や能力開発計画を作成できるように研修を進めています。従業員のニーズに合った講師主導型の研修に登録することを奨励し、インクルーシブな職場づくりを促進しています。協力的な議論、スキルフルな会話、フィードバックの取得に関するトピックが含まれる研修を開始し、クロスファンクショナルな学習と成長を促進するために、より広範な地域メンタリングプログラムも開始しました。

ウェルネス月間

心理的な問題への対処方法に関するセミナー、アート活動、個別カウンセリングを含むメンタルヘルス週間など、身体的および精神的健康プログラムや活動を通じて従業員のウェルビーイングを促進しています。

従業員感謝デー

部署・役職にかかわらず、上司、同僚、チームメンバーに感謝を表す機会として、「従業員感謝デー」を実施しています。全従業員への感謝の気持ちを込めて、さまざまな活動が実施されました。表彰プログラムは、利便性の向上、表彰の機会均等およびプロセスの改善を図るために人事システムWorkdayに組み込まれました。

DEIトレーニング：すべての従業員がDEIについて学び、職場でどのように適用できるかを理解するためのe-ラーニングを開始しています。

日産のDEIに対する外部評価

日産のDEIへの取り組みと、従業員の多様性を重視する姿勢は、社外からも高い評価を受けています。

日本

くるみん認定

2015年に、神奈川県で初めて「プラチナくるみん」企業に認定。「子育てサポート企業」として認定された企業のうち、さらに一段高い水準の取り組みを行った企業が認定を受けるもので、輸送用機器業界として初の認定取得。



えるぼし

厚生労働省による女性の活躍推進に関する状況などが優良な企業を対象としている。2017年に、最高位である3段階目の認定取得。



PRIDE指標

LGBTQ+などの性的マイノリティに対する取り組みを評価。2017年に日本の自動車会社として初めて受賞して以来、8年連続、最高ランクの「ゴールド」を受賞。



目次	Corporate direction	環境	社会性	ガバナンス	データ集
社会性に関する方針・考え方	人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達
地域社会	Power of employees	従業員の人権	DEI	従業員の能力開発	労働安全衛生

海外*1

地域	受賞・認定企業	年	タイトル	主体団体
米州	北米日産会社	2025	Platinum Sponsorship Award	NAACP – Murfreesboro Branch
		2025	Diamond Sponsorship Award	African-American Society of Williamson County
		2024	All-Time Top Corporation	Women's Business Enterprise National Council (WBENC) (米国)
		2024	Corporate Sponsor of the Year	100 Black Men of Dallas
		2024	Award of Appreciation	National Society of Black Engineers
		2024	Great Place to Work United States (2年連続)	Great Place to Work
		2024	All Stars Business Partner	Metropolitan Nashville Public Schools – Academies of Nashville
	カナダ日産自動車会社	2024	Great Place to Work Canada (6年連続)	Great Place to Work
		2024	Canada's Most Admired Corporate Cultures™	Waterstone Human Capital
		2024	Excellence Awardee for Diversity & Inclusion	Human Resources Director Canada
	メキシコ日産自動車 エヌアールファイナンスメキシコ	2025	Best Places to Work LGBTQ+ Mexico (エヌアールファイナンスメキシコ5年連続、メキシコ日産自動車4年連続)	Human Rights Campaign Equidad MX
		2024	Top Company for Women (3年連続)/Super Company (4年連続)	Top Companies – Expansion
	南米の日産全体 (アルゼンチン、チリ、ブラジル、ペルー)	2024	Great Place to Work for Argentina, Chile, Brazil and Peru (3年連続)	Great Place to Work
		2024	Best place to Work LGBTQIAP+ (初受賞) for Nissan Argentina, Chile and Brazil	Human Rights Campaign
		2024	Racial Equality (2年連続) for Nissan Brazil	Instituto de Identidades do Brasil
		2024	Most inclusive companies for automotive (2年連続) for Nissan Brazil	Automotive Business
AMIEO アフリカ/中東/インド/欧州/オセアニア	英国日産自動車会社 (NMGB)	2024	Outstanding Corporate Social Responsibility Award	Metro
		2024	Pride365認証 (4年連続)	InterPride (英国)
	豪州日産自動車会社/ 日産ニュージーランド社	2024	Great Place to Work	Great Place to Work
ASEAN	フィリピン日産社	2024	Best Employer Brand 2024	Employer Brand Institute of India

*1 これまでに外部団体から認証された主なDEIの取り組みについては、こちらをご覧ください。 >>>P159

従業員の能力開発

従業員の能力開発に関する方針・考え方

日産は能力開発プログラムを通して従業員のエンプロイアビリティを向上させることにより、大きな変革が続く社会に対応できる人財を育成し、社会に価値を提供していきます。そして、従業員一人ひとりが高いレベルのスキルを有しモチベーション高く働ける会社であり続けるために数々の取り組みを行っています。何よりも、従業員一人ひとりが自発的に学ぶ姿勢を大切に、それぞれの能力やポテンシャルを発揮し、会社と従業員が共に成長し続ける企業文化の醸成と人財育成に取り組んでいます。

従業員の能力開発に関するマネジメント

人事制度の継続的な改善

日産では「人／個人」と「組織／会社」の対等な関係の下、双方の中長期的な発展・成長を後押しするために、継続的に人事制度の改善に努めています。100年に一度と言われる自動車産業の大変革期を迎える中、2025年度には、人財マネジメントの基盤ともなる等級・評価・処遇の各制度を大幅に刷新しました。キャリア実現にオーナーシップを持つ従業員が、自ら積極的に能力開発を進めるだけでなく、それらを

後押しする職場上司による部下育成の支援や、PCC／PMDプログラム*1を通じた共通の価値観の具現化を進めています。具体的には、2024年度から2025年度にかけて評価制度を刷新し、従来の日産ウェイの5つの価値観に加え、日産リーダーシップウェイの4つの価値観を評価指標に導入しました。これは日産ウェイの実践を支える行動基盤として、従業員ひとり一人が取るべきリーダーシップの価値観と行動を具体的に定義したものです。

新制度においては、①企業文化改革の推進、②人財育成の質の向上、③未来志向の評価とコミュニケーションを狙いとし、さまざまな見直しを取り入れています。

- ① 企業文化改革の推進：コーポレートパーパスおよびDNAである「イノベーションをドライブし続ける」「他のやらぬことを、やる」に立ち返り、一人ひとりの積極的なチャレンジを促進・奨励すべく、従来の目標管理を中心とした評価体系の見直しを行いました。
- ② 人財育成の質の向上：従来の制度では、「結果」と「行動」を別体系で評価し、賃金／年俸と賞与というそれぞれ異なった処遇項目へ繋げてきましたが、25年度より、貢献度評価として「結果」と「行動」を包括的に評価・フィードバックし、報酬へと反映することで、成長実感や努力が報われたという実感を得やすい仕組みへと見直しを行いました。
- ③ 未来志向の評価とコミュニケーション：従来は異なった

サイクルで「結果」と「行動」の評価を行っていましたが、サイクルを統合することで、同じ上司・部下関係でさらなる成長に向けた対話の機会を持ちやすい仕組みへと見直しを行いました。

今後も、長期ビジョン「Nissan Ambition 2030」に沿って人事諸制度および人財育成プログラムの継続的な見直しと再構築を行っていきます。

自律的なキャリア形成を支援

日産では、従業員のキャリア形成へのサポートを目的とする上司とのキャリア面談を、全従業員を対象に年3回実施しています。「貢献度評価」と併せて、従業員一人ひとりが上司と話し合いのうえ、自らのキャリアに関する合意を形成していきます。面談における成長・キャリア形成の支援策を充実させるため、上司の評価スキルを向上させる研修プログラムの運用や、従業員が主体的にキャリアプランを考えるためのガイドやe-ラーニングを運用しています。評価を支援する専用システムもあり、上司が代わっても過去の評価内容が一目で分かり、評価・育成の取り組みの一貫性を保つようにしています。さらにキャリア面談に関する従業員の声を吸い上げ、評価に対する理解度・納得度などの運用状況を把握するため従業員に対してサーベイを実施し、必要な対策実施や運用改善につなげています。従業員のキャリア面談満足度も毎年モニタリングを行い、評価に関する理解度・納得度は向上しています。

*1 PCCプログラム：日産の一般層の評価・報酬制度。Performance, Competency, Careerを略してPCCプログラムと呼び、業務を遂行する上でコアとなるスキルやコンピテンシーを軸に、「キャリアコース別役割等級制度」、「評価制度」、「報酬制度」、「キャリア」の4つの仕組みから構成される。
PMDプログラム：同じく部課長向けの評価報酬制度を指す。PMDはPerformance Management and Developmentの略。

一方、従業員が自ら希望する仕事にチャレンジする仕組みとして、日本では「シフトキャリア制度」と「オープンエントリー制度」を用意しています。「シフトキャリア制度」は、ポストの募集に関係なく、自ら希望する部署や職種に自由に応募できる制度です。「オープンエントリー制度」は、ポストの募集があればその部署に応募できるもので、2024年度は約592のポストに191人がエントリーし111人が合格しています。

シニア人財の活躍支援

日産自動車では、ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン(多様性、公平、受容)の理念に基づき、高い専門性と経験を有するシニア従業員が、年齢に関係なく継続的に活躍できるキャリアステージとして、2013年4月に「シニアパートナー制度」を導入しました。この制度はシニア層のキャリアに関する多様なニーズと会社のニーズを両立する柔軟な働き方を整備し、60歳定年退職以降の就労機会を提供するものです。制度導入時、200名強であったシニアパートナーは、2024年末現在、約2,700名へと拡大し、さまざまな職種やおのおのの持ち場・立場で活躍されています。

また、2023年度には処遇や定期面談の仕組み等も見直し、より個々人の経験や能力に見合った期待値を揭示し、その貢献度に応じた処遇を実現することで、組織の一員としてモチベーション高く、業務の推進・後進の育成に取り組んでいた環境を整備しました。さらには、一定の基準を満たしたシニアパートナーには、65歳以降70歳まで、継続して活躍いただける仕組みも同時に導入し、シニア従業員のライフプランの選択肢がますます広がっています。

学習機会の提供



日産では、「従業員は会社における最も重要な資産であり、その育成が重要である」という考えをもとに、従業員それぞれのキャリアビジョンの実現に向けて、スキルを高め、知識を深められるように、マネジメントスキル、ビジネススキル、リーダーシップ開発など多様なプログラムを提供しています。また、今のモビリティ産業では特に重要となる、電動化、コネクテッド、自動運転、デジタル、先進技術といった分野のスキルを習得する機会も提供しています。具体的には個々のキャリアステージに合わせた層別の必須研修に加え、自らの関心のあるものを選び受講できる選択研修、自主学習を促進するグローバル共通のe-ラーニングコンテンツの拡充など、学び、成長し続ける組織文化の醸成に努めています。学習を促すためにテクノロジーを活用し、学び体験の充実化を図っています。時代の変化に合わせ、対面での集合研修からオンライン研修へのシフトも積極的に進め、個々人のモバイル端末を活用した学習など時間や場所にとらわれない効率的な学習環境の整備にも意欲的に取り組んでいます。

日産ラーニングセンター

技術革新やハイテク化が急速に進む自動車業界において、グローバル競争をリードする日本のモノづくりを維持・発展させるためには、先進的なクルマづくりやテクノロジーを理解するとともに、マネジメント能力と豊かな人間性を備えた人財が求められます。モノづくりの中核を担うリーダー層の継続的な育成と、次世代への技術・技能伝承を目的に、日産では「日産ラーニングセンター」を設置して学習機会の提供を行い、人財育成の活動を強力に推進しています。「日産ラーニングセンター」は、進化した日産ウェイの実践を通して成果を出し続けることができる「日産DNA」を持った技術者・技能者などの育成を目的に、さまざまなプログラムを実行しています。近年では受講機会の拡大などを目的に講座のオンライン化、オンデマンド化も進めており、AI、IoTを含む技術講座など178講座を提供しています。

日産ソフトウェアトレーニングセンター(STC)

2017年、日産先進技術開発センター(NATC)の中に日産ソフトウェアトレーニングセンター(STC)を開所し、クルマとソフトウェア開発の両方のスキルを持つ技術者の育成・スキル向上に努めています。CASEの進展により、ソフトウェアがクルマの競争力の源泉となることから、知識の習得と実装を学ぶSTCのプログラムを通して、デジタル化に対応した人財の育成を行っています。2017年の開所以来、21期、延べ681人の従業員が卒業(リスキリング完了)しました。

目次	Corporate direction			環境		社会性		ガバナンス		データ集		◀ 111 ▶ ↺
社会性に関する方針・考え方	人権	安全	品質	知的財産	責任ある調達	地域社会	Power of employees	従業員の人権	DEI	従業員の能力開発	労働安全衛生	

グローバルに展開する技術・技能教育

日産のグローバル展開をより強化するには、全世界で働く従業員一人ひとりの技術力を一層向上させることが不可欠です。研究開発部門および生産部門では、日本ならびにすべての地域で従業員の技術力を高めることができるよう、成長の機会を平等に提供しています。

技術員教育

世界共通の基盤教育プログラム グローバルトレーニングプログラム(GTP: Global Training Program)を、2012年から全世界の開発拠点のエンジニアに対し実施しています。さらに近年は、アドバンス教育として、より専門性の高い教育の企画を推進し、自動運転・コネクテッドカーの研究開発を担える人財を育成するために電気自動車、自動運転技術、コネクテッドカーサービスの教育に力を入れています。

技能員教育

日産はグローバル共通の生産方式である日産プロダクションウェイ(NPW: Nissan Production Way)のコンセプトに基づき、すべての原則と基準を策定しています。現場監督者の業務管理レベルを向上させるため、日産グループ共通のNPW教育プログラムを持ち、NPWの浸透と実践を目指しています。

マネジメントの質の向上

日産ではグローバルレベルで全社をあげたリーダーシップ・マネジメントの質の向上に取り組んでいます。2024年1月には、頭で考えるだけでなく心で感じるリーダーシップの価値観と行動を示した「日産リーダーシップウェイ」を明示しました。「日産リーダーシップウェイ」の導入にあたっては、経営層や部長職が自ら旗振り役となり、それぞれの部署での理解浸透に向けた対話やワークショップを実行し、変革意志の発信を行ってきました。2024年度には、部長層向けに、日産リーダーシップウェイの実践を通じた自組織改革への取り組み目的とした研修を新規に導入しました。2025年度以降は、主に新任部長層向けに継続的に実施予定です。

2021年度以降、全社の層別研修(新入社員、課長昇格時研修など)に加えた職位別の期待役割と関連づけた行動の理解促進と行動実践を継続的に行っていることに加えて、従来の研修体系についても日産ウェイや心理的安全性確保・人財育成のリーダーシップに合わせた体系に刷新し、関連するスキルやリーダーシップを強化する研修を受講できる環境を整えていきます。

また、すべての従業員に対して、学習と成長の機会を増やし、マネジメントの質を高めるため、2024年度は、Nissan Chargeというグローバル共通のフレームワークをさらに発展させ、約10,000人が学びを継続しています。さらに、2025年度にはグローバルのラーニングプラットフォームを刷新し、学びがより従業員に身近になることで成長が実感できる仕組みづくりに力を入れています。

また、中途入社者向けの受入れプログラムの改良にも力を入れており、中途入社者がより早く新しい環境に馴染んでいきいきと活躍できるよう、オリエンテーションの充実や、受入れ

上司・部署による効果的な受入れの支援、オンボーディングサーベイに基づく支援など働きやすい環境づくりにも力を入れています。

将来の経営層やリーダーの育成

日産では将来を担う経営層や専門性を持った部門のリーダーを継続的に輩出するため、戦略的・体系的な人財マネジメントの仕組みをトレーニング、ローテーション、採用などの施策に取り込み実施しています。

具体的には、将来のビジネスリーダー候補の人財を早期に選抜し、若手層、ミドルマネジメント層、グループ全体のマネジメント層など、成長段階に合わせて、各人の強みや育成課題を明確にし、各種育成プログラムを実施しています。

また、将来を担う人財が、経営層やリーダーとして必要な経験を得られるよう、部門や地域をまたぐローテーションを戦略的・計画的に実施し、マネジメントポストやグローバル機能を経験できる機会を提供しています。さらには、電動化や自動運転化、カーシェアリング、インターネットとのつながりなど、自動車を所有する時代から新たなモビリティサービスを創出する時代への変革期にあり、従来の自動車ビジネスの枠を越えた、新しいビジネスをけん引できるリーダーの育成にも取り組んでいます。

また、将来のリーダー候補のパイプライン醸成のために、若手層には日産の海外拠点に長期間出張し、現地のチームとともに課題解決に取り組む「Global Challenge Program」を提供しています。従業員一人ひとりの自発性をいかすという観点から、自薦方式で挑戦することが可能です。採用においては、新卒採用だけでなく、経験者やミドルマネジメントレベルでも外部の優秀な人財を獲得するなど人財の充実を図つ

ています。こうした人財マネジメントの仕組みを確実に運用するため、経営層による人事会議を定期的の実施し、人財の特定、育成計画の立案と実行、後継者計画の策定を行っています。また、経営層自らが将来のリーダー候補者と直接対話する機会を設け、部門や地域を越えた人財育成施策の議論に積極的に参画しています。こうした戦略的人財マネジメントシステムは、グローバル共通の枠組みを持ってリージョン間でも人財や制度の連携をしつつ、地域、部門の各レベルにおいて活発な議論がなされています。

日産の技術や専門特性を伝承する「エキスパートリーダー制度」

企業が持続的に発展するためには、従業員一人ひとりの専門知識やスキルを中長期的に高めていくことが重要です。日産では技術系に限らず、購買など非技術系も含めたさまざまな領域での専門性の強化・発展を目的として、「エキスパートリーダー制度」を導入しています。2024年度は制度導入19年目を迎え、85の専門領域で48名のエキスパートリーダーと2名のフェローが活躍し、それぞれの領域で専門性を発揮しながら、日産のビジネス全体に貢献しています。

また、イントラネットをはじめとする社内のさまざまなコミュニケーションツールを介して専門知識を共有するとともに、技術・専門性の伝承を目的としたセミナーや講座を実施して、次世代の人財育成を行っています。

全社研修体系図

必修研修

新部長 研修	役割・コンピテンシー オリエンテーション
新課長 研修	人事評価 マネジメント
	ダイバーシティ マネジメント／ インクルージョンシアター
	ハラスメント防止
	役割・コンピテンシー
新課長補佐 研修	役割・コンピテンシー・キャリア
担当 研修	キャリア
入社3年目 研修	受け入れ研修 / e-ラーニング
新入社員研修	受け入れ研修 / e-ラーニング
中途入社者研修	受け入れ研修 / e-ラーニング

選択研修・選抜研修 *1

	一般層		部課長層	
	担当	課長補佐	課長	部長
対面／オンライン			クオリティ マネジメント	
		チーム・リーダーシップ		
		信頼文化の構築		
		マネジャー向けコーチング研修		
	コーチング研修			
	プロジェクト マネジメント			
			V-エキスパート研修*2	
		V-パイロット研修*2		
	V-FAST ファシリテーター研修*2			
	V-up基礎研修*2			

従業員の能力開発の実績

日産自動車株式会社の研修実績 (年度)

研修実績にかかわる指標	2022	2023	2024
年間延べ受講人数	519,905	514,187	549,382
総受講時間(時間)	392,294	358,597	405,861
従業員1人当たりの 平均受講時間(時間)	16.5	14.9	16.8
受講満足度 (最高点:5.0)	4.2以上	4.2以上	4.2以上
従業員1人当たりの 投資(円)	75,000	76,000	63,000

*1 その他専門性知識・スキル開発のための研修を、対面やe-ラーニングで100以上整備しています。

*2 日産が開発した課題解決プログラム「V-up」に関する研修

労働安全衛生

労働安全衛生に関する方針・考え方

国や地域、部門を問わず、当社事業活動において、労働安全と健康が最優先であることを示し、事業のあらゆる場面で人の安全と健康が尊重される企業風土を醸成するため、日産では労働安全衛生グローバルポリシーを設けています。

同ポリシーでは、共通の価値観として「働く仲間の安全と健康は全てに優先する」を掲げ、基本方針を「私たちは、トップから社員一人ひとりに至るまで、全員が人間尊重の考え方を共に認識し合い、職場環境や業務プロセスの最適化、心身にわたる健康増進を積極的かつ継続的に進め、災害や疾病のない明るく活気ある職場づくりを推進する」としています。

また、以下の8つの領域を主要な項目として具体的なポリシーを規定するとともに、役員から従業員一人ひとりが持つ安全衛生に関する役割と責任についても規定しています。

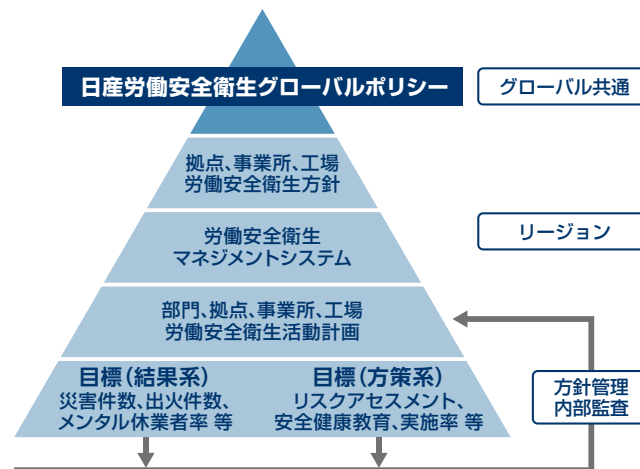
1. コンプライアンス遵守
2. 安全衛生活動計画とモニタリング
3. 設備、作業計画時の事前安全衛生評価
4. 構内協力会社管理
5. 安全衛生教育、作業指導
6. 災害事故の報告と類似災害事故防止
7. 健康増進
8. 感染症対策

日本、海外の拠点では、「労働安全衛生グローバルポリシー」に基づき、労働環境の安全衛生面に関する統一的なマネジメントを実施しています。

日産では、労働組合との間で締結する労働協約において労働安全衛生、健康推進を重視し、職場の安全・健康活動を推進しています。

長期的な視点では2030年に向けて、従業員が継続的に安全、安心、健康に働くことができるいきいきとした職場を維持向上していくことを目指して取り組んでいます。また、取り組みを通じて生産性の向上だけでなく、より質の高い従業員の健康・安全・幸福の実現という形で社会に価値を提供していきます。

日産労働安全衛生グローバルポリシーの位置づけ



労働安全衛生に関するマネジメント

日本では、毎年1回「中央安全衛生委員会」を開催しています。人事担当役員が議長となり各事業所や労働組合の代表が出席して、「労働安全」「防火」「メンタルヘルス」「健康管理」「交通安全」などをテーマに1年の活動を振り返り、次年度の活動計画を決定しています。各事業所では毎月「安全衛生委員会」を開催し、労働組合の代表者出席のもと、活動の進捗管理を実施しています。職場ごとには「安全衛生推進員」および「交通安全推進員」を委嘱し、実効性のある日常安全衛生活動の推進にあたっています。

グローバルでは、それぞれの拠点でPDCA (Plan-Do-Check-Act) サイクルを回しています。毎年2回、グローバルの全事業所とリモート会議で、情報共有や議論を行っているほか、労働安全衛生に関する世界各地の担当マネージャーが集合する「グローバル安全会議」を隔年で開催しています。^{*1} また、日本国内外の事業所で、各国政府の指針に沿った労働安全衛生マネジメントシステム (OSHMS) を導入し、多くの事業所ではISO45001^{*2} へも対応しており、労働安全衛生活動が確実に実施される体制を整備しています。

感染症対策の取り組みとして、従業員および関係者の安全確保を最優先として感染症対策の強化に取り組んでいます。事業継続性を維持しながら社会的責任を果たすため、BCPの策定と即時対応体制の構築や感染性胃腸炎蔓延防止のための講習会などを実施しています。

^{*1} 2020, 2021, 2022年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、集合形式での開催を見送り。

^{*2} ISO45001：労働安全衛生マネジメントシステムの国際規格。

労働安全衛生の実績

安全の取り組み

労働安全基準をグローバルに標準化

日産では、独自に開発した安全・防火リスク管理診断手法を導入し、職場に潜む労働災害および出火リスクを積極的に洗い出し、その対応策を講じています。

安全な職場づくり

日本、海外の全拠点で労働災害や出火リスクを事前に検出し、摘みとるツールとして日産独自の「SES (Safety Evaluation System)」と「F-PES (Fire-Prevention Evaluation System)」を導入しています。決められた評価基準をもとに職場パトロールを実施し、会社トップから一般従業員まで統一した視点で職場に潜む労働災害や出火リスクを検出する仕組みです。これらの活用により、労働災害や出火の低減に効果を上げてきました。

また、生産の現場で作業員一人ひとりが災害リスクに気づき、発生を未然に防げるよう、日本の事業所では危険予知トレーニング(KYT: Kiken Yochi Training)を2011年から組織的に継続して実施しており、各職場に広く定着し、職場の設備や作業に対して危険予知による災害の未然防止の活動が継続して計画的に実施されています。

その他にも、リスクアセスメントを活用して職場内のリスクを

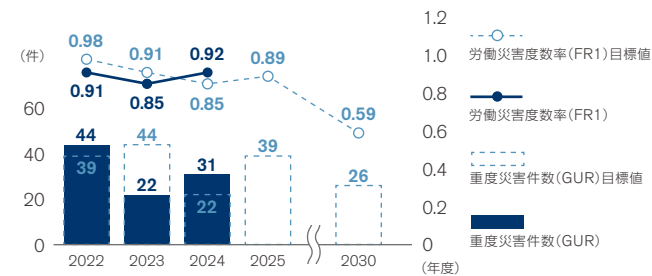
抽出し、対策を実施する活動を行っています。職場内のリスクをしっかりと抽出することができる人づくりとして、リスクアセスメントの教育も実施しています。教育を受けた従業員が設備や作業に対してリスクアセスメントを行い、安全対策を実施していくことで安全な職場づくりにつなげています。

グローバル生産拠点で発生した労働災害および出火事故については、共通の報告基準を定めており、発生拠点の責任者は速やかに日産自動車株式会社に報告、速やかに発生状況と対応策を各拠点と共有し、類似災害の再発防止に努めています。

日産は労働災害の包括的なモニタリングを目的に、労働災害度数率(FR1)*1および重度災害件数(GUR)*2の指標を採用しており、それぞれの進捗を管理しています。労働災害度数率は2030年度に向けて2020年度実績値の半減を目指す形で毎年の目標を設定し、死亡事故に関してはゼロとすることを目指しています。

2024年度のモニタリングの結果、労働災害度数率は前年度を上回る0.92、重度災害件数は31件を確認し、そのうち死亡災害は2件2名(日産グループ1名、日産グループ外1名)でした。

労働災害度数率および重度災害件数(グローバル)



*1 労働災害度数率(FR1: Frequency Rate 1): 予め定義された症状を伴う災害の度数率(予め定義された症状を伴う災害件数)×1,000,000/総労働時間×1.1

*2 重度災害件数(GUR): 死亡災害(G: Grave)、後遺障害を伴う災害(U: Unrecoverable)、後遺症はないが予め定義された症状を伴う重傷災害件数(R: Recoverable but serious)
 構内(日産自動車株式会社、日産自動車九州株式会社および海外生産拠点)のすべての作業員(構内パートナー企業などの他社従業員、外来者を含む、雇用形態や所属は問わず)

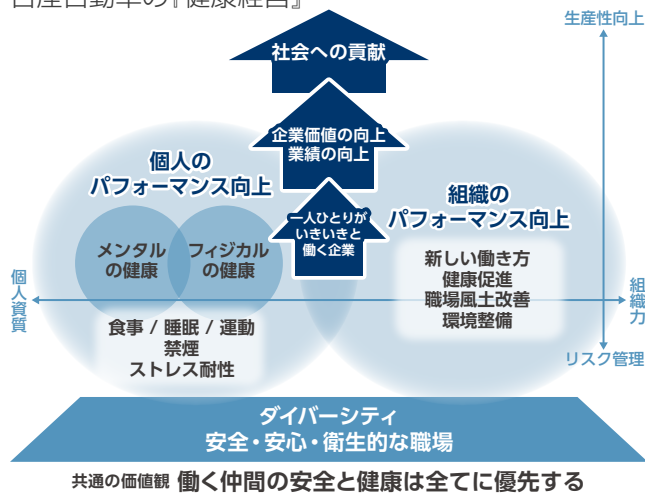
*3 WBGT: Wet Bulb Globe Temperatureの略。人体の熱収支に与える影響の大きい「湿度」、「日射・輻射など周辺の熱環境」、「気温」の3つを取り入れた指標

健康づくりとマネジメント(日本)

基本的な考え方

グローバルポリシーに則り、日産では、従業員の安全と健康は、個人だけでなく、日産が社会に貢献し続ける企業として成長していくための重要な課題と位置づけています。「日産自動車安全衛生基本方針」である「働く仲間の安全と健康は全てに優先する」を『健康宣言』として、従業員の健康を、経営的な視点で考え戦略的かつ愚直に施策を実践することで『健康経営』を実現していきます。活動の進捗を図る指標として休業率(フィジカル、メンタル)の目標をそれぞれ設定し、モニタリングしています。

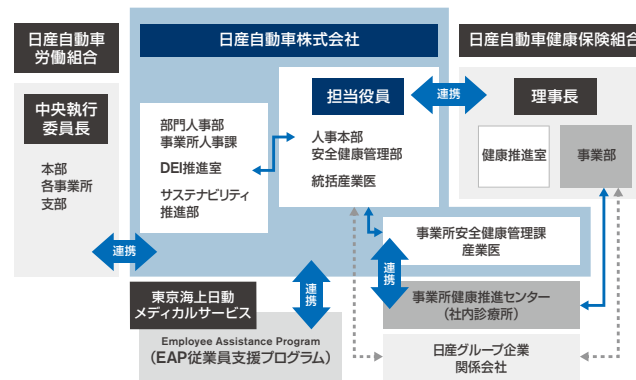
日産自動車の『健康経営』



健康推進体制

日産の健康推進は、日産自動車健康保険組合(事業所健康推進センター)、東京海上日動メディカルサービスなど医療の専門職と、人事部安全健康管理部、各事業所の安全健康推進部署および関連部署が、従業員の心身の健康のため、協働して活動を推進しています。

推進体制



健康課題への取り組み

健康推進体制下において、日本国内では、従業員の健康状態をデータによって見える化し、疾病リスクの分析、健康リスクを予測して、従業員の健康推進活動や、個別の改善プログラムの実行に取り組んでいます。より効果的な取り組みを行うため、自社の健康課題に見える化する健康経営戦略MAPを作成し、全社共通の取り組みを促進しつつ、事業所ごとにブレイクダウンした戦略MAPを作成することで、より地域性や事業所の特性をいかした健康推進活動を行っています。また、健康推進活動のマネジメント強化のため、健康経営に関する会議を体系立てて実施しています。

全社で取り組む中期計画					
健康経営戦略MAP					
健康課題	健康投資	健康投資効果			健康経営で解決したい経営課題
		健康投資施策の取り組みに関する指標	従業員の意識変容行動変容に関する指標	健康関連の最終的な目標指標	
フィジカルメンタル休業者の増加 特定の疾病の(生活習慣病に類する)リスクが向上している	健康経営の推進に基づく諸活動の実施 健康な人づくり	健康投資の結果の指標 ・イベント参加率 ・健康診断結果のフォロー ・ストレスチェック結果に基づく改善活動率 など	健康サーベイ ・食事・睡眠・運動の改善率 ・精検者率の増加 ・両立支援の拡大による満足度 ・職場改善活動の実施後アンケート など	・ワークエンゲージメント ^{*1} の向上 ・ヘルスリテラシー ^{*2} の向上 ・プレゼンティーズム ^{*3} の低減 ・アブセンティーズム ^{*4} の低減	コーポレートバーバスの実現 ↑ 一人ひとりがいきいきと働ける企業の実現

全社で心ひとつに取り組むために、各事業所の特性を活かす!



*1 ワークエンゲージメント：仕事に関連するポジティブで充実した心理状態のことで、以下の3つが揃った状態とされている。「仕事から活力を得ていきいきとしている」(活力)「仕事に誇りとやりがいを感じている」(熱意)「仕事に熱心に取り組んでいる」(没頭)

*2 ヘルスリテラシー：健康情報に基づく意思決定で自身の健康を決める力であり、以下が定義されている。

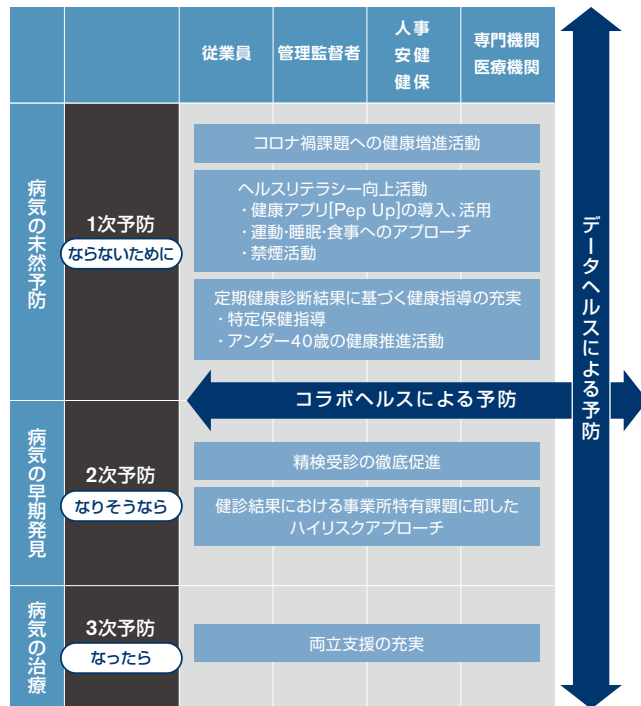
- ・健康情報入手・理解・評価・活用するための知識や意欲、能力
- ・日常生活におけるヘルスケアや疾病予防、ヘルスプロモーションについて判断や意思決定
- ・生涯を通じて生活の質を維持・向上

*3 プレゼンティーズム：従業員が職場に出勤はしているものの、何らかの健康問題によって、業務の能率が落ちている状態。

*4 アブセンティーズム：心身の不調により、業務自体が行えず、仕事を休業／欠勤している状態。

堅実に取り組むフィジカルヘルスケア

日本国内におけるフィジカルヘルスは、下記に注力しています。



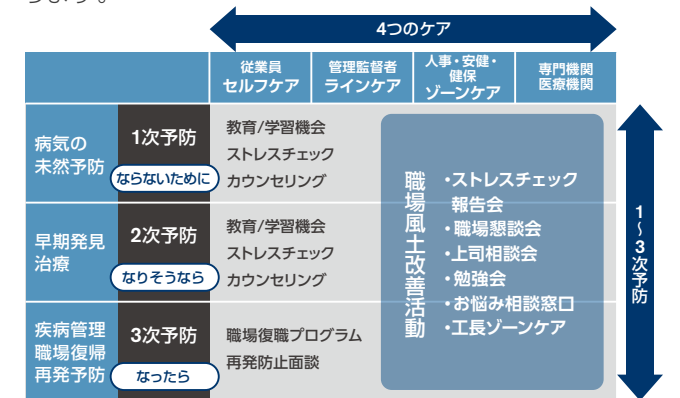
2018年より40歳未満への若年層に対し生活習慣病予防教育を継続的に行っており、参加率98%を維持しています。また、従業員の高齢化に伴う健康課題のため更年期セミナーを実施。全年齢に対する健康サポートを行っています。

『コロナ禍で増えた体重減』の活動により、肥満率は改善傾向。また口腔内の健康活動や熱中症予防としての食の活動など、さまざまな角度から健康活動を全社で推進しています。さらに2024年度からは運動に焦点を置き活動を開始しています。

2023年度にはDEI推進活動の一環としてセルフケアサポート「Cradle」導入、自分の健康のために予防も含め利用できる「ライフサポート休暇」の新設など、会社として包括的な活動により休業者減を実現しつつ、健康への意識向上による病気の未然防止など、フィジカルヘルスケアに堅実に取り組んでいます。^{*1}

包括的なメンタルヘルスケア

日本国内におけるメンタルヘルスには、下記の特徴があります。



【EAP^{*2}における『4つのケア』『1-3次予防』の実現】

- *ストレスチェックの実施による『セルフケア』の充実
- *社内アンケート結果に基づく職場風土改善活動『ラインケア』の促進
- *層別のケア『ゾーンケア』の新規導入
- *復職支援プログラムの徹底
- *社内リワークによる再発予防の強化

社内アンケートによるストレス度の解析により、職場風土の改善であるラインケアを長年積極的に取り組んできました。また、組織分析結果の報告会は全部門で行っており近年は、部門、部署ごとの報告会にこだわらず、小単位に組織分析結果報告会を行うことで改善活動の拡大につなげています。組織分析の解析と活動を進める中で、近年のメンタル休業者状況、およびストレス度の層別解析により、一部の層へのケアの必要性が明らかとなりました。日産ではそのケアを『ゾー

^{*1} フィジカルヘルスケア活動の詳細についてはこちらをご覧ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/SOCIAL/EMPLOYEE/ASSETS/PDF/Nissan_Health_Management.pdf

^{*2} EAP：Employee Assistant Programの略。従業員支援プログラム。

ンケア』と命名し、昨今の活動は以下を実施しています。

- ・新卒、中途入社者へのお悩み相談窓口体験
- ・間接業務従事者へのオンラインセッション
- ・直接員の若年層懇談会、セッション
- ・工長ゾーンケアとしての懇談会、コーチング活動

特に若年者の相談につなげるサポートとしてのお悩み相談窓口体験は年1回のカウンセリングを入社3年目まで実施し、メンタル不調者の早期発見にもつながっています。さらに2023年度からは対象者を拡大して従業員ケアを強化しています。

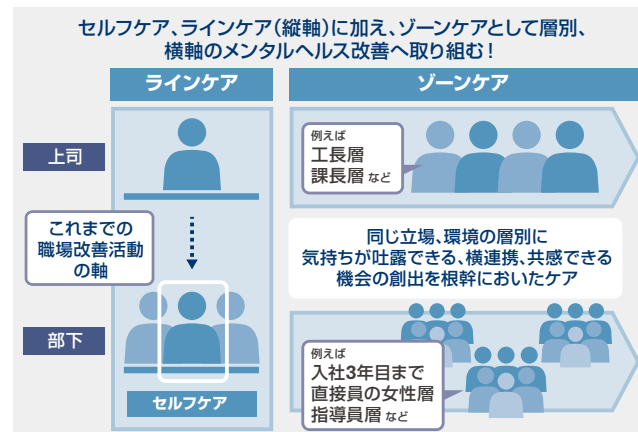
また、2019年より従業員向けのメンタルヘルスサポートとしてのセルフケア研修を、管理監督者・管理者向けにラインケア研修を実施しています。

セルフケア・ラインケア研修 (年度)

	2022	2023	2024
セルフケア研修参加率(%)	95.2	96.2	97.4
ラインケア研修参加率(%)	93.0	93.5	96.5

健康推進活動の社会的評価

日本国内において、経済産業省の健康経営優良法人認定制度を、健康推進活動のマネジメントシステムと位置づけて、取り組みを促進しています。その実績として、2019年より7年連続で健康経営優良法人(ホワイト500)に認定されています。また、従業員の健康増進のため、スポーツの実施に積極的に取り組んでいる企業として、2022年よりスポーツ庁のスポーツエールカンパニーに認定されています。



ガバナンス

ガバナンスに関する方針・考え方	119
コーポレートガバナンス	121
リスクマネジメント	131
プライバシー&データ保護	133
コンプライアンス	134

ガバナンスに関する方針・考え方

当社は、2024年3月7日に受けた公正取引委員会による下請代金支払遅延等防止法(以下、「下請法」という。)に基づく勧告を踏まえ、2025年3月5日に公正取引委員会に対し、改善報告書を提出しました。

当社は、公正取引委員会からの上記の勧告および指導を大変重く受け止め、社内遵法管理体制の整備および社内遵法意識と知識の向上を目的としたさまざまな取り組みを進めてまいりました。

社内遵法管理体制の整備として、下請法に係わる法令所管部署の設置による内部統制の強化、取引先からの相談・通報を受け付ける社外窓口の設置、取引先の声を積極的に拾い上げるための社長直下のパートナーシップ改革推進室の設置など、全社の仕組みや体制を見直し、強化しました。また、一般従業員および購買担当者を対象とした継続的な下請法教育やイベントを実施することで、再発防止の徹底および社内遵法意識と知識の向上に取り組んでまいりました。今後も、取引先との信頼の回復に努め、公正かつ適正な取引を進めてまいります。

上記を踏まえて、日産は、人々の生活を豊かにするため、信頼される企業として、独自性に溢れ、革新的なクルマやサービスを創造し、その目に見える優れた価値をすべてのステークホルダーに提供すべく、コーポレートガバナンス*1の向上を経営に関する最重要課題のひとつとして取り組んでいます。気候変動に伴うリスクと機会への対応をはじめ、社会からの

要請や社会的責任を常に意識しながら事業活動を展開し、事業の持続的な成長とともに持続可能な社会の発展に貢献していきます。

また、日産が持続可能な企業であるためには、高い倫理観と透明性、また強固な基盤を備えた体制が不可欠です。

そしてその取り組みを主体的に情報開示することが求められています。日産の事業はグローバルに拡大し、各地域で多様なステークホルダーと活動していますが、すべてのステークホルダーから信頼され続ける企業であるためには、すべての従業員が高い倫理観を持ってコンプライアンス(法令遵守)を実践しなければなりません。日産では2001年に「グローバル行動規範」*2を定めて、日産グループ全社で徹底しています。

*1 「コーポレートガバナンスガイドライン」はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/GOVERNANCE/ASSETS/PDF/Guidelines_JP.pdf

*2 「グローバル行動規範」はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/NISSAN_GCC_J.pdf

ガバナンスに関する方針・考え方

コーポレートガバナンス

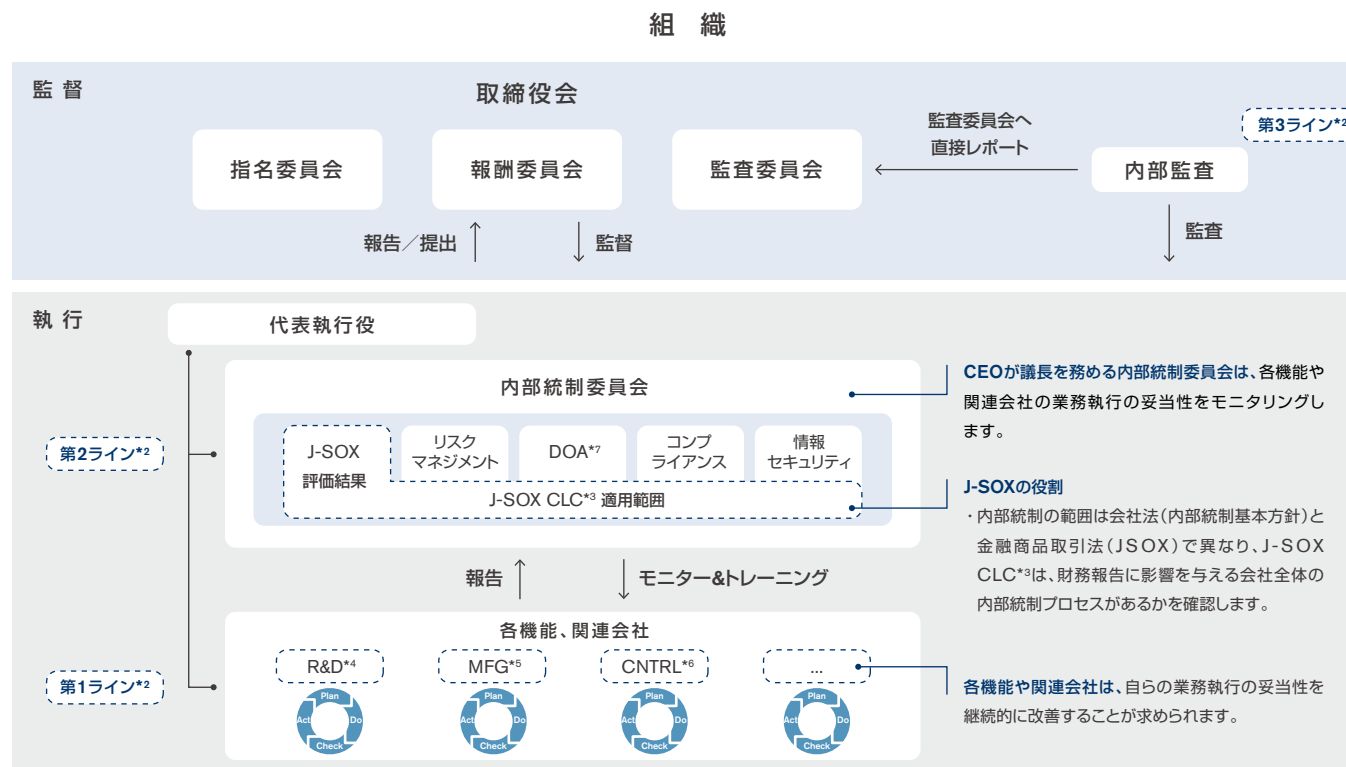
リスクマネジメント

プライバシー&データ保護

コンプライアンス

内部統制システムの基本理念

日産は、優れた価値をすべてのステークホルダーに提供することを目指し、その基盤となる健全なガバナンス体制を構築すべく、さまざまな取り組みを行っています。この基本理念のもと、取締役会では、会社法に定める内部統制システム^{*1}およびその基本方針を決議しました。取締役会はその責任において、体制と方針の実行状況を継続的に注視するとともに、必要に応じて変更・改善を行っています。2007年に設立された内部統制委員会の議長はCEOが務め、取締役会の監督下に置かれます。すべての執行役、執行役員およびその統括下の各部署、また関連会社は、議長の指揮下で連携し合い、内部統制システムのさらなる改善に努めます。



2024年7月更新

^{*1} 内部統制システムに関する詳細は2024年度有価証券報告書(P57-61)をご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/IR/LIBRARY/FR/2024/ASSETS/PDF/fr2024.pdf#page=60>

^{*2} 日産は「3つのディフェンスライン」を構築し運営することで、内部統制を効果的、効率的に機能させていきます。

^{*3} 全社統制

^{*4} R&D：研究開発 ^{*5} MFG：製造 ^{*6} CNTRL：管理 ^{*7} DOA：権限移譲

コーポレートガバナンス

コーポレートガバナンスの方針・考え方

日産は、2018年に発生した元経営者らによる不正行為を踏まえ、過度な権限集中を避け、ガバナンスの透明性を高めるために、社内の意識改革ならびにガバナンス改善などの再発防止に努めています。

当社は指名委員会等設置会社を選択し、明確な形で執行と監督・監査を分離し、意思決定の透明性を図るとともに、迅速かつフレキシブルな業務執行を実行し、内部統制、コンプライアンスならびにリスク管理体制の実効性を担保しています。

取締役会では、各委員会も含め社外取締役が過半数を占めており、報酬委員会は社外取締役のみで構成されています。さらに、取締役会議長と各委員会の委員長は独立社外取締役が務めています。

コーポレートガバナンスの体制

日産はすべてのステークホルダーに対して明確な経営目標や経営方針を公表し、その達成状況や実績を速やかに高い透明性を持って開示しています。さまざまなモニタリングシステムを活用しながら経営の健全性を維持するガバナンスの体制を構築するとともに、事業目標の達成に影響を及ぼす社内外のリスクを適切に評価し、管理しています。

日産は厳しい経営状況に対応するため、コスト構造の改善、戦略の再定義、パートナーシップの強化を柱とした経営再建計画「Re:Nissan」を策定しました。本計画の着実な実行および一日も早い業績回復を目指して、透明性のあるガバナンスを継続し、すべてのステークホルダーに対して価値を提供しながら、持続的な成長および長期ビジョン「Nissan Ambition 2030」を実現することに役員と従業員一丸となって取り組んでまいります。

取締役会の役割



取締役会の役割

- ・取締役会は、企業の繁栄および株主の利益に対して重要な責任を持つ。
- ・取締役会は、独立性を有する社外取締役の牽引により、多様な視点を持って、経営の基本方針を決定するとともに、執行役を監督する役割を担う。

取締役会の主な権限

経営の基本方針	・ 中長期事業計画 / 年度事業計画
株主総会	・ 招集 ・ 議案
選解任	・ 取締役会議長の選定 ・ 代表執行役の選定および解職 ・ 執行役の選解任 ・ 各委員会（指名・監査・報酬）の委員長および構成委員の選定および解職
会計	・ 四半期決算および計算書類 ・ 中間配当
その他	・ 内部統制に関する基本方針、等

取締役会の体制

当社の取締役会は、独立性を有する社外取締役（独立社外取締役）がけん引し、多様な視点を持って経営の基本方針を決定するとともに、執行役などの職務執行を監督する役割を担っています。

取締役会の議長および構成員の過半数（12名中8名）（2025年7月1日時点）を独立社外取締役とすることで、社外によりけん引される環境を創出しています。

また、各取締役は、国際性・ジェンダー・専門性等におけるダイバーシティ*1を有しており、これらのインクルージョンを通じて、会議全体として活発な議論と迅速な意思決定を実現することを目指しています。

重大な事項について

当社はサステナビリティ・リスク管理・内部統制／コンプライアンスを当社の経営に影響を及ぼす重要事項と位置づけ、以下の関連する方針・体制に則り、その取り組みを取締役会に伝達するプロセスを構築・運用しています。

また、2024年度を取締役会においては、以下の報告がなされ、そのうち重大な懸念事項として、下請法および独禁法に基づく関係省庁からの要請への対応に関する報告がなされました。

サステナビリティ

方針・体制

- ・コーポレートガバナンスガイドライン*2
- 第3章 ステークホルダーとの適切な協働

取締役会での報告事項

- ・サステナビリティ関連報告 1回

リスク管理

方針・体制

- ・コーポレートリスクマネジメント体制*3
- ・コーポレートリスクの年間管理プロセス*3

取締役会での報告事項

- ・コーポレートリスクマネジメント報告 1回

内部統制／コンプライアンス

方針・体制

- ・コーポレートガバナンスガイドライン*2
- 第1章 総則 第2条4
- ・コーポレートガバナンス報告書*4
- IV-1内部統制システム
- ・内部統制システム*5
- ・コンプライアンスシステム*6

取締役会での報告事項

- ・内部統制報告 2回
- ・監査委員会報告 2回
- ・コーポレートガバナンス報告書承認 1回
- ・関係省庁要請に基づく下請法、独禁法等に関する報告 6回
- ・取締役会運営における法令遵守対応 1回

*1 ダイバーシティに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P097

*2 「コーポレートガバナンスガイドライン」はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/GOVERNANCE/ASSETS/PDF/Guidelines_JP.pdf

*3 コーポレートリスクのマネジメント体制・年間管理プロセスに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P131

*4 「コーポレートガバナンス報告書」はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/GOVERNANCE/ASSETS/PDF/g_report.pdf

*5 内部統制システムに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P120

*6 コンプライアンスシステムに関する詳細はこちらをご参照ください。 >>>P134

取締役スキルマトリックス

取締役のスキルマトリックスは以下の通りです。

取締役スキルマトリックス(2025年7月1日時点)

		グローバル マネジメント	企業戦略	自動車業界	法務／ リスクマネジメント	財務／会計	ESG	製品／技術	セールス／ マーケティング	デジタルトランス フォーメーション
1	木村 康 Yasushi Kimura	○	○			○	○	○	○	
2	ベルナール デルマス Bernard Delmas	○	○	○			○	○	○	
3	井原 慶子 Keiko Ihara	○	○	○			○	○	○	○
4	永井 素夫 Motoo Nagai	○	○	○	○	○	○			
5	アンドリュー ハウス Andrew House	○	○			○	○	○	○	○
6	ブレンダ ハーヴィー Brenda Harvey	○	○				○	○	○	○
7	朝田 照男 Teruo Asada	○	○		○	○	○			
8	得能 摩利子 Mariko Tokuno	○	○		○	○	○		○	
9	ヴァレリー ランドン Valerie Landon	○	○		○	○	○			
10	ティモシー ライアン Timothy Ryan	○	○		○	○	○			
11	イヴァン エスピノーサ Ivan Espinosa	○	○	○			○	○	○	○
12	赤石 永一 Eiichi Akashi	○	○	○			○	○		○

ガバナンスに関する方針・考え方

コーポレートガバナンス

リスクマネジメント

プライバシー&データ保護

コンプライアンス

取締役会メンバーの担当職務 (2025年7月1日時点)

木村 康 (きむら やすし)



独立社外取締役
取締役会議長

指名委員会

取締役就任年月
2019年6月

ベルナール デルマス (Bernard Delmas)



独立社外取締役
筆頭独立社外取締役

報酬委員会
監査委員会

取締役就任年月
2019年6月

井原 慶子 (いはら けいこ)



独立社外取締役
報酬委員会委員長

指名委員会
報酬委員会

取締役就任年月
2018年6月

永井 素夫 (ながい もとお)



独立社外取締役
監査委員会委員長

指名委員会
報酬委員会
監査委員会

取締役就任年月
2019年6月

アンドリュー ハウス (Andrew House)



独立社外取締役
指名委員会委員長

指名委員会
報酬委員会

取締役就任年月
2019年6月

ブレンダ ハーヴィー (Brenda Harvey)



独立社外取締役

監査委員会

取締役就任年月
2023年6月

朝田 照男 (あさだ てるお)



独立社外取締役

監査委員会

取締役就任年月
2024年6月

得能 摩利子 (とくのう まりこ)



独立社外取締役

報酬委員会

取締役就任年月
2024年6月

ヴァレリー ランドン (Valerie Landon)



取締役

監査委員会

取締役就任年月
2025年6月

ティモシー ライアン (Timothy Ryan)



取締役

指名委員会

取締役就任年月
2025年6月

イヴァン エスピノーサ (Ivan Espinosa)



取締役
代表執行役社長
兼最高経営責任者

取締役就任年月
2025年6月

赤石 永一 (あかし えいいち)



取締役
執行役
チーフテクノロジーオフィサー

取締役就任年月
2025年6月

取締役会の特徴 (2025年7月1日時点)

取締役会と委員会構成における高い独立性

- ・取締役会議長および各委員会の議長はすべて独立社外取締役

取締役会

- ・取締役の過半数(12名中8名)が独立社外取締役*1*2

委員会

- ・指名委員会：過半数(5名中4名)が独立社外取締役
- ・報酬委員会：全員(5名中5名)が独立社外取締役
- ・監査委員会：過半数(5名中4名)が独立社外取締役

国籍とジェンダーに関する多様性

国籍数

5カ国

ジェンダー

33%
女性

*1 各取締役に關する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/PROFILE/EXECUTIVE/>

*2 取締役の選任理由はコーポレートガバナンス報告書(社外取締役 会社との関係(2))をご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/GOVERNANCE/ASSETS/PDF/g_report.pdf

取締役独立性基準

取締役会の高い独立性を担保するため、日産は、独立取締役の条件を厳密に定めています。

独立取締役は、以下の各号のいずれにも該当しないことが求められます。^{*1}

該当してはならない項目	
1	日産の役員および使用人である（現在もしくは過去10年間）
2	日産の主要株主である（現在もしくは過去5年間）
3	日産が主要株主である会社において、現在、取締役、監査役、会計参与または業務執行者である
4	日産の主要取引先である
5	日産から多額の寄付または助成を受けている組織の業務執行者である
6	日産から取締役の派遣を受け入れている会社の取締役、監査役、会計参与または業務執行者である
7	日産の主要債権者である
8	日産の会計監査人または会計参与である公認会計士もしくは税理士である
9	日産から財産上の多額の利益を得ている弁護士、公認会計士または税理士その他のコンサルタントである
10	日産から多額の支払いを受けている法律事務所、監査法人、税理士法人またはコンサルティング・ファームの従業員、パートナーまたは業務執行者である
11	上記各号のいずれかに該当する者の家族
12	日産で8年間を超えて取締役の職にあった者
13	以上の各号のほか、当社の少数株主を含む全株主との間で恒常的に実質的な利益相反が生じるおそれがある者

2024年度の実務活動状況

取締役会では、法令および取締役会規則に基づき、当社グループ経営に関わる重要事項等について決議しております。当事業年度における、取締役会に上程された議案には以下が含まれます。

1) 定例議案：

- ・年度事業計画承認、業務執行状況の報告、各四半期の決算承認、株主総会招集通知
- ・内部統制およびリスクマネジメント報告、コーポレートガバナンス報告書承認
- ・サステナビリティ関連報告（統合報告書・サステナビリティデータブック発行）
- ・IR活動状況の報告等

2) 2024年度における重要議案：

- ・ターンアラウンド計画の実施、および進捗状況の報告
 - ▶ 当社事業の回復・安定化に向けた抜本的な事業構造改革の議論を集中的に実施いたしました。「スリムで強靱な事業構造」の迅速な実行に焦点を当てた議論を行いました。
- ・Hondaとの経営統合に向けた検討に関する基本合意書締結（および解約）
 - ▶ 自動車の知能化・電動化時代に向けた戦略的パートナーシップの構築に向けて、Hondaとの経営統合に向けた議論を継続的に行いました。最終的には、変化を増す市場の見通し、当社の経営施策などさまざまな議論を経て、経営統合の協議・検討の中止を決定いたしました。今後も相互の強みが補完できる領域での協業の検討を継続することが確認されました。

・代表執行役の異動および執行役体制の変更

- ▶ 代表執行役の交替においては、経営環境の急激な変化を踏まえた経営刷新の要請に基づき、従前からの指名委員会の後継者プロセスに沿って候補者が選定され、取締役会においても当該候補者が次世代を担うに相応しいリーダーであることが確認され、選任を承認いたしました。

さらに、筆頭独立社外取締役が議長を務める社外取締役のみによる会合を定期的に開催し、当社のコーポレートガバナンスおよびビジネスに関する事項等について幅広く議論しているほか、独立社外取締役と外部の連携として、機関投資家および会計監査人との意見交換会を実施しております。そのほか当事業年度では新任の社外取締役を対象とした教育および当社拠点訪問等を実施致しました。^{*2}

^{*1} 「日産自動車株式会社取締役独立性基準」で規定する全要件の一部を抜粋したものです。詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/GOVERNANCE/ASSETS/PDF/Standards_JP.pdf

^{*2} 2024年度取締役会の活動状況はこちらをご参照ください。 [>>>P161](#)

指名委員会の体制と権限

権限・役割

- ・法定の権限である株主総会に提出する取締役の選任および解任に関する議案の内容を決定する
- ・取締役会に提案する代表執行役の選定および解職に関する議案の内容を決定する
- ・社長兼最高経営責任者の後継者計画の内容の策定および年次の検証を行う

決定事項

- ・取締役候補の選解任議案
- ・代表執行役の選定・解職議案
- ・CEOサクセッションプラン
- ・取締役議長の選定・解職議案
- ・各委員会の委員長および委員の選定・解職議案

指名委員会の委員長は独立社外取締役であり、また、委員5名のうち4名が独立社外取締役(うち1名女性)です(2025年3月末時点)。当委員会では、株主総会に提出する取締役の選任および解任に関する議案の内容の決定、取締役会に提案する代表執行役の選定および解職に関する議案の内容の決定、および社長兼最高経営責任者の後継者計画の内容の策定および年次の検証を行う権限を有しています。

2024年度指名委員会の開催回数・参加率

- ・2024年度*1の指名委員会開催総数は9回
- ・開催一回当たりの平均参加率は98%

2024年度の主な活動

- ・代表執行役の選定・解職議案を審議
- ・第126回定時株主総会に提出する取締役選解任議案について審議
- ・社長兼最高経営責任者の後継者育成計画について審議

報酬委員会の体制と権限

権限・役割

- ・法定の権限である取締役および執行役の個人別の報酬等の内容に係る決定に関する方針、ならびに取締役および執行役の個人別の報酬等の内容を決定する
- ・取締役および代表執行役の個人別の報酬額を決定する

決定事項

- ・取締役および執行役の報酬に関する方針および制度
- ・取締役および代表執行役の個人別の報酬額または非金銭報酬の場合には個人別の具体的な内容
- ・執行役の個人別の報酬等の内容

報酬委員会の委員(委員長を含む)は、5名すべて独立性を有する社外取締役(うち女性2名)としています(2025年3月末時点)。当委員会は、法定の権限である取締役および執行役の個人別の報酬等の内容に係る決定に関する方針、ならびに取締役および執行役の個人別の報酬などの内容を決定する権限を有しています。*2*3

2024年度報酬委員会の開催回数・参加率

- ・2024年度*1の報酬委員会開催総数は13回
- ・開催一回当たりの平均参加率は98%

2024年度の主な活動

- ・取締役および執行役の報酬に関する方針の決定
- ・報酬水準検討のためのベンチマーク企業を選定、外部第三者専門機関の調査結果も踏まえた報酬水準の審議
- ・取締役および執行役の当事業年度の報酬額および個人別の報酬などの決定

*1 2024年4月から2025年3月までの期間

*2 報酬制度の評価指標は2024年度有価証券報告書(P79-85)役員の報酬等をご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/IR/FINANCIAL_RESULTS/ASSETS/FR/2024/PDF/fr2024.pdf#page=82

*3 経営層の役割と評価はこちらをご参照ください。 >>>P010

監査委員会の体制と権限

権限・役割

- ・執行役などの職務執行状況や取締役会の監督機能の実効性を監査（モニタリング、監督）する
- ・執行役、従業員、子会社に対し、その職務の執行に関する事項の報告を求め、または業務および財産の状況の調査を行う
- ・取締役、執行役、また従業員の不法行為について差し止め請求を行う
- ・年次監査報告書を作成する
- ・会計監査人を選解任する
- ・会社が取締役もしくは執行役に対して訴えを提起し、または取締役もしくは執行役が会社に対して訴えを提起する場合、当該訴えについて、選定監査委員が会社を代表する

決定事項

- ・株主総会に提出する年次監査報告書
- ・監査方針、監査規程、監査委員会の年次監査計画、また関連予算
- ・会計監査人の選解任に関する株主総会議案
- ・監査委員会事務局のスタッフの選任
- ・グローバル内部監査室の年次監査計画、予算および人員計画。グローバル内部監査室責任者の選任と評価
- ・取締役および執行役に対する訴訟の提起

監査委員会の委員長は独立社外取締役であり、また、委員5名のうち4名が独立社外取締役（うち女性1名）です（2025年3月末時点）。当委員会では、内部統制システムの構築・運用状況を含む業務執行の監査の一環として、年度監査計画に従って、また、必要に応じて、執行役、執行役員および使用人から、当社およびグループ会社の業務執行に関する報告を

受けています。

また、委員長は、社長兼最高経営責任者をはじめとする執行役などと、定期的に会合を持ち、幅広く意見の交換を行っているほか、重要会議などに出席し意見を述べるとともに、決裁書その他の重要書類を閲覧し、必要に応じて執行役、執行役員および使用人に対して説明または報告を求めています。委員長が収集した情報については、適時に他の委員にも共有しています。

さらに、当委員会は、監査の実施に当たり、当委員会、内部監査部門および会計監査人の三者が適宜連携し、三様監査の実効性を高める取り組みを実施しています。当委員会のリーダーシップのもと、三者間での連携により、監査上の指摘事項およびその対応状況をタイムリーに共有し、内部統制の実効性の向上を図っています。また、当委員会は、内部監査部門を管轄し、内部監査部門が執行側から極めて高い独立性を確保する体制を構築した上で、内部監査部門から定期的に内部監査計画に基づく内部監査の進捗やその結果について報告を受けるとともに、必要に応じて、内部監査部門に対して内部監査に関する指示を行っています。^{*1*2}

加えて、当委員会は、執行役などのマネジメントの関与の疑義がある内部通報の通報先となり、関係する執行役などが通報者および通報内容を知り得ない体制を構築のうえ、その対応に当たっています。

さらに、当委員会は、取締役会の実効性に関して毎年実施される評価に対し、評価プロセスや評価結果に基づく課題抽出等に関する妥当性を監査して、その結果を取締役会へ報告

し、かかる評価が適正に実施され、取締役会の実効性向上のために意義あるものとなるよう、適切に監督しております。

2024年度監査委員会の開催回数・参加率

- ・2024年度^{*3}の監査委員会開催総数は12回
- ・開催一回当たりの平均参加率は100%

2024年度の主な活動

当事業年度においては、以下を当委員会の重点監査項目として定め、それぞれの項目について監査委員会等の場を通じて検討・審議を重ね、必要に応じて執行側などへ提言を実施しました。^{*4}

また、監査委員会での審議の際には、内部監査部門の責任者および会計監査人を陪席させ、各議題の審議を通じて認識された当社の状況や課題について適時に共有し、それぞれの監査に活かしてもらうとともに、各議題の審議をより充実させるため、必要に応じて、それぞれの観点からの意見を求めています。

^{*1} 内部監査の独立性に関する詳細は2024年度有価証券報告書（P73）をご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/IR/FINANCIAL_RESULTS/ASSETS/FR/2024/PDF/fr2024.pdf#page=76

^{*2} 監査委員会、内部監査部門、執行側の関係図の詳細は2024年度有価証券報告書（P73）をご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/IR/FINANCIAL_RESULTS/ASSETS/FR/2024/PDF/fr2024.pdf#page=76

^{*3} 2024年4月から2025年3月までの期間

^{*4} 監査委員会の当事業年度各月における主な活動状況は2024年度有価証券報告書（P75）をご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/IR/LIBRARY/FR/2024/ASSETS/PDF/fr2024.pdf#page=78>

重点監査項目	監査委員会による検討・審議のポイント
執行役などの業務執行状況のモニタリング	・中期経営計画「The Arc」の進捗（各地域における販売状況・キャッシュフローの状況とともに、在庫およびインセンティブの適正化を目指した販売の質の改善等の主要経営課題への取り組み状況を確し、必要に応じて執行側へ助言の上、さらなる検討を促した） ・ターンアラウンドの策定内容および計画に基づき一部実行された諸施策の進捗（ステークホルダーから予想されるアクションを勘案の上、リスクシナリオの妥当性、今後のコスト削減および資金調達の実現可能性、パートナー戦略の重要性等の観点から、執行側へ助言の上、さらなる検討を促した）
内部統制・リスク管理体制の運用状況の監督	・統合的なリスク管理体制および会社を取り巻く環境を踏まえて新たに顕在化した高リスク項目への対応 ・下請法遵守の徹底並びにサプライヤーとの適正取引確保および関係強化に向けた取り組み ・コンプライアンス部門の体制強化と法令遵守に関する社内啓蒙活動の促進 ・サイバーセキュリティに関する取り組み（成熟度自己評価の内容と第三者評価に基づく中期活動計画の進捗） ・執行側の意思決定の迅速化・効率化を求めた改善提言（マネジメント層が関与する会議体の削減・管理の徹底、権限移譲の拡大等）および当委員会からの提言に基づく執行側の対応
内部監査部門の活動状況の確認	・重要な監査発見事項とそれらに基づく改善提案の実行（内部監査部門から執行側へ確実な実行を促すフォローアップ） ・内部監査部門の「Insight Generator」機能を目指す取り組みと「グローバルワンチーム」として一体的な連携や緊密なコミュニケーション ・セカンドラインへのサポート（改訂J-SOX基準対応へのサポート等） ・DX促進への取り組み（監査管理システムの効率的な運用、監査におけるビッグデータの活用）
企業集団内部統制強化に向けた取り組み	・グループガバナンスのさらなる強化に向けた国内外の全グループ会社の統括的管理 ・グループ内での監査基準の統一等、当社の内部監査部門と国内外のグループ会社の内部監査部門との連携

以上の重点監査項目に記載されたもののほか、当委員会では以下についても、当事業年度における活動として取り組みました。

不正事案対応

- ・元会長および元代表取締役それぞれを被告として提起した損害賠償訴訟への対応、その他元会長らによる重大な不正行為に関する責任追及と損害回復のための適切な措置を継続実施

会計監査人との連携深化

- ・会計監査人からの当事業年度における四半期レビュー結果報告の聴取のほか、自動車事業における固定資産の減損など会計監査人の監査上の主要な検討事項（KAM）や、最新の監査上の法規制動向に関する意見交換を実施

往査およびグループ会社監査役との連携

- ・監査委員は、当社拠点および国内外主要子会社（2拠点および21社）について往査を実施し、主要な往査結果を監査委員会に報告
- ・グループ各社の監査品質向上を目的とした国内主要グループ会社監査役連絡会を半期毎に開催

執行役の体制

執行役は、取締役会決議により委任された業務の執行を決定するとともに、その執行を担っています。また、会社の重要事項や日常的な業務執行に関する事項について審議し議論する会議体を設置するとともに、効率的かつ機動的な経営を行うために、業務執行については明確な形で執行役員および従業員に権限を委譲しています。2025年3月末時点で、執行役として5名（うち代表執行役1名）が選任されています。^{*1}

監査の体制

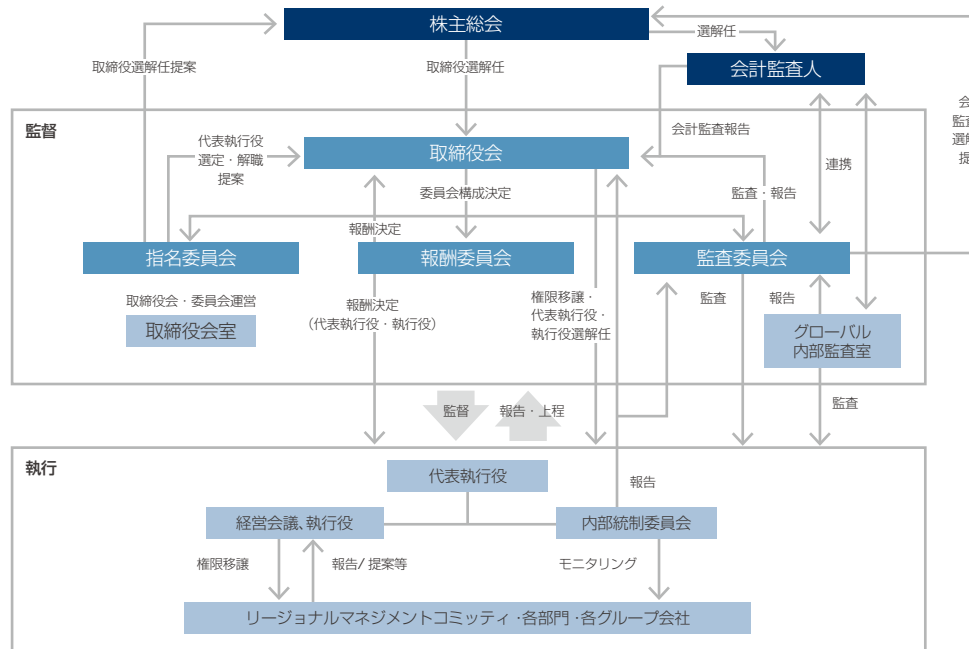
日産では、社外取締役、監査委員会、内部監査部門および外部の会計監査人が連携することで、内部統制システムの実効性をさらに向上させています。社外取締役は、独立性を有するため取締役会をけん引し、取締役会において経営の基本方針を決定するとともに、取締役、執行役などの職務の執行を監督します。また、監査委員会は内部監査部門を管轄し、内部監査部門に対して監査に関する指示を行い、内部監査部門は、継続的に職務の執行状況および発見事項などを報告しています。会計監査人からも同様に報告を受けるとともに、監査の品質管理体制について詳細な説明を受け、その妥当性を確認しています。

^{*1} 各執行役に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/PROFILE/EXECUTIVE/EO/>

独立した組織による内部監査

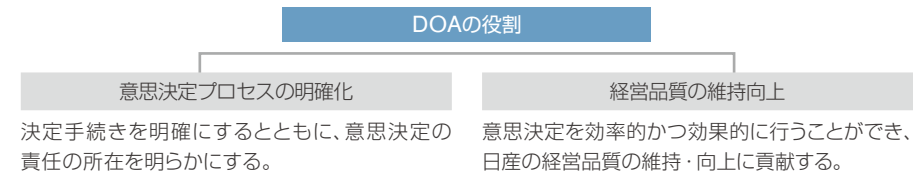
日産は、独立した組織であるグローバル内部監査部門を監査委員会の管轄のもと、設置しています。各地域では統括会社に設置した内部監査部門が担当し、より高度な専門性を要する販売金融、ITおよびモノづくりの分野では各地域を横断的に監査するグローバルな専門チームを設置しています。チーフ インターナル オーディット オフィサー(CIAO)の統括のもと、すべての内部監査は、グローバルに効率的かつ統一的に実施しています。内部監査は、監査委員会の承認を受けた監査計画に基づき実施され、その結果は定期的に監査委員会へ報告しています。また、監査結果は関係部署および役員へ適宜報告しています。

コーポレートガバナンス体制図



権限基準書の概要

DOAはDelegation of Authority (権限委譲)の略で、会社の重要な意思決定に誰が関与するのかについて定めたものです。



権限基準書の統制

意思決定プロセスの明確化および経営品質の向上を図るために、公正かつ透明性の高い権限基準を適切に整備し、厳格に管理しています。

01

厳格性

DOAの改定、新設および削除においては、役員が議長となっているDOAコミッティにて厳格に管理されている。

02

透明性

DOAは、誰が起案し、誰が助言し、誰が決定するのが適切かをあらかじめ定め、それぞれの権限と責任を明確にしている。また、それをイントラネット上に公開し透明性を高めている。

03

公正性

起案者と決定者以外にも、起案された承認事項に関して、専門的見地から助言するバリデーターをそれぞれのDOAに設定し、公正性を担保している。

04

実効性

各部門にDOA担当者を、または、各地域にDOAコーディネーターを設置し、DOAの効率的な運用およびグローバルでのDOAマネジメントの向上を図っている。

利益相反の回避

取締役および執行役と会社の利益が相反する取引については、事前にと取締役会の承認を得ること、および取引後に当該取引に関する重要な事実を取締役会に報告することを取締役会規則に規定しています。2019年には取締役利益相反解消指針を制定(2023年に改定)、取締役と会社との利益相反とは何かを定義し、年に一度の利益相反アンケートを実施するなど、取締役に對し利益相反または潜在的な利益相反を報告する義務を課すとともに取締役の利益相反を解決するプロセスなどを規定しています。さらに、2022年3月にグローバル利益相反規程が施行され、すべての役員および従業員に適用されています。

取締役利益相反解消指針の3つの柱

「取締役利益相反解消指針」の3つの柱

報告義務

各取締役は、以下2つの継続的な義務を負う：

- i 特定の利益相反が新たに生じたこと、またはその可能性を認識した際に、直ちにこれを報告する義務
- ii 取締役会または委員会に関連して提供を受けた資料により特定の利益相反を認識した場合、当該会議に先立ちこれを報告する義務

特定利益相反の確認

取締役会および各委員会の議案において、特定の取締役に利益相反の可能性が検出された場合、取締役会および各委員会の事務局が、当該議案が特定利益相反を有するかどうかを検討し、その解消のために必要な対応について各会議体の議長と確認を行う。なお、確認にあたり、必要に応じて、中立・公平な外部法律事務所の意見を求めることとしている。

特定利益相反解消手続きおよび管理

特定利益相反を解消するための手続きは以下を含む：

- i 特定利益相反が取締役において確認された場合、各会議体の議長が会議開催前に当該取締役に確認の結果を報告する。
- ii 報告を受けた取締役は、当該議案に関する資料の受領ならびに審議および決議への参加はしない。
- iii 確認された特定利益相反はデータベースにて管理する。

リスクマネジメント

リスクマネジメントの方針・考え方

日産では、「グローバルリスク管理規程」にて、リスクを「日産グループのコーポレートパーパス、戦略、および事業目的の達成を阻害する事象又は状況」と定義し、日産グループ全体で活動を推進しています。リスクをいち早く察知し、影響度の大きさや発生の可能性を評価して、必要な対策を検討・実行することにより、リスクが発生する確率や頻度の低減、万一発生した場合の損失の最小化に務めるとともに、リスクの大きさに応じた適切な管理がなされているのかを確認しています。

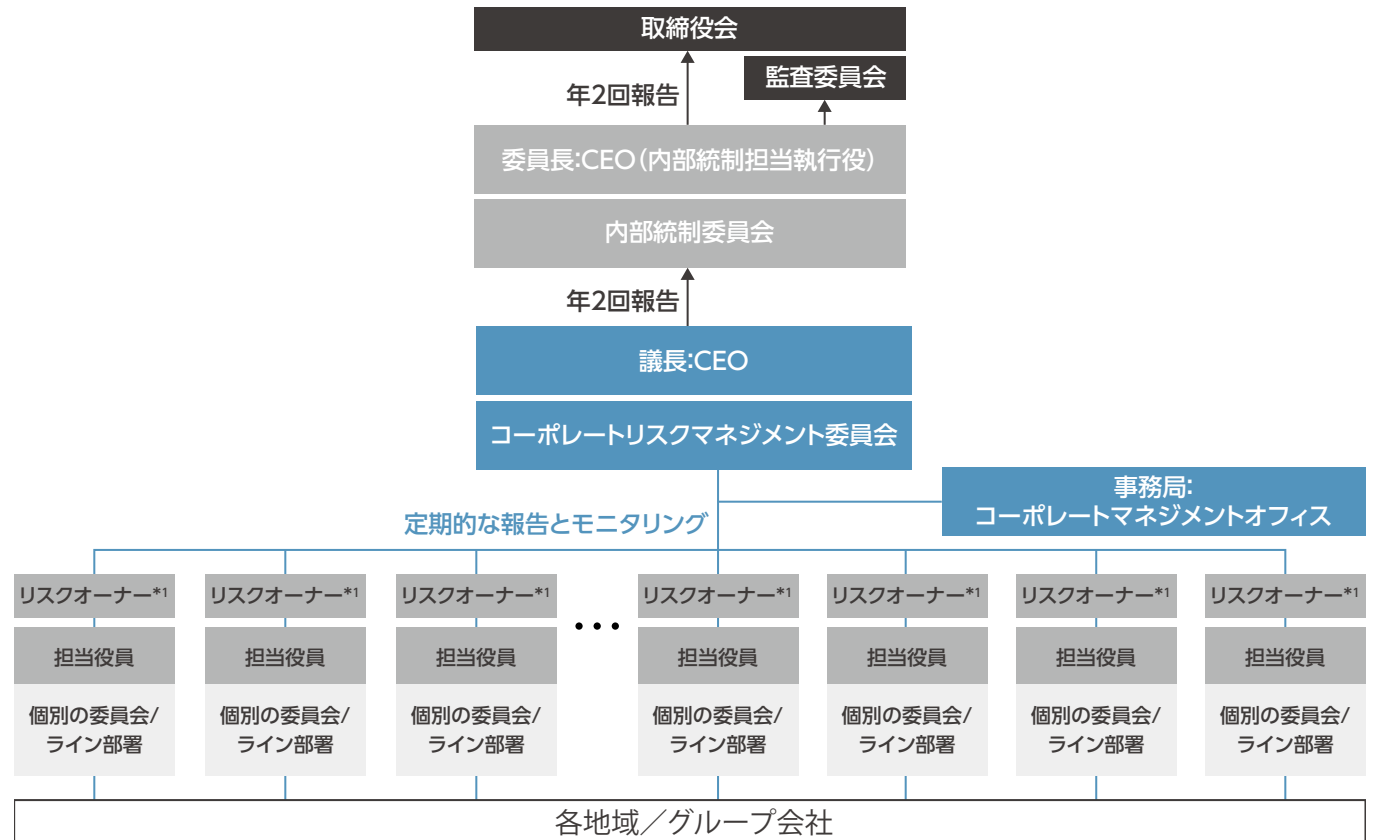
リスクマネジメントの体制

具体的には、社内外の事業環境の変化に対応するため、リスク管理の専門部署による役員層へのインタビューと各機能部署へのヒアリングの定期的な実施、および、経営戦略室と連携し、さまざまなリスクを洗い出すとともに、インパクトと切迫度、コントロールのレベルを定量的・定性的に評価し、コーポレートリスクマップの見直しを行います。そしてCEOが議長を務めるコーポレートリスクマネジメント委員会において、全社的に管理すべきリスクとその管理責任者を決定し、責任者のリーダーシップのもと、各リスクへの対策に取り組めます。リスク管理の責任者は各リスクにおけるコントロールレベルを評価し、それぞれのリスクマネジメント活動の有効性を判断しています。それらの状況は定期的にコーポ

レートリスクマネジメント委員会や内部統制委員会に報告し、さらに監査委員会や取締役会にも適宜報告しています。個別のビジネスリスクに対しては、発生時の影響と発生の可能性を最小にするため、各部門の責任において、本来業務の一環として必要な予防対策を講じるとともに、発生時の緊急対応策を整備しています。また、災害・操業リスクにおいては

能性を最小にするため、各部門の責任において、本来業務の一環として必要な予防対策を講じるとともに、発生時の緊急対応策を整備しています。また、災害・操業リスクにおいては

コーポレートリスクマネジメント体制



(2025年3月末時点)

*1 リスクオーナーは、原則としてエグゼクティブコミティのメンバー

専門部署を設置し、危機発生時に迅速かつ連携のとれた対応を行うことで、事業継続リスク^{*1}に対して網羅的に対応する体制を整えています。

国内外の連結会社とも連携を深め、日産グループ全体でリスクマネジメントの基本的なプロセスやツールの共通化、情報の共有化を進めています。

近年、新たな技術の普及や地政学的リスクの拡大など、企業を取り巻く環境は変化の度合いを増しています。そうした変化にも適切に対応していけるように、これからも取り組みを強化していきます。

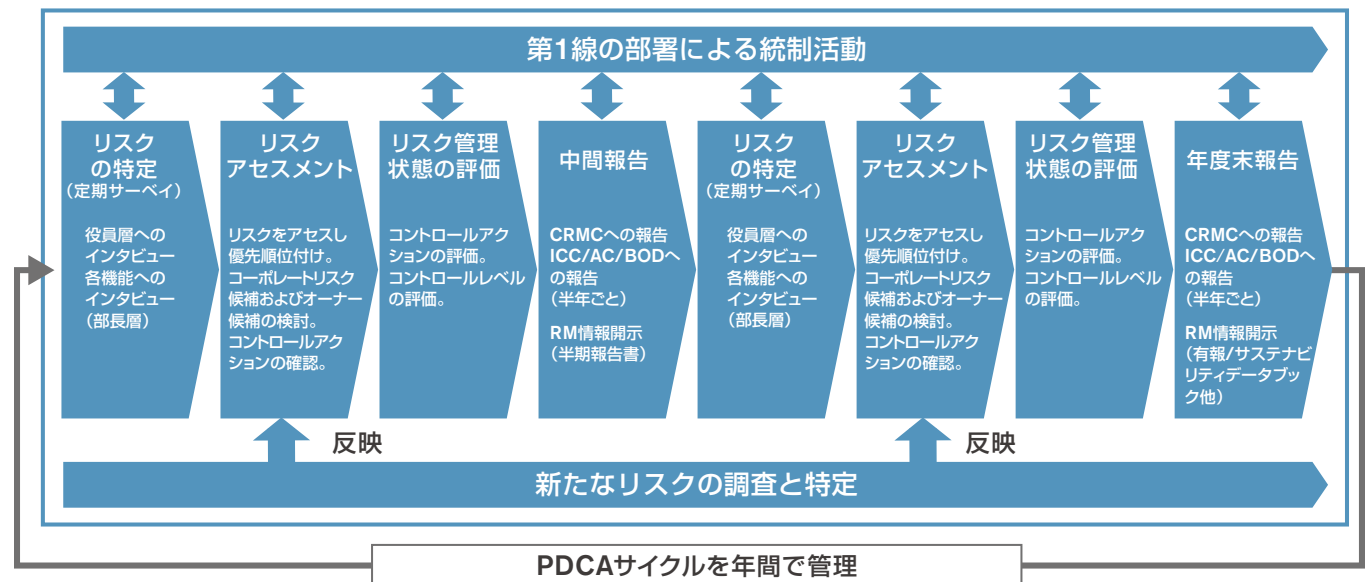
リスクマネジメント強化の取り組み

日産が2021年に発表した長期ビジョン「Nissan Ambition 2030」の達成に向けて、リスクマネジメントの枠組みやプロセスの見直しとその強化に継続して取り組んでいます。体制面の強化としては「三つの防御線（ディフェンスライン）」の原則に基づき、リスクマネジメントの事務局を第二線の機能として明確に位置づけ、人員体制の強化も行いました。会社の新たな基本方針をサポートするために、リスクマネジメントの目的を、事業目的の達成といった短期的なものにとどまらず、より長期的な視点でコーポレートパーパスの達成をサポートする活動と位置づけました。それに伴い、対象とするリ

スクも環境・人権などのESGリスクを含め、会社の企業価値の向上やサステナビリティに貢献する視点で、より幅広く捉えるようにし、新たなリスクを適時に捉える体制も構築しました。リスクの評価についても、従来の主観的・定性的な評価に、客観的・定量的な評価を加えるため、国際的なフレームワークも参照し、より具体的なリスクの評価と、リスクをコントロールし管理状態に置くための活動のモニタリングに取り組んでいます。

これらプロセスとツールの改善内容は、リスク管理マニュアルにも適宜反映しています。

コーポレートリスクの年間管理プロセス



CRMC: コーポレートリスクマネジメント委員会 ICC: 内部統制委員会 AC: 監査委員会 BOD: 取締役会

(2025年3月末時点)

^{*1} 「事業等のリスク」は2024年度有価証券報告書(P28-34)をご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/IR/LIBRARY/FR/2024/ASSETS/PDF/fr2024.pdf#page=31>

プライバシー&データ保護

情報セキュリティの方針・考え方

日産では、情報セキュリティ全般に対する取り組みの基本方針である「情報セキュリティポリシー」をグローバルに展開しています。当社は、ISO/IEC 27001ガイドラインに沿って情報の機密性、完全性および可用性を維持するよう努めています。情報漏えい、誤った情報の公開、または情報が利用できなくなる状況を防止し、これにより引き起こされる事業運営への悪影響、法令違反の可能性などを防止するため、これらの対策を「情報セキュリティポリシー」に定めています。

情報セキュリティのマネジメント

情報セキュリティ委員会のもと、PDCAを回した対策を図っています。グローバルで発生する社内外の情報漏えい事案については随時捕捉し、タイムリーに情報セキュリティの強化を実施することにより、確実に対応しています。情報セキュリティ委員会は、チーフ セキュリティ オフィサーが議長を務め、重大なセキュリティインシデントに迅速に対応しています。

情報セキュリティの実績

「情報セキュリティポリシー」の遵守を徹底するため、定期的

に社内教育プログラムを実施し、周知・定着を図っています。グローバルガバナンスを強化するために、情報セキュリティ成熟度評価を実施し、全社的や部門別のトレーニングおよびさまざまな訓練を実施しました。また、定期的にポリシーとプロセスの見直しと改訂を行っています。

自動車のサイバーセキュリティ

自動車のサイバーセキュリティリスクに対処するため、国連法規（UN-R155^{*1}）および規格（ISO/SAE 21434^{*2}）に準拠した開発・生産、監視体制の整備・運用を行い、お客さまの個人情報の保護と車載電子システム・コネクテッドカーサービスの安全な提供に努めています。また、日米のAuto-ISAC^{*3}などの業界団体への参画を通じて最新動向を収集し、セキュリティ強化を図っています。

データプライバシーの方針・考え方

日産は、個人情報の保護に関する法律を遵守し、個人情報を適正に扱うことが責務であると認識し、お客さまに関するデータを含む個人情報の利用において、グローバルで一貫したアプローチを適用するために、「グローバルデータプライバシーポリシー」^{*4}を策定しました。この方針は、個人情報の

取り扱いが一貫性をもって行われ、日産のすべての事業所で重要な責務として扱われていることを保証するものです。このポリシーは、プライバシーに関する日産の基本的なコミットメントについて規定しています。

データプライバシーのマネジメント

当社は、個人データの扱いについて、社内のがバナンス体制およびルール、手続きを整備しています。グローバルのがバナンスとして、地域別のデータプライバシーリーダーがエシックス&コンプライアンス室と連携して調整し、各地域のコンプライアンスオフィサーを通じて、最終的にグローバルコンプライアンス委員会に報告する体制になっています。日産グループでは、必要に応じてこれらのプロセスを徹底しています。

データプライバシーの実績

当社のプライバシーチームは、プロセスの改善を進めています。具体的には、個人データを扱う日産の部門が、データプライバシーの管理体制を導入するにあたり、サポートしています。

^{*1} 国連の定めた自動車のサイバーセキュリティに関する規約

^{*2} 自動車のライフサイクル全体にわたるサイバーセキュリティの要件・実施方法を示す国際標準

^{*3} Automotive Information Sharing & Analysis Centerの略で、自動車業界のサイバーセキュリティ情報を共有し、対応策・技術向上を協力して行う組織

^{*4} 「グローバルデータプライバシーポリシー」の詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/Data_Privacy_j.pdf

コンプライアンス

日産においては、すべての従業員が高い倫理基準に従って誠実に行動することが大切であるため、エシックス&コンプライアンス室を設置し、世界の各拠点にコンプライアンス施策を推進する担当部署と推進責任者を配置して、倫理とコンプライアンス意識の醸成に努めています。

また、日産は、サードパーティのコンプライアンスリスクに対処するために、「グローバルサードパーティ・コンプライアンスリスク管理ポリシー」およびプログラムを展開しています。このプログラムの一環として、エシックス&コンプライアンス室と購買部門が協力し、サプライヤー領域においてコンプライアンスリスクモニタリングを実施しています。このプログラムを通じて、日産は贈収賄、人権、環境リスクを含むさまざまなサードパーティに関連するリスクを監視しています。

コンプライアンスの強化

コンプライアンスリスクの管理

日産では、日本国内車両製造工場での完成検査における不適切な取り扱い*1が2017年に発覚した事を受け、各種法令遵守を強化するためコンプライアンスリスクチェックとモニタリングを実施しました。2021年度からエシックス&コンプライアンス室が開始したコンプライアンスリスク管理(CRA)は、2023年度にすべての主要な日産関連会社で完了しました。CRAの

結果に基づき、コンプライアンスチームはコンプライアンスリスクの高い項目に対して改善計画を作成しました。2024年には、15のリスクカテゴリーの新しいCRAサイクルを開始し、是正措置計画の定義を支援するために「コントロールセルフアセスメントチェックリスト」と呼ばれる新しいモニタリングプロセスを実施しました。

番号	コンプライアンスリスクカテゴリー
1	プロダクトコンプライアンス
2	コマーシャルコンプライアンス
3	コネクテッドサービス
4	輸入・輸出
5	サードパーティ管理 (例：パートナー/サプライヤー/サービスプロバイダー)
6	腐敗防止 (賄賂と汚職 - ファシリテーション・ペイメント、ロビー活動に関する法律および規制違反、利益相反)
7	公正競争・独占禁止法
8	ガバナンス
9	知的財産
10	データプライバシー
11	情報セキュリティ
12	環境保護
13	経理・財務
14	税務
15	人権と労働環境

2024年3月の公正取引委員会からの勧告を受領後、さまざまな改善・是正の取り組みを進め、2025年3月に下請代金支払遅延等防止法(以下、下請法)遵守に関する改善報告書を提出しました。*2 割戻金の運用廃止、取引先からの相談・通報を

受ける社外窓口開設のほか、取引先からの声を積極的に拾い上げ改善や是正につなげる取り組みなどを実施しています。また、2024年度には、購買部門内にコンプライアンス専任部署を設置しましたが、2025年4月からは、全社を対象とする下請法および関連法規制の遵守のための法令所管部署として拡充し、全社的な社内遵法管理体制を強化しました。今後も全社一丸となって公正な取引を進めてまいります。*3

倫理とコンプライアンスの文化

2024年に社内の倫理と法令遵守意識の向上を目的として、第5回日産エシックス・デー(企業倫理の日)をグローバルで開催しました。ここでは、日産の経営陣の姿勢と中間管理職の姿勢の両方を強化することに焦点を当てています。あらゆるレベルの従業員が「どんなときでも、誠実であり続ける」というテーマで、特に日常業務においてさまざまなメンバーと共に直面する倫理的ジレンマに対処する難しさについて議論しました。

倫理と誠実さの重要性を強化するためのもう一つの取り組みとして、倫理的文化に関する管理職向けガイドを作成しました。管理職は、日産の誠実さに対するコミットメントを強化し、「グローバル行動規範」やその他の社内ポリシー、価値観、適用法令を遵守して行動することを通じて、従業員に対して模範を示すことが求められます。さらに、同僚にガイダンス

*1 国内車両製造工場における完成検査に係る不適切な取り扱いの再発防止取り組みの詳細は2024年度有価証券報告書(P32)をご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/IR/FINANCIAL_RESULTS/ASSETS/FR/2024/PDF/tr2024.pdf#page=35

*2 詳細はこちらをご参照ください。 <https://global.nissannews.com/ja-JP/releases/250313-00-j>

*3 下請法に関する購買部門での取り組みについての詳細はこちらをご参照ください。 >>>P084

とサポートを提供し、チームのために健全で倫理的な職場環境を整える責任もあります。本ガイドには、リーダーとしての重要な役割および倫理的リーダーシップを向上させるための実践的なヒントと注意事項を記載しています。



販売会社との取り組み

販売会社とコンプライアンスの意識を共有し、より強固な内部統制を構築できるように、さまざまな取り組みを推進しています。

販売会社とのコミュニケーションを強化しながら、日本国内の販売会社向けにコンプライアンス強化を目的とした活動を実施しています。具体的には、コンプライアンスに関する管理レベルの把握と改善を目的とした「自己点検プログラム(Control Self-Assessment)」を展開。監査での指摘事項などを反映したチェック項目を各販売会社へ提供し、自社におけるコンプライアンスの現状や課題について把握し、PDCAサイクルを回しながら自発的改善活動につなげています。重大なコンプライアンス違反の案件が発生した際には、法務、広報、渉外など日産の関係各部署が連携しながら、販売会社とともにタイムリーかつ適切に対応しています。

腐敗防止

腐敗防止の方針・考え方

日産は、個人・組織にかかわらず、いかなる腐敗行為も容認しません。

腐敗防止のマネジメント

日産では「グローバル行動規範」*1を定め、エシックス&コンプライアンス室を設置するとともに世界の各拠点にコンプライアンス施策を推進する担当部署と推進責任者を配置してコンプライアンス意識の醸成に努めています。

また、行動規範の内容を完全に理解できるように教育を行っています。

日産は、「グローバルDOA(権限委譲)ポリシー」「グローバル内部者取引防止管理規程」「情報セキュリティ・ポリシー」「グローバル贈収賄防止、贈答品・接待ポリシー」*2「グローバルデータプライバシーポリシー」など、グローバルに適用される一連の社内ポリシーを策定し、コンプライアンス意識を高め違反を低減する活動に取り組んでいます。

日産が事業活動を行う各地域においても、法令遵守のためのさまざまな従業員教育プログラムを定期的で開催しています。例えば、「グローバル贈収賄防止、贈答品・接待ポリシー」に基づく誓約書を伴う研修を、グローバルすべての地域で実施しています。本研修では、賄賂の基本、法令、リスク領域、危険信号などを取り上げており、ケーススタディとし

て、賄賂、政府関係者とのやりとり、汚職の危険信号などの例が含まれています。また、「グローバル利益相反規程」に基づく研修もすべての地域で実施しており、利益相反となる潜在性を伴う最も一般的な状況や、日産において従業員がどのように開示すべきかについて説明しています。本研修には、お客さまやサプライヤーとの関係、忠実義務、個人的利害関係を踏まえたケーススタディが含まれています。研修修了後には誓約書を伴う修了証も発行しています。

*1 「グローバル行動規範」はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/NISSAN_GCC_J.pdf

*2 「グローバル贈収賄防止、贈答品・接待ポリシー」の詳細はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/Anti-Bribery_GH_j.pdf

ビジネス倫理の遵守

ビジネス倫理の遵守の方針・考え方

従業員における倫理とコンプライアンスの徹底

2001年より、従業員がどのように行動すべきかを「グローバル行動規範」として定め、グループ全社でグローバルに適用しています。

役員に対しても、法令遵守のガイダンスを策定し、啓発活動を実施することなどにより、その遵守を徹底しています。

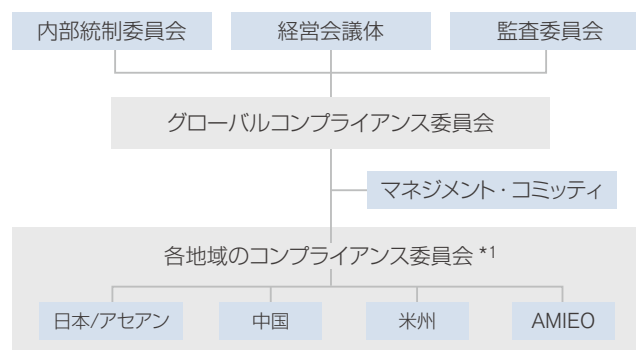
CEOとグローバル コンプライアンス オフィサーが共同で議長を務めるグローバルコンプライアンス委員会を年2回開催し、グローバルコンプライアンス計画の審議や年次プログラムの検証、コンプライアンス案件についての議論を行い、その結果を経営会議および監査委員会に報告します。

さらにグローバルコンプライアンス委員会の統括のもと、リージョナルコンプライアンス委員会を地域ごとに設置して、コンプライアンス違反行為や非倫理的行為を未然に防ぐグローバルな体制を構築。法令・倫理遵守機能を高めるため、各地域・拠点が連携しながらコンプライアンスの周知徹底とコンプライアンス違反行為の未然防止活動に取り組んでいます。日産グループでは、従業員が行動規範や法令に違反・抵触した場合、適切な懲戒処分を行うためのプロセスが設定されています。

また、コンプライアンスの管理を徹底するため、エシックス&コンプライアンス室を設置しています。さらに、日本/アセア

ン、中国、米州、AMIEO(アフリカ/中東/インド/ヨーロッパ/オセアニア)においては地域に独立した専任のコンプライアンスオフィサーを選任しています。

グローバルコンプライアンス委員会組織 (2025年4月1日現在)



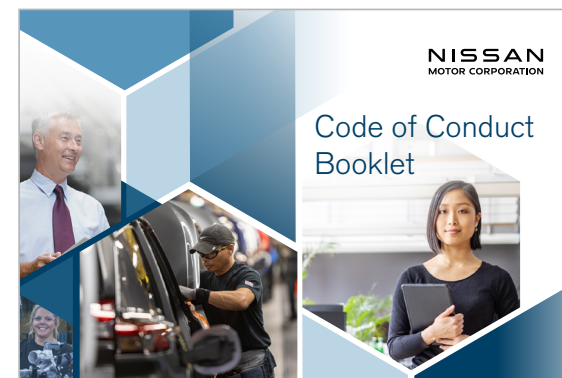
グローバル行動規範

「グローバル行動規範」*2は、日産がすべての事業所において法令を遵守し、公正かつ誠実に事業活動を行うための基本原則です。日産グループで働くすべての従業員に適用されており、従業員一人ひとりにこの行動規範の原則をしっかりと守り実践していく責任があります。最低でも3年に1回は会社や社会の変化に合わせた改定に向け、見直しを行っています。

2024年度、体裁を新たに「グローバル行動規範」の冊子*3を16言語で発行し、グローバルな展開活動により、世界中の従業員に行動規範を理解し遵守する重要性をあらためて伝えました。2023年から、「グローバル行動規範」研修に新しい学習

方法が導入され、ビジネスシナリオや倫理的ジレンマを考慮した教材が日産の全従業員に提供されました。間接従業員向けのe-ラーニング教材は約15言語に対応し、受講率は98.3%でした。直接従業員(工場および倉庫作業員)向けには研修資料が用意され、ビデオを視聴した上で、管理職層との対話を深めました。

日産のすべての従業員、役員は、本「グローバル行動規範」研修を毎年受講することが義務づけられています。「グローバル行動規範」の遵守・周知の状況については、所管部署による自主評価および内部監査部門による独立的評価が行われています。その結果は内部統制委員会へ毎年報告し、取締役会にも報告しています。



*1 各地域のコンプライアンス委員会はローカルレベルのコンプライアンス委員会を適切に監視しています。

*2 「グローバル行動規範」はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/NISSAN_GCC_J.pdf

*3 「グローバル行動規範」の冊子はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/EN/COMPANY/ASSETS/PDF/Nissan_Booklet_External.pdf

ビジネス倫理の遵守のマネジメント

健全性を高める内部通報制度

日産では、全世界の従業員一人ひとりがコンプライアンスを確実に理解し、企業活動が正しく行われるよう、グローバルで統一した内部通報制度SpeakUpを導入しています。

SpeakUpは、倫理ホットラインを専門とする独立した第三者機関であるNAVEX Globalによって運営されています。従業員はこのシステムを使って意見や質問を会社へ伝えることが可能となり、業務や職場の改善につながっています。また、匿名かつ秘匿の双方向コミュニケーションはウェブサイトを通じ、約17言語で、24時間365日行うことができます。

SpeakUpの活用はポスター、イントラネット上のバナー、社内記事、毎年開催の「日産エシックス・デー（企業倫理の日）」など、さまざまな社内コミュニケーションを通じて従業員に伝えられています。

日産は、従業員に「グローバル行動規範」やその他の会社規則に対する違反を報告するように促すとともに、コンプライア

ンス制度の土台である「グローバル内部通報規程」に沿い、報復を禁ずる方針によって通報者を保護しています。内部監査部門はSpeakUpシステムを監査の対象としています。

2024年度には、グローバルで2,452件が報告されました。そのうち21%がコンプライアンス関連、62%が人事関連の報告でした。これらの数には351件の問い合わせが含まれており、「問い合わせ」が最も多いカテゴリーとなっています。問い合わせの他に、最も頻繁に報告された内容は、「職場での攻撃的または不適切なコミュニケーション」「ハラスメント（性別に関連するもの以外）」「従業員間コミュニケーション、対人関係」に関するものでした。これらに対する措置は、手続きの是正から懲戒解雇におよぶまでさまざまです。

2024年には、従業員が安全で守られていると実感できることを目指し、新たな研修「声を上げる文化」が導入されました。このコースは、なぜ声を上げることをためらうのか、声の力、そして日産での声を上げる文化の構築にどのように貢献できるかについて従業員が理解を深めることを目的としています。

安全保障に関する輸出管理

日産は、国家および国際間の平和と安全の維持に貢献するため、日本や地域の安全保障に関する輸出規制法令の遵守を徹底しており、規制対象となる貨物やソフトウェア、技術について、テロ、産業スパイ、人権侵害者などの懸念活動への拡散防止を図っています。

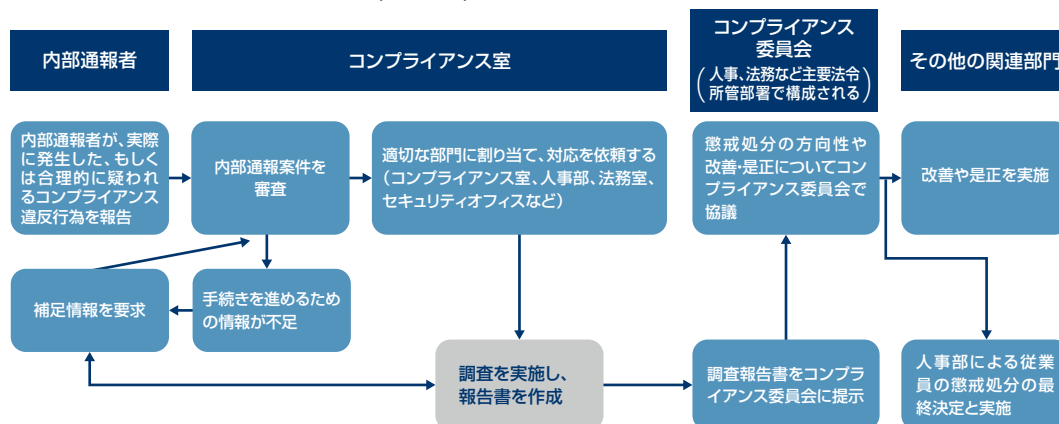
日産では、輸出管理担当役員を長とする自主管理体制を構築しています。各国・地域の法令の遵守を確実に行うため、社内規程や業務プロセスを整備し、グローバルディレクターとリージョナルマネジャーからなる輸出管理事務局とビジネス部門が協働して厳格に運用しています。

日産のグローバル輸出管理法令遵守ポリシーは、日産グループのすべての拠点で、法令を遵守することを目的としています。このポリシーでは、法令遵守体制と役割および責任を定義しており、各グループ会社は、リスク分析の結果に基づいて実際の業務とプロセス管理を担当します。日産は、世界各国の輸出管理規制の変更や関連動向に対して迅速に対応しており、今年度の焦点は、急速に変化する規制環境の管理、アメリカおよびAMIEO（アフリカ/中東/インド/ヨーロッパ/オセアニア）地域における事務局ネットワークの設立および手続きのデジタル化の強化です。

内部管理のレベル向上を図るため、日産は各地域で輸出管理に関するリスクアセスメントを定期的実施するほか、法規制や事業上の要請に即した監視体制づくりや継続的な運用の改善に取り組んでいます。

また、コンプライアンスリスクに関する従業員の認知度をさらに高めるため、輸出管理および制裁に関する研修パッケージを作成し、従業員向けの研修システムを利用して展

グローバル内部通報システム(SpeakUp)のプロセス

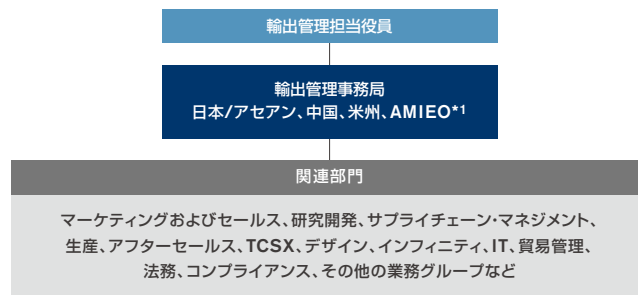


開する予定です。

日産では、将来を見据え、グローバルで先進技術に関する輸出管理に取り組んでいます。日本、米国、欧州の拠点をはじめ、世界各地で電動化や自動運転、コネクテッドカーなどの先進技術の輸出管理を推進しています。

また、輸出管理手続きを開発・設計業務に組み込むことで、コンプライアンスの強化を図っています。さらに、各地域における規制対象品目やソフトウェア、技術の情報を毎年集約し、体系的に共有することで、各地域のビジネスにおいて網羅的で確実な輸出管理を実施しています。

輸出管理に関するグローバル組織図



税の透明性

税への取り組み

日産は、「グローバル行動規範」に沿って、日産グループが事業を行うすべての国の法令だけではなく、国際的な租税条約および税関連の財務報告ルールを遵守しています。世界中の市場で、適切かつ効率的に事業を運営するために、税務方針を「税務ガバナンスポリシー」*2として文書化しています。法令の変化に対応するために当該方針は継続的に改訂しています。税務方針には、日産のガバナンスの取り決め、税務リスク管理戦略、税務当局への対応方法が含まれています。国内規則と国際規則（OECD国別報告など）、オーストラリアや英国*3など、その国独自の透明性に関する要件も含め、すべての税の開示要件を一貫して満たしています。

日産は、経営上の重要事項決定時に税務部門を関与させ、税務リスクを効果的に管理しています。日産の税務部門は、事業運営や戦略の意思決定に税務が及ぼす影響が適切に評価され、適時に対処されるよう、他の部門をサポートしています。事業戦略のサポートに必要な取引、組織の再編、法人の変更、法規制の変化、その他の事業変更に関する税務部門からの報告は特に重要です。税務部門が、事業運営上の決定を税務の観点から検証し、正式な権限委任手続きを経たうえで、税務戦略が一貫した方法で適時行われ、より広範な経営目標に沿ったものであることを確認します。

グループ内企業間取引においては、OECDによって策定された国際的に確立された基準を適用しています。企業間取引は

独立企業間価格で行い、日産の企業間であっても、独立企業間として取引します。

日産は税務執行に透明性を持たせ、事業を行う国の管轄内で地域や国際的な税法に沿って適切な納税を行い、税務関連の利子や法令違反による罰金の支払いを回避します。

日産のビジネスは実際に事業を行う企業の統合で成り立っており、日産は租税回避を目的とした取引や、事業方針に沿わない取引には一切関与していません。

日産の税務戦略と税務方針は、CFOが審査および承認します。グローバル税務責任者とはCFOを通じて、税務リスクおよびリスク管理ツール、グループの税務戦略に関する情報を毎年取締役会で報告しています。

CFOは日産グループの税務ガバナンスに責任を負っています。日産の財務報告書（税務報告を含む）は、独立した会計監査人が監査しています。*4

税務管理

各国および各地域、グローバルレベルで設けられている権限移譲プロセスを通じて、経営上の意思決定を税務執行の観点から一貫して検証することにより、日産はグループ内の税務リスクを効果的に管理しています。日産が最も重要視しているのは、グローバルブランドとしての評価と製造・販売事業および資金調達の継続的な成功です。

日産は、調査項目に関する税務処理について税務当局と合意に達することで、税務調査の終了を目指しています。税務当局と合意に至らない場合、日産は、訴訟提起など税務ポジ

*1 AMIEO（アフリカ/中東/インド/ヨーロッパ/オセアニア）

*2 「税務ガバナンスポリシー」はこちらをご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/LIBRARY/ASSETS/PDF/Tax_Governance_Policy_j.pdf

*3 日産の英国での税務戦略（英語のみ）はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan.co.uk/legal/nissan-uk-tax-strategy.html>

*4 2024年度有価証券報告書の独立監査人の監査報告書（P180）、内部統制報告書（P184）、確認書（P186）をご参照ください。 https://www.nissan-global.com/JP/IR/FINANCIAL_RESULTS/ASSETS/FR/2024/PDF/fr2024.pdf#page=183

ションを守るために必要な措置を講じます。

日産は、税務リスクを明確にし、管理するためのさまざまな対策を講じています。例えば、税務部門はグループで進行中の監査、不確実な税務ポジションおよび将来の税務リスクとなりうるトピック(新しい税務規則や税務当局による既存の規則とは一貫性がない適用など)のリストを含むグローバルなデータベースを維持しています。これには、直接税と間接税の両方の潜在的な税務リスクが含まれています。これらのリスク項目は詳細に文書化され、認定されます。報告書は必要に応じて作成され、重要な調査結果については四半期ごとにグローバルな上級管理職と協議されます。

具体的には、法人所得税に関して、国際財務報告解釈指針委員会第23号(IFRIC 23)の要求に従い、各国、各地域、およびグローバルレベルでの不明瞭な税務ポジション(Uncertainty Tax Position)を確認するプロセスを実施しています。日産では2019年度初めよりIFRIC 23を適用しています。

移転価格に関しては、日産の税務部門が内部手順を有しており、移転価格リスクの特定、評価、軽減のための管理を行い、またリスク動向を監視のうえ、重大化した場合にはすべてのステークホルダーに報告をしています。税務部門は、製品および単体会社の収益性を定期的にモニターし、移転価格税制上の潜在的な税務リスクを特定しています。潜在的な税務リスクが確認された場合は、財務担当役員チームに報告されます。税務戦略の実施に責任を負うグループ内の幹部レベルのポジションには、グローバル税務責任者がおり、CFOに報告します。

税務ガバナンスおよび管理体制は、税務部門、コンプライア

ンス部門、内部監査部門によって定期的に各国、各地域、およびグローバルレベルで評価されています。税務のガバナンスと管理に関するグローバルポリシーは、日産のウェブサイトで公開しており、全従業員がアクセスできます。コンプライアンス部門(各国、各地域、およびグローバルレベル)は、ポリシーがどのように運用され、またビジネスに即しているか否かを税務部門と確認します。

監査委員会は、日産のコーポレートガバナンスシステムの一環として、会計年度ごとに重点監査項目を設定しています。監査委員会のもとで内部監査の専門部門がグループ会社の業務、プロセス、税務方針を含む方針全般、法律、その他の関連事項の遵守状況を定期的に監査しています。監査委員会は定期的に内部監査部門の活動結果報告を受け、必要に応じて内部監査に関する指示を行っています。内部統制およびリスク管理に関する活動状況は、定期的に取り締役会へ報告しています。

日産では、違法行為や非倫理的行為を目撃した場合や、疑念が生じた場合に、従業員が報告できるように、SpeakUpという内部通報制度を用意しています。SpeakUpは税務関連の違反の可能性を経営陣へ提起する手段となっています。

ステークホルダーの関与と税務に関する懸念の管理

日産は、各国の税務当局をはじめ、他の公的機関や業界団体と、直接的・間接的を問わず長期的でオープンかつ建設的な関係を構築し、維持することを目指します。

定期的な会合やパートナーシップ・プログラムを通じて税務

当局との関係を築いています。必要に応じて事前裁定や企業内取引における移転価格の正当性を確保しながら、移転価格事前確認(APA)を利用し、税務当局と継続的にコミュニケーションをとっています。

日産は、政策立案者と定期的にかかわり、事業実態を反映した健全な税務政策の原則に基づく税務規則および規制の策定を支援しています。また日産はTax Executives Institute (TEI)やOECDの経済産業諮問委員会(BIAC)などの業界団体や国際的な経済団体にも技術的な意見を提供しています。

日本の自動車メーカーとして、日本の主要な民間企業団体のひとつである経団連と日本自動車工業会(JAMA)の一会員でもあります。

当社のIR部門は、グローバル税務部と連携してステークホルダーからの税務関連の質問に対応しています。税務部門はこれらの質問への回答に関して十分な情報を提供しています。

主要市場別の法人税

日産はグローバルに支払った法人税を主要市場ごとの国内外の内訳とともに開示しています。

法人税(単位：億円)

	日本	米国	中国	メキシコ	その他地域	合計
2023年度	92*1	1,052	503	302	322*1	2,271*1
2024年度	401	609	538	398	404	2,350

*1 2023年度の法人税額に軽微な誤りがあったため、修正しています。

データ集

会社基本情報.....141

ESGデータ集

環境データ.....142

社会性データ.....157

ガバナンスデータ.....161

会社基本情報

会社概要

設立	1933年12月26日
本社所在地	〒220-8686 神奈川県横浜市西区高島一丁目1番1号
事業内容	日産グループは、日産自動車株式会社とその子会社、関連会社等で構成されています。自動車およびその部品の製造・販売を主な事業内容としており、さらに同事業に関連する「物流」「金融」をはじめとした各種サービス活動を展開しています。
ブランド	ニッサン、インフィニティ
連結従業員数 (2025年3月末時点)	132,790人
グローバル拠点 (2025年3月末時点)	研究開発拠点：15市場 (日本、米国、メキシコ、英国、スペイン、ベルギー、ドイツ、中国、台湾、タイ、ベトナム、インド、南アフリカ、ブラジル、アルゼンチンに計44カ所) デザイン拠点：5市場 (日本、米国、英国、中国、ブラジルに計7カ所) 車両生産拠点：13市場、28拠点 (OEMからの供給(ルノー、三菱自動車、いすゞ、スズキなど)は含まない)

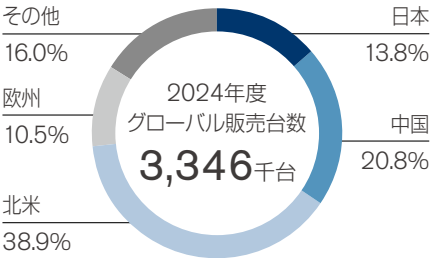
財務データ*1

	2022年度	2023年度	2024年度
売上高	105,967	126,857	126,332
営業利益	3,771	5,687	698
経常利益	5,154	7,022	2,102
税金等調整前当期純利益	4,024	5,992	▲ 4,136
親会社株主に帰属する 当期純利益	2,219	4,266	▲ 6,709
設備投資	3,508	4,861	5,773
減価償却費	3,168	3,514	3,636
研究開発費	5,222	6,099	6,190

グローバル販売台数

	2022年度	2023年度	2024年度
グローバル販売台数	3,305	3,442	3,346
日本	454	484	461
中国	1,045	794	697
北米	1,023	1,262	1,303
欧州	308	361	351
その他	475	541	534

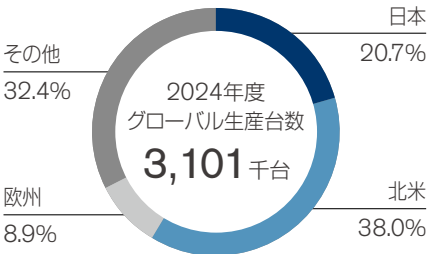
(千台)



グローバル生産台数

	2022年度	2023年度	2024年度
グローバル生産台数	3,381	3,430	3,101
日本	597	725	641
北米	992	1,235	1,178
欧州	288	325	276
その他	1,504	1,146	1,005

(千台)



*1 財務データに関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/IR/>

環境データ

気候変動(製品).....142

気候変動(企業活動).....145

資源依存(再利用).....150

資源依存(拠点の廃棄物).....151

水資源の管理.....152

大気品質.....154

環境課題を踏まえた基盤の強化.....155

マテリアルバランス.....156

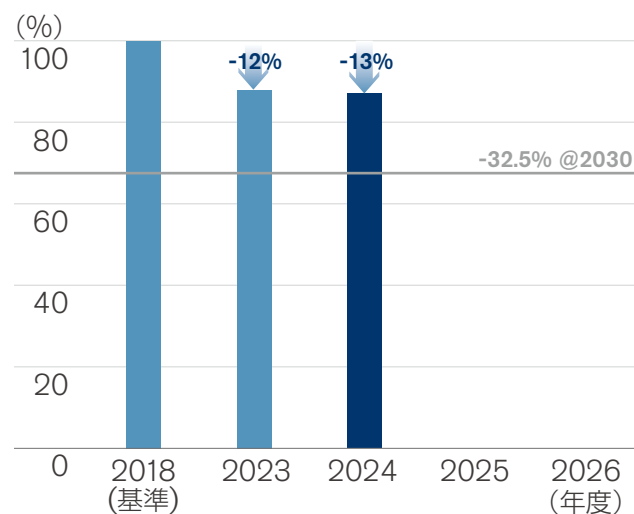
環境保全コスト.....156

気候変動(製品)

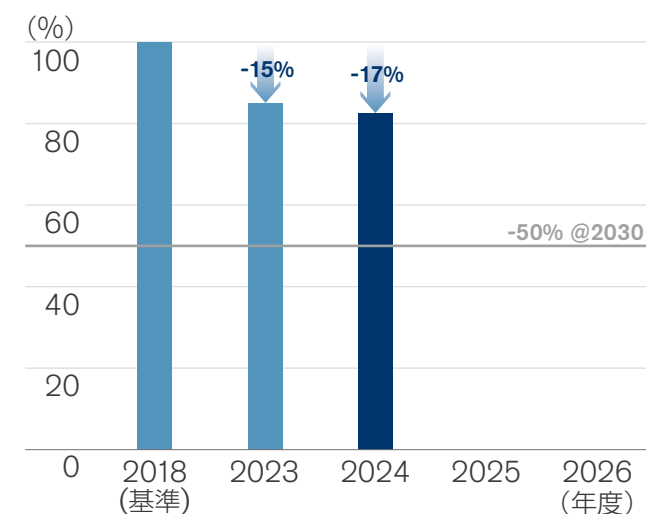
新車からのCO₂排出量削減率

グローバル：-13%、4地域(日本、米国、欧州、中国)：-17%
主に4地域におけるICE燃費改善や電動化の推進により、CO₂排出量の削減が進みました。^{*1}

グローバル

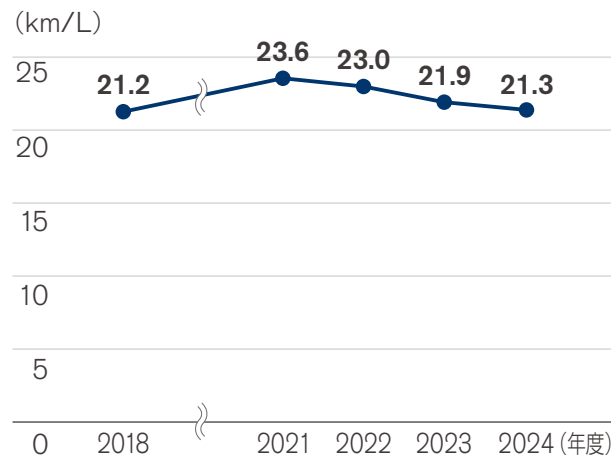


4地域(日本、米国、欧州、中国)



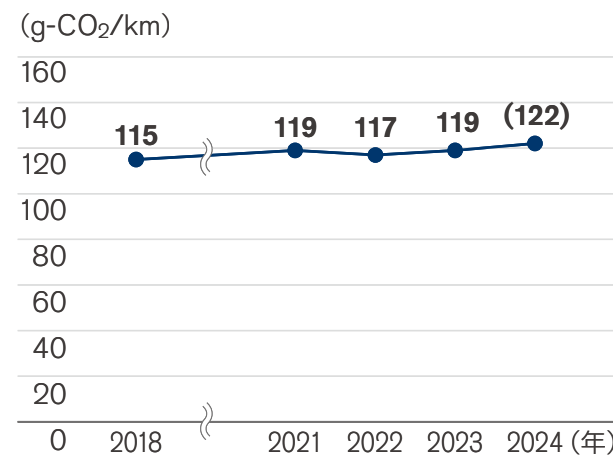
^{*1} CO₂排出量はWell to Wheelベース、削減率は社内規定の方法で算出しています。

日本における企業平均燃費(CAFE)*1



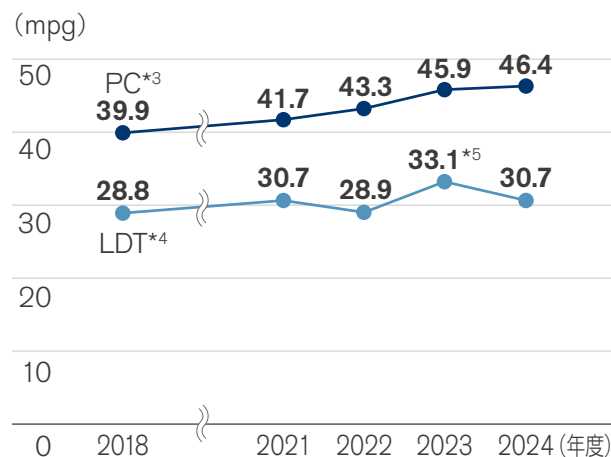
2024年度の日本における企業平均燃費*2は、21.3km/Lとなりました。e-POWERにおける大型車比率の増加により企業平均燃費が低下しましたが、e-POWER比率は前年同等を維持しています。

欧州における企業平均CO₂排出量*6



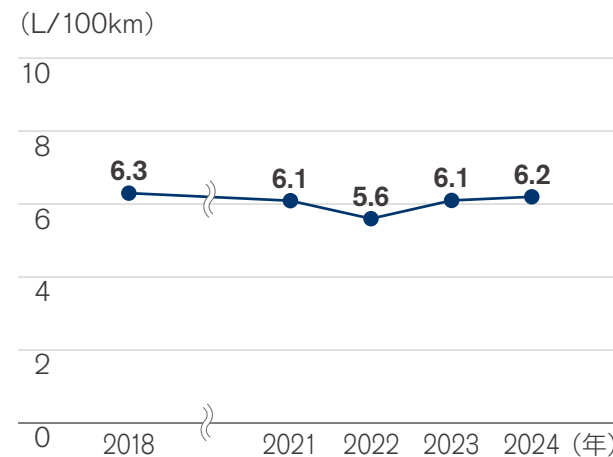
2023年度の企業平均CO₂排出量は119g-CO₂/kmとなりました。2024年度はハイブリッド車の販売が好調でしたが、e-POWER比率の低下により、企業平均CO₂排出量は昨年に対してわずかに悪化する見込みです。*7

米国における企業平均燃費(CAFE)



2024年度の米国における企業平均燃費は乗用車(PC)が46.4mpg、小型トラック(LDT)が30.7mpgとなりました。乗用車セグメントは小型モデルの台数比率増加により、企業平均燃費が向上しました。小型トラックセグメントは大型モデルの台数比率増加により、企業平均燃費が低下しました。

中国における企業平均燃料消費量



2024年の中国における国内生産車の企業平均燃料消費量は6.2L/100kmとなりました。新型の大型SUVの販売が好調でしたが、電動車比率の向上により、全体としては前年同等を維持しました。

*1 2022年度以降はWorld-wide harmonized Light duty Test Cycle (WLTC)評価モードによる型式認証車両を含みます。

*2 社内で算出した暫定値を使用しており、一部車種にWLTCモードの燃費値を含みます。

*3 Passenger Car

*4 Light Duty Truck

*5 2023年値に誤りがあったため、修正しています。

*6 2021年以降はWorldwide harmonized Light vehicles Test Procedure (WLTP)評価モードによる型式認証車両を含みます。

*7 2024年の公式値はまだ公開されていないため、暫定値で表示しています。

売上高、グローバル販売台数および生産台数データ

	2023年度	2024年度
売上高*1	126,857	126,332

(億円)

	2023年度	2024年度
グローバル販売台数*2	3,442	3,346
日本	484	461
北米	1,262	1,303
欧州	361	351
アジア	961	841
その他	374	390

(千台)

	2023年度	2024年度
グローバル生産台数*2	3,430	3,101
日本	725	641
北米*3	1,235	1,178
欧州*4	325	276
アジア*5	1,020	895
その他*6	126	110

(千台)

お客さまの電動車への関心が高い日本と欧州においては、e-POWER、EVおよびハイブリッド車*7の比率は前年に引き続き70%前後を維持しています。これは、環境価値を追求したサステナブルな商品群が日産ビジネスのコアになりつつある状況を表していると、日産は捉えています。

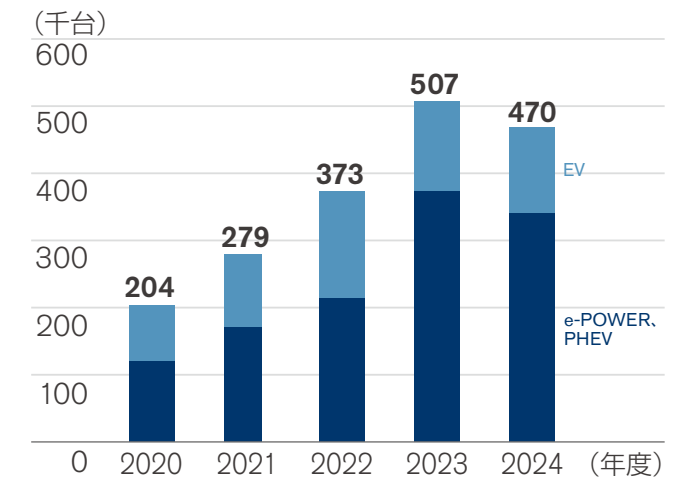
パワートレイン比率(出荷台数ベース)

地域別	単位	ガソリン車	ディーゼル車	e-POWER車	EV	ハイブリッド車
日本	%	31	0	42	6	21
北米	%	96	0	1	3	0
欧州	%	24	4	25	8	38
アジア	%	88	4	3	3	1
その他	%	79	12	2	0	6
グローバル	%	75	3	10	4	8

電動車の販売台数(EV、e-POWER、PHEV)

Nissan Ambition 2030では電動車ラインナップの拡充、電動車販売比率の向上を目指しています。2024年度は厳しい競争環境への対応として一部市場で実施した生産調整の影響により、電動車の販売台数は前年に対して減少しました。

EV、e-POWER、PHEV*8販売台数



*1 2024年度から中国合併会社持分法ベースへ変更いたします。これに伴い、2023年度売上高の値を修正しております。

*2 グローバル販売台数およびグローバル生産台数の中国・台湾については、1～12月ベースの数字

*3 米国、メキシコの生産台数

*4 英国、フランスの生産台数

*5 台湾、タイ、中国、インドの生産台数

*6 南アフリカ、ブラジル、エジプト、アルゼンチンの生産台数

*7 e-POWER車以外

*8 2023年度よりPHEVは中国市場で販売

気候変動(企業活動)

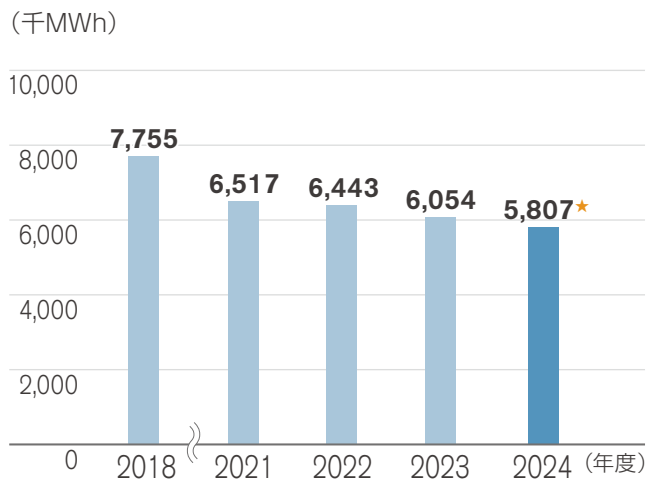
エネルギー投入量*1

	単位	2018	2021	2022	2023	2024
合計	MWh	7,755,180	6,516,552	6,442,705	6,053,630	5,807,255★
地域別						
日本	MWh	3,845,585	3,432,988	3,403,180	3,045,909	2,863,146
北米	MWh	2,397,746	1,935,449	1,971,446	2,074,570	2,069,954
欧州	MWh	862,042	557,173	545,092	511,387	474,668
その他	MWh	649,807	590,941	522,987	421,763	399,488
エネルギー源別						
一次エネルギー						
天然ガス	MWh	2,882,123	2,374,726	2,396,027	2,049,589	1,934,282
LPG	MWh	199,882	147,084	129,607	109,199	102,694
コークス	MWh	179,226	112,162	111,013	105,823	93,636
灯油	MWh	127,258	71,632	57,919	53,602	45,176
ガソリン	MWh	153,630	90,081	94,372	55,898	55,043
軽油	MWh	57,068	49,218	48,110	9,800	8,818
重油	MWh	19,101	11,967	10,954	28,837	4,938

						(年度)
	単位	2018	2021	2022	2023	2024
敷地外						
電力(購入)	MWh	4,008,519	3,558,048	3,484,661	3,484,666	3,419,207
うち再生可能エネルギー*2	MWh	150,623	220,768	239,875	215,351	239,002
冷水	MWh	5,473	3,597	3,929	4,643	4,870
蒸気	MWh	63,577	74,565	94,423	140,283	123,984
うち再生可能エネルギー*3	MWh					7,605
敷地内						
電力(自家発電)	MWh	59,323	23,473	11,689	11,288	14,607
うち再生可能エネルギー*4	MWh	59,323	23,473	11,689	11,288	14,607
再生可能エネルギー総量	MWh	209,946	244,242	251,563	226,639	261,214

エネルギー投入量推移*1

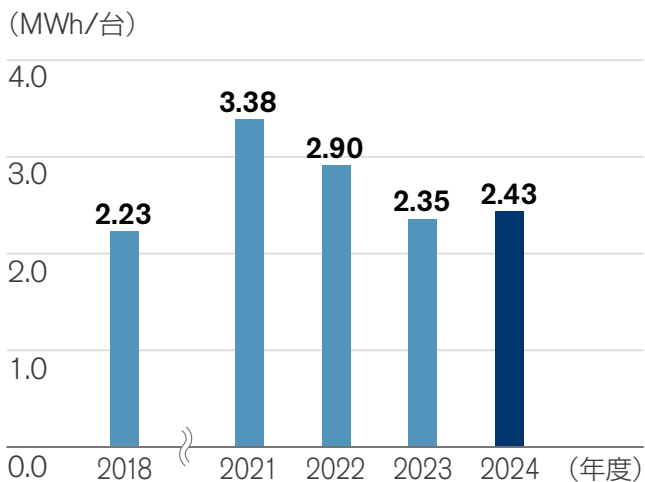
2024年度の日産のグローバル企業活動における総エネルギー投入量は5,807千MWh★となり、2023年度の6,054千MWhより、4%減少しました。



エネルギー消費量(生産台数当たり)*5

2024年度の生産台数当たりのエネルギー消費量は2.43MWhとなり、2023年度より3%増加しました。

日本の数値には、海外で組み立てて使用するパワートレインや他の部品の製造を含みます。分母の数はそれぞれの地域で製造された生産台数であるため、数値が高くなる場合があります。



(年度)		
地域別	単位	2024
日本	MWh/台	4.46
北米	MWh/台	1.78
欧州	MWh/台	1.72
その他	MWh/台	1.30

*1 2023年度の実績値を見直した結果、変更が生じています。

*2 日産が購入した電力における再生可能エネルギー量

*3 日産が購入した冷水・蒸気における再生可能エネルギー量

*4 日産が拠点内で発電し自社で消費した再生可能エネルギー量

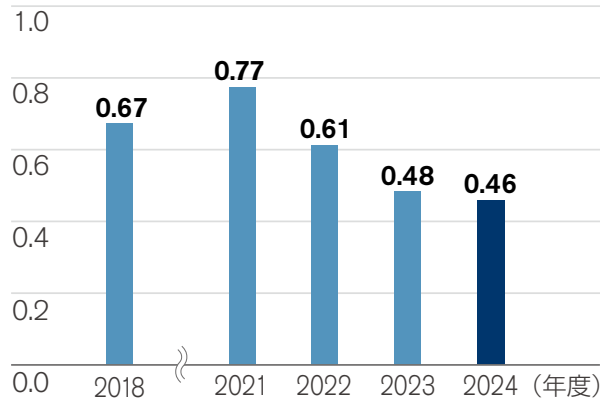
*5 データの集計対象を変更し、財務連結グループと一致させています。

★を付している開示情報について、KPMGあずさサステナビリティ株式会社により保証を受けています。
詳細はこちらをご参照ください。 [>>>P061](#)

エネルギー消費量(売上高当たり)*1

2024年度の売上高当たりのエネルギー消費量は0.46MWhとなり、2023年度と比較し、4%の減少となりました。企業として経済成長がエネルギー使用に及ぼす影響を最小化する取り組みを継続しています。

(MWh/百万円)



スコープ1と2のCO₂排出量*1

2024年度の日産のグローバル企業活動からのCO₂排出量*2は、1,519千トン★(スコープ1排出量442千トン★、スコープ2排出量1,077千トン★)となり、2023年度の1,731千トンより12%減少しました。

(年度)

	単位	2018	2021	2022	2023	2024
スコープ1	kt-CO ₂	725	588	585	477	442★
スコープ2	kt-CO ₂	1,688	1,238	1,187	1,254	1,077★
スコープ1と2	kt-CO ₂	2,413	1,825	1,772	1,731	1,519★
日本	kt-CO ₂	1,277	1,001	994	984	908
北米	kt-CO ₂	687	483	502	501	401
欧州	kt-CO ₂	131	89	81	86	73
その他	kt-CO ₂	318	253	195	161	137

エネルギー起源CO₂以外の温室効果ガス(GHG)排出量*3

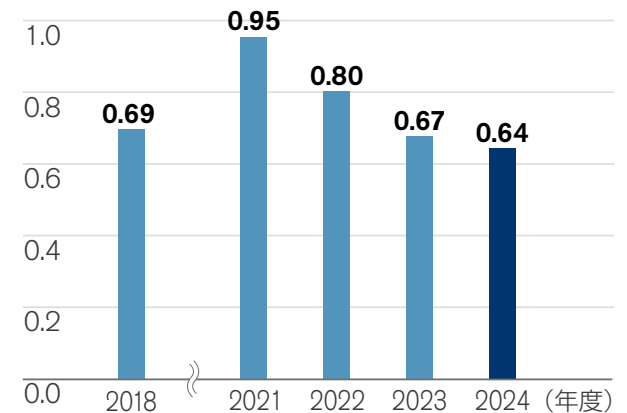
(年度)

種類別	単位	2018	2021	2022	2023	2024
CH ₄ (メタン)	t-CO ₂ e	4,846	5,088	5,054	5,705	4,810
N ₂ O(一酸化二窒素)	t-CO ₂ e	1,425	1,244	1,071	1,801	2,094
HFCs(ハイドロフルオロカーボン)	t-CO ₂ e	3,594	1,320	1,878	148	121
PFCs(パーフルオロカーボン)	t-CO ₂ e	0	0	0	0	0
SF ₆ (六ふっ化硫黄)	t-CO ₂ e	43	43	43	128	117
NF ₃ (三ふっ化窒素)	t-CO ₂ e	2	1	0	0	0

スコープ1と2のCO₂排出量*4 (生産台数当たり)

2024年度は、企業活動に伴う生産台数あたりのCO₂排出量が0.64となりました。

(t-CO₂/台)



*1 2023年度の実績値を見直した結果、変更が生じています。

*2 CO₂の算定方法についてはこちらをご参照ください。 >>>P062

*3 地球温暖化対策の推進に関する法律をもとに算出した、日産自動車株式会社の国内拠点からのGHG排出量。

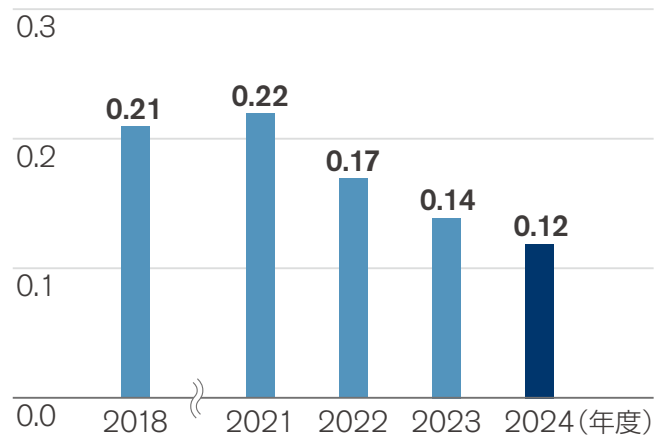
*4 データの集計対象を変更し、財務連結グループと一致させています。

★を付している開示情報について、KPMGあすさすサステナビリティ株式会社により保証を受けています。詳細はこちらをご参照ください。 >>>P061

スコープ1と2のCO₂排出量(売上高当たり)*1

2024年度のグローバル拠点からの売上高100万円当たりのCO₂排出量は0.12トンとなりました。

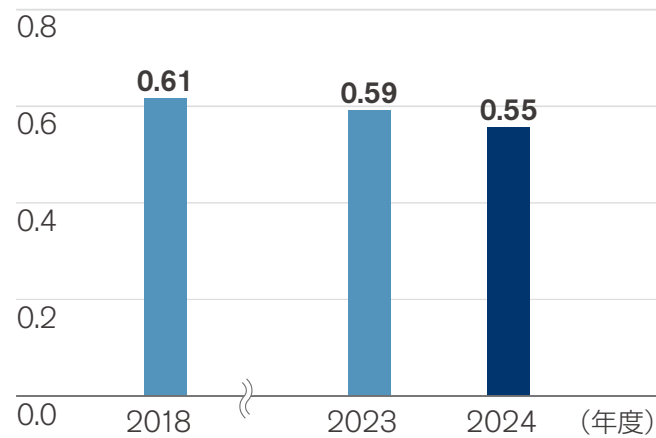
(t-CO₂/百万円)



生産活動からのCO₂排出量(生産台数当たり)*2*3

2024年度のグローバル生産台数当たりのCO₂排出量は0.55トンとなり、2018年度比で10%削減しました。

(t-CO₂/台)



*1 2023年度の実績値を見直した結果、変更が生じています。

*2 NGP管理範囲での生産台数当たりのCO₂排出量

*3 データの集計対象を変更し、財務連結グループと一致させています。

輸送量

(年度)						
	単位	2018	2021	2022	2023	2024
合計*1*2	百万ton-km	34,973	23,052	25,938	32,893	31,116
インバウンド*3	百万ton-km	10,278	7,572	8,720	11,166	11,159
アウトバウンド*4	百万ton-km	24,695	15,480	17,218	21,727	19,957

海上	%	60.8	61.9	69.9	69.6	70.5
トラック	%	23.5	24.0	19.1	20.4	19.2
鉄道	%	14.8	13.7	10.7	9.8	10.1
航空	%	0.9	0.4	0.3	0.2	0.2

2024年度はグローバル輸送量が前年比で5%減少し、311億トンキロとなりました。

物流からのCO₂排出量

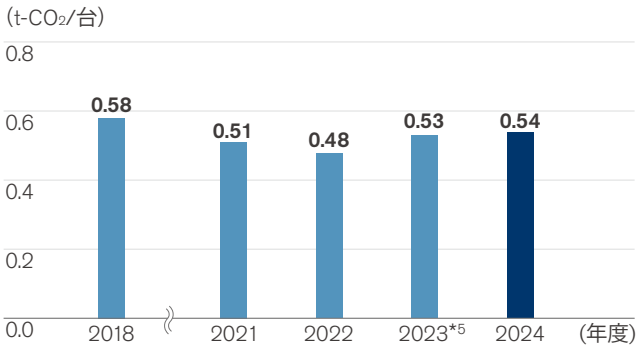
(年度)						
	単位	2018	2021	2022	2023*5	2024
合計*1*2	kt-CO ₂	2,471	1,610	1,591	1,981	1,774
インバウンド*3	kt-CO ₂	891	410	408	552	505
アウトバウンド*4	kt-CO ₂	1,580	1,201	1,182	1,429	1,269

海上	%	29.1	26.4	35.1	37.0	38.1
トラック	%	59.8	66.5	58.3	57.3	56.1
鉄道	%	3.8	3.9	3.4	3.1	3.4
航空	%	7.2	3.2	3.1	2.6	2.5

2024年度の物流からのCO₂排出量は前年比で10%減少し、1,774千トンとなりました。

物流からのCO₂排出量(生産台数当たり)

2024年度は、生産台数当たりのCO₂排出量は0.54トンとなりました。



*1 GHG Protocolに準拠した国際基準に基づく国際基準に準じた排出係数の適用により、2018年度以降の数値に変更が生じています。
*2 CO₂排出量には当社生産拠点への部品の輸送、ならびに当社生産拠点から販売店への輸送が含まれます。
*3 インバウンドには部品調達・KD(現地組み立て用)部品の輸送と返却容器の輸送が含まれます。
*4 アウトバウンドには完成車・サービス部品輸送、販売店までの輸送と廃材・利材輸送については、2022年度の実績値より追加しています。
*5 2023年度の実績値を見直した結果、変更が生じています。

カテゴリー別のスコープ3排出量

温室効果ガス(GHG)の報告に関するガイドラインに基づいた試算を行った結果、日産のスコープ3排出量の約81%は、製品であるクルマの使用によるものでした。

(年度)

項目	単位	2024
1.購入した製品・サービス*1	kt-CO ₂	23,365★
2.資本財	kt-CO ₂	1,271
3.燃料およびエネルギー関連活動	kt-CO ₂	225
4.輸送、配送(上流)	kt-CO ₂	1,643
5.事業から出る廃棄物	kt-CO ₂	109
6.出張	kt-CO ₂	178
7.雇用者の通勤	kt-CO ₂	153
8.リース資産(上流)	kt-CO ₂	—
9.輸送、配送(下流)	kt-CO ₂	607
10.販売した製品の加工	kt-CO ₂	6
11.販売した製品の使用*2	kt-CO ₂	125,080★
12.販売した製品の廃棄	kt-CO ₂	232
13.リース資産(下流)	kt-CO ₂	497
14.フランチャイズ	kt-CO ₂	—
15.投資	kt-CO ₂	122
合計	kt-CO ₂	153,489

*1 2024年度実績より算定式を改定しております。改定後の算定方法(購入した製品・サービスにおけるCO₂排出量)についてはこちらをご参照ください。 >>>P062

*2 2024年度実績より算定式を改定しております。改定後の算定方法(販売した製品の使用に伴うCO₂排出量)についてはこちらをご参照ください。 >>>P062

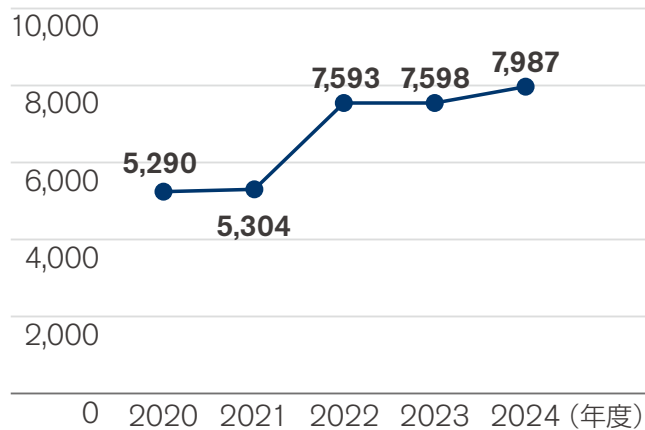
★を付している開示情報について、KPMGあすさすステナビリティ株式会社により保証を受けています。詳細はこちらをご参照ください。 >>>P061

資源依存(再利用)

化学物質の適正な利用

日産では化学物質のハザードやリスクの選定基準を法令遵守以上のレベルで見直しを行っており、世界で検討が進んでいる物質も積極的に制限しています。その結果、2024年度の指定化学物質数は7,987へと増加しています。これは将来のリペア、リユース、リビルト、リサイクルといった資源の循環に必要な取り組みと考えています。^{*1}

指定化学物質数



クルマでの再生樹脂の利用

日産はクルマへの再生樹脂の使用拡大を技術開発も含め取り組んでいます。

2024年度は、日産車1台に使用する樹脂のうち再生樹脂の割合は5%となりました。この実績は欧州における最量販車をもとに算出しています。

シュレッダーダストの最終処分率

日本の自動車リサイクル法に基づいて、リサイクル率向上に継続的に取り組んできました。その結果、使用済み自動車(ELV)より鉄類および非鉄金属を除いた自動車シュレッダーダスト(ASR)の最終処分場での処分率は2024年度もゼロを達成しました。

材料比率

日産車に使用する材料は、重量比で鉄60%、非鉄11%、樹脂19%、その他11%(2024年実績)で構成されています。日産は、天然資源使用量をさらに低減するため、それぞれの材料に関し再生材の使用拡大に向けた取り組みを進めています。

バンパー回収本数推移

2024年度に日本国内のディーラーで回収したバンパー本数は7万8,000本となり、回収率は2023年度から6%減少しました。

^{*1} 化学物質のガバナンスに関する詳細はこちらのページをご参照ください。 [>>>P018](#)

資源依存(拠点の廃棄物)

廃棄物発生量*1

2024年度の定常廃棄物*2発生量は、グローバルの企業活動全体で150,642トン、生産工場で145,678トンとなりました。(生産工場の非定常廃棄物*3は10,226トン)

企業活動での定常廃棄物発生量*4

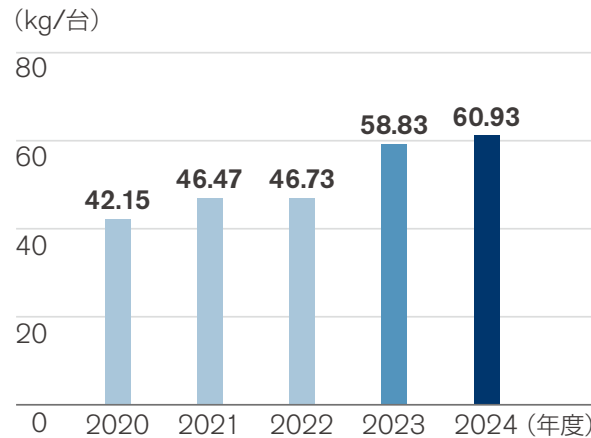
		(年度)				
	単位	2020	2021	2022	2023	2024
合計	ton	153,160	158,199	157,982	155,857	150,642

地域別内訳						
日本	ton	48,921	52,386	51,069	57,646	54,910
北米	ton	48,043	51,062	52,007	50,814	50,856
欧州	ton	31,868	33,895	36,577	44,551	43,142
その他	ton	24,328	20,857	18,329	2,846	1,734

処理方法別内訳						
リサイクル	ton	133,168	139,599	139,225	146,332	142,013
焼却廃棄物	ton	13,453	11,392	10,223	1,997	1,352
埋立廃棄物	ton	6,539	7,208	8,688	7,528	7,277

廃棄物発生量(生産台数当たり)*1

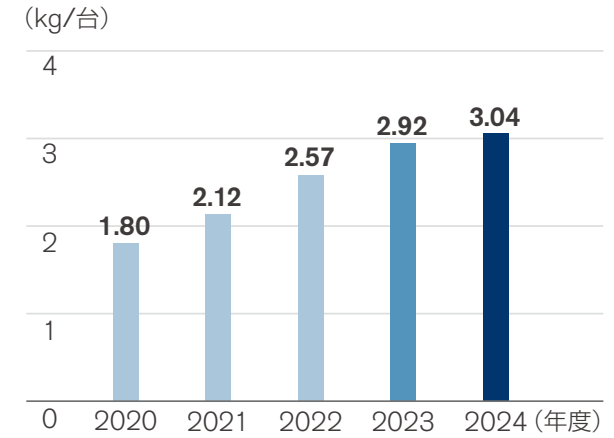
2024年度の生産台数当たりの定常廃棄物発生量*5は60.93kgとなりました。



		(年度)	
地域別	単位	2023	2024
日本	kg/台	76.53	82.62
北米	kg/台	40.80	41.53
欧州	kg/台	134.72	154.15
その他	kg/台	9.00	5.55

埋立廃棄物量(生産台数当たり)*1

2024年度の生産台数当たりの定常埋立廃棄物量は3.04kgとなりました。



プラスチック資源循環促進法*6に関する対応

2024年度の日本国内のプラスチック使用製品産業廃棄物等の排出量は6,092トンとなりました。

プラスチックに関する目標	2024年度実績
梱包用プラスチック材等の排出抑制活動の継続	リターナブル容器の再利用を継続実施
プラスチック使用製品産業廃棄物における再資源化率100%の継続	再資源化率100%

*1 2023年度実績値より集計対象を財務連結グループと一致させています。2022年度以前の実績値は非連結会社も含みます。

*2 通常生産、メンテナンス、故障対応などの定常廃棄物。

*3 新工程設置、設備移設、設備撤去など、非定常に発生する廃棄物。

*4 2019年からの経年変化を示す開示合計は、*3を除いた生産拠点とオフィス拠点から発生した、定常廃棄物総量。

*5 生産工場における定常廃棄物発生量

*6 プラスチック資源循環促進法：プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律。

水資源の管理

企業活動での取水量*1

2024年度にグローバル企業活動における取水量は16,873千m³となり、2023年度の17,794千m³と同等となりました。

2024年度のグローバル生産工場の取水量は15,761千m³となり、2023年度の16,620千m³と同等となりました。

(年度)						
	単位	2020	2021	2022	2023	2024
合計	千m ³	21,159	20,090	20,208	17,794	16,873

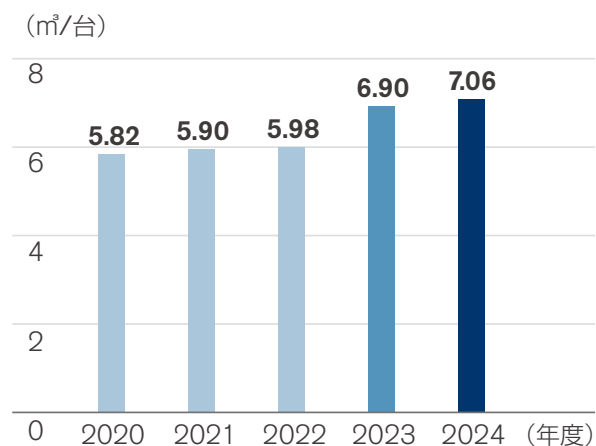
日本	千m ³	10,797	10,317	10,472	10,724	10,086
北米	千m ³	3,888	4,047	4,235	4,409	4,321
欧州	千m ³	1,373	1,404	1,270	1,380	1,402
その他	千m ³	5,101	4,322	4,231	1,281	1,064

水源別の取水量

(年度)		
	単位	2024
合計	千m ³	16,873
地表水	千m ³	1,117
地下水	千m ³	6,118
第三者の水	千m ³	9,638

企業活動での取水量(生産台数当たり)*1

2024年度の生産台数当たりの水の取水量は7.06m³/台となり、2023年度の6.90m³/台と同等となりました。



(年度)			
地域別	単位	2023	2024
日本	m ³ /台	14.80	15.73
北米	m ³ /台	3.64	3.71
欧州	m ³ /台	4.24	5.07
その他	m ³ /台	4.08	3.45

企業活動での排水量*1

2024年度のグローバル企業活動における排水量は12,831千m³となり、2023年度の13,405千m³と同等となりました。

(年度)						
	単位	2020	2021	2022	2023	2024
合計	千m ³	13,624	13,620	13,319	13,405	12,831

日本	千m ³	8,474	8,771	8,902	9,448	9,133
北米	千m ³	2,351	2,565	2,610	2,837	2,669
欧州	千m ³	1,094	707	596	724	706
その他	千m ³	1,705	1,577	1,210	396	324

水質

化学的酸素要求量 (COD)*2	kg	18,017	19,941	24,884	24,811	22,536
------------------	----	--------	--------	--------	--------	--------

排水先別の排水量

(年度)		
	単位	2024
合計	千m ³	12,831
地表水	千m ³	8,144
地下浸透	千m ³	0
第三者の水	千m ³	4,133
海水	千m ³	554

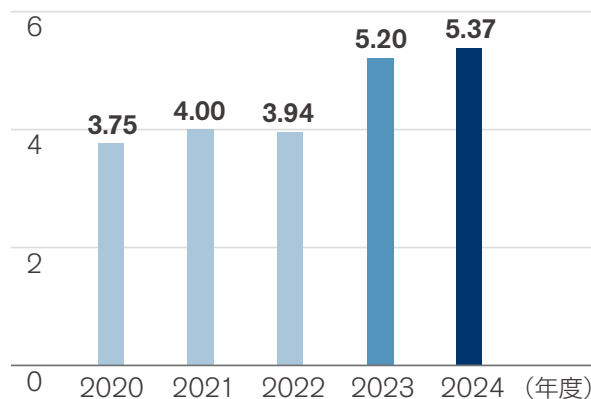
*1 2023年度実績値より集計対象を財務連結グループと一致させています。2022年度以前の実績値は非連結会社も含みます。

*2 日産自動車および日産自動車九州の4拠点

企業活動での排水量(生産台数当たり)*1

2024年度の生産台数当たりの排水量は5.37m³となり、2023年度の5.20m³と同等となりました。

(m³/台)



企業活動での消費量*1*2

2024年度のグローバル企業活動における水の総消費量は4,042千m³となり、2023年度の4,390千m³より減少しました。

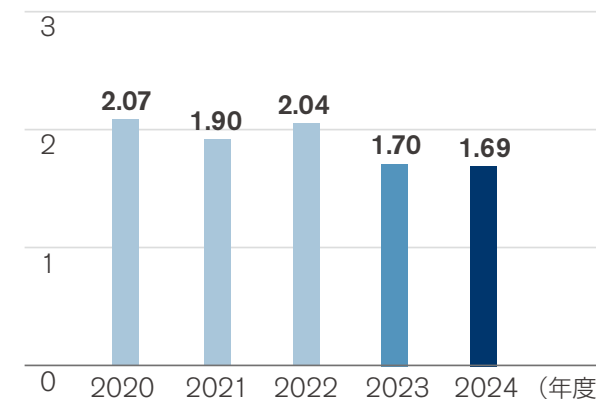
(年度)

	単位	2020	2021	2022	2023	2024
合計	千m ³	7,535	6,470	6,889	4,390	4,042
日本	千m ³	2,323	1,546	1,570	1,277	953
北米	千m ³	1,537	1,481	1,625	1,572	1,653
欧州	千m ³	279	697	674	656	696
その他	千m ³	3,396	2,745	3,021	885	740

企業活動での消費量(生産台数当たり)*1

2024年度の生産台数当たりの水の消費量は、1.69m³/台となり、2023年度の1.70m³/台と同等となりました。

(m³/台)



(年度)

地域別	単位	2023	2024
日本	m ³ /台	13.03	14.24
北米	m ³ /台	2.34	2.29
欧州	m ³ /台	2.22	2.56
その他	m ³ /台	1.26	1.05

日本の数値には、海外で組み立てて使用するパワートレインや他の部品の製造を含みます。分母の数はそれぞれの地域で製造された生産台数であるため、日本の数値が他の地域よりも高くなる場合があります。

(年度)

地域別	単位	2023	2024
日本	m ³ /台	1.76	1.49
北米	m ³ /台	1.30	1.42
欧州	m ³ /台	2.02	2.52
その他	m ³ /台	2.82	2.40

*1 2023年度実績値より集計対象を財務連結グループと一致させています。2022年度以前の実績値は非連結会社も含みます。

*2 GRI303に基づいて算出。消費量は水の総取水量から総排水量を差し引いた量を示しています。

大気品質

エミッション(NO_x, SO_x)

2024年度に生産拠点*1から排出されたNO_xとSO_xの量はそれぞれ360トン、1トンになりました。

		(年度)				
	単位	2020	2021	2022	2023	2024
窒素酸化物(NO _x)	ton	364	373	340	495	360
硫黄酸化物(SO _x)	ton	10	7	2	2	1

揮発性有機化合物(VOC)排出量*2

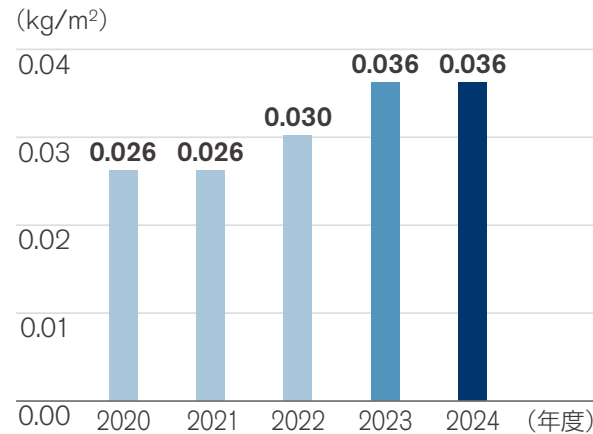
2024年度のVOC総排出量は10,404トンとなり、2023年度より減少となりました。水系塗料、VOC含有率の低い物質への切り替えなどの活動を継続しています。

		(年度)				
	単位	2020	2021	2022	2023	2024
合計	ton	10,451	10,653	11,104	11,018	10,404

日本	ton	3,176	3,031	3,987	4,791	4,397
北米	ton	3,097	3,112	3,156	3,294	3,480
欧州	ton	839	519	877	1,023	749
その他	ton	3,339	3,991	3,084	1,910	1,778

VOC排出量(塗装面積当たり)*2

2024年度の塗装面積当たりのVOC排出量は0.036kgとなりました。



	単位	(年度)	
		2023	2024
合計	kg/m²	0.036	0.036
日本	kg/m²	0.052	0.054
北米	kg/m²	0.021	0.024
欧州	kg/m²	0.029	0.024
その他	kg/m²	0.066	0.060

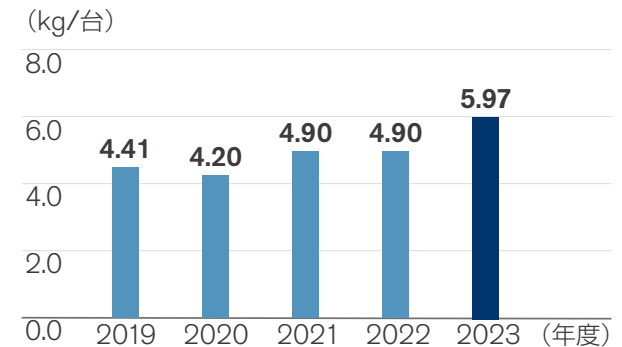
PRTR対象物質排出量(日本)*3

2023年度の化学物質排出移動量届出制度(PRTR: Pollutant Release and Transfer Register)対象物質の排出量は4,326トンとなり、法改正による新規対象物質増加等により2022年度の2,924トンより増加となりました。

		(年度)				
	単位	2019	2020	2021	2022	2023
国内拠点合計	ton	3,339	2,173	2,183	2,924	4,326
追浜工場	ton	1,022	697	881	959	1,055
栃木工場	ton	467	394	323	567	1,077
日産自動車九州株式会社	ton	1,391	1,042	942	1,369	2,151
横浜工場	ton	21	9	4	8	15
いわき工場	ton	62	6	4	4	7
日産テクニカルセンター	ton	351	3	3	3	3
座間工場	ton	26	22	26	14	18

PRTR対象物質排出量(生産台数当たり/日本)

2023年度の実績より集計対象を財務連結グループと一致させています。2022年度以前の実績値は非連結会社も含みます。



*1 国内連結拠点のみ

*2 2023年度実績値より集計対象を財務連結グループと一致させています。2022年度以前の実績値は非連結会社も含みます。

*3 日本のPRTRのガイドラインに基づいて算出。PRTR取扱量から製造品としての搬出量を除いた総排出量。

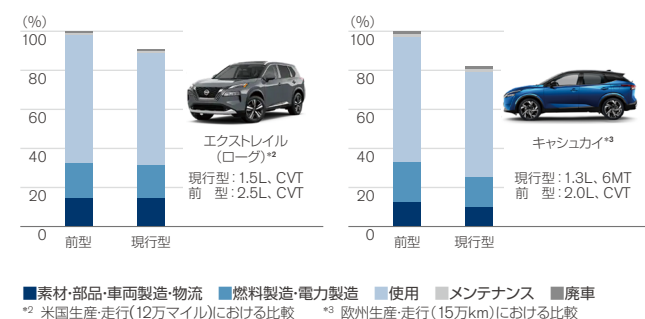
環境課題を踏まえた 基盤の強化

ガソリン車のライフサイクルアセスメント

日産はLCA手法の適用をグローバル販売モデルを中心に進めており、台数ベースでのカバレッジは、グローバルで約80%、欧州では約90%に達しています。

「エクストレイル（「ローグ」）」「キャシュカイ」の例では、パワートレインの効率向上や車両軽量化により、前型車よりもCO₂等価排出量を削減しています。*1

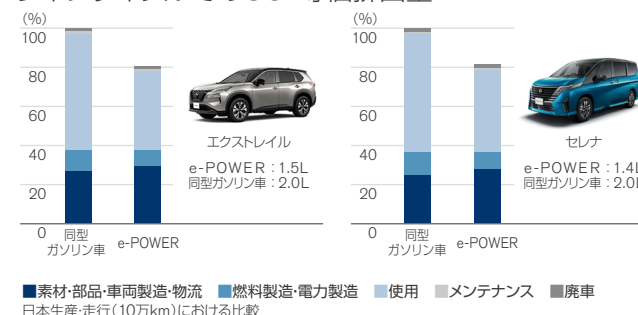
ライフサイクルでのCO₂等価排出量



e-POWERのライフサイクルアセスメント

2016年に新パワートレインのe-POWERを投入し、ライフサイクルにおける環境負荷を低減しながら車両の電動化をさらに推進しています。例えば、「エクストレイル e-POWER」「セレナ e-POWER」では同型のガソリン車と比較し、約20%のCO₂等価排出量を削減を達成しています。

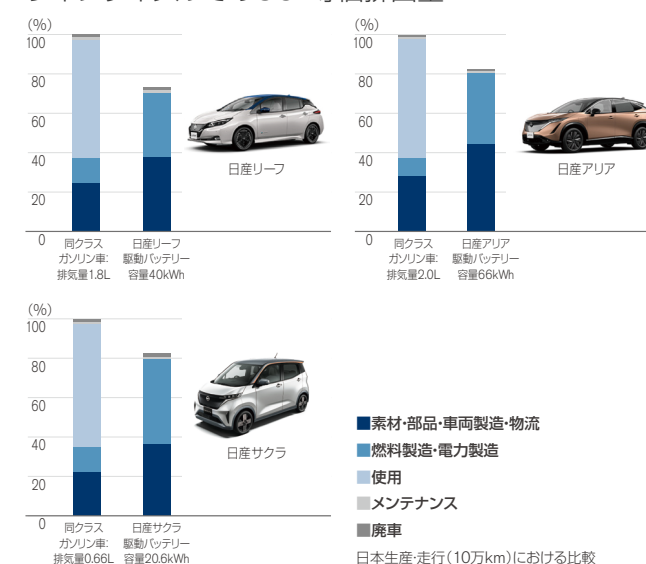
ライフサイクルでのCO₂等価排出量



EVのライフサイクルアセスメント

「日産リーフ」は日本の同クラスのガソリン車と比べ、ライフサイクルにおけるCO₂等価排出量を約30%削減しています。2022年発売の「日産アリア」と「日産サクラ」は、EV商品力のさらなる向上と環境負荷低減を両立しています。航続距離を伸ばすと同時に日本の同クラスガソリン車対比で、ライフサイクルCO₂排出量を約20%削減しました。

ライフサイクルでのCO₂等価排出量

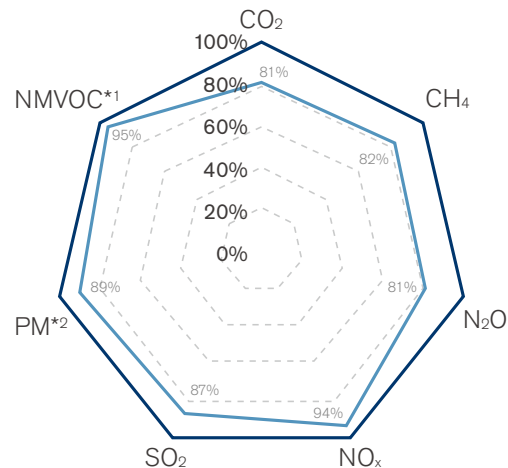


*1 LCA手法に関する詳細はこちらをご参照ください。 <https://www.nissan-global.com/JP/SUSTAINABILITY/ENVIRONMENT/GREENPROGRAM/FOUNDATION/LCA/>

ライフサイクル評価における 地球温暖化以外の貢献

日産はLCA評価のスコープを温室効果ガス以外の化学物質へも広げています。新型「キャシュカイ」は前型車と比較し、削減対象とする全化学物質においておよそ5～20%の排出量削減をライフサイクルで達成しており、地球温暖化以外を含む総合的な環境負荷低減に貢献しています。

新型「キャシュカイ」のライフサイクル評価



- 前型車
- 新型「キャシュカイ」

欧州生産・走行(15万km)における比較

マテリアルバランス

投入量

(年度)			
	単位	2023	2024
原材料*3	ton	3,039,866	2,820,044
エネルギー	MWh	6,053,220*4	5,807,255
うち再生可能エネルギー	MWh	226,639*4	261,216
水*3	千m ³	17,794	16,873

生産量／排出量

(年度)			
	単位	2023	2024
車両生産			
グローバル生産台数*3	千台	2,577	2,391
CO ₂ 排出量	kt-CO ₂	1,731*4	1,519
排水量*3	千m ³	13,405	12,831
エミッション			
NO _x (窒素酸化物)	ton	495	360
SO _x ((硫黄酸化物)	ton	2	1
VOC(揮発性有機化合物)*3	ton	11,018	10,404
廃棄物発生量*3			
リサイクル	ton	146,332	142,013
焼却廃棄物	ton	1,997	1,352
埋立廃棄物	ton	7,528	7,277

環境保全コスト*5

(年度)					
	単位	2023		2024	
		投資	コスト	投資	コスト
総額	百万円	15,557	165,353	15,887	160,937
事業エリア内コスト	百万円	1,908	2,207	751	2,145
上・下流コスト	百万円	0	406	0	384
管理活動コスト	百万円	0	13,324	0	12,094
研究開発コスト	百万円	13,649	149,238	15,136	145,888
社会活動コスト	百万円	0	48	0	108
環境損傷対応コスト	百万円	0	130	0	318

経済効果

(年度)			
	単位	2023	2024
総額	百万円	13,996	9,983
費用削減額	百万円	3,293	237
収益額	百万円	10,703	9,746

*1 NMVOC:Non-Methane Volatile Organic Compounds

*2 PM:Particulate Matter

*3 2023年度実績値より集計対象を財務連結グループと一致させています。2022年度以前の実績値は非連結会社も含みます。

*4 2023年度の実績値を見直した結果、変更が生じています。

*5 環境保全コストは環境省の「環境会計ガイドライン」に準じて算出され、日本国内の活動分のみを示しています。

社会性データ

従業員データ (年度)

	単位	2022	2023	2024
連結従業員数*1		131,719 (15,397)	133,580 (16,549)	132,790 (16,031)
	日本	60,423 (14,550)	60,468 (15,248)	60,902 (15,065)
	北米	37,745 (182)	40,262 (310)	40,242 (234)
	欧州	10,037 (274)	9,999 (693)	9,771 (478)
	アジア	17,649 (57)	16,958 (48)	16,210 (40)
	その他海外地域	5,865 (334)	5,893 (250)	5,665 (214)
		8,067	6,969	2,558
新規採用人数*2		8,067	6,969	2,558
	日本*3	1,464	1,765	1,471
	北米	4,995	3,989	564
	欧州	638	550	145
	アジア	204	360	249
	その他海外地域	766	415	129
		5.3	4.0	3.7
離職率*2		5.3	4.0	3.7
	日本*3	2.6	2.9	2.8
	北米	6.9	3.4	3.1
	欧州	7.3	4.5	4.3
	アジア	3.9	10.2	8.0
	その他海外地域	5.6	8.0	6.5
		15.5	15.9	16.2
女性管理職比率		15.5	15.9	16.2
従業員意識調査*4 (エンゲージメント)	スコア	69	71	69
	回答率	90	91	89
重度災害件数 (GUR) *5		44	22	31
労働災害度数率 (FR1)		0.91	0.85	0.92

	単位	2022	2023	2024
日産自動車 (株)				
従業員数	人	23,525	24,034	24,413
	男性	20,174	20,510	20,839
		3,351	3,524	3,574
平均年齢	歳	41.7	41.2	41.0
	男性	41.8	41.3	41.0
		40.9	40.7	40.8
勤続年数	年	16.4	15.0	14.7
	男性	17.1	15.6	15.2
		12.3	11.2	11.3
新規採用人数	人	1,527	1,765	1,819
	男性	1,316	1,465	1,553
		211	300	266
離職率*6	%	6.2	6.2	5.0
	自己都合	2.7	2.4	2.8
障がい者雇用率	%	2.5	2.5	2.6
組合員総数*7	人	26,434	26,531	26,701
平均年間給与*8	円	8,509,353	8,771,496	8,956,336
男女の賃金の差異*9	全体	81.9	82.5	83.8
	正規	78.0	79.0	81.0
	非正規	88.1	81.6	81.0

	単位	2022	2023	2024
人事評価を受けた従業員の割合	%	100	100	100
年休取得日数	日	19.7	19.0	18.8
年休取得率	%	96	97	94
平均残業時間	時間/月	25.6	25.4	20.3
育児休職取得者数	人	373	412	696
	男性	246	302	515
		127	110	181
男性の育児休職取得率*10	%	42.3	51.4	65.5
育児休職復職率	%	94.2	96.9	97.7
	男性	94.3	95.5	96.9
		94.1	99.3	100
介護休業取得者数	人	13	25	19
	男性	11	20	13
		2	5	6
管理職：女性人数	人	330	346	374
	女性比率	10.4	10.7	11.5
うち部長職以上：女性人数	人	92	99	114
	女性比率	8.6	9.0	10.2
間接従業員に占める外国人の割合	%	5.8	6.4	6.8
管理職に占める外国人の割合	%	5.8	6.2	6.3

*1 ()内は臨時雇用者数で外数。
*2 間接従業員のみ。
*3 日産自動車株式会社と日産自動車九州株式会社の合計。
*4 100点満点で、従業員意識調査に参加した国内外88社の平均スコア。
*5 橋内(日産自動車株式会社、日産自動車九州株式会社および海外生産拠点)のすべての作業者(橋内パートナー企業などの他社従業員、外来者を含む、雇用形態や所属は問わず)
*6 離職率合計には、定年退職者を含む。
*7 組合員総数には、一般従業員、シニアパートナー/シニア社員(定年退職後の再雇用者)を含む。日産自動車九州(株)を含む。
*8 平均年間給与は賞与および基準外賃金を含む。
*9 男女の賃金の差異は、給与・手当・賞与を含めた総支給額を対象者の人数で除し平均を算出のうえ、男性の平均賃金を100としたときの女性の平均賃金の割合を示している。管理職比率など男女間に構成の違いがあることで1名当たり賃金に差が出ているが、賃金制度・体系において性別による処遇差は一切ない。
*10 男性の育児休職取得率=対象年度に育児休職を1日以上取得した男性従業員数÷対象年度に配偶者が出産した男性従業員数

従業員データ(続き)

(年度)

	単位	2022	2023	2024
研修実績	年間延べ受講人数	人	519,905	514,187
	総受講時間	時間	392,294	358,597
	従業員1人当たりの平均受講時間	時間	16.5	14.9
	受講満足度(最高点:5.0)	点数	4.2以上	4.2以上
	従業員1人当たりの投資	円	75,000	76,000
			63,000	

役員データ

	単位	2022年度	2023年度	2025年 7月1日時点
会社法上の役員に占める外国人の割合	%	46.7	40.0	50.0
会社法上の役員に占める女性の割合	%	23.1	26.7	28.6
取締役：女性人数	人	2	3	4
	女性比率	%	16.7	25.0
うち社内取締役：女性人数	人	0	0	1
	女性比率	%	0	25.0
うち社外取締役：女性人数	人	2	3	3
	女性比率	%	28.6	37.5

労働組合の状況

日産自動車株式会社の従業員は日産自動車労働組合に加入し、同組合は全日産・一般業種労働組合連合会を上部団体とし、全日本自動車産業労働組合総連合会を通じ、日本労働組合総連合会に加盟しています。労使関係は安定しており、2025年3月末現在の組合員総数は日産自動車九州を含め26,701名です。なお、日本国内のグループ各社においては大半の企業で会社別労働組合が存在し、全日産・一般業種労働組合連合会を上部団体としています。

ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン

これまでの主な外部評価*1

地域	受賞・認定企業	年	タイトル	主体団体
日本	日産自動車株式会社	2024	「PRIDE指標」8年連続ゴールド受賞	work with Pride
		2022	LinkedIn Talent Awards 2022 Diversity Champion部門ファイナリスト	LinkedIn
		2017	「えるぼし」第3段階目に認定	厚生労働省神奈川労働局
		2017	「なでしこ銘柄」に5年連続で選定	経済産業省と東京証券取引所グループ共同
		2015	「プラチナくるみん」を取得	厚生労働省神奈川労働局
		2015	「女性が輝く先進企業表彰 内閣府特命担当大臣賞」受賞	内閣府男女共同参画局
米州	北米日産会社	2025	Platinum Sponsorship Award	NAACP – Murfreesboro Branch
		2025	Diamond Sponsorship Award	African-American Society of Williamson County
		2024	All-Time Top Corporation	Women’s Business Enterprise National Council (WBENC) (米国)
		2024	Corporate Sponsor of the Year	100 Black Men of Dallas
		2024	All Stars Business Partner	Metropolitan Nashville Public Schools – Academies of Nashville
	カナダ日産自動車会社	2024	Great Place to Work Canada (6年連続)	Great Place to Work
		2024	Canada’s Most Admired Corporate Cultures™	Waterstone Human Capital
		2024	Excellence Awardee for Diversity & Inclusion	Human Resources Director Canada
	メキシコ日産自動車 エヌアールファイナンスメキシコ	2025	Best Places to Work LGBTQ+ Mexico (エヌアールファイナンスメキシコ5年連続、メキシコ日産自動車4年連続)	Human Rights Campaign Equidad MX
		2024	Top Company for Women (3年連続)/Super Company (4年連続)	Top Companies – Expansion
	南米の日産全体 (アルゼンチン、チリ、ブラジル、ペルー)	2024	Great Place to Work for Argentina, Chile, Brazil and Peru (3年連続)	Great Place to Work
		2024	Best place to Work LGBTQIAP+ (初受賞) for Nissan Argentina, Chile and Brazil	Human Rights Campaign
		2024	Racial Equality (2年連続) for Nissan Brazil	Instituto de Identidades do Brasil
		2024	Most inclusive companies for automotive (2年連続) for Nissan Brazil	Automotive Business
AMIEO アフリカ/中東/インド/欧州/オセアニア	英国日産自動車会社 (NMGB)	2024	Outstanding Corporate Social Responsibility Award	Metro
		2024	Pride365認証 (4年連続)	InterPride (英国)
	豪州日産自動車会社/ 日産ニュージーランド社	2024	Great Place to Work	Great Place to Work
ASEAN	フィリピン日産社	2024	Best Employer Brand 2024	Employer Brand Institute of India

*1 米国では上記記載以外にも外部評価受賞あり。

安全

主な外部安全評価結果(2024年度評価分)

地域	外部評価	レーティング	車種	割合*1
米国	NCAP*2	総合5★ (2024モデルイヤー)	「日産リーフ」 「日産リーフプラス」 「ムラーノ」 「アルティマ」 「セントラ」 「ヴァーサ」 「ローグ」 「日産アリア」 「パスファインダー」 インフィニティ 「QX50」 「QX60」	11/16
		総合4★ (2024モデルイヤー)	「タイタン (クルーキャブ)」 「フロンティア (クルーキャブ)」 「キックス」 「アルマーダ」 インフィニティ 「QX80」	5/16
	IIHS*3	2025 Top Safety Pick+	「パスファインダー」 「アルマーダ」 「ムラーノ」 インフィニティ 「QX80」	4/15
		2025 Top Safety Pick	インフィニティ 「QX60」	1/15
中南米	Latin NCAP	5★	「キックス」	1/1

製品安全及び品質

2024年度リコール実績*4

国・地域	件数(件)	台数(千台)
日本	13	386
北米	20	639
欧州	14	130
その他	13	100
グローバル	42*4	1,256

地域社会への貢献の実績

2024年度の社会貢献活動の実績

グローバル社会貢献活動従業員参加人数：延べ約6万6千人

グローバル社会貢献活動受益者数：延べ100万人以上

グローバル社会貢献支出額：約23.4億円

社会貢献支出には以下の費用を含む

- ・社会貢献活動費は社会貢献活動を実施するために支出した経費(労務費は除く)
- ・寄付は社会貢献を目的とした現金寄付および非営利組織の年会費などの支出
- ・現物寄付は金額に換算
- ・スポンサーシップ その他は社会貢献を目的とした各種イベントなどのスポンサーシップ費

2024年度 グローバル社会貢献支出額(内訳)

	金額(百万円)	比率(%)
社会貢献活動費	659	28.2
寄付	1,101	47.1
現物寄付(金額換算値)	205	8.8
スポンサーシップその他	373	15.9
合計	2,338	100

*1 レーティング獲得車種数/評価を受けた車種数

*2 NCAP：New Car Assessment Program の略。米国運輸省道路交通安全局(NHTSA：National Highway Traffic Safety Administration)の新車アセスメントプログラム。

*3 IIHS：Insurance Institute for Highway Safety の略。米国道路交通安全保険協会。

*4 リコール措置案件ごとに1件とカウントした件数のため、各国・各地域のリコール件数合計≠グローバル件数となります。各国当局からの安全関連の調査依頼に対しては100%対応しています。

ガバナンスデータ

2024年度(2024年4月～2025年3月)における取締役会および委員会の出席状況

取締役会	
取締役会開催総数	開催1回当たりの平均参加率
21回	97.2%

委員会					
指名委員会		報酬委員会		監査委員会	
開催総数	開催1回当たりの平均参加率	開催総数	開催1回当たりの平均参加率	開催総数	開催1回当たりの平均参加率
9回	98%	13回	98%	12回	100%

コーポレートガバナンスの概要(2025年7月1日時点)

会社組織形態	指名委員会等設置会社
取締役会の議長	独立社外取締役
取締役の人数	12人
うち独立社外取締役	8人
うち女性取締役	4人
指名委員会委員長	独立社外取締役
指名委員会の人数	5人
うち独立社外取締役	4人
うち女性取締役	1人
報酬委員会委員長	独立社外取締役
報酬委員会の人数	5人
うち独立社外取締役	5人
うち女性取締役	2人
監査委員会委員長	独立社外取締役
監査委員会の人数	5人
うち独立社外取締役	4人
うち女性取締役	2人